

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1381 集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

元岡・桑原遺跡群 33

—55 次・56 次調査の報告・

元岡古墳群 G 群 6 号墳の報告—

2019

福岡市教育委員会

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

元岡・桑原遺跡群 33

—55 次・56 次調査の報告・

元岡古墳群 G 群 6 号墳の報告—



1001 MOT-55
1043 MOT-56

2019

福岡市教育委員会



重要文化財 金錯銘大刀

巻頭図版2



重要文化財指定品（附資料）集合写真

序

九州大学は、福岡市箱崎地区・六本松地区・筑紫地区のキャンパスを統合移転し、福岡市西区元岡・同桑原及び、糸島市にまたがる新キャンパスを建設する事業を進めています。本市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うとともに、多角連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地域のまちづくりなど、長期的・広域的な視点から対応を行っております。

統合移転用地内における事前発掘調査もこの一環として平成7年度から福岡市が取り組んでおり、当初は土地の先行取得を行った福岡市土地開発公社からの受託、平成14年度からはあわせて九州大学からの受託による発掘調査を実施しました。発掘調査の報告書は、遺構・遺物の整理が終了した分から順次発行しており、九州大学を委託者とする報告書は13冊が既刊となっています。その他にも福岡市土地開発公社分の調査報告書が18冊、概要報告書が2冊、関連リーフレットが3部発行されています。いずれも地域の歴史を語る上で欠かすことができない成果と考えております。

本書で報告する各調査からは、先史時代から近世にかけての元岡・桑原地区における貴重な考古資料が出土しており、この地域の歴史を物語る上で欠かすことのできない調査になりました。本書が文化財の保護・活用の一助となり、学術研究の資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、九州大学をはじめとする関係各機関並びに地元の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

平成31年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例　言

- 1 本書は九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が九州大学の委託を受けて発掘調査を実施した元岡・桑原遺跡群の調査報告書である。本書では第55次・第56調査の報告を行い、合わせて元岡古墳群G群6号墳出土遺物の報告を行っている。
- 2 本書に使用した実測図、写真的作成者は各調査・整理担当者の他、以下の通りである。
55次調査
　遺物実測図：上方 高弘・鳥井 幸代・比佐 陽一郎
56次調査
　遺構実測図：坂口 剛毅・名取 さつき・阿部 洪太郎
　遺物実測図：山崎 賀代子・西 幸子
- 3 本書に使用した図面の整図は各担当者の他、井上加代子が行い、山崎賀代子の協力を得た。
- 4 第56次調査の空中写真は(有)空中写真企画により撮影されたものである。
- 5 第56次調査の3Dレーザー測量は(株)パスコにより測量されたものである。
- 6 第56次調査の自然科学分析は(株)古環境研究所により作成されたものである。
- 7 本書に使用した座標は日本測地系で、国土調査方第Ⅱ座標系に依拠している。
- 8 遺物番号は調査ごとの通し番号としている。
- 9 本書の執筆は各調査担当者により以下の通り分担した。(肩書は平成31年3月現在)
　I・III：大塚 紀宜（経済観光文化局埋蔵文化財課調査第2係長）
　II：米倉 秀紀（経済観光文化局博物館学芸課長）・宮元 香織（北九州市立自然史・歴史博物館）
　　比佐 陽一郎（経済観光文化局埋蔵文化財センター保存分析係長）
　　松園 菜穂（経済観光文化局埋蔵文化財センター保存処理指導員）
　IV：比嘉 えりか（経済観光文化局文化財活用課歴史資源活用係）
　V：比佐 陽一郎（経済観光文化局埋蔵文化財センター保存分析係長）
　　西 幸子（埋蔵文化財センター技能員・福岡大学特別選抜研究員）
- 10 本書に関わる記録・遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。なお、元岡古墳群G-6号墳に関連する記録・遺物等は福岡市埋蔵文化財センターの所蔵になっている。
- 11 本書の編集は、各担当者の協力を得て、大塚が行った。

遺跡名	元岡・桑原遺跡群		遺跡略号	M O T	遺跡登録番号	2782
調査次数	調査番号	所在地	分布地図	調査期間	調査面積	
第55次	1001	西区大字元岡	140 元岡	H22.4.12～H25.5.15	3,300m ²	
第56次	1043	西区大字元岡	140 元岡	H22.9.14～H23.12.28	6,970m ²	

目 次

Iはじめに	1
1. 元岡・桑原遺跡群の調査経過	1
2. 元岡・桑原遺跡群の位置と環境	2
(1) 地理的環境	2
(2) 元岡・桑原地区の発掘調査における成果	2
3. 調査組織	6
II 55次調査の報告	9
1. 第55次調査の概要	9
2. 調査区の位置と環境	10
3. 調査の記録	12
(1) 元岡古墳群G-1号墳	12
(2) 元岡古墳群G-2号墳	35
(3) その他の遺構・包含層出土遺物	37
4. 元岡G-1号墳出土資料に関する保存科学的調査	53
(1) はじめに	53
(2) 調査対象資料と調査の目的、方法	53
(3) 調査結果	55
(4) おわりに	61
5. おわりに	87
附論：元岡・桑原遺跡群における横穴式石室の構造について	89
III 56次調査1・2区の報告	111
1. 調査の経緯とこれまでの報告内容	111
2. 1区調査概要	111
(1) 調査区概要・調査経緯	111
(2) 土坑・貯蔵穴	113
(3) 溝状遺構	116
(4) 掘立柱建物・柵列	117
(5) その他の遺物	122
3. 2区調査概要	124
(1) 調査区概要・基本層序	124
(2) 土器溜り	126
4. 元岡・桑原遺跡群第56次調査1区・2区における自然科学分析	129
5. 考察	137
(1) 中世の56次1区・G-6号墳	137
(2) 56次2区の弥生時代の土器溜りについて	138
付録 元岡古墳群G-6号墳石室デジタルデータについて	139
IV 56次調査3区の報告	147
1. 調査の概要	147
2. 調査の内容	147
(1) 谷	147
(2) 溝	152
(3) 土坑	154
3. 花粉分析	155
4. まとめ	160
V 「庚寅銘大刀」の重要文化財指定について	
1. はじめに	167
2. 指定に至る経緯	167
3. 指定された資料について	168
重要指定品目録	198

挿図目次

I はじめに

第1図 元岡・桑原遺跡群と周辺の遺跡 (1/100,000)	1
第2図 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図 (1/15,000)	3

II 55次調査の報告

第1図 第55次調査区位置図	10
第2図 第55次調査区全体図 (1/500)	11
第3図 G-1号墳実測図 (1/100)	12
第4図 G-1号墳西側周溝実測図 (1/40)	13
第5図 G-1号墳丘トレンチ出土遺物 (1/3)	14
第6図 G-1号墳西側周溝出土遺物 (1/3)	15
第7図 G-1号墳石室埋土上層出土遺物1 (1/3)	16
第8図 G-1号墳石室埋土上層出土遺物2 (1/3)	17
第9図 G-1号墳石室実測図 (1/60)	18
第10図 G-1号墳石室第1面(左)・第3面(右)実測図 (1/60)	19
第11図 G-1号墳石室遺物出土状況実測図 (1/30)	19
第12図 G-1号墳石室出土遺物実測図1 (1/3)	20
第13図 G-1号墳石室出土遺物実測図2 (1/3)	22
第14図 G-1号墳出土遺物(鉄鏃)実測図3 (1/2)	23
第15図 G-1号墳出土遺物(鉄鏃)実測図4 (1/2)	24
第16図 G-1号墳出土遺物(大刀)実測図5 (1/4)	25
第17図 G-1号墳出土遺物(刀子・刀装具)実測図6 (1/2)	26
第18図 G-1号墳出土遺物(胡籠金具)実測図7・8及び復元図 (1/2・1/3)	27~29
第19図 G-1号墳出土遺物(耳環・鉤・鏡・空玉)実測図9 (1/2・1/1)	30
第20図 G-1号墳出土遺物(玉類)実測図10 (1/1)	31
第21図 G-1号墳出土遺物(玉類)実測図11 (1/1)	32
第22図 G-1号墳出土遺物(玉類)実測図12 (1/1)	33
第23図 G-1号墳出土遺物(玉類)実測図13 (1/1)	34
第24図 G-2号墳石室周辺実測 (1/100) 及び同出土遺物実測図 (1/3)	35
第25図 調査区北壁土層断面図 (1/200)	36
第26図 石組遺構実測図 (1/40)	36
第27図 溝(SD)出土遺物実測図 (1/3・1/2)	38
第28図 G-1号墳周辺遺物包含層出土遺物	39
第29図 中世以降の水田面出土遺物実測図 (1/3)	40
第30図 客土・造成土出土遺物実測図1 (1/3)	41
第31図 客土・造成土出土遺物実測図2 (1/3)	42
第32図 出土剥片石器実測図 (1/1・1/2)	43
第33図 出土礫石器実測図 (1/3・1/4)	44
第34図 現在想定される耳環の構造	55

III 56次調査1・2区の報告

第1図 56次調査区位置図 (1/4,000)	111
第2図 56次調査区付近地図 (1/1000)	112
第3図 56次1区造成段堆積土層図 (1/50)	113
第4図 56次1区全体図 (1/200)	114

第5図 SK-03実測図（1/80）.....	115
第6図 SK-03出土遺物実測図（1/3）.....	116
第7図 SK-05・06実測図（1/50）.....	117
第8図 SK-07・08実測図（1/80・1/50）.....	118
第9図 SD・SP出土遺物実測図（1/3）.....	119
第10図 掘立柱建物実測図1（1/80）.....	120
第11図 掘立柱建物実測図2（1/80）.....	121
第12図 掘立柱建物実測図3（1/80）.....	122
第13図 1区出土遺物実測図（1/3）.....	123
第14図 56次2区包含層土層図（1/50）.....	124
第15図 56次2区全体図（1/200）.....	125
第16図 2区土器溜り1・2実測図（1/40）.....	126
第17図 包含層・土器溜り出土遺物実測図（1/3）.....	127
第18図 土器溜り（下層）出土遺物実測図（1/3）.....	128

IV 56次調査3区の報告

第1図 56次調査区遠景（南から）.....	147
第2図 SX01遺構検出状況（東から）.....	147
第3図 SX01土層断面実測図（1/60）.....	148
第4図 56次3区調査区全景（1/200）.....	折込
第5図 SX01南北トレンチ土層断面実測図（1/80）.....	149
第6図 SX01出土遺物実測図（1/3）.....	150
第7図 SD02・03・04土層断面実測図（1/40）.....	151
第8図 SD05土層断面実測図（1/40）.....	152
第9図 SK06実測図（1/20）.....	153
第10図 SD03・SD04・SK06出土遺物実測図（1/3）.....	154
第11図 SX01における花粉ダイヤグラム.....	158
第12図 SX01で検出された花粉.....	159

V 庚寅銘大刀の重要文化財指定について

第1図 金錯銘大刀（1/3）.....	169
第2図 附資料実測図(1)（1/2）.....	170
第3図 附資料実測図(2)（1/1・1/2）.....	171
第4図 附資料実測図(3)（1/2）.....	172
第5図 附資料実測図(4)（1/2）.....	173
第6図 附資料実測図(5)（1/2）.....	174
第7図 附資料実測図(6)（1/2）.....	175
第8図 附資料実測図(7)（1/2）.....	176
第9図 附資料実測図(8)（1/2）.....	177
第10図 附資料実測図(9)（1/2）.....	178
第11図 附資料実測図(10)（1/2）.....	179
第12図 附資料実測図(11)（1/1）.....	180
第13図 附資料実測図(12)（1/1）.....	181
第14図 附資料実測図(13)（1/1・1/3）.....	182
第15図 附資料実測図(14)（1/3）.....	183
第16図 附資料実測図(15)（1/3・1/6）.....	184
第17図 附資料実測図(16)（1/3）.....	185

図版目次

- 卷頭図版 1 重要文化財 金錯銘大刀
卷頭図版 2 重要文化財指定品（附資料）集合
写真

II

- 図版 1 元岡古墳群 G－1・2号墳周辺全景
(北側丘陵伐採後：南から)
元岡古墳群 G－1・2号墳周辺全景
(北側丘陵伐採前：南から)
図版 2 調査区全景（東から）
G－1号墳北側から旧今津湾を望む
(北から)
図版 3 G－1号全景
周溝
図版 4 表土剥ぎ
図版 5 西側周溝
西側周溝土層断面
図版 6 石室全景
図版 7 石室全景
奥壁
側壁
図版 8 側壁
床面 1
床面 2
図版 9 遺物出土状況
図版 10 遺物出土状況
図版 11 G－2号墳
図版 12 SD01 土層
石組遺構
水田面の動物の足跡
図版 13 G－1号墳出土遺物（須恵器）
図版 14 G－1号墳出土遺物（須恵器・土師器）
図版 15 G－1号墳出土遺物（金属器）
図版 16 G－1号墳出土遺物（刀子・胡籠金具）
図版 17 G－1号墳他出土馬具
G－1号墳出土耳環
図版 18 G－1号他出土玉類
調査区出土石器

III

- 図版 1 1 元岡・桑原遺跡群遠景（南東から）
2 1区全景（北東から）
図版 2 1 1区全景（南東から）
2 1区全景（北西から）
3 SD-01 南側部分（南から）

- 図版 3 1 SD-02 G-6北側部分（西から）
2 SD-02土層（北から）
3 SK-03（南から）

- 図版 4 1 SK-04（西から）
2 SK-05（北から）
3 SK-06（北西から）

- 図版 5 1 SK-07（東から）
2 SK-08（南東から）
3 2区全景（東から）

- 図版 6 1 2区土器溜り 1（南東から）
2 2区土器溜り 2（東から）
3 2区調査区北壁土層（東から）

IV

- 図版 1 調査区全景（北から）
SX01 土層断面（南から）
図版 2 調査区全景（北西から）
調査区全景（上が南東）
SX01 第1面遺構掘削状況（西から）
図版 3 SX01 第1面遺構掘削状況（北から）
SX01 土層断面（南東から）
SX01 包含層遺物出土状況
図版 4 SD02 土層断面（南東から）
SD03 土層断面（北西から）
SD04 土層断面（北西から）
図版 5 SD05 土層断面（南東から）
SK06 遺構掘削状況（東から）
SK06 断面（西から）
図版 6 出土遺物

V

- 図版 1 金銅製品
図版 2 刀・刀装具、鉄鋒、馬具
図版 3 鑷子、刀子、工具
図版 4 鉄鏃（1）
図版 5 鉄鏃（2）
図版 6 鉄鏃（3）・両頭金具
図版 7 玉
図版 8 玉
図版 9 土器①
図版 10 土器②
図版 11 土器③
図版 12 土器④

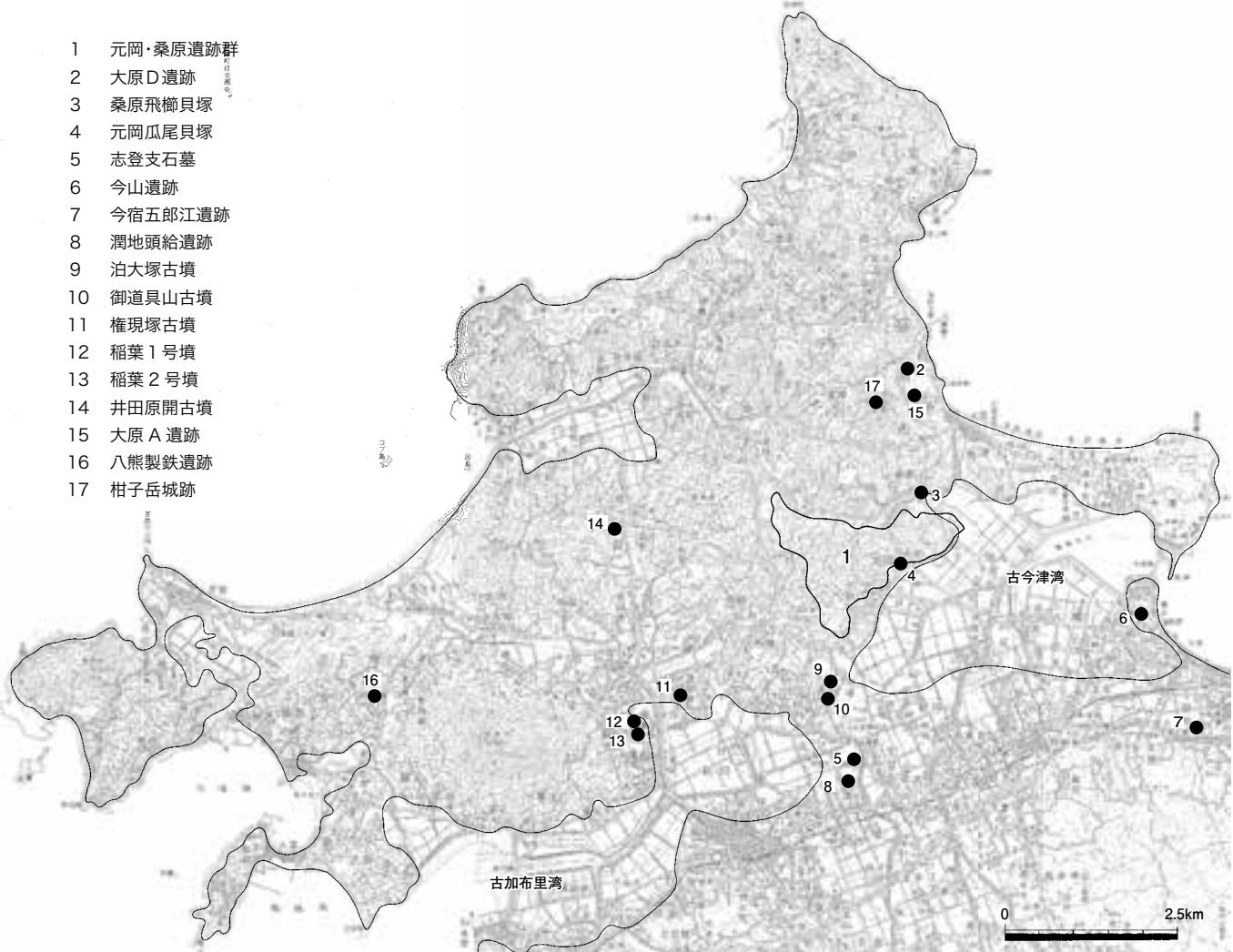
I はじめに

1. 元岡・桑原遺跡群の調査経過

九州大学の福岡市西区元岡・桑原地区への統合移転が決定したことを受け、福岡市教育委員会は平成7（1995）年に対象地内の踏査を行い、平成8（1996）年にはこの事業を担当する大規模事業等担当課を設置した。造成予定地の詳細な試掘調査は平成8年3月から同年9月までに実施し、あわせて桑原金屎古墳や元岡石ヶ原古墳などの確認調査を実施した。

移転用地は福岡市土地開発公社が全域を先行取得した後に九州大学が再取得することとなったため、造成工事に伴う発掘調査は福岡市教育委員会と福岡市土地開発公社が受託契約を結び、平成8年から平成20（2008）年まで実施された。しかし、造成工事計画が変更となり、未造成のまま九州大学が再取得した地区についても造成工事に先立つ埋蔵文化財の発掘調査が必要となった。その調査範囲は大規模な面積に及ぶことなどから、福岡市教育委員会が発掘調査を行うことで九州大学と協定書を締結した。これに基づき、平成15（2003）年から平成27（2015）年度まで九州大学との受託契約による発掘調査を実施した。

移転用地内の埋蔵文化財包蔵地は、古墳などを除いて「元岡・桑原遺跡群」と総称しており、同遺跡群内では平成27（2015）年度までに66次の調査が実施されている（表1）。



第1図 元岡・桑原遺跡群と周辺の遺跡(1/100,000)

2. 元岡・桑原遺跡群の位置と環境

(1) 地理的環境

元岡・桑原遺跡群は、福岡市西区元岡・桑原地区に所在し、玄界灘に突出する糸島半島の東側基部の丘陵地帯に位置する。丘陵には、小河川により樹枝状に浸食された狭い谷が無数に入り込む。現在の糸島半島はその全面で九州本島と繋がっているが、縄文海進以降、中世のある時期までは中央の一部が陸橋状に繋がっていた以外は、東と西にそれぞれ大きく海が湾入していたと考えられる。この東西の湾入部が干拓によって江戸時代に埋め立てられ、現在のような地形をなすに至っている。元岡・桑原遺跡群は、その東側の湾（古今津湾）の奥部北側に位置する（図1）。

糸島半島の地質は、大きく3つに分類でき、北側の北崎トーナル岩、「野北—今津帶」と言われる三郡変成岩、糸島花崗閃緑岩で形成されている。元岡・桑原遺跡群が立地する元岡丘陵は、北東端が三郡変成岩帯に含まれるが、大部分は糸島花崗閃緑岩帯に含まれている。糸島花崗閃緑岩は斜長石、カリ長石、黒雲母、普通角閃石から構成される中～粗粒岩で、白亜紀に形成されたものと考えられている。三郡変成岩帯は、後期古生代からジュラ紀にかけて形成されており、このうち野北—今津帶は3億3千万年～2億8000年前に相当する。

これらの丘陵体から流出した土砂が堆積して、狭い平野を形成している。糸島半島の南側には現在低地が広がっているが、これは古今津湾と古加布里湾が東西から深く入り込み、入海を形成していたものが、瑞梅寺川や雷山川などの南からの河川堆積によって埋まったものである。

(2) 元岡・桑原地区の発掘調査における成果

元岡・桑原地区では、旧石器時代の明確な遺跡は発見されていない。しかし3次、20次、26次調査などでナイフ形石器、剥片尖頭器、細石核が包含層から出土しており、後期旧石器時代の人々がこの地で活動していたことは確実である。

縄文時代には、第3次調査で縄文草創期～早期の遺構・遺物が出土しており、遺構は石組み炉や集石遺構が20基以上確認されており、連結土坑も1基見つかっている。ともに条痕文土器、押型文土器、撚糸文土器などの土器類、石器類も出土している。縄文草創期から早期の遺跡は桑原地区北側に隣接する大原D遺跡でも見つかっており、付近の低丘陵上に集落が点在していたとみられる。

平成4（1992）年度に調査された桑原飛櫛貝塚は縄文中期～後期の貝塚で、アサリやマガキの貝層が厚さ80cmにわたって堆積していた。貝塚中から土壙墓が検出され、うち1基には貝輪装着の女性が被葬されていた。元岡丘陵東麓にある元岡瓜尾貝塚は縄文後期の貝塚で、溜池の岸に貝層が露出している。マガキやシジミなどの貝殻や動物骨、魚骨が出土している。縄文時代当時、糸島半島の南部は入海になっていて漁撈採集活動が盛んだったと考えられ、糸島半島南岸は天神森貝塚や岐志貝塚などとあわせて北部九州での貝塚の集中地区になっている。

縄文晩期には2次調査で貯蔵穴が1基検出されており、42次調査では晩期中頃の包含層が自然流路最下層で確認されており、丘陵の谷部や裾部で初期水田耕作が行われていた可能性も示唆される。

弥生時代には42次調査で大規模な遺物堆積がみられる。遺物量は6000箱を超え、弥生中期から後期の土器の他、祭祀に使用された木器や小銅鐸、朝鮮半島系土器をはじめとする外来系土器も出土しており、広範囲にわたって活発に活動していたことがうかがえる。

第2図 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図(1/15,000)

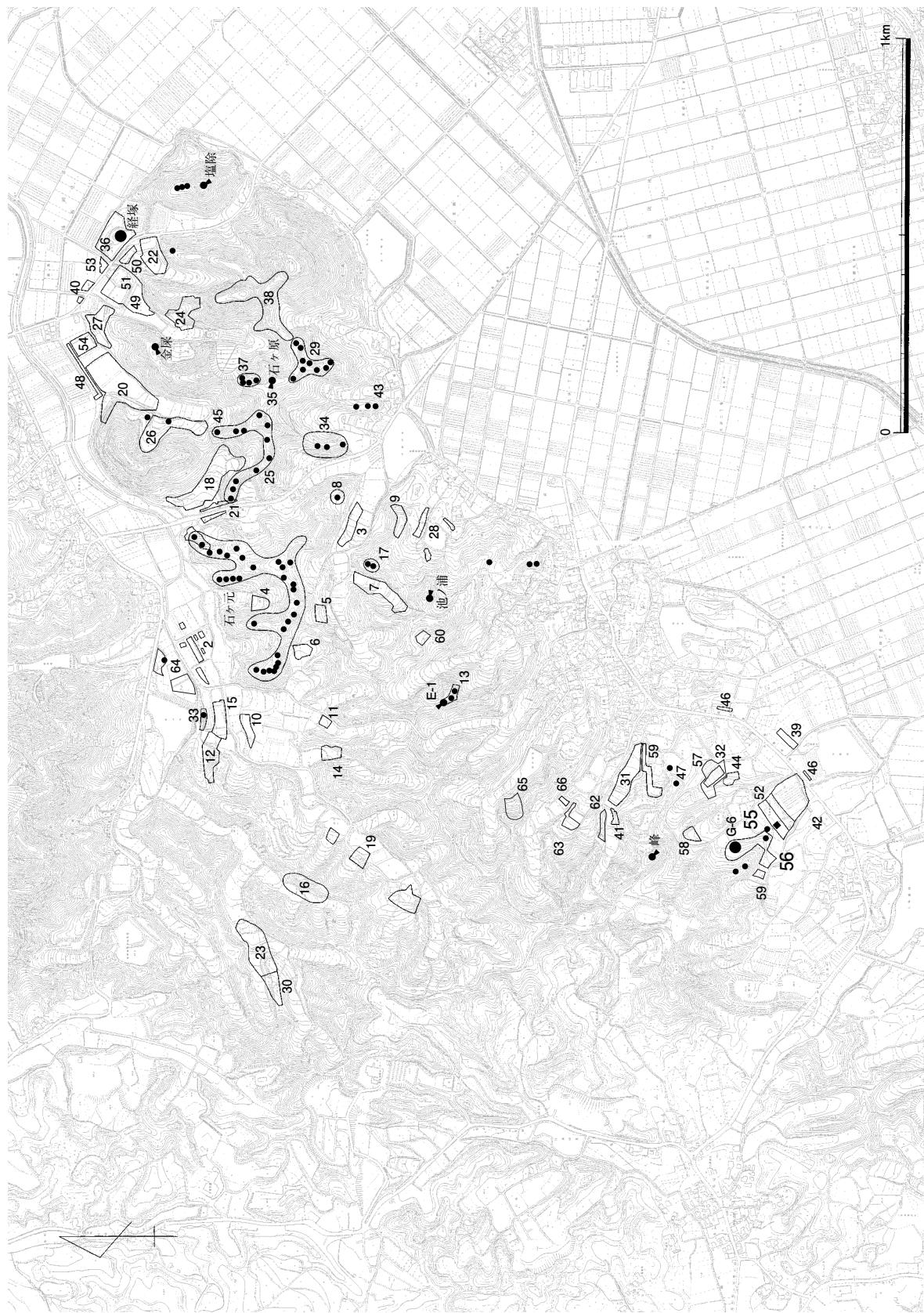


表1 元岡・桑原遺跡群調査一覧

調査番号	遺跡名	原因	調査期間	調査面積	古墳	内容等	報告書(集)
9602	第1次	確認	960401～960930	8154		試掘調査	743
9656	桑原石ヶ元古墳群	公社	960401～970331	4737		円墳	722・744
9657	桑原金屎古墳	確認	960820～961129	605		前方後円墳	909
9685	元岡石ヶ原古墳	確認	960827～961129	1280		前方後円墳	909
9656	第2次	公社	961111～970325	3007		古墳時代～古代、溝、土抗、水田	722
9763	第3次	公社	971113～990222	3500	1	縄文時代石組炉、弥生時代住居跡、円墳	829
9764	第4次	公社	971201～980331	1219		古代～中世掘立柱建物、溝	829
9771	元岡古墳群第2次(D群)	確認	971110～971128	60	2	試掘調査	年報12
9811	第5次	公社	980427～980623	2500		古代土抗、包含層	693
9812	第6次	公社	980630～980828	2800		古墳時代包含層	693
9813	第7次	公社	980506～990611	7500		古墳時代～古代住居跡、池状遺構、製鉄路	1012・1302
9829	第8次(元岡古墳群M群)	公社	980916～981225	300	1	円墳	829
9851	第9次	公社	981102～981210	190		弥生時代住居跡	1172
9854	第10次	公社	990106～990225	1336		古代～中世包含層	639
9855	第11次	公社	990106～990320	1650		古墳時代～古代土抗、包含層	829
9902	第12次	公社	990406～000328	5500		古代製鉄路	860・1063
9903	第13次	公社	990412～000316	600	3	前方後円墳、円墳	861
9904	第14次	公社	990422～990722	1200		古代包含層	693
9923	第15次	公社	990611～990928	3500		古代包含層、中世水田	860
9933	第16次	公社	990802～991110	1200		古代包含層	693
9934	第17次(元岡古墳群B群)	公社	990910～991208	517	2	円墳	861
9946	第18次	公社	991010～020215	16800	2	古墳時代～古代住居跡、掘立柱建物、池状遺構、製鉄炉、円墳	1063・1102・1172・1246・1302
9947	第19次	公社	991016～991215	3200		古代包含層	743
0001	第20次	公社	000405～030523	20130		古墳時代住居跡、古代掘立柱建物、製鉄炉	962・1013・1063・1105・1328
0002	第21次(石ヶ元古墳群)	公社	000405～000921	3170	3	円墳	910
0033	第22次	公社	000410～001025	4750		古代掘立柱建物、製鉄関係遺構	909
0019	第23次	公社	000601～010331	8110		確認調査	1011
0034	第24次	公社	000821～030320	5500		古墳時代住居跡、古代製鉄炉	860
0052	第25次(元岡古墳群A群)	公社	011124～011130	2200	7	円墳	861
0110	第26次	公社	010405～011130	5487	1	古墳時代住居跡、円墳、古代掘立柱建物	963
0153	第27次	公社	011201～020829	4495		古墳時代住居跡	909
0154	第28次	公社	020201～020704	2200		古代～中世包含層	909
0204	第29次(元岡古墳群N群)	公社	020405～030930	4000	9	円墳	861
0240	第30次	公社	020801～020930	2450		古代包含層	1011
0242	第31次	九大	021001～060113	10000		古代瓦窯、掘立柱建物、鍛冶炉、古墳時代祭祀関連	1103
0257	第32次	九大	030120～030331	1700		試掘	(1328)
0303	第33次	九大	030408～030519	450	1	円墳	1064
0310	第34次(元岡古墳群J群)	公社	030401～030812	1200	3	円墳	909
0340	第35次(石ヶ原古墳)	公社	030520～050112	1853	1	前方後円墳	909
0341	第36次(経塚古墳)	公社	030901～050331	8000	1	円墳、中近世墓群	1011・1105
0365	第37次(元岡古墳群O群)	九大	031020～040226	461	4	円墳	861
0371	第38次(水崎城)	公社	040308～050117	1816		中世山城	1105
0404	第39次	民間	040405～040416	880		弥生時代包含層	1064
0410	第40次	九大	040407～040428	1250		包含層	1064
0435	第41次	九大	040506～060217	900		古代包含層、製鉄関連遺構	1064
0451	第42次	九大	041001～090630	4800		縄文時代晚期～古墳時代初頭自然流路	1174・1246・1275・1276・1328・1354
0486	第43次		050207～050308	180		古墳墓道	1173
0523	第44次	九大	050601～051020	1189		古墳時代～古代集落	1064
0535	第45次(桑原古墳群A群)	公社	050720～051122	1128	3	円墳	1105
0538	第46次	福岡市土木局	050808～051011	403		弥生～中世集落	964
0562	第47次(元岡I-1号墳)	九大	060105～060310	107	1	円墳	1064
0563	第48次	公社	060110～070203	447		弥生～古代集落	1173
0611	第49次	公社	060403～070322	2723		古墳時代～古代集落	1173・1356
0709	第50次	公社	070401～070827	811		近世末～近代墓地	1173
0741	第51次	公社	070829～081003	6888		古墳時代～古代集落	1173・1356
0763	第52次	九大	080121～090630	3900		弥生～古墳時代初頭自然流路	1354・1380
0768	第53次	九大	080219～080409	770		古代集落	1328
0844	第54次		081006～090109	1872		古代集落	1173・1380
1001	第55次	九大	100412～110330	3300	2	大型方墳・中世以降水田	1381
1043	第56次	九大	100914～111228	6970	2	大型円墳・中世集落	1210・1355・1381
1103	第57次	九大	110412～130906	6700		古墳時代包含層、古代～中世集落	1328・1356
1110	第58次	九大	110620～130315	1152		縄文時代早期集落、古代包含層	1301
1140	第59次	九大	120123～130315	2298		古墳時代～中世集落	1246
1306	第60次	九大	130522～130829	271		古墳時代～古代包含層	1302
1315	第61次	九大	130701～131023	407		古代包含層	1275
1327	第62次	九大	130901～131115	1374		中世集落	1356
1328	第63次	九大	131001～140423	1244		古代～中世集落	1328
1331	第64次	九大	131001～140430	2900	1	弥生集落、円墳、中世集落	1302
1413	第65次	九大	140602～141226	2451		弥生～古代包含層	1356
1525	第66次	九大	150929～151008	167		中世～近世包含層	1328

元岡・桑原遺跡群の南側に広がっていた入海（今津古湾）の沿岸には弥生時代を通じて集落や分布しており、弥生前期の志登支石墓、磨製石斧の材料としての玄武岩産地である今山遺跡、弥生後期以降の拠点集落である今宿五郎江遺跡や潤地頭給遺跡など、湾岸一帯で活発な生業が営まれていたことがわかる。42次調査も今津湾岸での生業活動に係わる集落に付随する遺物包含層と考えるべきであろう。

なお、元岡・桑原遺跡群の弥生時代の遺構の特徴として、北部九州の独自の埋葬形態である甕棺墓がほとんどみられないことが挙げられる。これまで甕棺墓が確認されたのは42次調査の2点のみで、この他には甕棺墓の存在をうかがわせる甕棺破片も出土しないため、もともと甕棺墓が作られなかつたものとみられる。一方、甕棺墓の欠落を補うような土壙墓の存在も確認できない。弥生時代の元岡丘陵における墳墓については、その存在も含めて検討すべき課題となっている。

古墳時代には丘陵上に7基の前方後円墳が築かれ、丘陵の南方にも2基の前方後円墳が確認されているが、調査が行われた古墳が少なく、詳しい状況は不明である。調査が実施された前方後円墳では13次調査の金屎古墳があり、前期の古墳で割竹形木棺を主体部とし、2面の鏡が副葬されていた。35次調査の元岡石ヶ原古墳は横穴式石室を持つ後期の古墳であった。糸島半島には元岡・泊地区の前方後円墳群をはじめ、井田原開古墳、権現塚古墳等の前方後円墳があるが、いずれも半島の南側に位置している。このことは当時の集落拠点の分布や支配構造を考える上で着目すべきものであろう。

古墳時代後期には丘陵の各所に小型の円墳が集中的に築造され、群集墳として形成される。その中で桑原石ヶ原古墳群からは鍛冶に関係する工具が副葬されており、被葬者が鍛冶活動に従事していたことが想定され、桑原地区での鉄器製作が6世紀後半にはすでにに行われていたことを物語っている。

奈良時代には元岡・桑原地区は嶋郡に属し、登志、川辺、韓良、明敷、久米、志麻、鷁永の七郷が『和名類聚抄』に記載されている。このうち川辺郷については正倉院文書の「筑前国嶋郡川辺里戸籍」（大宝2年）に記録が残されており、郷戸主肥君猪手以下18名の郷戸主と各戸の成員が記されている。肥君猪手は当時の志摩郡の大領職で、他に元岡・桑原遺跡群出土木簡には当時の氏姓が具体的に記載されている。川辺郷（川辺里）の所在については諸説あるが、桑原地区を川辺里に比定する説もある。

古代に関する発掘調査では、7次、12次、18次、20次、24次の各調査で製鉄炉を主とする製鉄関連遺構が多数検出されている。これらの調査では製鉄の過程で生成された鉄滓が大量に確認されており、総量で80トン以上の鉄滓が廃棄されたことが判明している。

鉄生産に関する資料は他に、7次調査で出土した「壬辰年韓鐵」木簡や15次調査出土の「祓」に関する木簡等の文字資料もあり、元岡で行われた製鉄事業が公的なものであったことが裏付けられる。周辺では大原A遺跡や大原D遺跡で8～9世紀の製鉄炉や鍛冶炉が出土し、糸島半島西側の八熊製鉄遺跡でも8世紀の製鉄炉や鍛冶炉、木炭窯などが出土している。今津湾南岸の今宿から飯氏にかけての地区でも製鉄炉や木炭窯が見つかっており、8世紀～9世紀にかけて糸島地区で製鉄、鉄器生産が大々的に行われたとみられる。

また31次調査で平安時代の瓦窯跡が検出され、鴻臚館で使用された瓦の生産が行われたことが確認されている。同様に当遺跡の南方約5kmに位置する怡土城で使用された非常に厚手の平瓦が当遺跡でも出土しており、怡土城に供給した瓦の生産地があったことが推測される。

中世には、志摩郡に広大な皇室領莊園（法金剛院領怡土庄）が設定され、他に觀世音寺領船越庄、安樂寺領板持庄、同桑原庄もあった。桑原地区の18次調査では斜面を造成して集落が形成されていたことが確認されており、寺院莊園領の「別所」と推定されている。このほかに46次調査でも11～15世紀の集落が検出されている。

弘安の役後は恩賞地として大友氏に与えられ、大友氏がこの地を領する淵源となった。柑子岳城は志摩郡代の番城として築かれたものである。戦国期、16世紀前半には一時大内氏が志摩郡を支配した時期もあり、この地を巡って大友、大内の争いが繰り広げられた。58次調査では堀切とみられる大型の溝が検出されているが、丘陵上には『筑前國統風土記拾遺』に記載のある水崎城をはじめとする柑子岳城の枝城が築かれており、38次調査では水崎城に関する堀切等を確認している。58次で確認された溝も中世山城に関する遺構とみられる。天正7（1579）年に柑子岳城が高祖城主原田了栄によって落とされ、以後志摩郡は原田氏の支配下に置かれた。

近世には糸島半島は21村を含む元岡触と26村の御床触に分けられ、元岡・桑原地区は一農村として構成される。36次、63次調査では近世の墓群を確認している。

明治22年には元岡・桑原を含む5カ村が合併して糸島郡元岡村が成立し、この元岡村が福岡市に編入されたのは昭和36（1961）年のことである。

3. 調査組織

（第55次調査：平成22年度）

調査主体：福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

文化財部長 宮川 秋雄

調査担当：福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課

課長 田中 壽夫

調査第2係長 菅波 正人

調査担当 吉留 秀敏、大塚 紀宜（12月～）

庶務担当：埋蔵文化財第1課

課長 濱石 哲也

管理係長 田中 龍三郎

管理係 井上 幸江

（第56次調査：平成22～23年度）

調査主体：福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

文化財部長 宮川 秋雄（22年度）、藤尾 浩（23年度）

調査担当：福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課

課長 田中 壽夫

調査第1係長 米倉 秀紀

調査担当 吉留 秀敏（試掘調査）、大塚 紀宜（I・II区）、比嘉 えりか（III区）

庶務担当：福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課

課長 濱石 哲也

管理係長 田中 龍三郎（22年度）、和田 安之（23年度）

管理係 井上 幸江

(整理・報告書作成：平成30年度)

調査主体：福岡市経済観光文化局

　局長　　高島 収

　文化財活用部長　高山 嘉樹

調査担当：経済観光文化局埋蔵文化財課

　課長　　大庭 康時

　報告書作成担当　米倉 秀紀（博物館学芸課長）、大塚 紀宜（埋蔵文化財課調査第2係長）、
　比嘉 えりか（文化財活用課）、比佐 陽一郎（埋蔵文化財センター保存分析係長）

庶務担当：経済観光文化局文化財活用課

　課長　　松本 真人

　管理調整係長　藤 克己

　管理調整係　　松原 加奈枝

表1 元岡・桑原遺跡群調査一覧

書名	調査次数	集数	発行年
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報1		福岡市埋蔵文化財調査報告書第693集	2001
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報2		福岡市埋蔵文化財調査報告書第743集	2003
元岡・桑原遺跡群1	第2次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第722集	2002
元岡・桑原遺跡群2	桑原石ヶ元古墳群	福岡市埋蔵文化財調査報告書第744集	2003
元岡・桑原遺跡群3	第3次・4次・8次・11次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第829集	2004
元岡・桑原遺跡群4	第12次-1・15次・24次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第860集	2005
元岡・桑原遺跡群5	第13次・17次・25次・29次・37次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第861集	2005
元岡・桑原遺跡群6	第22次・27次・28次・34次・金屎古墳・石ヶ原古墳	福岡市埋蔵文化財調査報告書第909集	2006
元岡・桑原遺跡群7	第21次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第910集	2006
元岡・桑原遺跡群8	第20次-1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第962集	2007
元岡・桑原遺跡群9	第26次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第963集	2007
元岡・桑原遺跡群10	第46次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第964集	2007
元岡・桑原遺跡群11	第23次・30次・36次-1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1011集	2008
元岡・桑原遺跡群12	第7次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1012集	2008
元岡・桑原遺跡群13	第20次-2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1013集	2008
元岡・桑原遺跡群14	第12次-2・18次-1・20次-3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1063集	2009
元岡・桑原遺跡群15	第33次・40次・41次・44次・47次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1064集	2009
元岡・桑原遺跡群16	第18次-2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1102集	2010
元岡・桑原遺跡群17	第31次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1103集	2010
元岡・桑原遺跡群18	第20次-4・36次-2・38次・45次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1105集	2011
元岡・桑原遺跡群19	第9次・18次-3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1172集	2012
元岡・桑原遺跡群20	第43次・48次・49次-1・50次・51次-1・54次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1173集	2012
元岡・桑原遺跡群21	第42次-1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1174集	2012
元岡・桑原遺跡群22	第56次-1(G-3・G-6号墳)	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1210集	2013
元岡・桑原遺跡群23	第18次-4、42次-2、59次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1246集	2014
元岡・桑原遺跡群24	第42次-3、61次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1275集	2015
元岡・桑原遺跡群25	第42次-4	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1276集	2015
元岡・桑原遺跡群26	第58次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1301集	2016
元岡・桑原遺跡群27	第18次-5、60次・64次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1302集	2016
元岡・桑原遺跡群28	第20次-5、42次-5、53次、57次-1、63次、66次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1328集	2017
元岡・桑原遺跡群29	第42次-6、52次-1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1354集	2018
元岡・桑原遺跡群30	第56次-2(G-6号墳)	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1355集	2018
元岡・桑原遺跡群31	第49次-2、51次-2、57次-2、62次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1356集	2018
元岡・桑原遺跡群32	第52次-2、54次-2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1380集	2019
元岡・桑原遺跡群33	第55次、56次-3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1381集	2019
元岡・桑原遺跡群34	調査総括編	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1385集	2019
桑原遺跡群1 第1次発掘調査報告	第1次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第432集	1995
桑原遺跡群2 飛櫛貝塚第1次調査	桑原飛櫛貝塚第1次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第480集	1996

II 第55次調査

1 第55次調査の概要

九州大学移転用地内は大きく第1工区から第4工区に分かれるが、第55次調査区がある第4工区は実験農場が主体であったため、工区全体を圃場整備に伴う調査方式とし、遺構面が削られるか2m以上の盛り土を施す部分を発掘調査対象とした。本調査区部分は、この部分に構内道路を建設する計画があった。平成22年4月1日に重機による表土剥ぎによって発掘調査を開始した。その後、この道路計画は発掘調査開始半年後に取りやめとなつたため、発掘調査を一端中止し、九州大学と協議を行つた結果、調査を行つていない部分について調査を行わず埋戻しを行つて現状保存することとした。ただし、元岡古墳群G-1号墳については、すでに遺物の大半を取り上げていることと、遺物が出土した玄室の床面の下の一部にも敷石が確認できたことから、同古墳の埋め戻しを行う前に、床面の調査を行つこととした。

なお、調査担当者である吉留秀敏は調査の中止期間中に発病したため、G-1号墳最終床面の調査は、吉留の協力のもと大塚紀宜が行つた。吉留は調査終了後、報告書の準備を進めており、吉留と技能員等によりほぼ全点の実測と出土土器のレイアウトを終了していたが、平成25年3月に吉留が逝去したため、本報告書の編集は、吉留の残した記録・写真等を元に、米倉秀紀が行つた。

以下、吉留撮影の写真日付等を元に簡単な調査の経過を記す（特に断りのない限り平成22年）。

4月1日	重機による表土剥ぎ開始
5月14日頃	人力による掘削開始。G-1号墳石室石材上面が姿を現す。
5月27日頃	石室床面近くまで達し、大刀等の遺物が出土。
6月中頃まで	圭頭大刀や仿製鏡のほか大刀・鉄鏃・多様な玉類などが陸続と出土。
7月3日	少雨の中、現地説明会を実施し、多くの人が訪れた。
10月1日	ラジヘリによる空撮。この後、G-1号墳を除き、調査区埋戻し
平成24年8月20日	石室調査再開（一部床石剥がし）（担当者吉留・大塚）
平成25年3月5日	吉留逝去、5月15日 石室埋戻し

本報告書作成における整理分担・執筆分担等は下記のとおりである。

遺物実測	吉留・上方高弘・鳥井幸代・比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）
遺物レイアウト	土器：吉留、その他：米倉
遺物写真撮影	吉留・米倉・比佐
遺物整理	甲斐田嘉子・鳥井

なお、遺構の説明については、吉留が残した図面・会議資料等を基に、一部吉留の文章を折り込みながら記述したが、解釈が間違っている可能性もあることを、ご寛容いただきたい。また出土遺物の内、金属器・装飾品については比佐・松園の全面的な協力を仰ぎ4章で詳細な分析を行つてゐるため、3章では文章を簡略化し、遺物の詳細は4章を参照いただきたい。

さらに、宮元香織氏（北九州市立自然史・歴史博物館）に、玉稿をいただいた。心から謝意を申し上げたい。

本書の執筆は次のとおりである（敬称略）。

1～3：米倉秀紀 4：比佐陽一郎・松園菜穂（福岡市埋蔵文化財センター） 5：米倉
元岡・桑原遺跡群における横穴式石室の構造について 北九州市立自然史・歴史博物館 宮元香織

2 調査区の位置と環境

今回報告する第55次調査は、元岡・桑原遺跡群の最南端近くの福岡市と糸島市市境に位置する。調査地点中央には北から伸びてくる狭い尾根があり、尾根の両側は谷であるが、尾根は当調査区南端で終わり、東西の谷はつながって、調査区の南側では大きな谷を成している。谷は時代とともに埋まっていき、その最上面は白色系のシルト層である。シルト層の最上面には、部分的に縄文時代晚期の薄い包含層が形成され、シルト層の形成は縄文時代後期を前後する時期と考えられる。

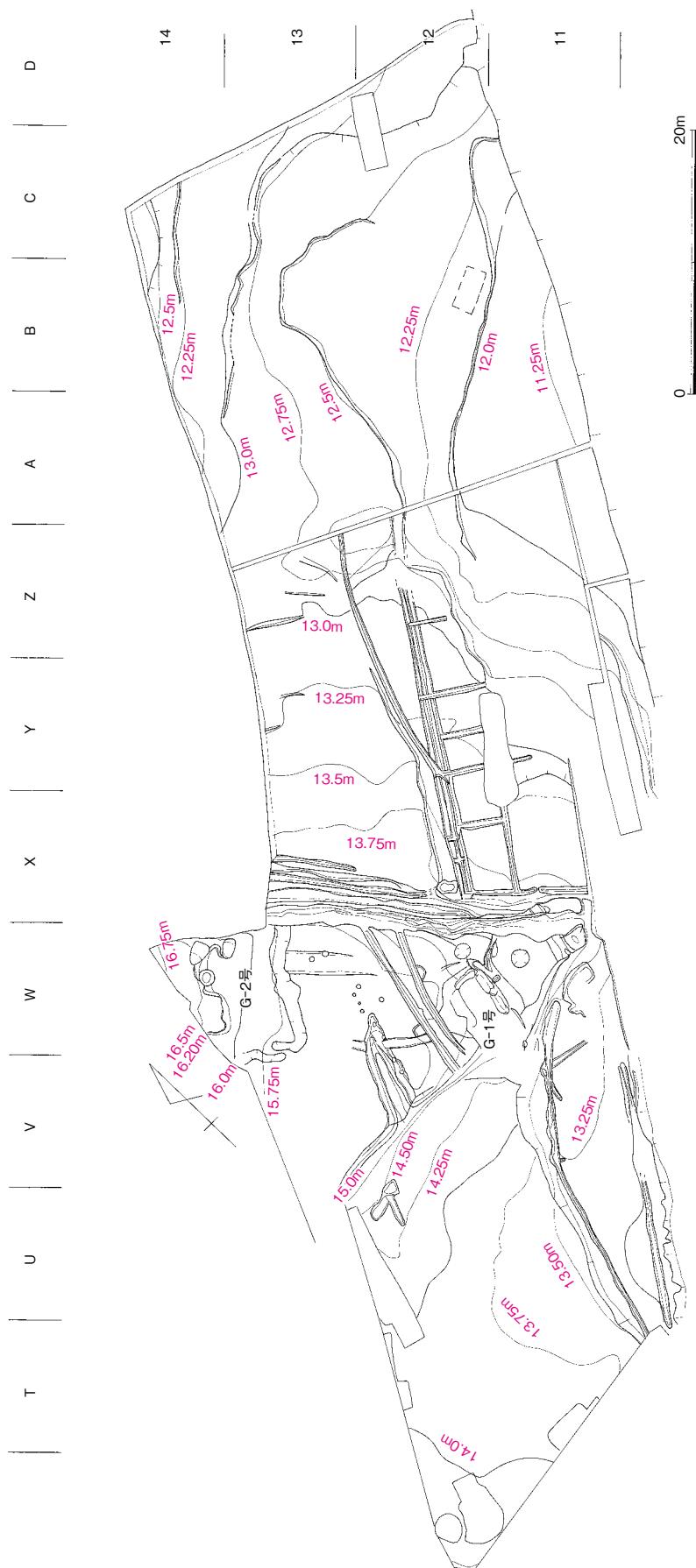
このシルトを切るように、東西に幅30m、深さ1～2mの2本の自然流路（42次・52次SD01・02）が形成され、その最下層にやはり縄文時代晚期の遺物が出土する。この2本の流路からは、弥生時代中期から古墳時代初頭を中心にコンテナ1万箱以上の弥生時代遺物が出土した。特筆するべき遺物としては、貨銭などの中国銭9枚、小銅鐸2点、楽浪系・朝鮮半島系の土器群、絵画入りの土器や木製品、船材などの多量の木製品などがある。両流路の間には、数軒の竪穴住居や建物群があるが、その数は多くはない。

谷の中央に伸びる尾根には古墳群が築造され（元岡古墳群G群）、当調査区内にはG-1・2号墳があるが、いずれも封土は遺存せず、石室と思われる石材が地表にわずかに顔を出している状況である。当調査区の北西にあるG-6号墳からは、平成23年度に紀年銘大刀が出土した（第56次調査）。当調査区では、中央に伸びる丘陵の先端部部分には古墳時代後期の古墳が2基あり（元岡古墳群G-1・2号墳）、谷部分には上述の自然流路と流路埋没後に形成された水田を検出した。調査は前述のように途中で中止したため、谷部については水田面下の流路埋没層上面まで行い埋め戻した。G-1号墳は床面まで調査した後、現地で保存し、現在は、九州大学によって盛土がなされている。

本報告ではG-1号墳、G-2号墳、SD01・02内包含層の順に報告する。

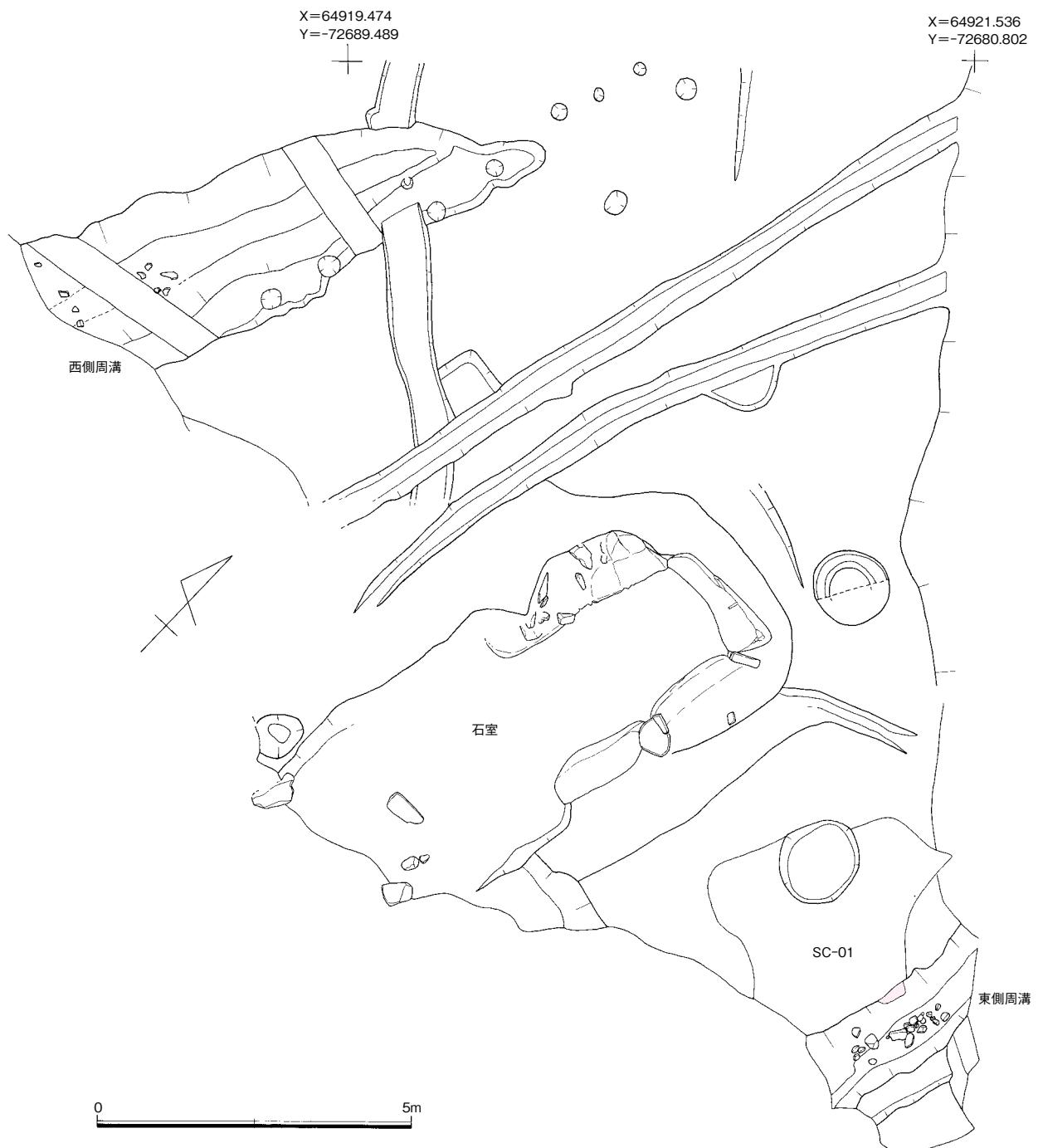


第1図 第55次調査区位置図



※グリッド名は第42次・52次と共通

第2図 第55次調査全体図 (1/500)



第3図 G-1号墳実測図 (1/100)

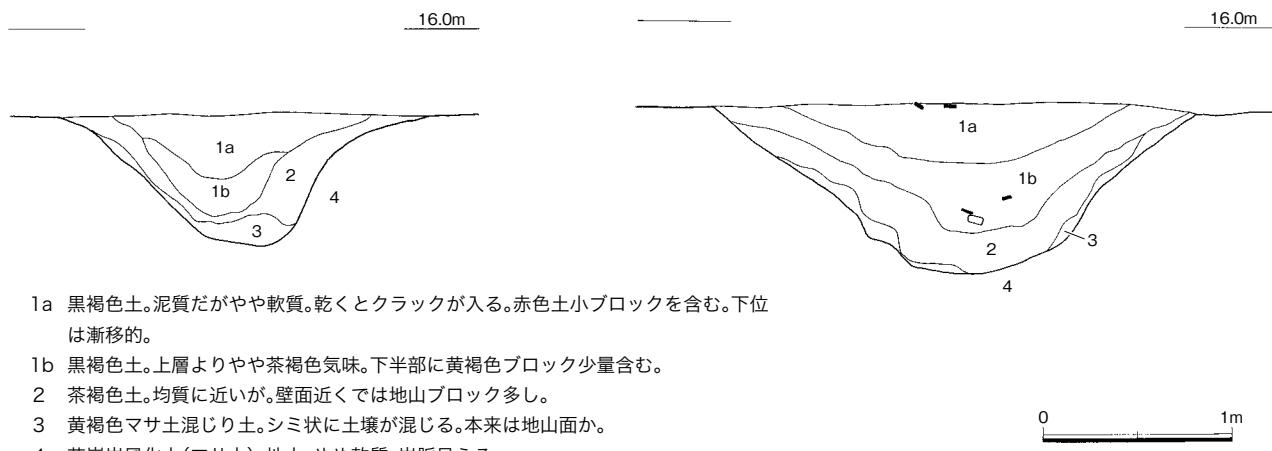
※赤アミ部分は焼土

3 調査の記録

(1) 元岡古墳群G-1号墳

① 立地・現況

調査区の中央に北から伸びる尾根があり、当古墳はその尾根の先端部に位置する。墳丘は全壊に近い。封土はほとんど遺存せず、ほぼ平坦になっており、石室の石材と考えられる石の上面が地表面に数点確認できる状態であった。また尾根の東・北・南側も大きく削平されている。調査は、石室と考えられる石材周辺の表土除去から開始した。



第4図 G-1号墳西側周溝実測図 (1/40)

② 墳丘 (第3・4図)

上述のように封土はほとんど遺存せず、古墳の周囲も削られているため、墳丘の形態や規模は明確にはわからないが、石室の西（山）側と東（平野）側で周溝の可能性がある溝が検出されている。

東側の溝 (SD 202) は、遺存部分の長さ約3.4m、最大幅約1.8m、最大深約20cmを測る。溝の東側立ち上がりは二段掘りなっている。遺存部分が少ないため明確ではないが、溝の方向は概ね石室主軸と一致する。溝底近くには長さ20～30cm前後の石が20個前後あり、溝内からは古墳時代の須恵器・土師器が出土した。

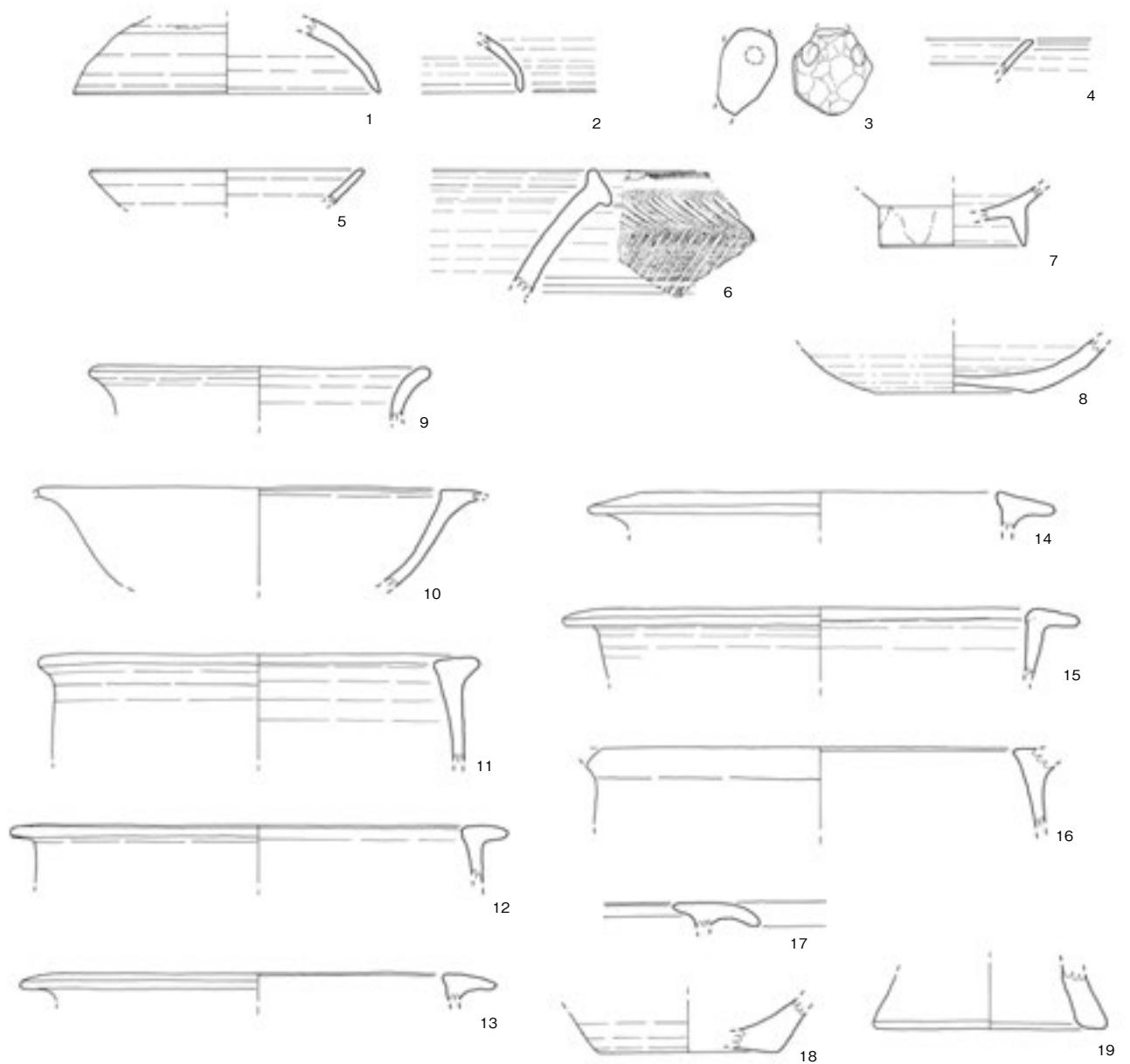
西側の溝 (SD 201) は南側が深く、北側に行くにつれて幅が狭く、底面が高くなり、途中で消滅する。南端と北端で80cm近く高低差がある。南端部分で最大幅約3m、深さ約1mを測る。溝の東側上端は溝の方向がほぼ石室主軸に近いが、溝の西側上端は直線を成さずにゆるい円弧を成している。またこの溝の延長線上にも溝の続きは確認できない。土層断面図 (第4図) を見ると、最下部に腐植していない層、その上層に腐植した黒色系の層がたまり、後者に墳丘からの転落遺物が入っている状況は、通常の古墳周溝と変わらない。溝内より古墳時代の土師器・須恵器が出土した。

上記のように、本墳の形状を判断する材料としては、溝2本のみであるが、遺存状況が悪く即決することはできない。まとめで検討する。

墳丘・溝出土遺物 (第5～8図)

1～19は墳丘北東隅のBトレンチ (G-1号墳北東隅部拡張区Bトレ) 出土。トレンチ内での出土位置・層位等は不明である。1・2は須恵器壺蓋。1は口径13.7cmを測る。3は土師器の把手、4は白磁碗の小片である。5は須恵器で鉢か。6は須恵器の甕。7は白磁碗、8は肥前産陶器と思われる。9～19は弥生土器で、本来は古墳が乗る丘陵の両側にあるSD 01・02に伴うものと考えられる。9・11～18は甕、10は高壺、19は支脚である。20は前底部Cトレンチ (G-1号墳前庭部東斜面Cトレンチ) 出土の肥前産染付である。21～26は墳丘Dトレンチ (G-1号墳南西隅部拡張区Dトレンチ) 出土で、トレンチ内での出土位置・層位等は不明である。21は須恵器壺身で、受部径11.2cmを測る。22は須恵器脚付壺と思われる。23・26は土師器高台壺、24は須恵器で平瓶か。25は褐釉陶器水注である。

27～33は石室西側溝 (SD 201) 出土。27～29は弥生土器。30～33は須恵器である。30は壺で、底径12.2cmを測る。外面はカキ目の後口クロナデ、内面は口クロナデで仕上げている。31は甕で、口縁部と頸部で同一個体で、口径49.8cmを測る。口縁直下に沈線で有軸羽状文を施す。



Aトレンチ

Cトレンチ

Dトレンチ



20



21



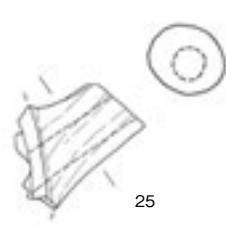
22



23



24



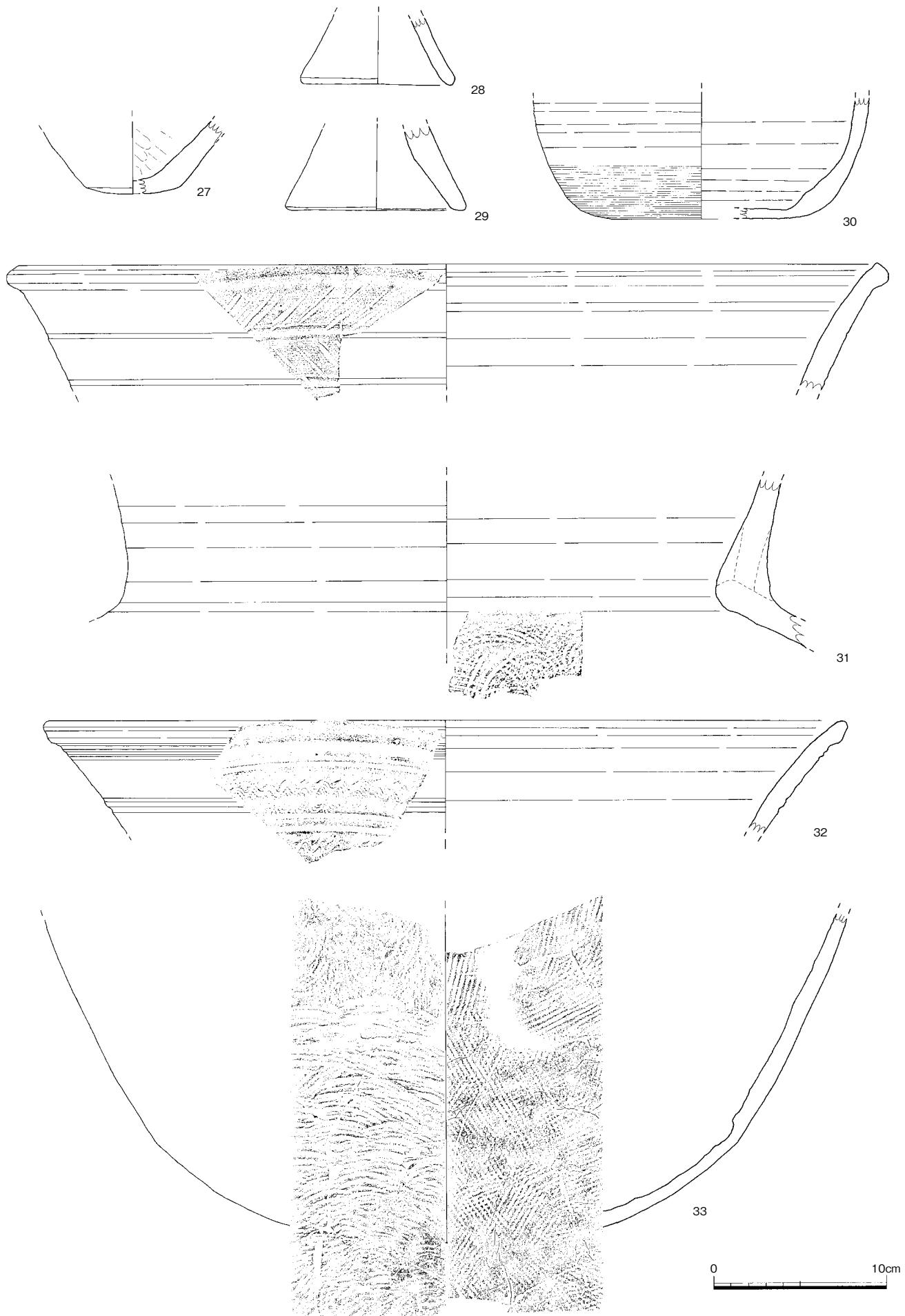
25



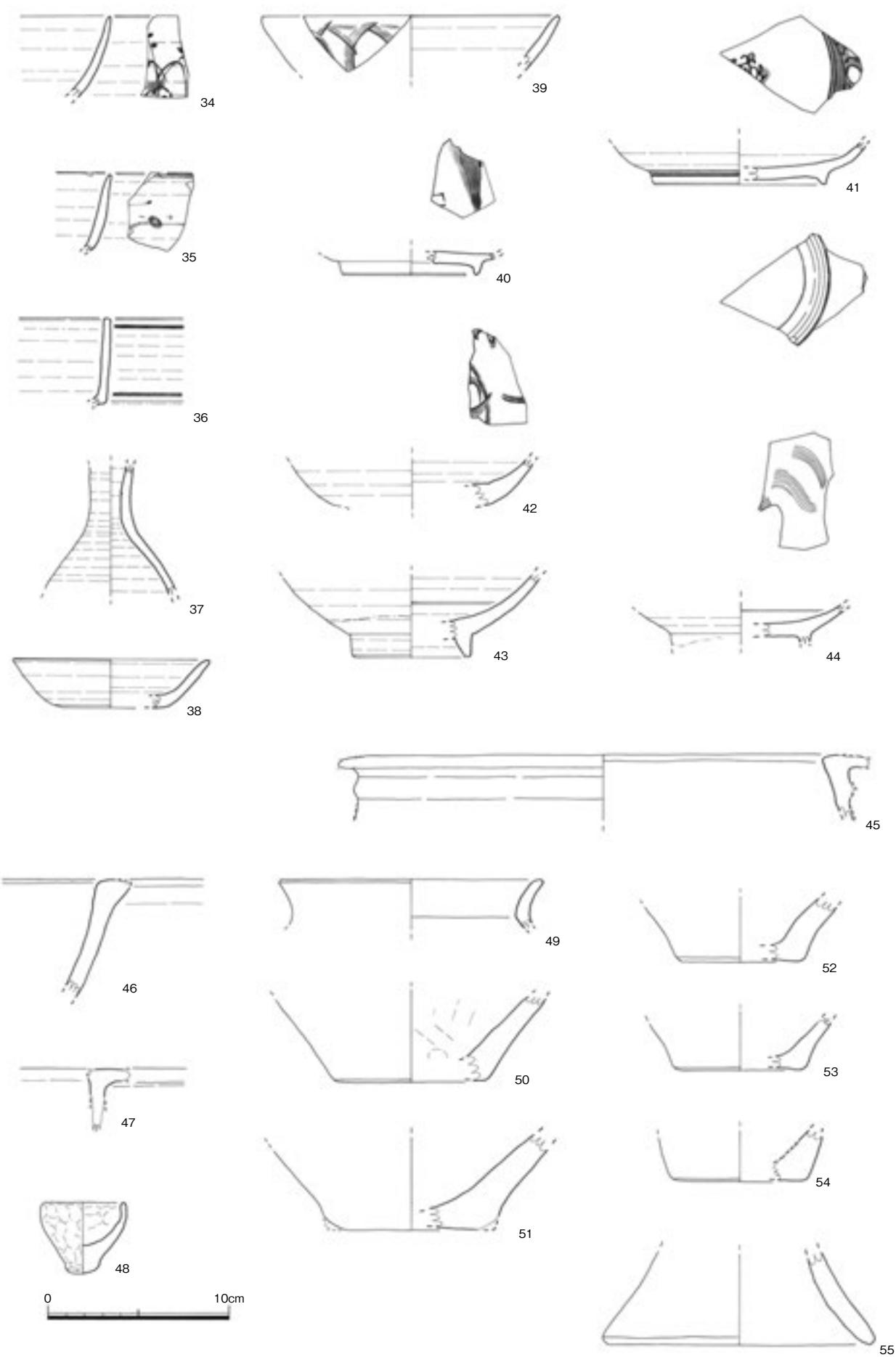
26



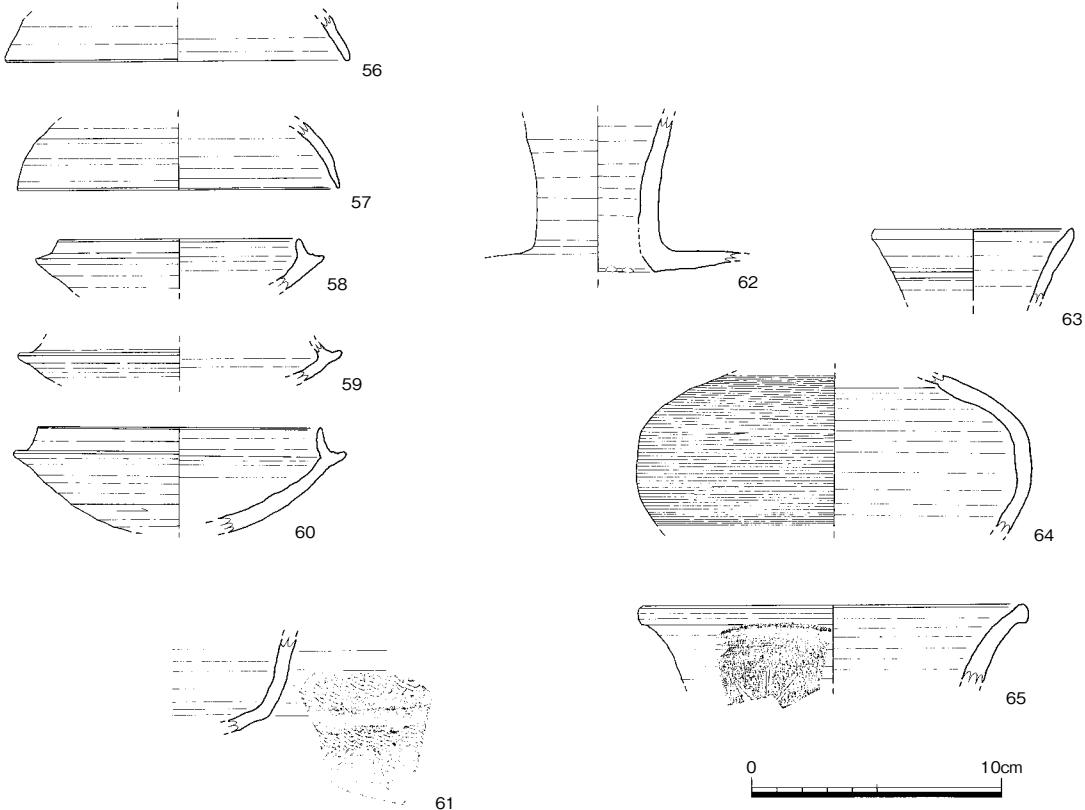
第5図 G-1号墳のトレンチ出土遺物 (1/3)



第6図 G-1号墳西侧周溝出土遺物 (1/3)



第7図 G-1号墳石室埋土上層出土遺物1 (1/3)



第8図 G-1号墳石室埋土上層出土遺物2 (1/3)

ほぼ全面を口クロナデで仕上げ、内面にわずかに自然釉がかかっている。32も甕で口径45.3cmを測る。ほぼ全面口クロナデで仕上げている。33は甕の底部で、残存部分の最大径45.4cmを測る。外面は擬格子目タタキ、内面は底部が青海波、上部は同心円の当具である。

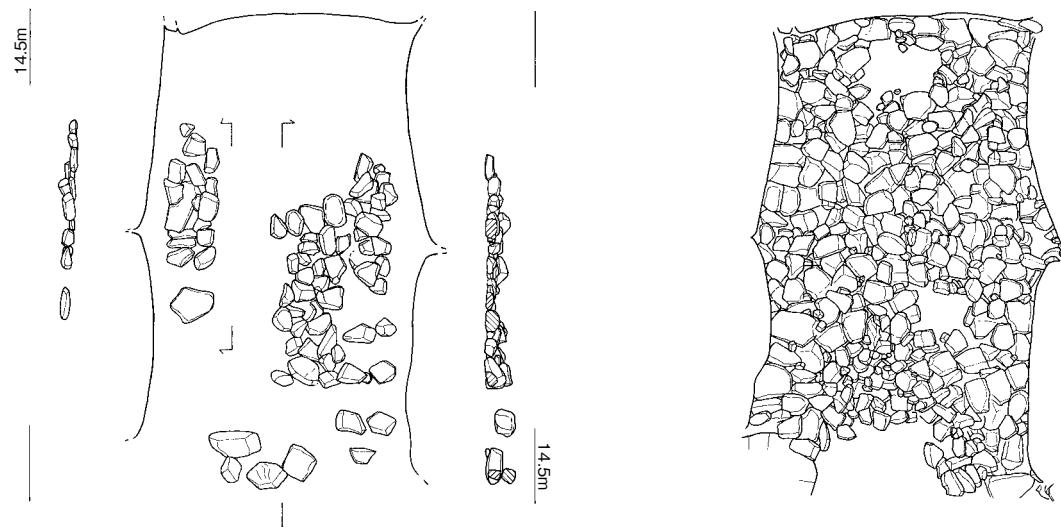
34～65は石室埋土上部から出土した。本来的には墳丘の遺物、あるいは石室崩壊後に混ざった後世の遺物が含まれていると考えられる。34～37・39～41は肥前産陶磁器で、17～18世紀代を中心とするものと思われる。42は中国製青磁碗で龍泉窯系の碗である。43・44は中国製白磁碗である。38は土師器の皿で、口径10.0cmを測る。45～55は弥生土器で、中期・後期が多い。56～65は須恵器である。56・57は壺蓋で、56は口径13.5cm、57は口径12.6cmを測る。58～60は壺身で、58は口径9.6cm、59は受部径12.7cm、60は口径11.1cmを測る。いずれも体部が直線に近い形状を呈している。61は鉢か。外面に櫛描きの波状文を施している。62は瓶の頸部。63は壺の口縁部。64は壺もしくは平瓶か。65は甕の口縁部で口径15.3cmを測る。

③ 石室

内部主体は横穴式石室で、玄室の両側壁と奥壁の腰石1石のみが遺存する。石材はすべて花崗岩である。両袖石と羨道部分は掘方で大略の幅がわかる。袖石は左右対称の位置に無く、左袖石の方が右袖石より30～40cmほど羨道部側に位置している。玄室から羨道にむかって左側壁の長さ3.6m、右側壁の長さ3.24m、奥壁中央から袖石部分までの長さ3.7m前後、石室中央部の幅2.1mを測り、長幅比はおおむね1.75：1を測る。奥壁は1石、両側石は2石から成り、両側石の石は、高さ1～1.2m、長さ1.6～1.8m前後の似たような石を用いている。奥壁は上部を割られているため、この石の高さは不明であるが、奥壁を1石で構築している可能性も考えられる。

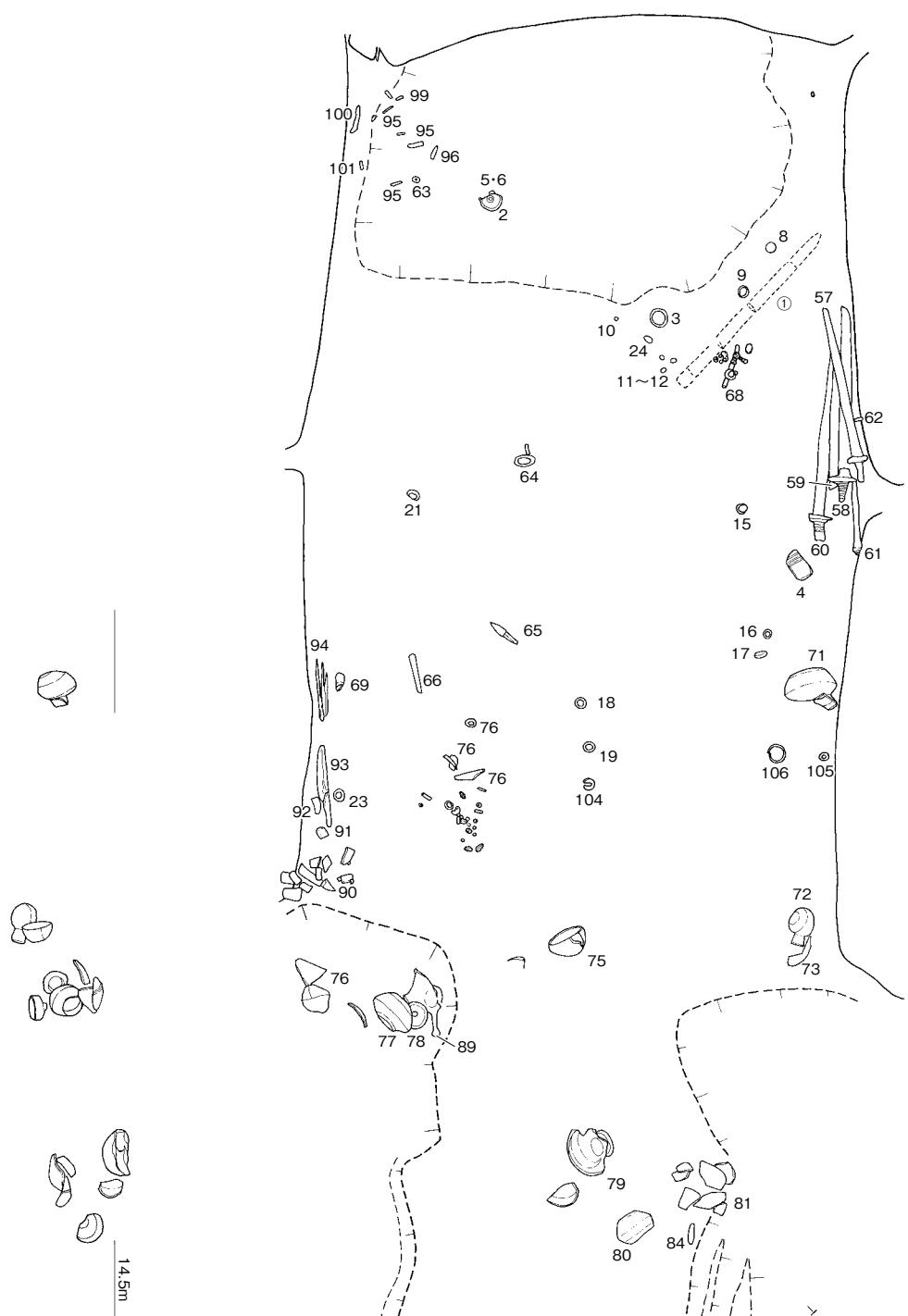


第9図 G-1号墳石室実測図 (1/60)



第10図 G-1号墳石室第1面（左）・第3面（右）実測図（1/60）

0 2m

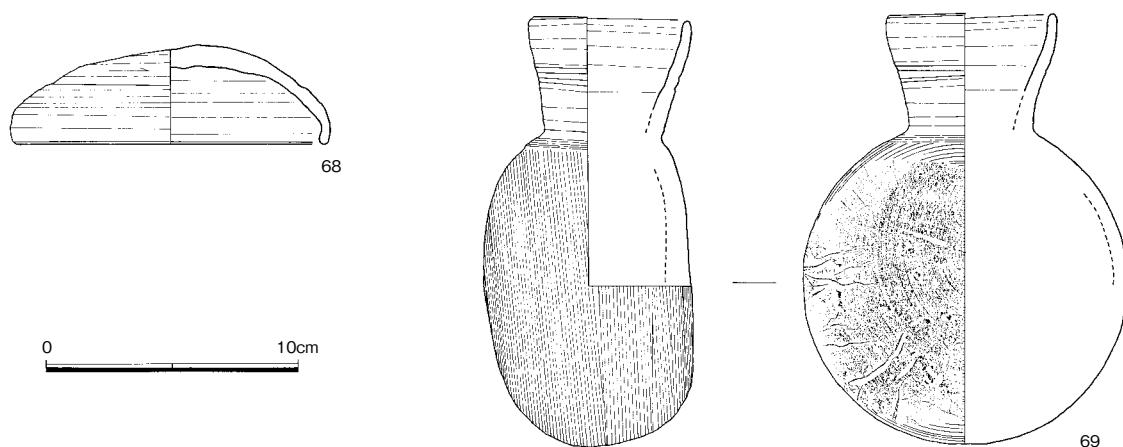
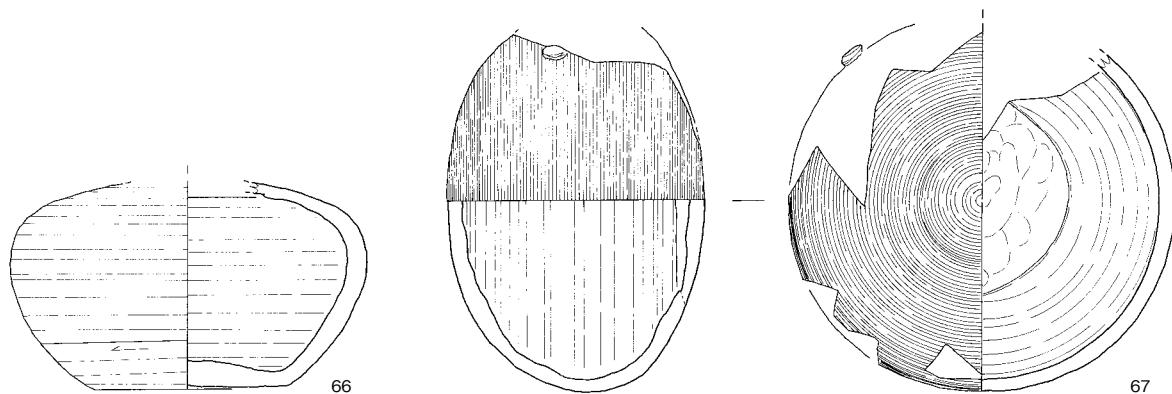


第11図 G-1号墳石室遺物出土状況実測図（1/30）

玄室床面には礫が敷かれているが、礫の上面は、築造当初の床面は当然ほぼ平坦を成しているが、羨道部側の一部でそれより高い位置に礫がまとまっており、吉留はこれを第一面としている（第10図左）。吉留は、この第一面を調査後、礫を撤去し、石室全体の実測・写真撮影を行った（第9図）が、なお一部で床面の礫が高い位置にあり、その下にも礫が確認できたため、最終的に大塚がそれらの礫を撤去して築造当初の床面を検出した（第10図右）。

羨道部は、ほぼ壁面は遺存しないが、壁面最下部の石の掘方が確認でき、3.6m以上の長さがある。現存部分では玄室の長さとほぼ同じである。羨道部床面は玄室床面（築造当初）より一段（15～20cm）高い。両袖石を結んだ玄室側の線から70cm前後の位置に樋石状の石が置かれている。またこの石から1.4m前後石室入り口側の位置に、樋石状の掘方があり、そのすぐ石室入り口側にずれて割れたのではないかと考えられる石がある。複室ではないものの、羨道部が数区画に分かれていたものと思われる。閉塞石は現存していない。また前庭部や墓道は後世に削平を受けている。

玄室奥壁近くの一部と羨道部床面は後世の搅乱を受けているが、玄室内床面における副葬品の遺存状況は全般的に良好で、刀・刀子・鎌等の鉄器、勾玉・管玉等の装飾品がほぼ原位置に近い位置と考えられる場所で出土した。一方須恵器・土師器等の土器の多くは床面からやや高い位置で出土したものや袖石を抜いた跡から出土したものがある。これらの副葬品と追葬の関係については不明であるが、吉留が埋葬位置を復元している（まとめ参照）。なお玄室上部埋土内から弥生時代から現代の遺物が出土した（前記）。



第12図 G-1号墳石室出土遺物実測図1 (1/3)

石室床面出土遺物（第12～23図）

石室床面もしくはそれに近い位置からは、土器類、刀・鎌・などの鉄製武器、勾玉・管玉などの玉類、鏡などの重要な遺物が多く出土した。出土位置については第11図に大枠を示しているが、中には床面から浮いているものや破損しているものもあり、初葬時のものと追葬時のものが混在していると考えられるが、細かな分析は行っていない。以下、種類別に記載していくが、鉄製品・玉類等については、第4章で比佐・松園が詳細な分析を行っているため、本章では簡便に記載している。

須恵器・土師器（第12・13図）

66～77は石室床面ないしは床面近くから出土した須恵器・土師器で、66～69は羨道部で出土した。一部床面の攪乱出土を含んでいる。

66～74は須恵器で、66は羨道部出土の壺で、胴部最大径14.0cmを測る。67は羨道部壁際で出土した堤瓶で、胴部径15.0cmを測る。68は羨道部最先端（入口側）で出土した壺蓋で、口径12.3cmを測る。69は68と同じ場所で出土した横瓶で、口径6.8cm、器高17.0cmを測る。

70～75は玄室床面近くで出土した。70は右袖石抜け跡で出土した蓋で、口径11.3cmを測る。天井部付近にはカキメを施し、外面一部に自然釉が付着している。71は同じく右袖石抜け跡で出土した脚付壺で、70とセットと思われる。口径9.65cm、器高19.75cmを測る。72も右袖石抜け跡で出土した平瓶で、胴部最幅17.6cm、器高17.6cmを測る。体部外面全面をカキメで仕上げている。73は左袖石近くで出土した堤瓶で、全体的にやや歪んでいる。器高13.0cmを測る。74は左壁際中央付近で出土した平瓶で、口縁部を一部欠いている。最大幅19.4cm、器高16.4cmを測る。カキメは胴部上半にしか施されていない。

75～77は土師器で、いずれも床面上で出土した。75は左壁際に4振出土した大刀群の上に伏せた状態で出土した土師器壺である。全面をていねいなナデもしくはミガキで仕上げている。色調は明るい橙色を呈している。口径13.4cm、器高4.7cmを測る。76は石室中央のもっとも羨道部に近い場所、框石があった付近で出土した土師器の鉢（碗）である。全面ナデで仕上げている。口径11.5cm、器高6.7cmを測る。77は76近くで出土した土師器鉢（碗）である。

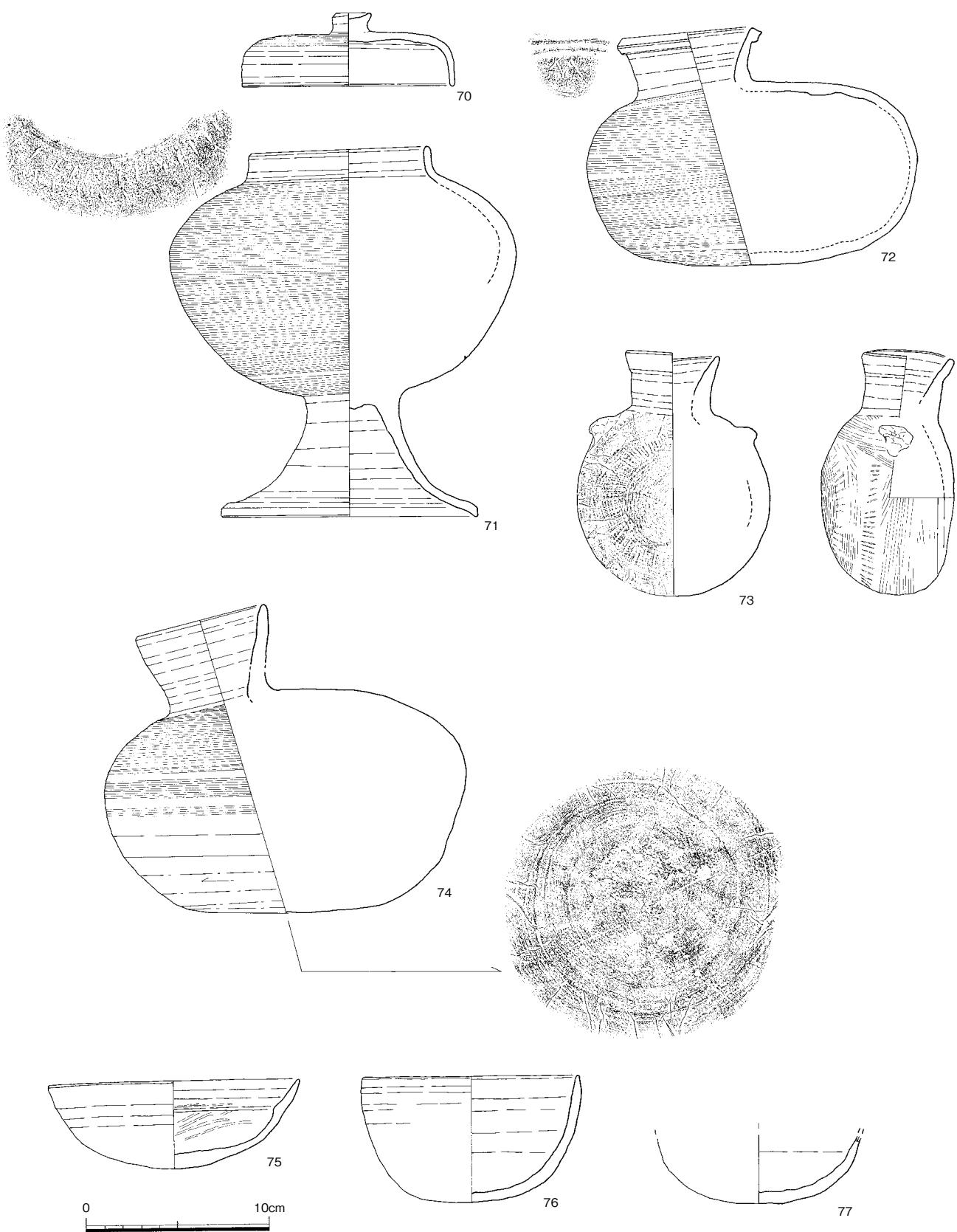
金属器

鉄鎌（第14・15図）

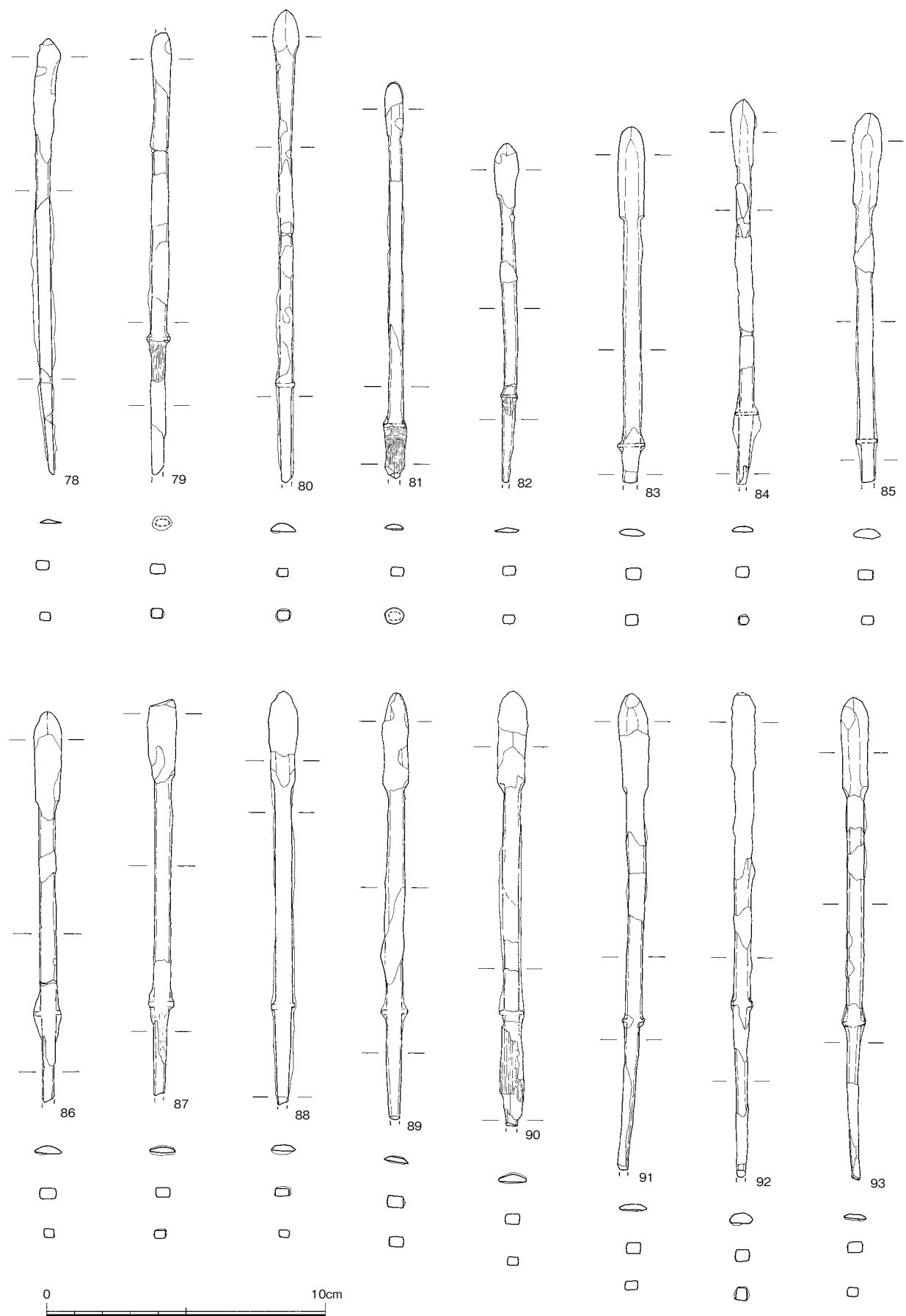
78・80・82・84は玄室右壁際前方で壁に沿って床面敷石上で出土した。109は羨道部最先端、その他は右壁際奥壁近くで壁に沿ってまとまって床面敷石上から出土したと思われる。

大刀（第16図）

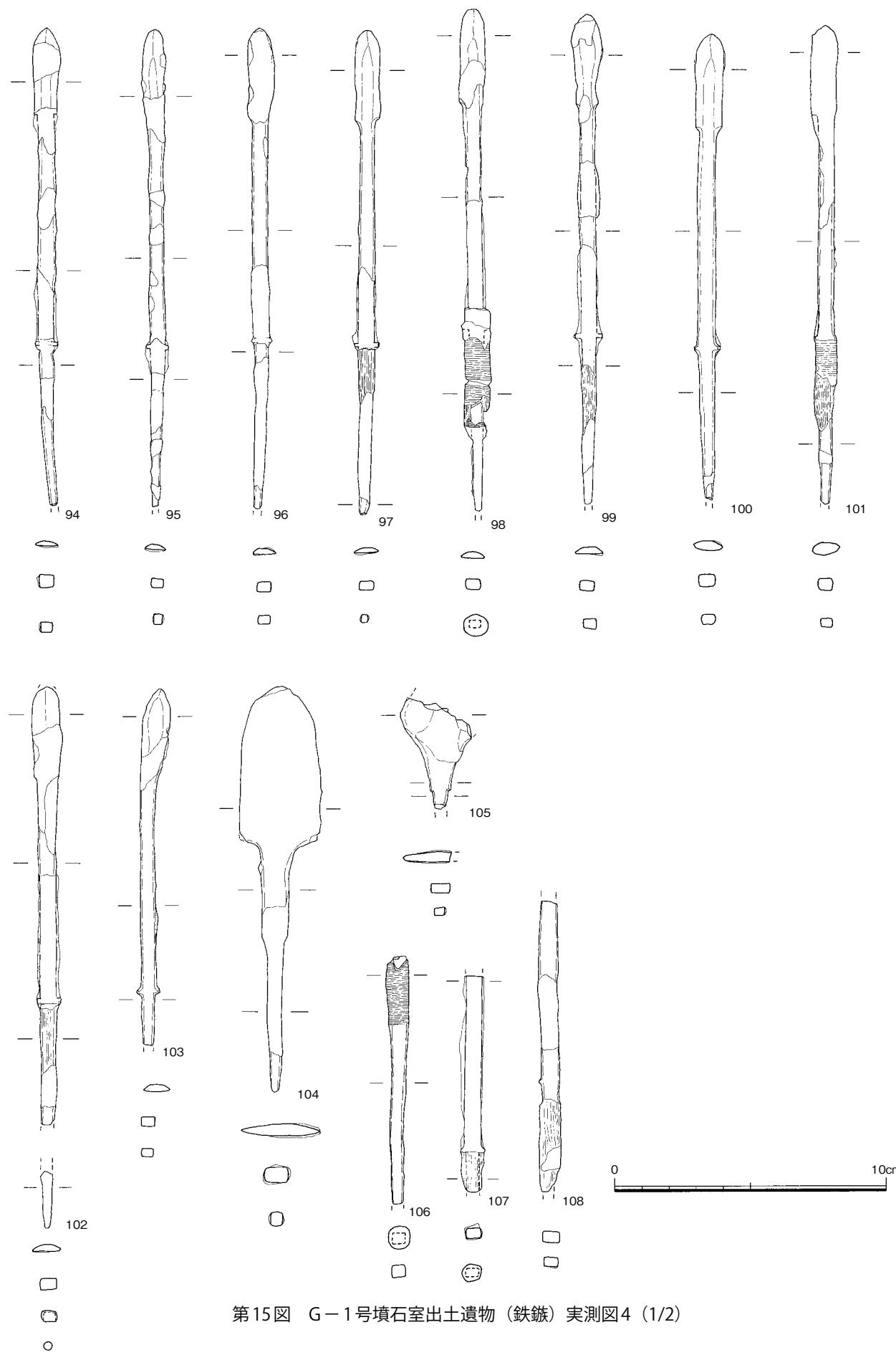
玄室左壁際中央で壁に沿って敷石上で4本がまとまって出土した。4本とも切先を奥壁に向けているが、位置は微妙に異なっている。109は全長60.6cmを測り、切先をわずかに欠損している。銛が装着し、茎先端には釘がついている。110は全長74.55cmを測る。銛・鍔が装着している。茎には木質が残っている。111は長さ72.8cmを測る。銛・鍔が装着している。茎の目釘孔が明瞭にわかる。112は長さ77.75cmを測る。銛・鍔が装着している。銛は鉄芯金貼で、鍔は銅地金貼である。茎には銀線を少なくとも十一重が巻かれている。大刀群から10数cm離れて、圭頭（第17図127）が出土しており、この刀に装着するものである。ほぼ同じ長さの110～112のうち、圭頭大刀（112）がもっとも上におかれ、3本の上にやや短めの109が置かれていた。



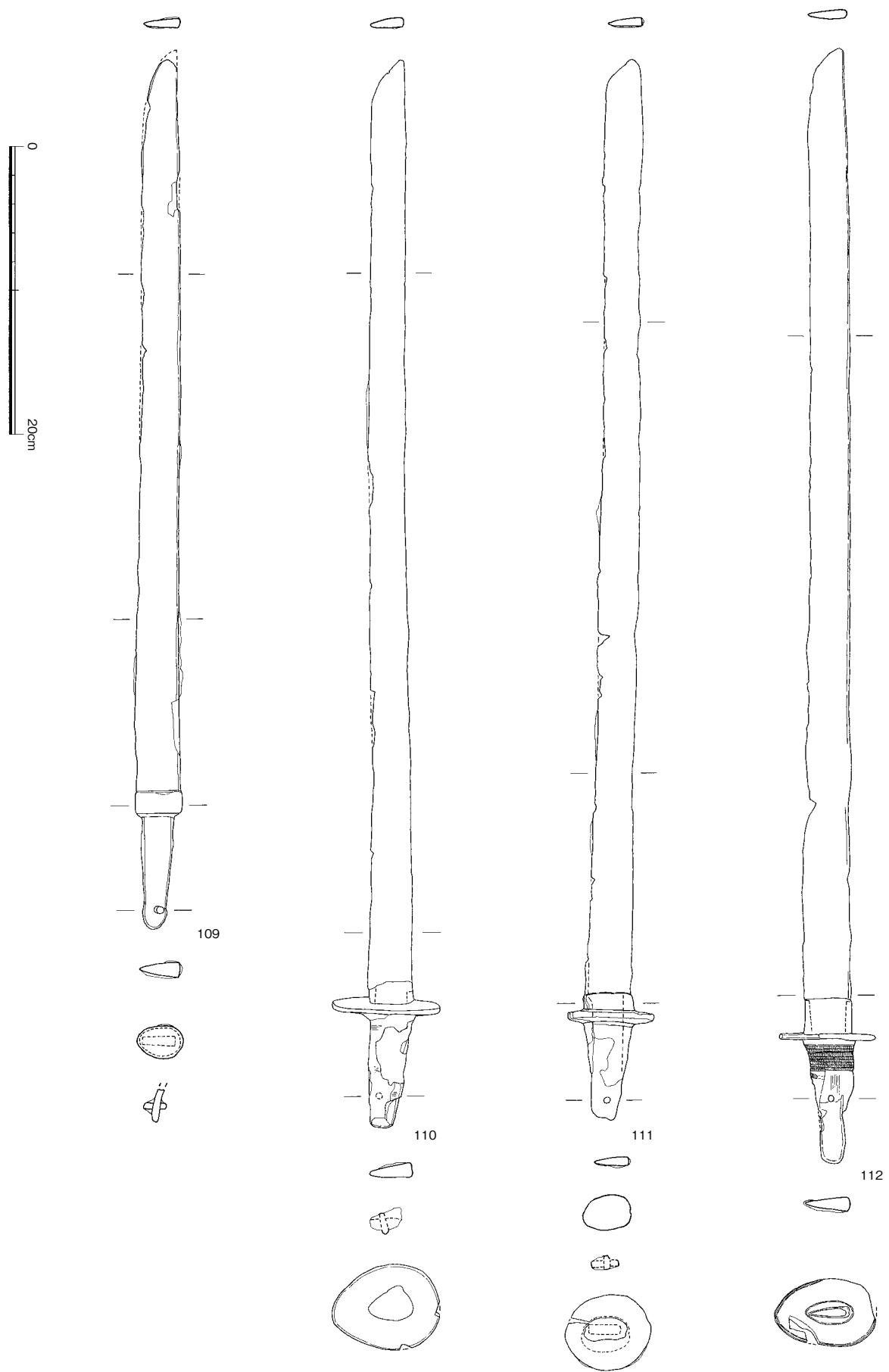
第13図 G-1号墳石室出土遺物実測図2 (1/3)



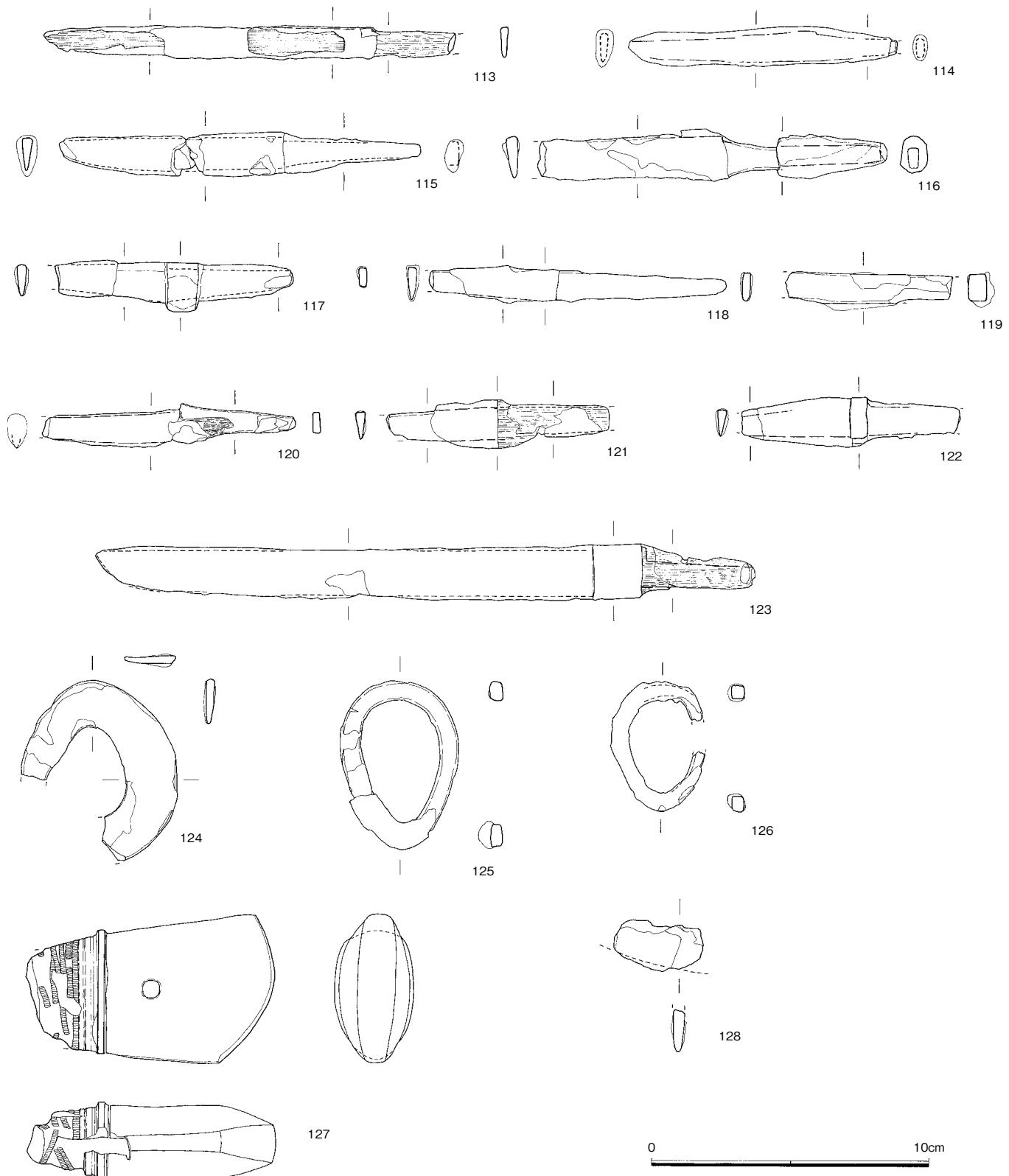
第14図 G-1号墳石室出土遺物（鉄鏃）実測図3 (1/2)



第15図 G-1号墳石室出土遺物（鉄鏡）実測図4 (1/2)



第16図 G-1号墳石室出土遺物（大刀）実測図5（1/4）

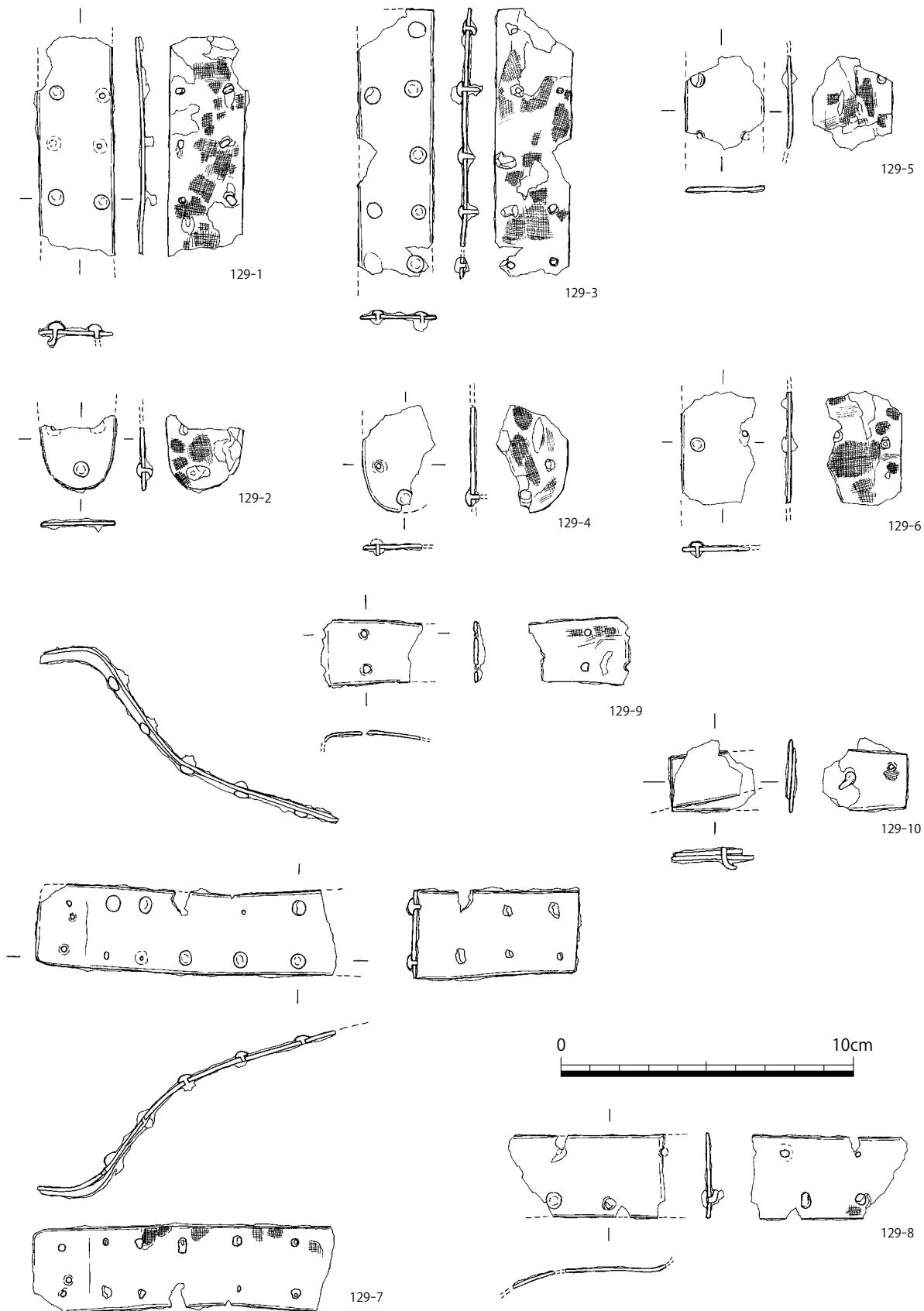


第17図 G-1号墳石室出土遺物（刀子・刀装具）実測図6 (1/2)

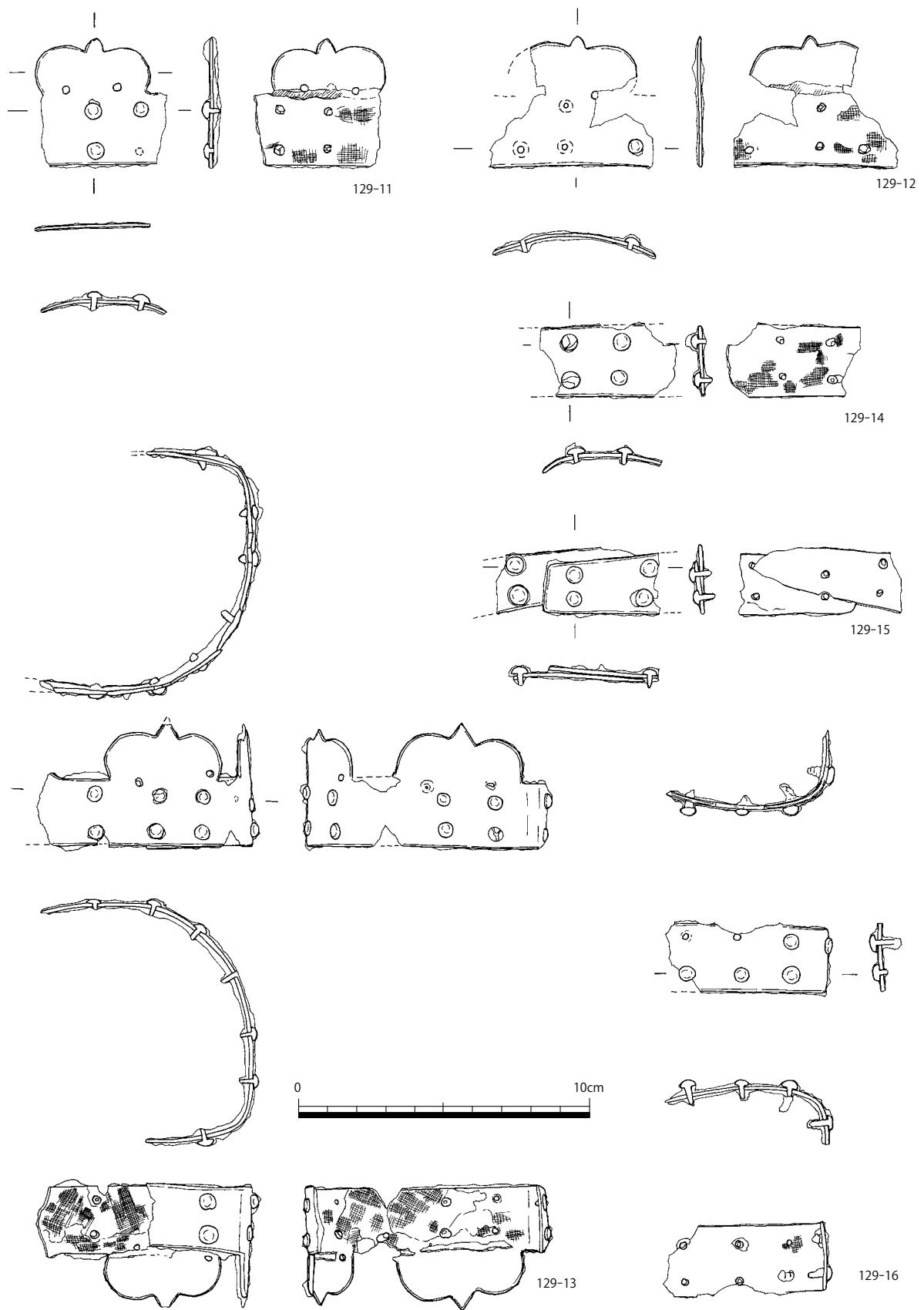
小刀・刀子（第17図）

113は上記大刀群のやや中央寄りで、ガラス玉などの玉類十数点の上から出土した。現存長14.75cmを測る。ほぼ全面に木質が遺存している。114は框近くで出土した。全面鍛で覆われている。現存長9.65cmを測る。115は上記大刀群と同じ場所で出土した。116・117は上記78などの鉄鎌群近くやや石室中央寄りで別々に出土。118は右袖石抜け跡付近で、割れて離れた状態で出土した。119は石室中央付近奥壁寄り、120は石室中央付近右壁寄りで出土した。121は出土位置不明、122は前記

大刀群の場所で出土した。123は短めの刀で、銛を装着している。長さ23.55cmを測る。右壁際奥壁近くの鉄鎌群と一緒に出土した。



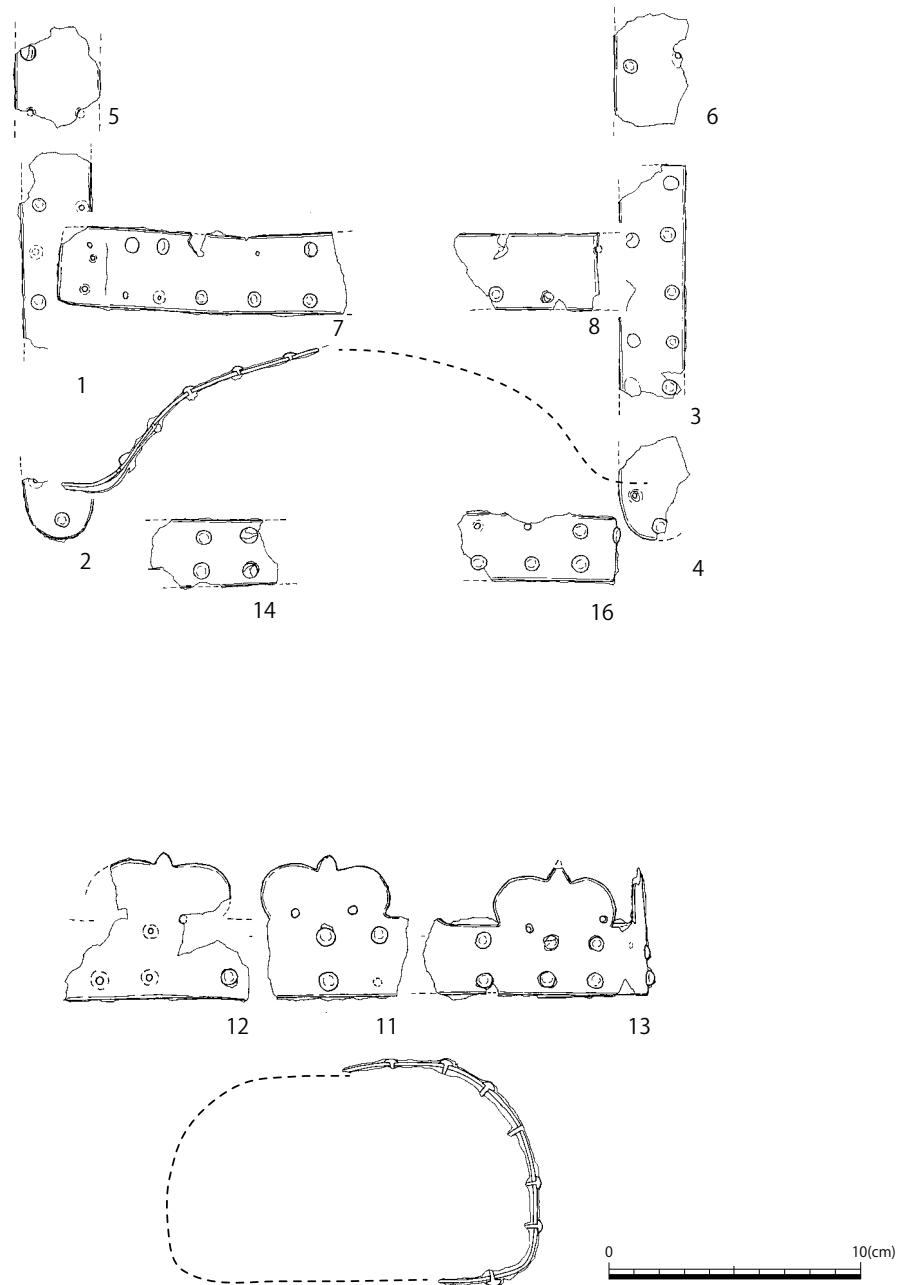
第18-1図 G-1号墳石室出土遺物（胡籠金具）実測図7（1/2）



第18-2図 G-1号墳石室出土遺物（胡籠金具）実測図8（1/2）

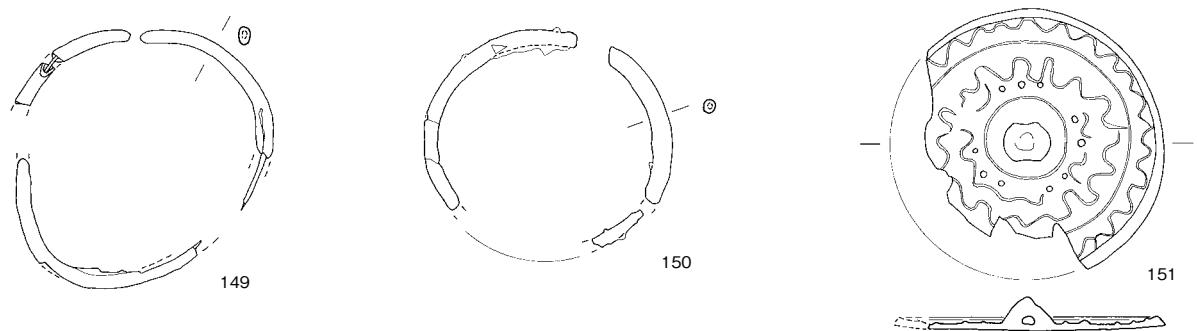
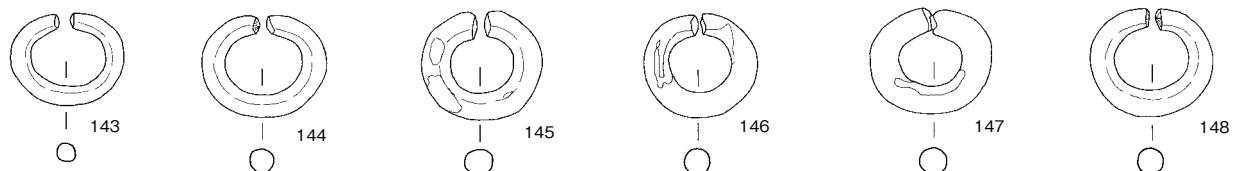
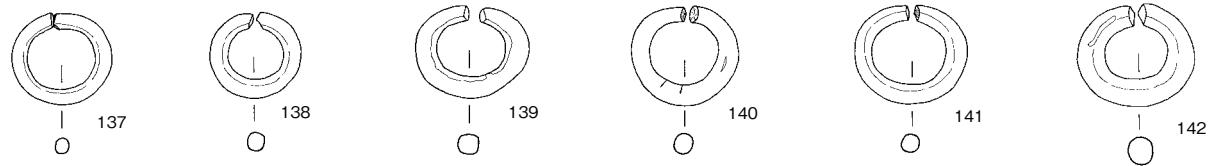
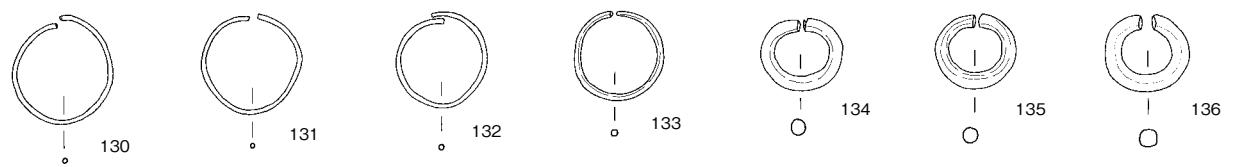
刀装具及びその他の鉄器（第17・18図）

124は刀の鐔で、大刀109の鐔である。125・126は鞘金具、責金具等であろうか。127は大刀112の柄頭で、いわゆる圭頭である。刀身側に銀線が5～6重巻かれしており、刀身部分の銀線と合わせ、十五重前後巻かれている。128は馬具か。129は胡簾金具である。約20点ほどに割れて出土しているが、一体のものである。

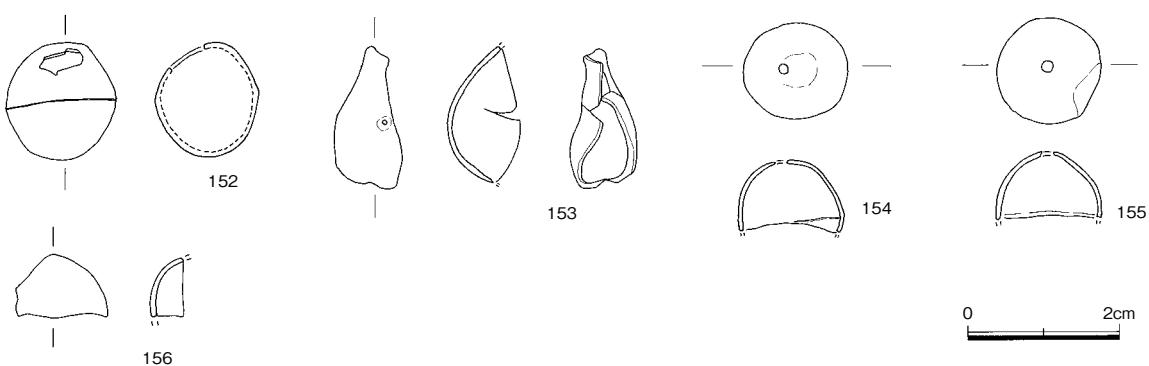


※部材5、6は裏面の有機物付着状態が1~4に似ていたため吊り金具の部材として配置したが、帯の幅が異なつておき確度は低い。

第18-3図 胡簾復元図（案）（1/3）

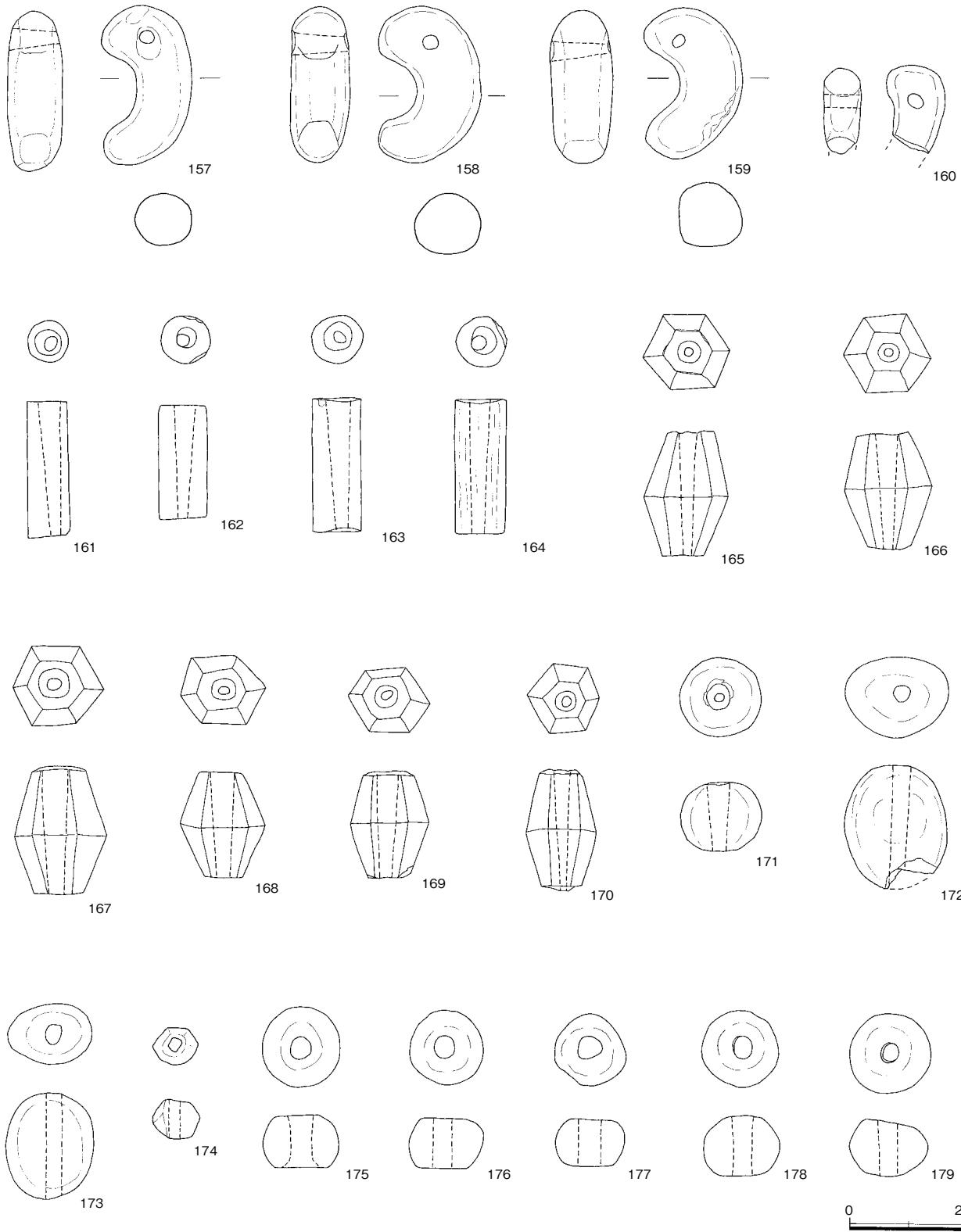


0 5cm

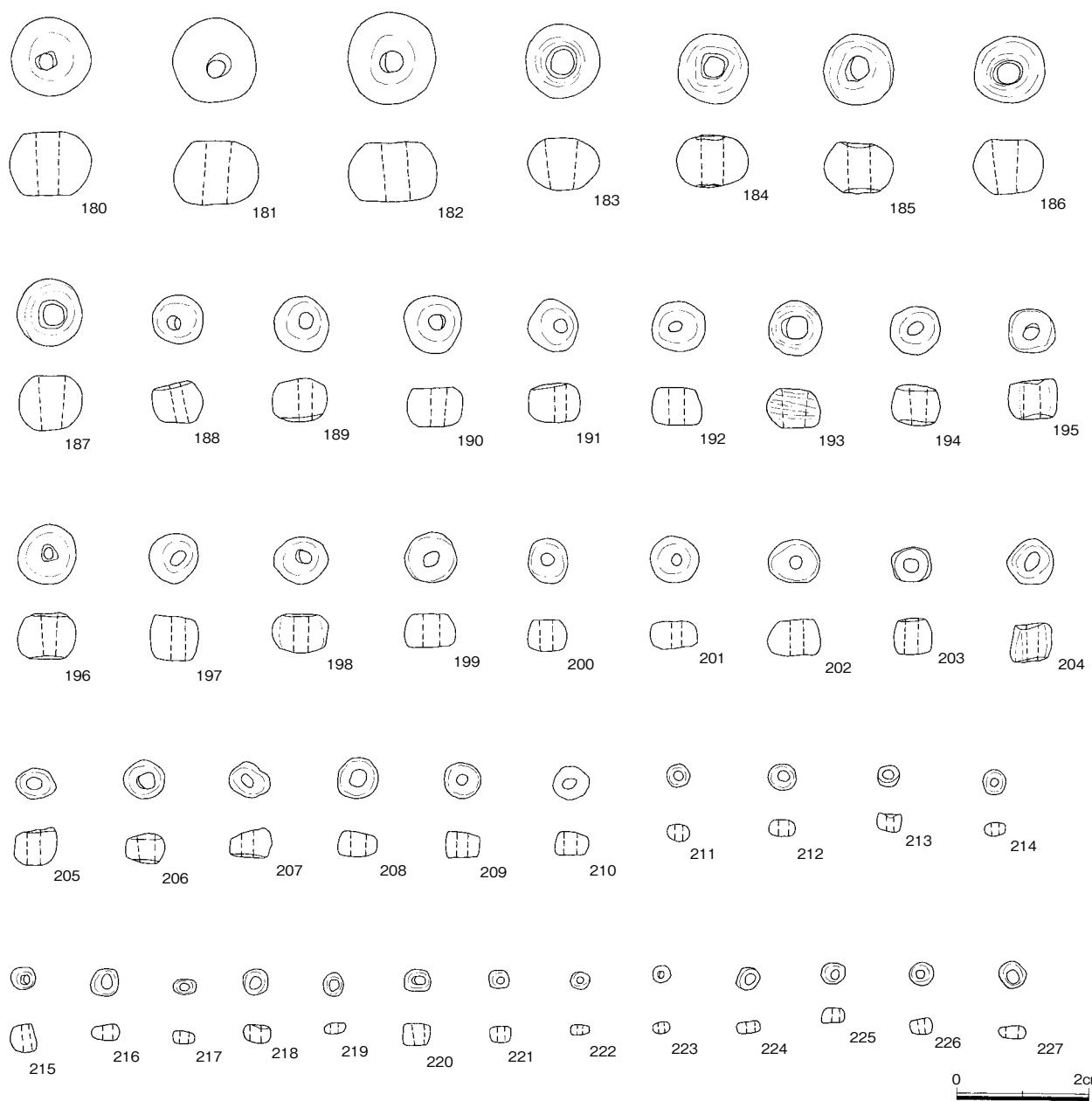


0 2cm

第19図 G-1号墳石室出土遺物（耳環・鉤・鏡・空玉）実測図9 (1/2・1/1)



第20図 G-1号墳石室出土遺物（玉類）実測図10（1/1）



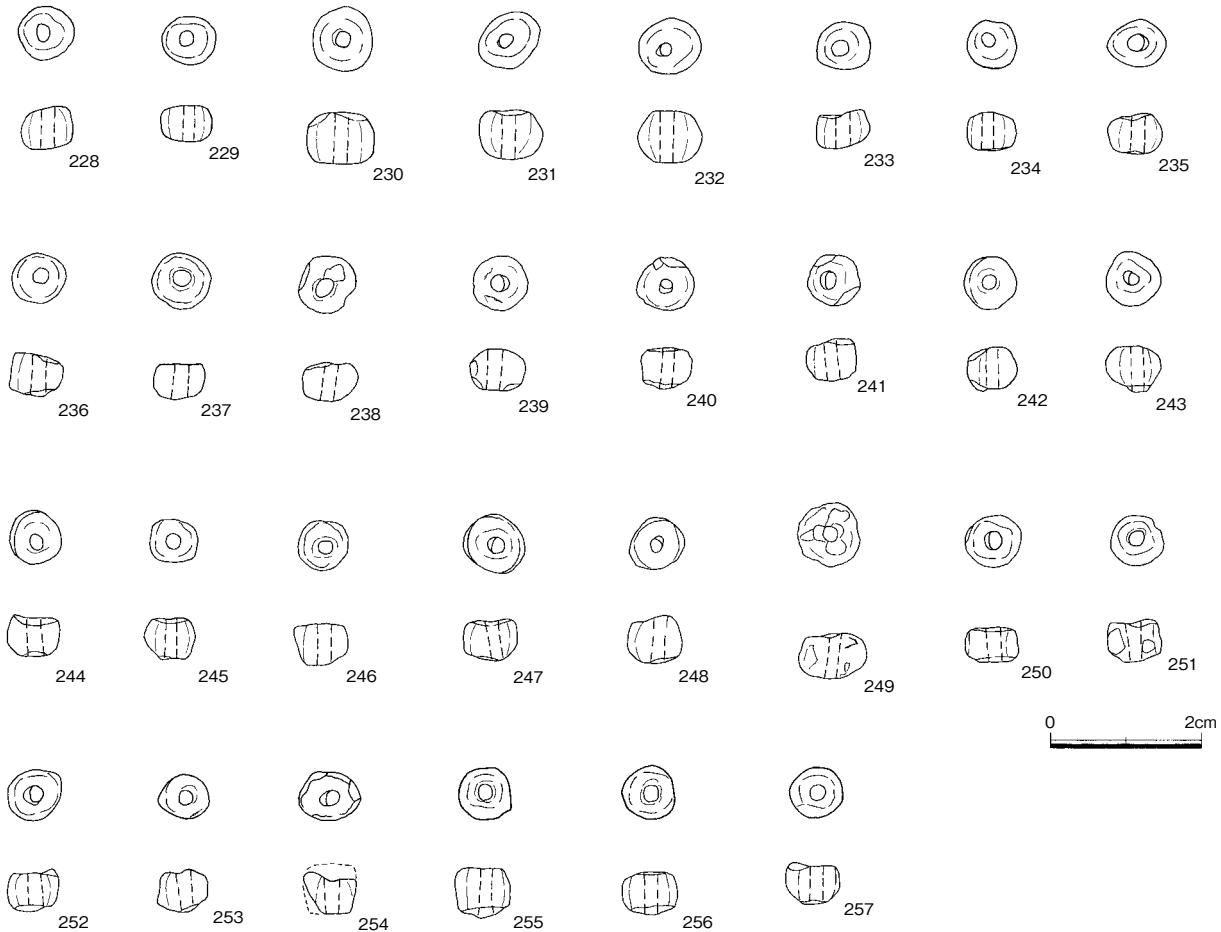
第21図 G-1号墳石室出土遺物（玉類）実測図11（1/1）

耳環（第19図）

耳環は、石室内から点々と出土しているが、吉留は耳環の位置から埋葬者の位置を推定している（まとめ参照）。130～132はいわゆる金環で、幅（径）1～2mmの針金状の金を長さ7～8cm前後に切り、円形に曲げたものである。133は銀製。134～148は青銅製の耳環で、多くに鍍金が認められる。径2.3～3.3cm、厚さ0.4～0.8cmを測る。

銅鉈（第19図）

149・150は青銅製の地に鍍金を施した鉈である。149は石室前方左壁近くで出土した。直径6～7cmを測る。150はラベルが無く出土地不明。



第22図 G-1号墳石室出土遺物（玉類）実測図12（1/1）

銅鏡（第19図）

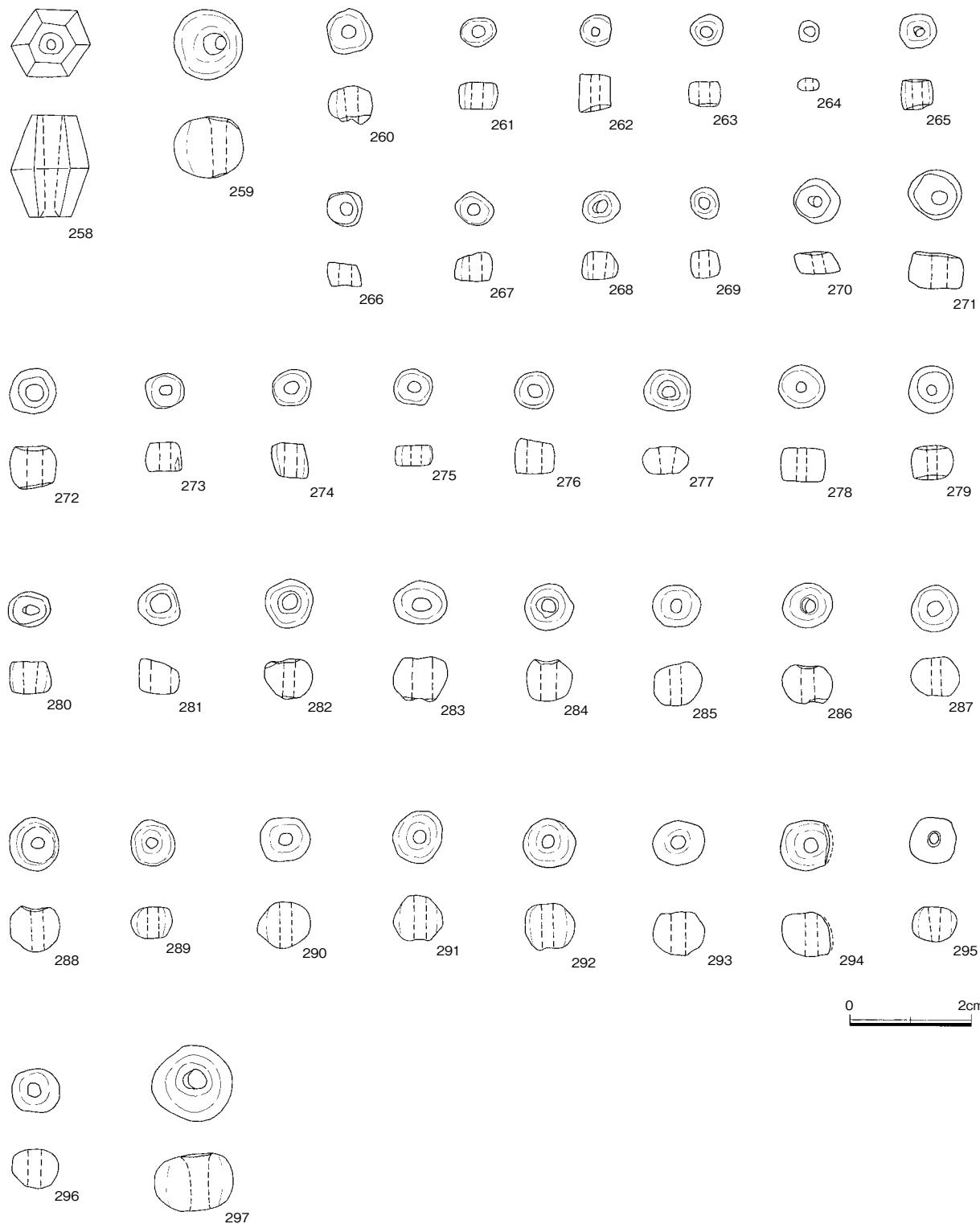
151は、奥壁近くの浅い攪乱内の床面で出土した青銅鏡である。鏡の下に耳環とガラス玉があったが、一部を欠損しており、本来の位置での出土かどうか不明である。直径7.6cmを測る。鏡背の文様は、外区も内区も波状を呈した文様で、仿製鏡である。

空玉（第19図）

152～156は銀製の空玉である。152は唯一の完形に近いもので、直径1.5cm前後を測る。いずれも器壁1mm前後と薄い。

玉類（第20～23図）

玉類は、水晶製・硬玉製・ガラス製勾玉、碧玉製管玉、水晶製切子玉、琥珀製棗玉、水晶製・ガラス製丸玉、ガラス製小玉、土製玉などがある。157～160は勾玉で、157は水晶製、158・159は翡翠製、160はガラス製である。水晶は透明度が極めて高い。翡翠は糸魚川産と推察される。161～164は碧玉製の管玉。168～170は水晶製切子玉、171は水晶製の丸玉である。172・173は琥珀製棗玉、174は瑪瑙製と思われる小玉で47ある。175～227はガラス製の丸玉・小玉・粟玉で、全点が青色～紺色を呈している。228～257は土製の玉である。258～297は「2面」と明記されたものを集めたが、大半が床面の土を水洗いして見つかったものである。258は2面敷石No.1と明記のある水晶製の切子玉。259～281・297はガラス製の玉で、269が緑色に近い他は、紺色系統を呈している。282～296は土製の玉である。



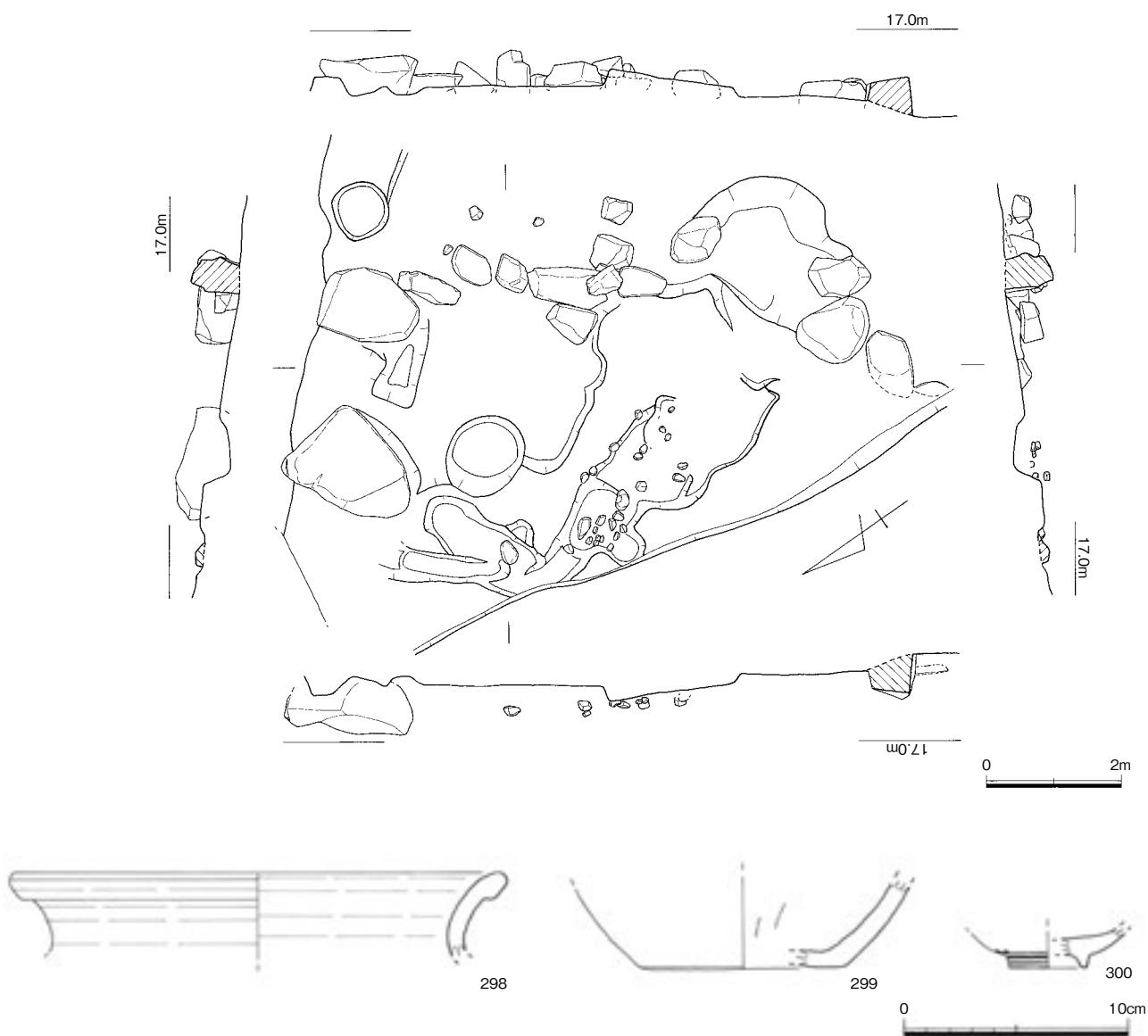
第23図 G-1号墳石室出土遺物（玉類）実測図13（1/1）

(2) 元岡古墳群G-2号墳

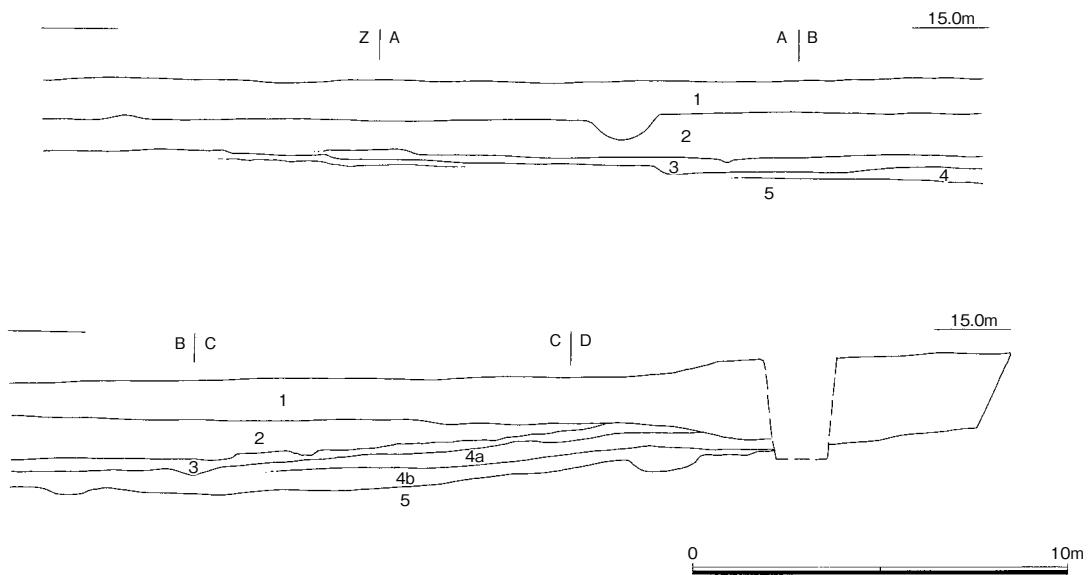
G-2号墳は、G-1号墳の山側20mの位置にある。調査前に礫が数点頭を出していた。表土を剥いだ結果、長さ0.5~2mほどの礫約20点が見つかった。礫は石室最下段の石としては比較的小ぶりである。一部が列をなしているような状況であるが、石室掘方や石材抜け跡と明確に判断できる穴は、図面や写真を見る限りは明瞭ではない。

出土遺物（第24図）

周辺から出土した遺物で3点実測している。298は須恵器の甕で、口径21.7cmを測る。299は弥生土器、300は肥前系染付である。

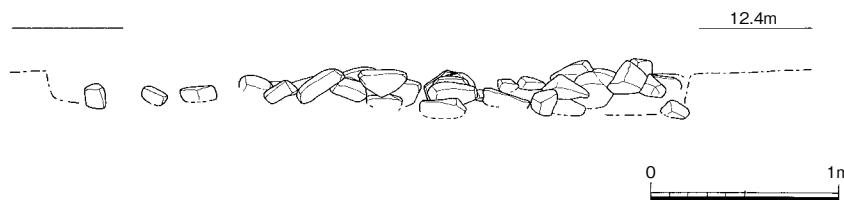
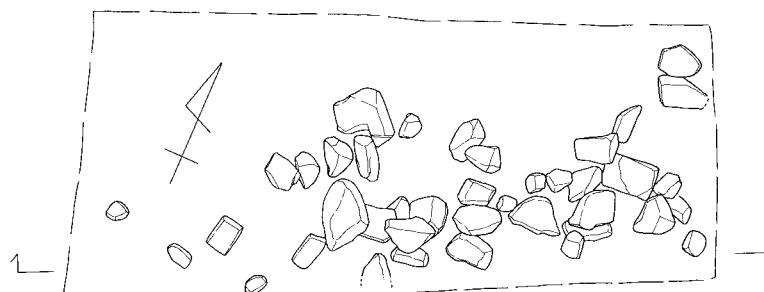


第24図 G-2号墳石室周辺実測図（1/100）及び同出土遺物実測図（1/3）



- 1 黄～茶褐色土。礫・瓦・コンクリートブロックを多く含む。昭和後期の水田かさ上げ時の盛り土。
- 2 上部は暗灰色シルト(耕土)、下部は暗～茶褐色シルト(床土)。昭和後期以前の水田。
- 3 暗～黒褐色シルト。水田層。
- 4 上部は暗褐色シルト、中位は黒褐色シルト、下部は暗黄褐色細砂。
- 5 黒褐色シルト～粘質土。下部は黑色シルトと暗灰色砂の互層。古墳時代後期包含層。

第25図 調査区北壁土層断面図 (1/200)



第26図 石組遺構実測図 (1/40)

(3) その他の遺構・包含層出土遺物

当調査区南東側隣接地である第42・52次調査では、調査区の東と西に幅約30mの自然流路S D 01・S D 02が流れ、当調査区に続いている。溝は古墳時代には埋没し、その後中世以降の時期に開田したものと考えられ、隣接調査区である第42次・52次調査区と当調査区でも水田跡が検出されている。水田面は2~3枚あり、最上層の水田は、戦後のものである。最下層の水田面には、筆者が調査した第42次調査区でも、本調査区でも偶蹄目の足跡が残されている。出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器の他、中世の糸切土師器皿があり、さらに江戸時代の肥前系染付が含まれている。なお、本調査では水田面下のS D 01・02埋土層は、最上層のみを掘削し、トレーナーを除いてほとんど掘削を行わないまま、保存のため埋め戻した。図25はG-1号墳から北東側の調査区層序である。最下層の5層がS D 01包含層で古墳時代後期の遺物を含んでいる。3層は近世以降の水田で、4層の時期はよくわからない。

古墳2基以外に検出した遺構は、残された図面の記述や遺物の注記等を見ると、住居跡1基、古墳時代包含層で検出した石組遺構1基、溝数条である。このうち、溝については下記に記載の遺構番号を書いた出土遺物があるが、残された図面を見る限り、溝の位置は特定できなかった。出土遺物から考えて、近世以降の水田に伴う溝や近現代の溝と考えられる。

① 住居跡

全体図の中に、S Cの記述があり、範囲が明示されているが、個別の図面などは見当たらなかった。古墳の保存が決まったことから、掘削は行っていないものと推察される。発見されたのは、G-1号墳石室南側で住居の二辺が見つかり、残りは溝や攪乱によって削平されている。古墳南側周溝南側に焼土らしき記述があるが、これが炉かどうか不明である。古墳時代前期の住居ではないかと思われる。

② 石組遺構（第26図）

調査区北東側で見つかった。包含層最上部自然流路S D 01を少し掘り下げた古墳時代層で発見した。長さ20~30cm前後の石40ヶ前後から成る。平面的なレベルはほぼ同じであるが、特に規則的な配列は成していないような印象を受ける。

③ S D 3 0 1出土遺物（第27図）

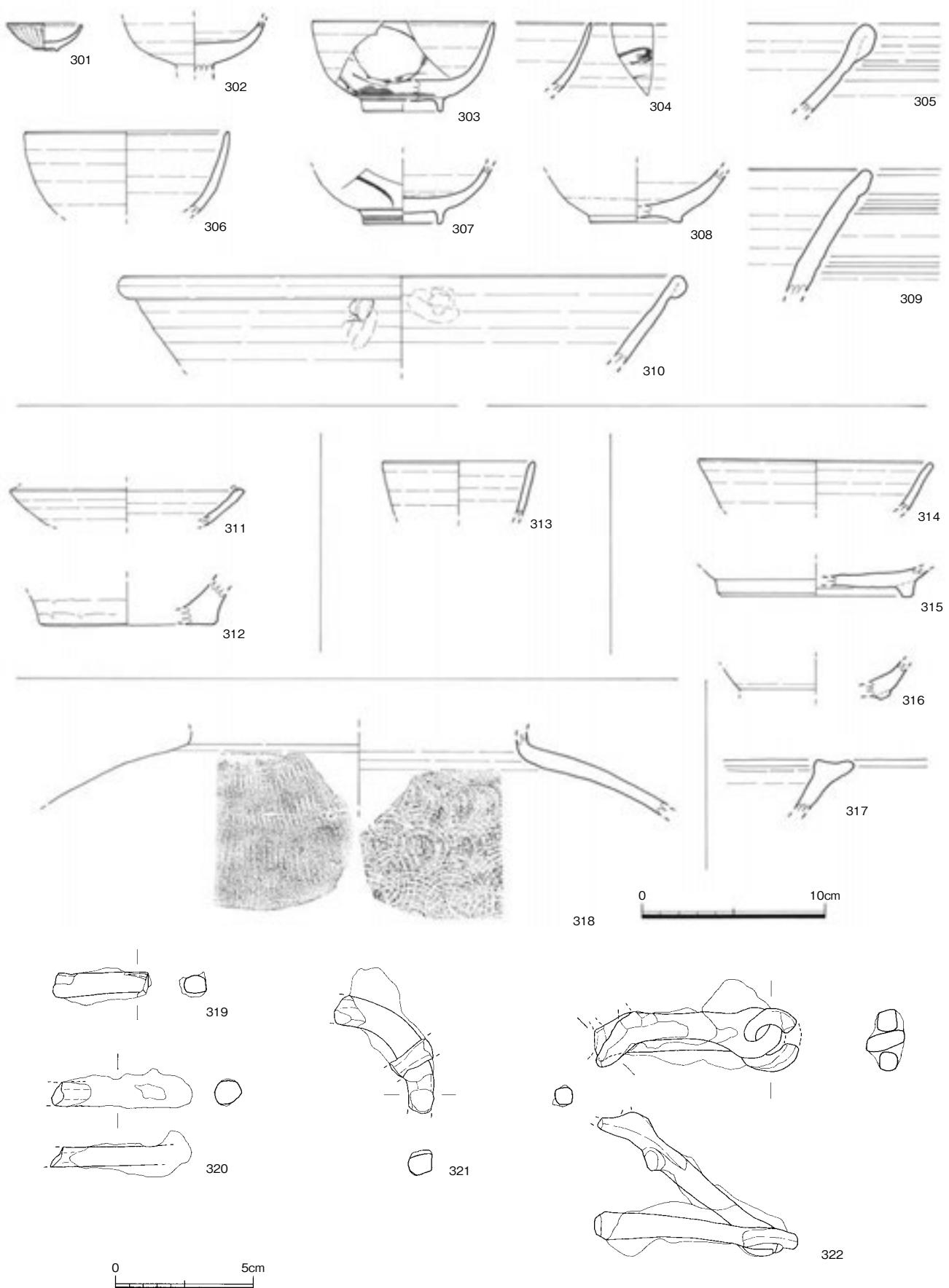
出土遺物は近世・肥前系磁器がほとんどである。301は白磁の紅皿、302は白磁の仏飯器か。303・304・307は染付の碗、305は陶器の擂鉢、306は白磁碗、308は陶器の碗、309は須恵器の甕、310は陶器の擂鉢で、18・19世紀代のものが多いようである。

④ S D 3 0 5出土遺物（第27図）

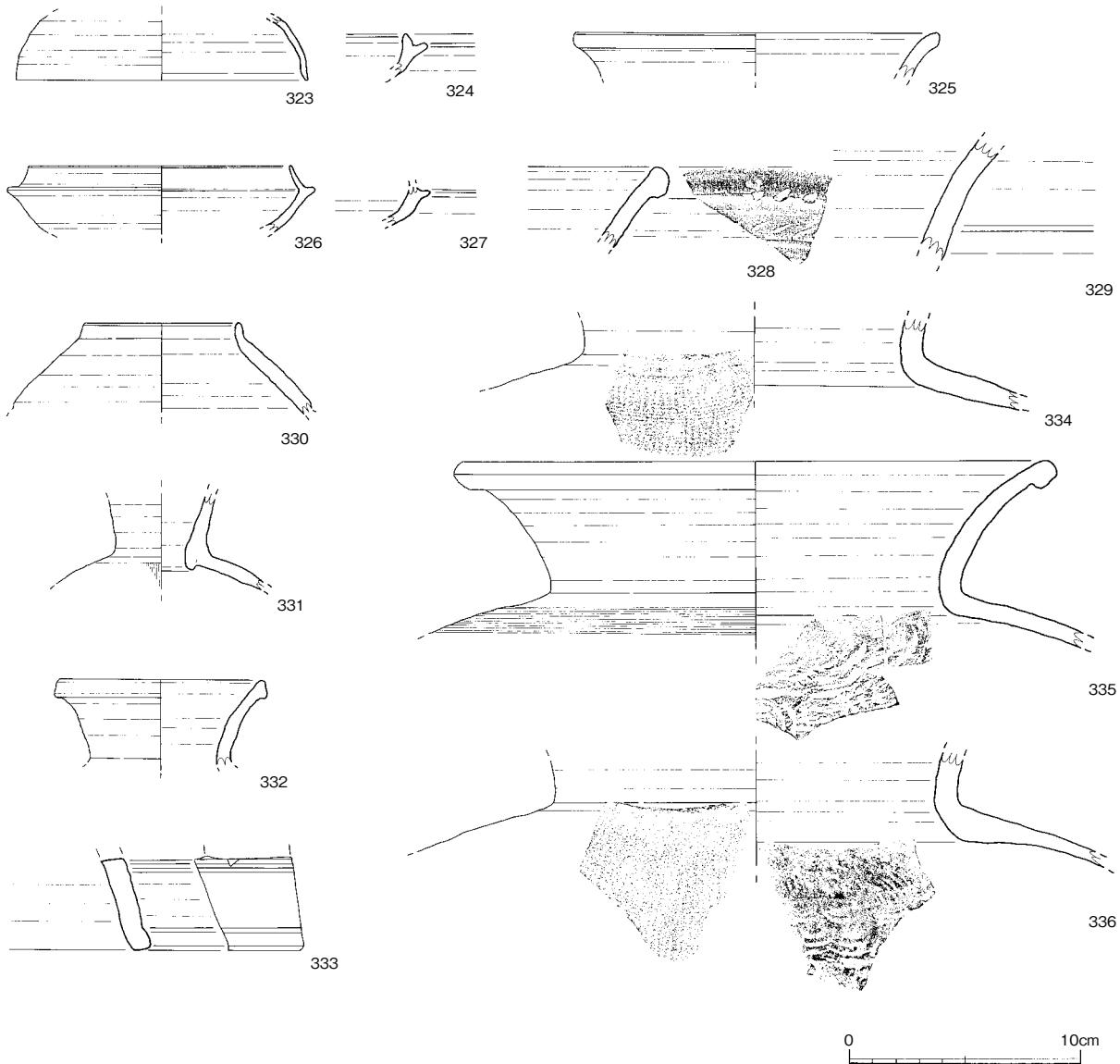
319は鉄器の小片である。鉄鏃か。

⑤ S D 3 0 8出土遺物（第27図）

4点図化している。311は須恵器の壺身で、受部径12.6cmを測る。312は弥生土器の甕である。320は鉄器片である。



第27図 溝（SD）出土遺物実測図（1/3・1/2）



第28図 G-1号墳周辺遺物包含層出土遺物 (1/3)

⑥ SD 309出土遺物 (第27図)

313は須恵器の壺で、口径8.2cmを測る。

⑦ SD 310同出土遺物 (第27図)

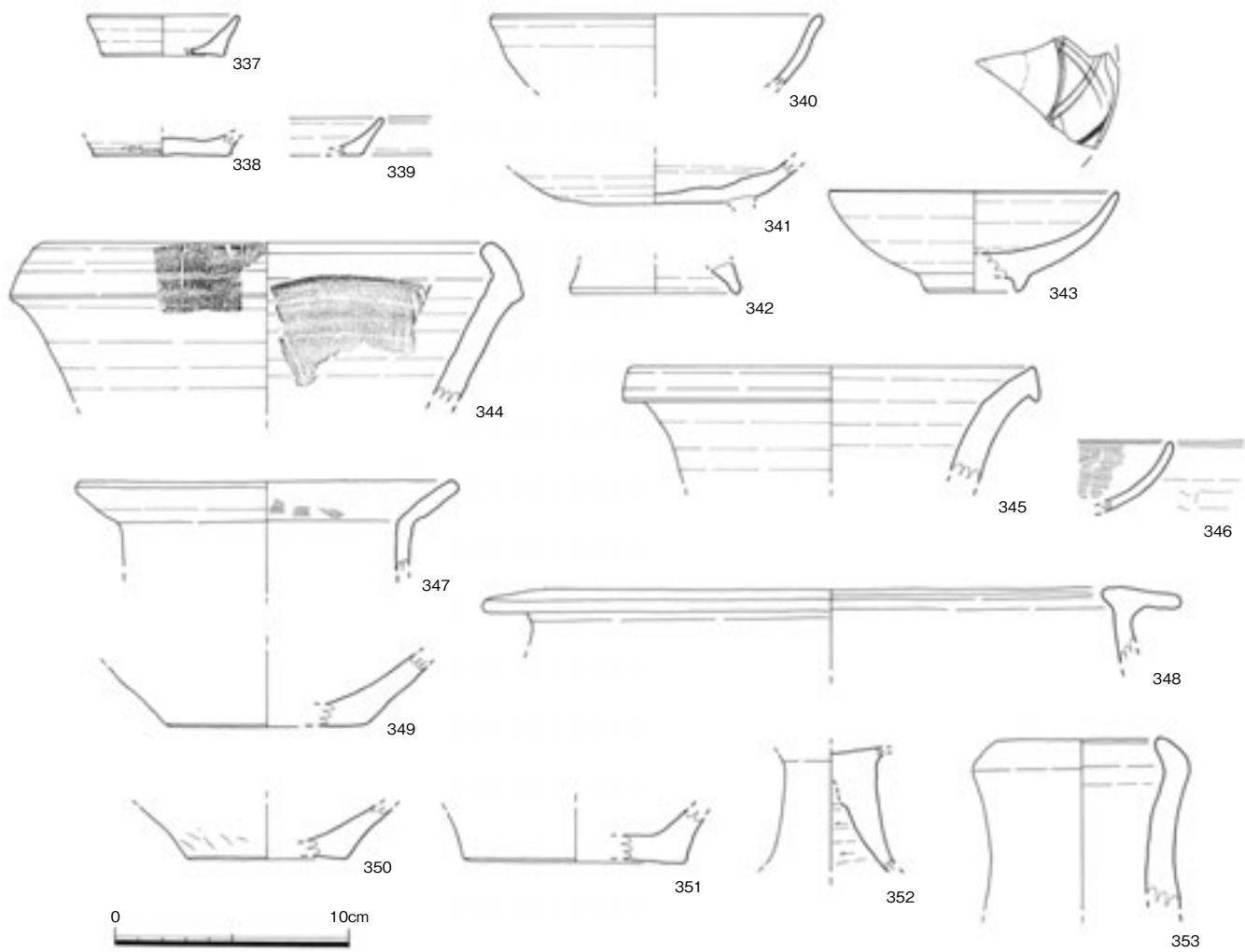
2点図化している。316は土師器の高台付壺である。317は弥生土器の甕。

⑧ SD 311出土遺物 (第27図)

321は湾曲した鉄器であるが、馬具であろうか。322馬具の引手金具等であろうか。

⑨ SD 312出土遺物 (第27図)

2点図化している。314は須恵器の碗で口径12.6cmを測る。315は須恵器の高台付壺で、高台径10.6cmを測る。数少ない古代の土器である。



第29図 中世以降の水田面出土遺物実測図 (1/3)

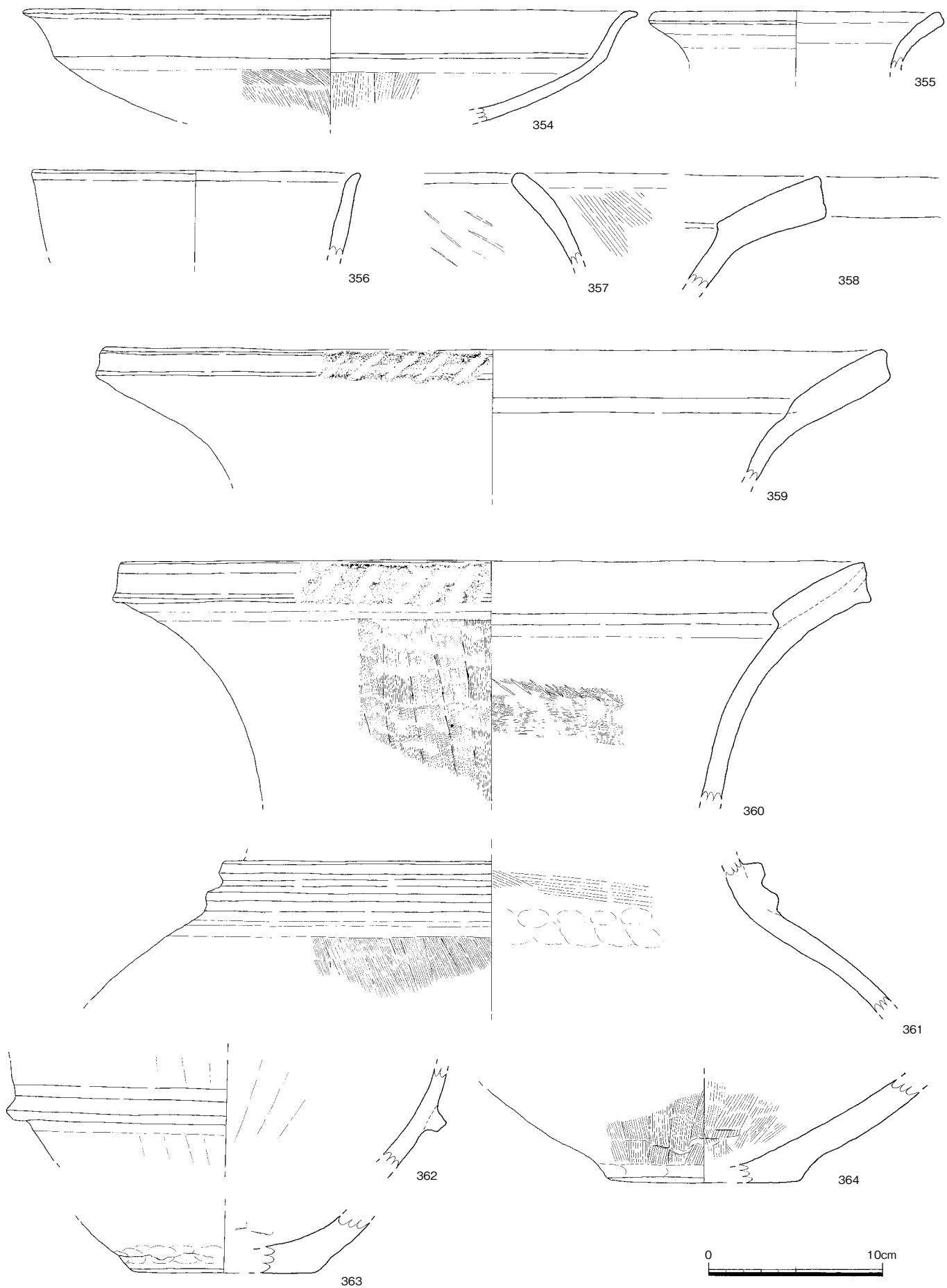
⑩ G-1号墳周辺包含層出土遺物（第28図）

S D O 1・O 2の上に乗る水田面や包含層最上層、古墳近くの地山面などから出土した遺物で、そのうち調査区U・V 10・11区の包含層など出土したものを集めている。G-1号墳に近い地点に位置するグリッドから出土したものである。位置的に見て、本来はG-1号墳墳丘にあった可能性があるが、確証がない。墳丘・石室から出土した須恵器と合わせて検討する必要がある。

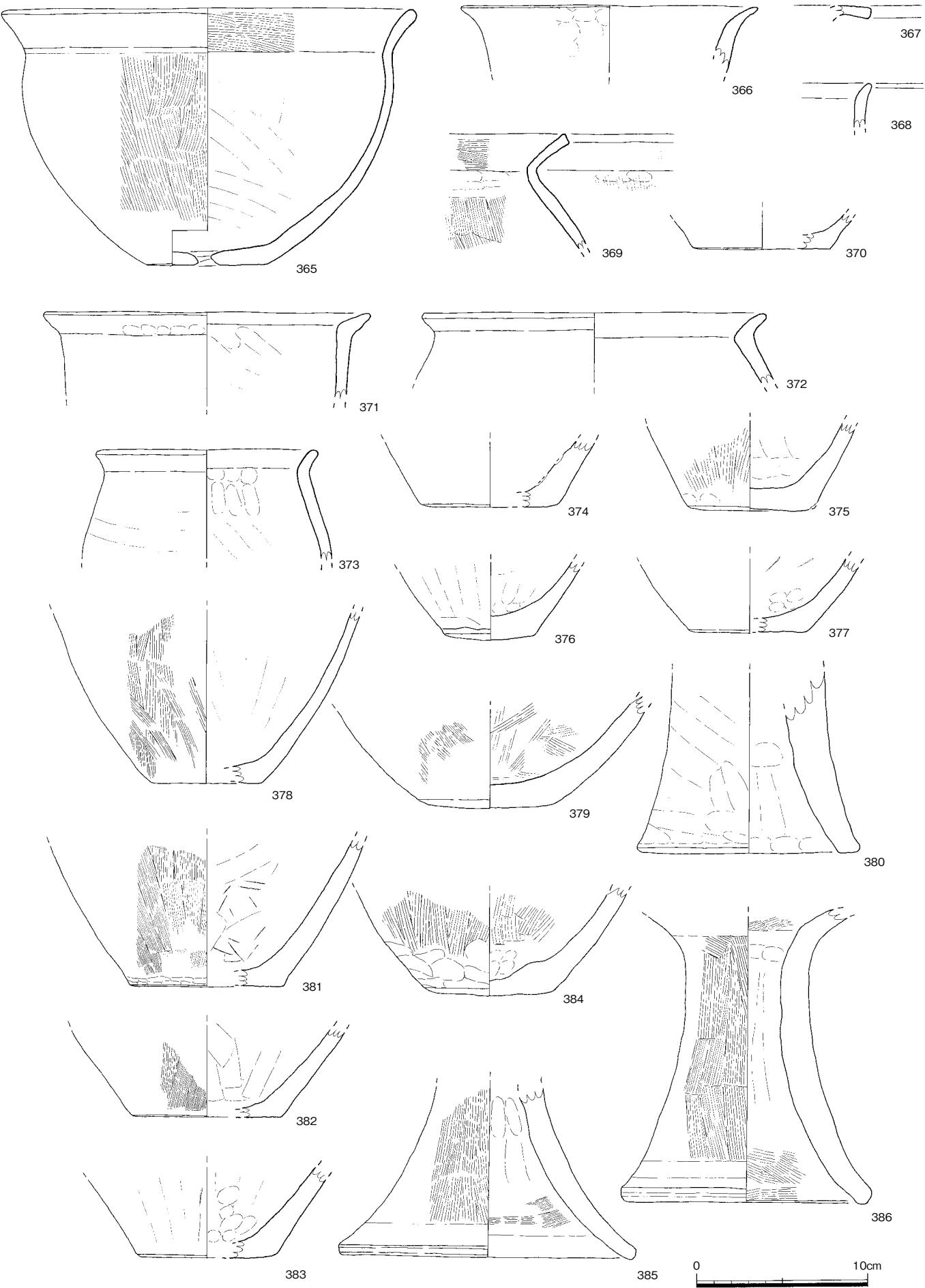
323は須恵器の壺蓋で、口径12.3cmを測る。口縁端部は細くなり内面はわずかに段状を呈している。324は須恵器壺身。325は須恵器甕で口径15.5cmを測る。326は須恵器壺身で、口径11.1cmを測る。327は須恵器壺身、328・329は須恵器の甕の破片である。330は須恵器の壺、331は堤瓶、332は須恵器壺、333は器台の破片である。334～336は須恵器の甕である。

⑪ その他の出土遺物（第29～31図）

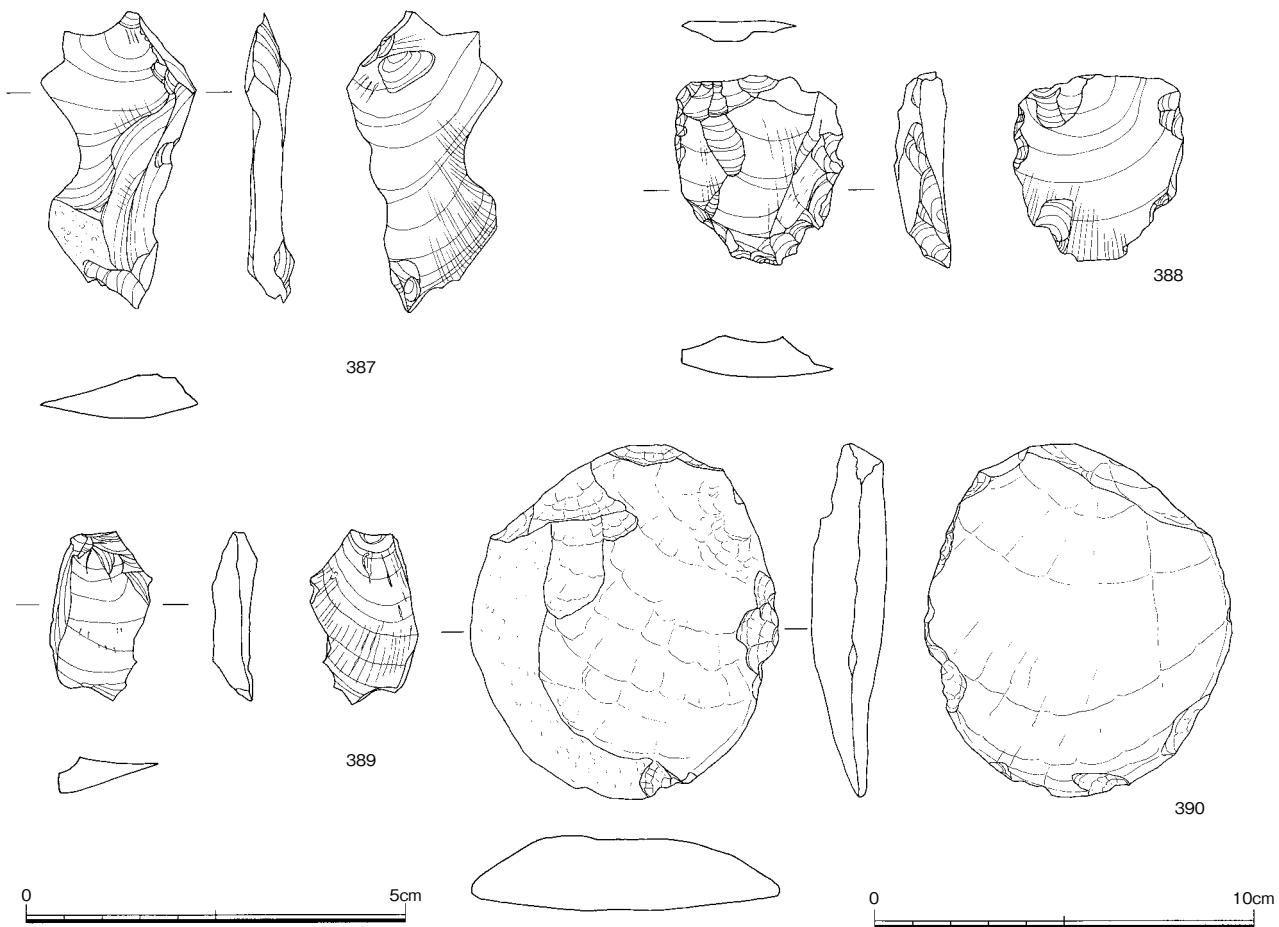
包含層や旧水田面から出土した遺物の内、第28図に記載したもの以外と出土場所が不明なものである。337～339は糸切り底の土師器皿である立ち上がりが急角度でしっかりとした造りである。中世末から近世初頭か。340は瓦器碗で口径14.0cmを測る。341・342は高台付壺。343は肥前系の染付である。344は陶器の擂鉢、345須恵器の甕である。346～386は弥生土器・土師器で、346は内面にハケメを施した鉢である。347・348は甕の口縁部、349・350は壺の底部、351は甕の底部である。352は高壺、353は器台の破片である。



第30図 客土・造成土出土遺物実測図1 (1/3)



第31図 客土・造成土出土遺物実測図2 (1/3)

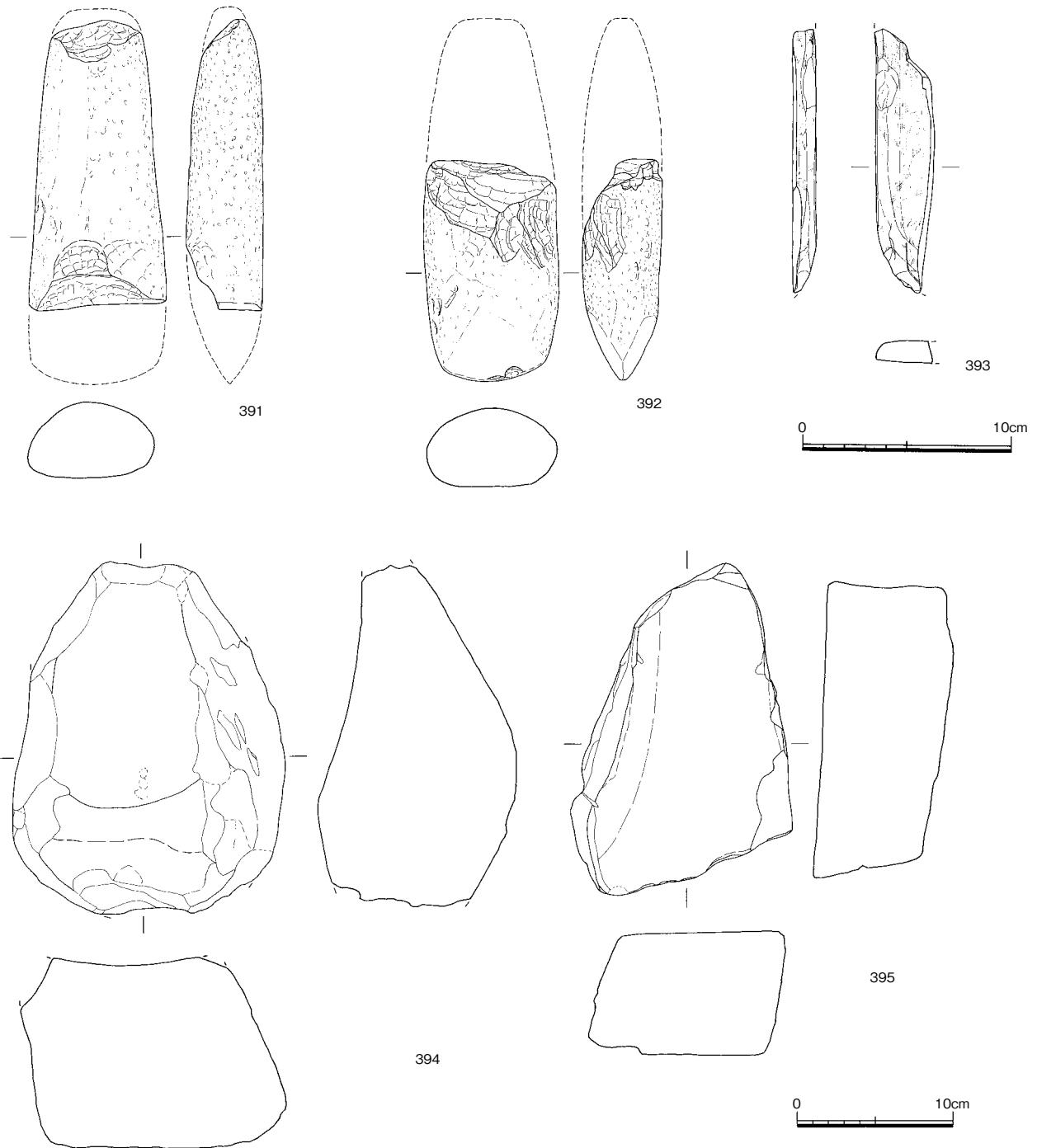


第32図 出土剥片石器実測図 (1/1・1/2)

354は高環で口径34.7cmを測る。356は土師器で口径18.2cmを測る。鉢か。358～361は弥生土器の大型壺である。いずれも口縁部断面が歯ブラシ状を呈し、359・360は口唇部に刻目を施す。362～364は壺の底部近くの破片である。365は鉢で底部に焼成後の穿孔を有する。366～369は弥生土器の壺・甕・鉢口縁部の小片で、371～373は弥生土器鉢の口縁部片。370・374～384は弥生土器の甕の底部である。380・386は弥生土器の器台、385は弥生土器高環の脚部である。

⑫ 石器 (第31・32図)

調査区内から出土した石器をまとめた。387～389は黒曜石製の加工痕がある剥片である。390は玄武岩の剥片で、エッジの一部に加工痕が認められる。391・392は玄武岩製の磨製石斧である。391は刃部を欠く。全面敲打痕が残っている。392は刃部の破片である。393～395は砥石である。393は粘板岩系の石材で、394・395は大型の砥石である。



第33図 出土礫石器実測図 (1/3・1/4)

表1 出土土器一覧表

図 No.	出土場所 遺構	種類	器形	時期	器高 cm	口径 cm	底径 cm	調整		外面 色調	胎土	備考	登録 番号
								外面	内面				
5 1	G-1北東隅拡張区Bトレ	須恵器	壺蓋	古墳時代		13.7		回転ナデ	回転ナデ	黄灰	2mm石英・長石少量		00052
5 2	G-1北東隅拡張区Bトレ	須恵器	壺蓋	古墳時代				回転ナデ	回転ナデ	灰	精良		00053
5 3	G-1北東隅拡張区Bトレ	土師器	把手	古墳時代か?				ナデ	摩滅	にぶい橙色	2mm石英・長石・赤色粒・金雲母微量		00011
5 4	G-1北東隅拡張区Bトレ	白磁	碗	中世				回転ナデ	回転ナデ	灰	灰白		00062
5 5	G-1北東隅拡張区Bトレ	須恵器	鉢?	古墳時代後期		12.3		回転ナデ	回転ナデ	暗灰	精良		00036
5 6	G-1北東隅拡張区Bトレ	須恵器	甕	古墳時代後期				回転ナデ	回転ナデ	灰	1mm石英・長石やや多量		00051
5 7	G-1北東隅拡張区Bトレ	白磁	碗	中世			6.5	回転ヘラケズリ、底ケズリ	回転ナデ	灰	灰白		00061
5 8	G-1北東隅拡張区Bトレ	陶器	鉢?	近世			6.9	回転ヘラケズリ	回転ナデ	褐、冰裂	黄橙	肥前産	00060
5 9	G-1北東隅拡張区Bトレ	弥生土器	甕	弥生時代中期		18.3		ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	黄橙	2mm石英・長石・金雲母少量		00081
5 10	G-1北東隅拡張区Bトレ～	弥生土器	高环	弥生時代中期		20.0		ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	3mm石英・長石等や多量	赤彩	00144
5 11	G-1北東隅拡張区(Bトレ)	弥生土器	甕	弥生時代中期		19.8		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	灰白	3mm石英・長石少量		00068
5 12	G-1北東隅拡張区(Bトレ)	弥生土器	甕	弥生時代中期		22.2		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	褐灰	2mm石英・長石・赤褐色粒・金雲母少量		00066
5 13	G-1北東隅拡張区(Bトレ)	弥生土器	甕	弥生時代中期		21.3		磨滅	磨滅	橙	5mm石英・長石・赤褐色粒少量		00070
5 14	G-1北東隅拡張区(Bトレ)	弥生土器	甕	弥生時代中期		20.8		ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	にぶい橙	2mm石英・長石・金雲母少量		00082
5 15	G-1北東隅拡張区(Bトレ)	弥生土器	甕	弥生時代中期		23.0		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	灰黄褐～黒褐	2mm石英・長石・黒雲母少量		00065
5 16	G-1北東隅拡張区(Bトレ)	弥生土器	甕	弥生時代中期		17.3		磨滅	磨滅	明赤褐	3mm石英・長石少量		00071
5 17	G-1北東隅拡張区(Bトレ)	弥生土器	甕	弥生時代中期		3.7		磨滅	磨滅	にぶい橙	2mm石英・長石少量		00072
5 18	G-1北東隅拡張区(Bトレ)	弥生土器	甕	弥生時代中期			8.0	ナデ	磨滅	にぶい橙	2mm石英・長石微量		00069
5 19	G-1北東隅拡張区(Bトレ)	弥生土器	器台	弥生時代中期			10.4	ナデ	ナデ	橙	1mm石英・長石・赤褐色粒・金雲母少量		00067
5 20	G-1前庭部東斜面Cトレ	染付	碗	近世				回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	肥前産	00058
5 21	G-1南西隅部拡張区Dトレ	須恵器	壺身	古墳時代後期		約9.5		回転ナデ	回転ナデ	灰褐	2mm石英・長石少量		00038
5 22	G-1南西隅部拡張区Dトレ	須恵器	脚台付壺?	古墳時代後期				カキ目・回転ナデ	回転ナデ	青灰	1mm石英・長石少量		00039
5 23	G-1南西隅部拡張区Dトレ	土師器	壺	古代			7.0	回転ナデ	回転ナデ	橙	1mm石英・長石・金雲母少量		00074
5 24	G-1南西隅部拡張区Dトレ	須恵器	壺?	古墳時代後期			10.8	カキ目・回転ナデ	回転ナデ	灰	1mm石英・長石・黒色粒少量		00037
5 25	G-1南西隅部拡張区Dトレ	陶器	水注	中世				ヘラナデ	ヘラナデ	黒褐、冰裂	灰	中国産	00059
5 26	G-1南西隅部拡張区Dトレ	土師器	高台环	古代			7.8	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐	2mm石英・長石やや多量		00073
6 27	G-1西側溝(S D 201)	弥生土器	甕	弥生時代			5.4	ハケメ	ナデ	橙	3mm石英・長石・金雲母少量		00079
6 28	G-1西側溝(S D 201)	弥生土器	器台	弥生時代			8.8	磨滅	磨滅	明赤褐	2mm石英・長石・金雲母少量		00080
6 29	G-1西側溝(S D 201)	弥生土器	器台	弥生時代			10.2	磨滅	磨滅	橙	3mm石英・長石・金雲母やや多量		00077
6 30	G-1西側溝(S D 201)	須恵器	壺	古墳時代後期			12.2	カキ目・回転ナデ	回転ナデ	灰白	1~6mm石英・長石少量		00049
6 31	G-1西側溝(S D 201)	須恵器	甕	古墳時代後期		36.0		回転ナデ	回転ナデ	灰・黄褐	1mm石英・長石少量		00048

図 No.	出土場所 遺構	種類	器形	時期	器高 cm	口径 cm	底径 cm	調整		外面 色調	胎土	備考	登録 番号
								外面	内面				
6 32	G-1西側溝(S D 201)	須恵器	甕	古墳時代 後期		45.3		回転ナデ	回転ナデ	褐灰	1mm石英・長石や や多い		00050
6 33	G-1西側溝(S D 201)	須恵器	甕	古墳時代 後期				格子目タタキ	同心円・青海波	灰	2mm石英・長石少量		00056
7 34	G-1羨道埋土	染付	鉢	近世				回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	肥前	00047
7 35	G-1石室埋土上 部	染付	碗	近世				回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	灰	灰白	肥前	00043
7 36	G-1石室埋土上 部	染付	鉢	近世				回転ナデ	回転ナデ	灰	灰白	肥前	00044
7 37	G-1石室埋土上 部	陶器	徳利	近世				回転ナデ	回転ヘラケズリ	暗赤褐、 氷裂	灰	肥前	00063
7 38	G-1石室埋土上 部(SX204u)	土師器	壺	古代	2.6	10.6	6.2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄 橙	3mm石英・長石少量 底部ヘラ 切		00021
7 39	G-1石室埋土上 部	青磁	碗	中世		16.1		回転ナデ	回転ナデ	黄褐	灰白	竜泉Ⅲ	00040
7 40	G-1石室埋土上 部	染付	鉢	近世			7.4	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰	灰白	肥前	00046
7 41	G-1石室埋土上 部	染付	碗	近世			9.3	回転ナデ・ヘラ ケズリ	回転ナデ	灰白	灰白	肥前	00042
7 42	G-1石室埋土上 部	青磁	碗	中世				回転ヘラケズリ	回転ナデ	黄褐・水 裂	黄橙	竜泉 I	00045
7 43	G-1石室埋土上 部	白磁	碗	中世			6.4	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白	灰白		00064
7 44	G-1石室埋土上 部	白磁	碗	中世			7.6	回転ヘラケズリ	回転ナデ・櫛描	灰白	灰白		00041
7 45	G-1石室埋土上 部(SX204u)	弥生土器	甕	弥生時代 中期		23.6		磨滅	磨滅	橙	4mm石英・長石・金 雲母多量		00023
7 46	G-1石室埋土上 部(SX204u)	弥生土器	甕	弥生時代 中期				磨滅	磨滅	黄橙	3mm石英・長石・赤 色粒・金雲母多量		00025
7 47	G-1石室埋土上 部(SX204u)	弥生土器	甕	弥生時代 中期				磨滅	磨滅	明赤褐	3mm石英・長石多量		00024
7 48	G-1石室埋土上 部(SX204u)	弥生土器	ミニチュア	弥生時代	3.8	4.5	1.7	指押さえ・ナデ	指押さえ・ナデ	にぶい橙	2mm石英・長石多量		00020
7 49	G-1石室埋土上 部(SX204u)	弥生土器	甕	弥生時代		14.3		磨滅	磨滅	橙	2mm石英・長石・金 雲母少量		00022
7 50	G-1石室埋土上 部(SX204u)	弥生土器	壺	弥生時代			8.3	磨滅	ナデ	橙	3mm石英・長石多量		00015
7 51	G-1石室埋土上 部(SX204u)	弥生土器	壺	弥生時代			9.4	磨滅	磨滅	明赤褐	3mm石英・長石・金 雲母多量		00014
7 52	G-1石室埋土上 部(SX204u)	弥生土器	壺	弥生時代			7.0	磨滅	磨滅	橙	2mm石英・長石・赤 色粒・金雲母多量		00017
7 53	G-1石室埋土上 部(SX204u)	弥生土器	壺	弥生時代			7.1	磨滅	磨滅	明赤褐	2mm石英・長石多量		00018
7 54	G-1石室埋土上 部(SX204u)	弥生土器	壺	弥生時代			7.3	磨滅	磨滅	橙	2mm石英・長石・金 雲母多量		00019
7 55	G-1石室埋土上 部(SX204u)	弥生土器	壺	弥生時代			14.7	磨滅	磨滅	橙	3mm石英・長石・赤 色粒・金雲母多量		00016
8 56	G-1石室埋土上 部	須恵器	壺蓋	古墳時代 後期		13.5		回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰	1mm石英・長石少 量		00032
8 57	G-1石室埋土上 部	須恵器	壺蓋	古墳時代 後期		12.6		回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰	精良		00031
8 58	G-1石室埋土上 部	須恵器	壺身	古墳時代 後期		9.6		回転ナデ	回転ナデ	褐灰?灰	1mm石英・長石少 量		00034
8 59	G-1石室埋土上 部	須恵器	壺身	古墳時代 後期		約 10.5		回転ナデ	回転ナデ	暗灰	1mm石英・長石少 量		00033
8 60	G-1石室埋土上 部	須恵器	壺身	古墳時代 後期		11.1		回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰	1mm石英・長石少 量		00026
8 61	G-1石室埋土上 部	須恵器	鉢?	古墳時代 後期				回転ナデ	回転ナデ	灰	1mm石英・長石多 量		00027
8 62	G-1石室埋土上 部	須恵器	壺・頸 部	古墳時代 後期				回転ナデ	回転ナデ	黄灰	2mm石英・長石多量		00028
8 63	G-1石室埋土上 部	須恵器	瓶	古墳時代 後期		7.9		回転ナデ	回転ナデ	灰	3mm石英・長石少量		00030
8 64	G-1石室埋土上 部	須恵器	平瓶	古墳時代 後期				カキメ	回転ナデ	灰	2mm石英・長石少 量		00035

図 No.	出土場所 遺構	種類	器形	時期	器高 cm	口径 cm	底径 cm	調整		外面 色調	胎土	備考	登録 番号
								外面	内面				
8 65	G-1石室埋土上部	須恵器	甕	古墳時代後期		13.3		回転ナデ	回転ナデ	灰	精良		00029
12 66	G-1石室内N o. 80	須恵器	壺	古墳時代後期		8.0		回転ヘラケズリ	回転ナデ	にぶい赤褐	1mm石英・長石少量		00003
12 67	G-1石室内N o 81	須恵器	堤瓶	古墳時代後期				カキ目	回転ナデ	青灰・灰	2mm石英・長石少量		00007
12 68	G-1石室内N o 83	須恵器	坏蓋	古墳時代後期	4.0	12.3		回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	灰	1mm石英・長石少量		00004
12 69	G-1石室内N o 82	須恵器	堤瓶	古墳時代後期	17.0	6.8		カキ目・回転ナデ	回転ナデ	青灰	1mm石英・長石少量		00008
13 70	G-1石室内N o 78	須恵器	坏蓋	古墳時代後期	3.9	11.3		回転ナデ・カキメ	回転ナデ・ナデ	暗灰・灰	1mm石英・長石少量	つまみあり	00001
13 71	G-1石室内N o 77	須恵器	脚付壺	古墳時代後期	19.7	9.7	13.7	平行タタキ・カキメ	回転ナデ・ナデ	灰	1mm石英・長石少量		00002
13 72	G-1石室内N o 76	須恵器	平瓶	古墳時代後期	17.6	7.7		カキ目	回転ナデ	灰	微細石英・長石少量		00005
13 73	G-1石室内N o 72	須恵器	堤瓶	古墳時代後期	13.0	5.0		カキ目・回転ナデ	回転ナデ	黒・灰白	1mm石英・長石少量		00009
13 74	G-1石室内N o 71	須恵器	平瓶	古墳時代後期	16.4	7.2		カキ目・回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	3mm石英・長石少量		00006
13 75	G-1石室内N o 102	土師器	坏	古墳時代後期	4.7	13.4		ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	橙	2mm石英・長石・金雲母多量		00012
13 76	G-1石室内N o 75	土師器	鉢	古墳時代後期	6.7	11.5		ヨコナデ	ヨコナデ	明赤褐～浅黄橙	2mm石英・長石多量		00013
13 77	G-1石室内N o 110	土師器	鉢	古墳時代後期				磨滅	磨滅	橙	3mm石英・長石・金雲母		00010
24 298	G-2石室西側撥乱溝	須恵器	甕	古墳時代		21.7		回転ナデ	回転ナデ	灰白	1mm石英・長石少量		00123
24 299	G-2石室東側検出面	弥生土器	甕	弥生時代			9.0	磨滅	ナデ	赤褐	3mm石英・長石・金雲母少量		00075
24 300	G-2石室周辺	染付	碗	近世			3.4	回転ヘラケズリ	回転ナデ	明オリーブ灰	灰白	肥前系	00057
27 301	S D 301	磁器	紅皿?	近世	1.5	4.1	1.8	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白・やや粗	肥前系	00097
27 302	S D 301	磁器	仏飯器	近世			2.0	回転ヘラケズリ・ナデ	回転ナデ	灰白	灰白・精良	肥前系	00096
27 303	S D 301	染付	碗	近世	4.9	9.8	4.3	回転ヘラケズリ・ナデ	回転ナデ	灰白	灰白・精良	肥前系	00095
27 304	S D 301	染付	碗	近世				回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白・精良	肥前系	00094
27 305	S D 301	陶器	すり鉢	近世?				回転ナデ	回転ナデ	灰褐	2mm砂粒		00090
27 306	S D 301	磁器	碗	近世		11.0		回転ヘラケズリ・ナデ	回転ナデ	灰白	灰白・精良	肥前系	00092
27 307	S D 301	染付	碗	近世			4.2	回転ヘラケズリ	回転ナデ	明オリーブ灰	灰白・精良	肥前系	00093
27 308	S D 301	陶器	碗	近世			4.9	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰オリーブ	黒粒少量、浅黄橙	肥前系	00091
27 309	S D 301	須恵器	甕	古墳時代				回転ナデ	回転ナデ	黄灰	1.75mm石英・長石やや多量		00101
27 310	S D 301	陶器	すり鉢	近世?		30.7		回転ナデ	回転ナデ	明赤褐	精良		00089
27 311	S D 308	須恵器	坏身	IV期	約11			回転ナデ	回転ナデ	灰色	1mm石英・長石少量		00100
27 312	S D 308	弥生土器	甕	弥生時代			9.4	ナデ	ナデ・指押	橙	3mm石英・長石・金雲母少量		00083
27 313	S D 309	須恵器	壺	古墳時代		8.2		回転ナデ	回転ナデ	にぶい赤褐	1mm石英・長石やや多量		00099
27 314	S D 312	須恵器	坏	古代		12.6		回転ナデ	回転ナデ	灰	1mm石英・長石・黒粒やや多量		00102
27 315	S D 312	須恵器	高台坏	古代			10.6	回転ナデ	回転ナデ	暗赤褐	1mm石英・長石やや多量		00103
27 316	S D 310	土師器	高台坏	古代			8.1	回転ナデ	磨滅	橙	1mm石英・長石少量		00084
27 317	S D 310	弥生土器		弥生時代				磨滅	磨滅	にぶい橙	3mm石英・長石・金雲母多量		00085
27 318	S D 311	須恵器	甕	古墳時代後期				回転ナデ・平行タタキ	回転ナデ・青海波	青灰・灰	2mm石英・長石少量		00055

図 No.	出土場所 遺構	種類	器形	時期	器高 cm	口径 cm	底径 cm	調整		外面 色調	胎土	備考	登録 番号
								外面	内面				
28 323	V-10・11区 地山直上	須恵器	壺蓋	古墳時代 後期		12.3		回転ナデ	回転ナデ	青灰	1mm石英・長石少量		00125
28 324	V-10・11区 地山直上	須恵器	壺身	古墳時代 後期				回転ナデ	回転ナデ	灰	1mm石英・長石微量		00118
28 325	UV-11・12 区中世水田上面	須恵器	甕	古墳時代 後期		15.5		回転ナデ	回転ナデ	灰	1mm石英・長石微量		00111
28 326	V-10・11区 地山直上	須恵器	壺身	古墳時代 後期		11.1		回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄 橙	1mm石英・長石微量		00126
28 327	V-10・11区 地山直上	須恵器	壺身	古墳時代 後期				回転ナデ	回転ナデ	灰	1mm石英・長石微量		00119
28 328	V-10・11区 地山直上	須恵器	甕	古墳時代 後期				回転ナデ	回転ナデ	暗灰	1mm石英・長石微量		00117
28 329	V-10・11区 地山直上	須恵器	甕	古墳時代 後期				回転ナデ	回転ナデ	灰	2mm石英・長石微量		00120
28 330	UV-11・12 区中世水田上面	須恵器	無頸壺	古墳時代 後期		6.7		回転ナデ	回転ナデ	灰	1mm石英・長石微量		00110
28 331	V-10・11区 地山直上	須恵器	堤瓶	古墳時代 後期				回転ナデ	回転ナデ	灰	3mm石英・長石微量		00122
28 332	UV-11・12 区中世水田上面	須恵器	壺	古墳時代 後期		9.0		回転ナデ	回転ナデ	灰	1mm石英・長石微量		00109
28 333	V-10・11区 地山直上	須恵器	器台	古墳時代 後期				回転ナデ	回転ナデ	暗灰	精良		00124
28 334	V-10・11区 地山直上	須恵器	甕	古墳時代 後期				回転ナデ	回転ナデ平行タ タキ・カキメ	黄灰	4mm石英・長石少量		00127
28 335	G-1石室覆土最 上部	須恵器	甕	古墳時代 後期		25.6		力キ目・回転ナ デ	回転ナデ	灰	2mm石英・長石少量		00054
28 336	V-10・11区 地山直上	須恵器	甕	古墳時代 後期				回転ナデ・平行 タタキ	青海波	灰	2mm石英・長石微量		00128
29 337	S D O 1か 0 2	土師器	皿	中世末	1.7	6.4	5.1	回転ナデ	回転ナデ	橙色	1mm石英・長石・赤 褐粒・金雲母微量	底部糸切	00145
29 338	A 10～14区	土師器	皿	中世			5.8	回転ナデ	回転ナデ	黄橙	1mm石英・長石・赤 褐粒・金雲母微量	底部糸切	00104
29 339	S～V 10～ 12区	土師器	皿	中世				回転ナデ	回転ナデ	橙	1mm石英・長石・赤 褐粒・金雲母微量	底部糸切	00108
29 340	A 10～14区	瓦器	碗	古代		14.0		回転ナデ	磨滅	灰白	精良		00086
29 341	A 10～14区	土師器		古代			8.6	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	1mm石英・長石・赤 褐粒・金雲母微量		00088
29 342	A 10～14区	土師器		古代			7.2	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙	1mm石英・長石・赤 褐粒少量		00087
29 343	S～V 10～ 12区	染付	皿	近世	4.3	12.1	4.1	回転ヘラケズ リ・ナデ	回転ナデ	灰白	灰白・精良	肥前系	00098
29 344	UV-11・12 区中世水田上面	陶器	擂鉢	中世		18.9		回転ナデ	回転ナデ	橙	2mm石英・長石少量	備前	00112
29 345	V-10・11区 地山直上	須恵器	甕	古墳時代		17.1		回転ナデ	回転ナデ	暗灰	2mm石英・長石微量		00121
29 346	U～W 10区攢 乱	弥生土器	鉢	弥生時代				ナデ	ハケメ	にぶい橙	1mm石英・長石・金 雲母少量		00107
29 347	X～Z-11 ～13区第1面	弥生土器	甕	弥生時代		16.1		ナデ・ヨコナデ	ハケメ	黄橙	3mm石英・長石・金 雲母多量		00115
29 348	V-10・11区 地山直上	弥生土器	甕	弥生時代		29.1		ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	白	3mm石英・長石・や や多量		00114
29 349	U～W 10区攢 乱	弥生土器	壺	弥生時代			8.3	ナデ	ナデ	明赤褐	1mm石英・長石・金 雲母少量		00106
29 350	A 10～14区	弥生土器	壺	弥生時代			6.9	ナデ	ナデ	にぶい橙	1mm石英・長石や 微量		00105
29 351	V-11・12区 地山直上	弥生土器	甕	弥生時代			9.3	ナデ	指押さえ・ナデ	浅黄橙	2mm石英・長石・金 雲母微量		00113
29 352	V 10・11区地 山直上集石部	土師器	高环	古墳時代				ナデ	ナデ	橙	3mm石英・長石少量		00076
29 353	X～Z-11 ～13区第1面	弥生土器	器台	弥生時代		6.7		磨滅	磨滅	橙	4mm石英・長石・金 雲母多量		00116

図	No.	出土場所 遺構	種類	器形	時期	器高 cm	口径 cm	底径 cm	調整		外面 色調	胎土	備考	登録 番号
									外面	内面				
30	354	ラベル無	弥生土器	高環	弥生時代		34.7		ハケメ・ヨコナ デ	ハケメ・ヨコナ デ	にぶい橙	2mm石英・長石・金 雲母少量		00147
30	355	ラベル無	弥生土器	壺	弥生時代		16.6		ナデ・ヨコナデ	ナデ	にぶい黄 橙	3mm石英・長石少量		00139
30	356	G 2号墳 南SC内	土師器	鉢	古墳時代		18.2		摩滅	ケズリ後ナデ	赤褐色	1mm褐色粒・雲母		00170
30	357	ラベル無	弥生土器	鉢	弥生時代				ハケメ・ヨコナ デ	ナデ	黄橙	2mm石英・長石・金 雲母少量		00141
30	358	ラベル無	弥生土器	壺	弥生時代				ナデ	ヨコナデ	にぶい橙	2mm石英・長石少量		00171
30	359	ラベル無	弥生土器	壺	弥生時代		43.9		ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐	3mm石英・長石・金 雲母少量		00129
30	360	ラベル無	弥生土器	壺	弥生時代		57.0		ハケメ・ヨコナ デ・ナデ	ハケメ・ヨコナ デ・ナデ	黄橙	5mm石英・長石・金 雲母多量		00130
30	361	ラベル無	弥生土器	壺	弥生時代				ハケメ・ヨコナ デ・ナデ	ハケメ・ナデ	明赤褐色	2mm石英・長石やや 多量		00132
30	362	ラベル無	弥生土器	甕	弥生時代				ナデ	ナデ	にぶい黄 橙	3mm石英・長石少量		00133
30	363	ラベル無	弥生土器	壺	弥生時代			10.9	ナデ	ナデ	灰黄褐	3mm石英・長石やや 多量		00135
30	364	ラベル無	弥生土器	壺	弥生時代			11.1	ハケメ・ヨコナ デ・ナデ	ハケメ	灰黄褐	3mm石英・長石・金 雲母少量		00134
31	365	ラベル無	弥生土器	鉢	弥生時代	14.8	23.9	7.2	ハケメ・ヨコナ デ・ナデ	ハケメ・ナデ・ 指押	橙	3mm石英・長石やや 多量	底部穿孔	00131
31	366	ラベル無	弥生土器	鉢	弥生時代		17.0		ナデ	ナデ	橙	3mm石英・長石少量		00140
31	367	ラベル無	弥生土器	甕	弥生時代				ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙	1mm・石英・長石少 量	赤彩	00142
31	368	G 2号墳 南SC内?	土師器	鉢	古墳時代				ナデ	ナデ	暗赤褐	1mm・石英・長石少 量		00169
31	369	ラベル無	土師器	甕	古墳時代				ハケメ・ヨコナ デ・ナデ	ハケメ・ヨコナ デ・ナデ	灰黄褐	1mm石英・長石・金 雲母少量		00146
31	370	ラベル無	弥生土器	甕	弥生時代			7.8	ナデ	ナデ	にぶい黄 橙	2mm石英・長石・金 雲母微量		00143
31	371	ラベル無	弥生土器	甕	弥生時代		18.7		ナデ・ヨコナデ	ナデ	にぶい黄 橙	1mm石英・長石・金 雲母微量		00137
31	372	ラベル無	弥生土器	甕	弥生時代		19.7		ハケメ・ヨコナ デ	ヨコナデ・ナデ	明赤褐	2mm石英・長石やや 多量		00138
31	373	ラベル無	弥生土器	甕	弥生時代		12.7		ナデ・ヨコナデ	ナデ	にぶい褐	2mm石英・長石・金 雲母微量		00136
31	374	G 1号墳 SD201 西側周溝内	弥生土器	甕	弥生時代	3.9		7.8	磨滅	磨滅	明赤褐	2mm石英・長石やや 多量		00078
31	375	ラベル無	弥生土器	甕	弥生時代			7.5	ハケメ・ナデ	ナデ・指押	にぶい褐	3mm石英・長石・金 雲母多量		00153
31	376	ラベル無	弥生土器	甕	弥生時代			5.3	ナデ	ナデ	にぶい褐	2mm石英・長石少量		00157
31	377	ラベル無	弥生土器	甕	弥生時代			6.8	磨滅	ナデ・指押	にぶい黄 橙	4mm石英・長石・金 雲母多量		00155
31	378	ラベル無	弥生土器	甕	弥生時代			6.3	ハケメ・ナデ	ナデ	にぶい褐	3mm石英・長石・金 雲母やや多量		00154
31	379	ラベル無	弥生土器	甕	弥生時代			8.2	ハケメ・ナデ	ナデ・ハケメ	にぶい橙	4mm石英・長石・金 雲母多量		00156
31	380	ラベル無	弥生土器	甕	弥生時代			8.9	ハケメ・ナデ	ナデ	にぶい黄 橙	3mm石英・長石・金 雲母・赤褐色粒多 量		00151
31	381	ラベル無	弥生土器	甕	弥生時代			7.5	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ・ 指押	にぶい黄 橙	2mm石英・長石・金 雲母少量		00159
31	382	ラベル無	弥生土器	甕	弥生時代			4.7	ハケメ・ナデ	ナデ	明赤褐色	2mm石英・長石少量		00158
31	383	ラベル無	弥生土器	甕	弥生時代			7.9	ナデ	ナデ・指押	にぶい黄 橙	2mm石英・長石少量		00152
31	384	ラベル無	弥生土器	器台	弥生時代			12.7	ナデ・指押	ナデ・指押	橙	3mm石英・長石・金 雲母・やや多量		00148
31	385	ラベル無	弥生土器	高環	弥生時代			17.1	ミガキ	ハケメ・ナデ・ シボリ	橙	3mm石英・長石・金 雲母・やや多量	赤彩	00150
31	386	ラベル無	弥生土器	器台	弥生時代			14.4	ハケメ・ヨコナ デ	ハケメ・ナデ・ シボリ	にぶい褐	3mm石英・長石・金 雲母・やや多量		00149

表2 出土金属器一覧表

図	番号	出土場所	種類	材質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm		登録番号
14	78	G1号 石室内092	鉄鎌	鉄	15.75	0.85	0.3	ほぼ完形	20045
14	79	G1号 石室内157	鉄鎌	鉄	16	0.65	0.4	両端欠損	20014
14	80	G1号 石室内093-2	鉄鎌	鉄	17.1	0.9	0.35	茎欠損	20040
14	81	G1号 石室内130	鉄鎌	鉄	14.3	0.6	0.3	茎欠損	20047
14	82	G1号 石室内094	鉄鎌	鉄	12.25	0.9	0.35	茎欠損	20039
14	83	G1号 石室内137	鉄鎌	鉄	12.8	0.65	0.4	茎欠損	20050
14	84	G1号 石室内093	鉄鎌	鉄	13.85	0.85	0.4	茎欠損	20044
14	85	G1号 石室内143	鉄鎌	鉄	13.3	1	0.3	茎欠損	20023
14	86	G1号 石室内138	鉄鎌	鉄	14.15	1	0.25	茎欠損	20051
14	87	G1号 石室内154	鉄鎌	鉄	14.35	0.95	0.35	両端欠損	20027
14	88	G1号 石室内125	鉄鎌	鉄	15	0.9	0.3	茎欠損	20041
14	89	G1号 石室内156	鉄鎌	鉄	15.45	0.85	0.4	茎欠損	20026
14	90	G1号 石室内145	鉄鎌	鉄	15.7	1	0.4	茎欠損	20018
14	91	G1号 石室内151	鉄鎌	鉄	17.2	1.05	0.2		20024
14	92	G1号 石室内134	鉄鎌	鉄	17.45	0.85	0.4	両端欠損	20043
14	93	G1号 石室内141	鉄鎌	鉄	17.5	0.95	0.4	茎欠損	20019
15	94	G1号 石室内147	鉄鎌	鉄	17.7	0.9	0.4	茎欠損	20017
15	95	G1号 石室内152	鉄鎌	鉄	17.7	0.8	0.5	茎欠損	20013
15	96	G1号 石室内153	鉄鎌	鉄	17.8	0.9	0.35	茎欠損	20025
15	97	G1号 石室内132	鉄鎌	鉄	18	0.9	0.35		20021
15	98	G1号 石室内127	鉄鎌	鉄	18.05	0.9	0.4	茎欠損	20046
15	99	G1号 石室内150	鉄鎌	鉄	18.15	1	0.4	両端欠損	20016
15	100	G1号 石室内136	鉄鎌	鉄	17.3	1.05	0.45	茎欠損	20020
15	101	G1号 石室内135	鉄鎌	鉄	17.75	1	0.4	茎欠損	20042
15	102	G1号 石室内133	鉄鎌	鉄	19以上	1.05	0.4	一部欠損	20052
15	103	G1号 石室内138-2	鉄鎌	鉄	13.2	0.9	0.3	茎欠損	20022
15	104	G1号 石室内155	鉄鎌	鉄	15	2.95	0.5	ほぼ完形	20035
15	105	G1号 石室内153-2	鉄鎌	鉄	4.15	3.6	0.3	破片	20028
15	106	G1号 石室内144	鉄鎌	鉄	9.2	0.5	0.4	両端欠損	20015
15	107	G1号 石室内128	鉄鎌	鉄	8	0.6	0.4	破片	20049
15	108	G1号 石室内129	鉄鎌	鉄	10.8	0.65	0.4	破片	20048
16	109	G1号 石室内59	大刀	鉄	60.6	3	1		20091
16	110	G1号 石室内60	大刀	鉄	74.55	2.9	1		20092
16	111	G1号 石室内57	大刀	鉄	72.8	3	0.6		20089
16	112	G1号 石室内58	大刀	鉄	77.75	3.3	1.1	圭頭大刀	20090
17	113	G1号 石室内68	刀子	鉄	14.75	0.9	0.2	茎欠損	20036
17	114	G1号 石室内115	刀子	鉄	9.65	1	0.3	ほぼ完形	20034
17	115	G1号 石室内124	刀子	鉄	12.95	1.2	0.4	ほぼ完形	20030
17	116	G1号 石室内66	刀子	鉄	12.55	1.5	0.4	茎に鹿角	20037
17	117	G1号 石室内67	刀子	鉄	8.5	1.7		切先欠損	20011
17	118	G1号 石室内112・113	刀子	鉄	10.65	1.15	0.3	切先欠損	20038
17	119	G1号 石室内122	刀子	鉄	6	1	0.7	両端欠損	20032
17	120	G1号 石室内65	刀子	鉄	9.2	1.1	0.3	両端欠損	20031
17	121	G1号 石室内No.なし	刀子	鉄	8	1.1		切先・茎欠損	20012
17	122	G1号 石室内123	刀子	鉄	7.85	1.6	0.4	切先欠損	20033
17	123	G1号 石室内151	小刀	鉄	23.55	1.9	0.5	完形・茎に木質	20010
17	124	G1号 大刀59の鰐	刀装具鰐	鉄	6.5	5.9	0.4	大刀59の鰐	20009
17	125	G1号 奥壁下攪乱坑内	刀装具鰐	鉄	6	4.2	0.5		20007
17	126	G1号 石室内59	刀装具鰐	鉄	4.65	3.35	0.45		20008
17	127	G1号 大刀58(図112)	刀装具鰐	鉄	8.9	5.35	2.9	銀線巻き(圭頭)	20053
17	128	G1号 前庭石積上部	馬具?	鉄	2.2	1.75	0.4		20029
※	18	129	G1号 石室内	胡籠金具	鉄			20片前後あり	20093
19	130	G1号 石室内15	耳環	金	2.9		0.15		20064
19	131	G1号 石室内9	耳環	金	2.6		0.1		20062

図	番号	出土場所	種類	材質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm		登録番号
19	132	G1号 石室内8	耳環	金	2.6		0.15		20061
19	133	G1号 石室内5	耳環	銀	2.5		0.2		20060
19	134	G1号 石室床面水洗	耳環	青銅鍍金	2.3		0.4		20054
19	135	G1号 石室床面水洗	耳環	青銅鍍金	2.2		0.4		20055
19	136	G1号 石室内105	耳環	青銅鍍金	2.3		0.5		20057
19	137	G1号 石室内敷石2面上	耳環	青銅鍍金	2.8		0.4		20059
19	138	G1号 石室内104	耳環	青銅鍍金	2.4		0.5		20056
19	139	G1号 石室内20	耳環	青銅鍍金？	3		0.6		20069
19	140	G1号 石室内19	耳環	青銅鍍金	2.8		0.6		20070
19	141	G1号 石室内39	耳環	青銅鍍金	2.9		0.5		20072
19	142	G1号 石室内21	耳環	青銅鍍金	3.1		0.8		20071
19	143	G1号 石室内23	耳環	青銅鍍金？	3		0.5		20068
19	144	G1号 石室内土2面	耳環	青銅鍍金	3.3		0.6		20058
19	145	G1号 石室内17	耳環	青銅鍍金	3.2		0.7		20066
19	146	G1号 石室内18	耳環	青銅鍍金	3		0.7		20067
19	147	G1号 石室内16	耳環	青銅鍍金	3.2		0.7		20065
19	148	G1号 石室内14	耳環	青銅鍍金	3.2		0.7		20063
19	149	G1号 石室内106	鉈	青銅鍍金	約7.0		0.5		20075
19	150	G1号 石室内	鉈	青銅鍍金	約6.5		0.5		20074
19	151	G1号 石室内	鏡	青銅鍍金	7.2		0.2		20073
19	152	G1号 奥壁下攪乱坑内	空玉	鉄	1.4～1.6				20083
19	153	G1号 2面敷石C-4	空玉	鉄	1.9	0.9			20085
19	154	G1号 石室内11	空玉	鉄	1.3				20081
19	155	G1号 石室内10	空玉	鉄	1.4				20082
19	156	G1号 2面土D-3	空玉	鉄	1.2				20086
27	319	SD305	馬具？	鉄				小破片	20005
27	320	SD308	馬具？	鉄	5.05			小破片	20004
27	321	SD311	馬具	鉄				破片	20001
27	322	SD311	馬具	鉄	7.4			破片	20002

※耳環に関しては4章の表も参照

表3 出土石器一覧表

図	No.	出土地	種類	原材料	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	備考	登録番号
32	387	G－1号墳東側周溝	加工ある剥片	透明黒色黒曜石	4.0	2.3	0.6		00161
32	388	X 12区G 1号北トレンチ	加工ある剥片	漆黒黒曜石	2.5	2.2	0.6		00160
32	389	X～Z－11～13区第1面	加工ある剥片	黒色黒曜石	2.3	1.3	0.6		00162
32	390	S D 304近世溝	加工ある剥片	玄武岩	9.4	8.2	2.0		00163
33	391	G－1号北東隅拡張区	磨製石斧	玄武岩		6.6	3.6		00164
33	392	S D 301	磨製石斧	玄武岩		6.4	3.7		00165
33	393	ラベルなし	砥石	粘板岩？	12.7	2.9	1.1		00168
33	394	G 1前庭積石内	砥石	花崗岩？	22.6	17.6	12.8		00166
33	395	G1石室内	砥石	？	21.3	14.3	8.2		00167

4 元岡G－1号墳出土資料に関する保存科学的調査

(1)はじめに

元岡G－1号墳の主体部からは多くの副葬品が出土している。この内、武器や装身具といった資料は、肉眼観察による考古学的な情報の取得に加え、理化学機器を援用した材質分析や構造、微細部分の観察を行い、類例との比較検討などをすることで、技術の変遷、系譜関係の解明といった成果が得られている。幸い、福岡市には埋蔵文化財の保存処理を行うための施設が整っており、その事前調査のための各種機器類を有していることから、元岡G－1号墳出土の各種資料について、保存科学的調査を実施した。

埋蔵文化財の内、特に木製品や金属製品は埋蔵環境下で腐食が進行しており、出土後の適切な保存、活用のためには何らかの保存処理が必要となる。保存処理においては、資料の状態を把握し適切な処理に繋げるための事前調査が不可欠となり、そこでは肉眼観察や触診に加え、各種の理化学機器を使った調査が行われる。その際、資料の腐食や劣化状態の情報を加えて、材質や構造、付着物といった資料の来歴に関わる情報も得ることができる。この保存処理のための事前調査は、直接保存処理に関わらない資料に関しても行われる場合があり、これらを包括して保存科学的調査と位置づけることができる。

調査には、結果が画像情報として得られる、つまり目で見て分かる作業＝観察と、見ただけでは判断が付かない情報を数値やチャートで得て解釈をする作業＝分析があり、双方を組み合わせることでより正確な結果に近づくことができる。

(2)調査対象資料と調査の目的、方法

今回調査対象としたのは、元岡G－1号墳から出土した武器や武具、馬具などの金属器、鉱物やガラス、金属を素材とする各種の装身具類である。

1) 武器・武具・馬具

武器には鉄刀、鎌が、武具は盛矢具である胡籠、馬具には轡がある。鉄刀には装飾付大刀も含まれる。これらは現状では鉄を主とする金属のみの状態となっているが、元々は木や皮革、纖維などの各種有機物と組合せて製作、使用されたものであり、埋蔵環境下でこれらが失われた結果として金属のみが残存した状況となっている。また、金属も腐食によって形状や色調が変化した状態になっている。

用途としては武器、武具、馬具というこれらの資料であるが、製作技術という側面から見ると工芸品という見方も可能で、技術史的な観点も求められる。また、威信材として王権とのつながりを検討する上での重要な資料となることもあり、特に装飾付大刀や馬具類は、型式学的な検討に加え、製作技法なども加えた詳細な研究が進んでいる（木更津市2016・齋藤2018）。そのことも踏まえ、今回は透過X線撮影による構造調査、実体顕微鏡やデジタルマイクロスコープを用いた細部の観察、残存有機物の調査、蛍光X線分析装置を使った材質調査を行った。

透過X線撮影装置は、可視光線よりも波長が短い＝エネルギーの強い電磁波であるX線を用いることで、肉眼では見ることのできない試料内部の構造を知ることができる。保存科学的調査に用いられる理化学機器のなかでも基本的な装置として古くから使われ、成果を発揮してきた。G－1号墳の隣で出土した庚寅銘大刀の象嵌発見はその最たるものといえよう。使用した装置はYXLON社製MG226である。検出器には受光部の大きさが409.6×409.6(mm)の大型フラットパネルを使用しており、

資料をできるだけ管球側に近づけることで、像を拡大しての観察も可能となる。本調査においては、鋸で形状が変化した状況や、部材を組み合わせた部分の観察を主な目的としている。

実体顕微鏡も基本的な観察装置である。両目で観察することによって、立体的に資料を捉えることが可能となり、細部の状態観察には不可欠な装置である。しかし観察像の記録や、計測といった部分では、デジタル機器にやや劣る部分があり、今回は加えてデジタルマイクロスコープも使用した。これは、試料に光を照射して、反射した光をCCDカメラで検知し、デジタル処理によって拡大しモニターに映し出すものである。画面上での計測や画像の合成、三次元化などの機能が付加されている。使用した装置はHIROX社製KH-8700である。これらの装置を使い、主に金工資料の細部情報や、鉄製品に残存する有機物の観察を行った。

材質分析に用いる蛍光X線分析装置は、試料にX線を照射し、試料に含まれる元素から生じる各元素ごとに特有のエネルギー値を持つ二次X線=蛍光X線を検出器で捉え、その元素の種類や量を調べる分析法である。ただし、含まれる元素の量を正確に知るためにには、あらかじめ分析対象となる元素を含む組成比の明らかな標準資料を分析し、対象資料の分析結果を校正する必要がある。更に、埋蔵文化財の場合、埋蔵環境下で腐食などの要因によって組成比が変化したり、あるいは埋土など周辺環境の影響を受けて変質することが想定されるため、非破壊による表面分析の場合、資料本来の組成を正確に示しているとは限らない。これらのことから、得られた結果の取り扱い、解釈には注意が必要となる。

分析可能な元素はナトリウム(Na)からウラン(U)までで、自ずと無機物が対象となる。文化財では主に金属や鉱物が対象となるが、金属に関してはその中でも非鉄金属の同定に有効である。弥生時代以降使用される銅合金や、古墳時代になって新たに加わる金や銀といった貴金属は、肉眼観察で鋸の色などからある程度の材質推定はできるものの、合金の状態まで細かく知ることはほぼ不可能である。この様な場合に有効な装置といえる。

使用した装置はAMETEK・EDAX社製のエネルギー分散型微少部蛍光X線分析装置Orbisで、分析条件は次のとおり。

対陰極：ロジウム(Rh)／検出器：シリコンドリフト検出器／印加電圧：50kV・電流値：任意／測定雰囲気：大気／測定範囲0.3mm・1mm ϕ ／測定時間120秒

2) 装身具類

装身具には玉、耳環、鏡、鍔がある。玉は更に材質によって、石（樹脂化石を含む）、土、ガラス、金属がある。

石製玉類は、特に緑色の石材を用いる資料について、肉眼観察による石材種同定と分析によるそれでは大きな隔たりのあることが示されている(大坪2015・比佐2018)。石材種を不正確に報告すれば、産地からの流通論などに影響の及ぶことが懸念され、正しい議論や研究の基礎とするためにも、基本的な情報の取得、表示が必要と考える。今回も、緑色の石材を用いた玉について、蛍光X線分析や比重測定を行った。

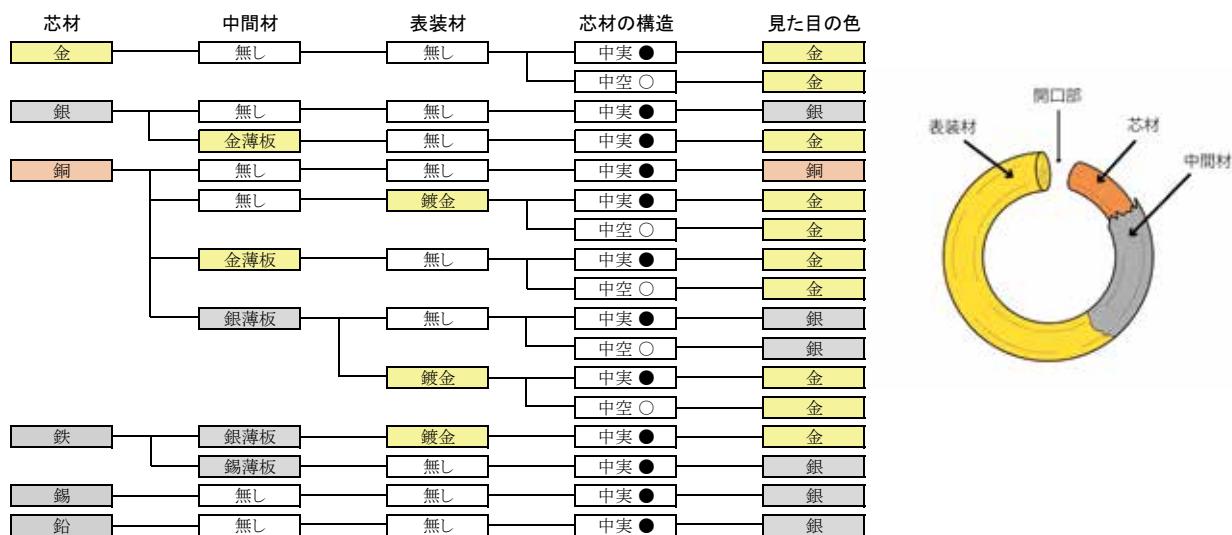
ガラス製の玉類は、文化財分野への蛍光X線分析装置の普及によって、急速に研究が進んだ資料の一つといえる。材質や製作技法からガラス玉を分類し、その変遷や流通を明らかにする研究は、日本では肥塚隆保氏を嚆矢として（肥塚1996・2010）、現在では田村朋美氏、大賀克彦氏（Tamura and Oga2013）、谷澤亜里氏（谷澤2011）らに引き継がれている。福岡市においても、蛍光X線分析装置が導入された平成11年以降、肥塚氏の指導を受けて、ガラスの材質や製作技法調査を進めており、元岡G-1号墳出土の資料についても、同様に調査を行った。なお、ガラス玉の分析、観察は、出土か

ら間もない段階で、筆者らの前任である保存処理担当者（田上勇一郎、上角智希、西澤千絵里の諸氏）によって行われた結果を使用している。ただし、色調など改めて見直した部分もあり、最終的な文責は筆者らにある。また、材質調査に用いた分析装置はと条件は下記のとおりである。

分析装置：エネルギー分散型微小領域蛍光X線分析装置（エダックス社製／Eagle μ probe）／対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／印加電圧：20kV・電流：任意／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3mm ϕ ／測定時間120秒

他に玉類では金属製空玉が出土しており、これについても材質分析を中心とした調査を行っている。

耳環は耳に装着する装身具として、金や銀という貴金属の色調を得ることを最終目的としながら製作されているが、そこに至るには様々な素材や技法が用いられていることが知られている（第34図）。



第34図 現在想定される耳環の構造

多種多様な材料や技法が用いられることの意味や、製作地は解明されていないものの、細かい情報の蓄積によって問題解決の糸口が見つかることが期待される。調査は透過X線撮影による構造観察、蛍光X線分析による材質調査、顕微鏡による細部の観察を行った。

この他、鏡、釧についても基礎情報の取得を目的として透過X線撮影や材質分析を実施した。

(3) 調査結果

1) 武器・武具・馬具

① 大刀

大刀は全部で4本出土している他、刀身とは別に金を加飾した鞘を1点取り上げている。大刀の内1本は大型の圭頭を有する装飾付大刀である。

透過X線撮影では、同じ古墳群の6号墳で金象嵌による銘文大刀が出土していることから、第二の象嵌大刀の発見が期待されたが、锷や鍔といった刀装具を含め、象嵌は確認できなかった。刀身の形状や構造に関しては鋒、関、目釘といった部分の状況がそれぞれ観察できる（保存科学調査図版 [=以下本章内では図版と表記]）。

装飾付大刀の圭頭部分では、側面に外觀からは確認できない微細な線状の影が見られる。これは絞り技法によって成形した部材を2枚合わせて中空の圭頭を作り出した際の合わせ目と見られる。また、スponジ状の不規則な網の目の様な状態が観察されている（図版4-2）。本例の様な中空の柄頭には、内部に布を詰めて柄の部材を固定することが知られている（横田1985）。大刀では無いものの、過

去に透過X線撮影を行った事例で古賀市船原古墳のマラカス状金銅製品では、中空の球体部分に布が詰められていたが、その透過X線像には元岡G-1号墳の圭頭に見られるのと同様の影が映し出されている（比佐2008）。G-1号墳の圭頭は鷲目金具を付ける孔から木質らしきものは見えるものの、更に奥の状態を窺い知ることはできない。しかし、類例から見て、内部に布が詰め込まれている可能性も想定される。

圭頭部分の材質分析では、銅(Cu)、金(Au)、水銀(Hg)が検出されており、観察の結果と合わせ銅板に鍍金を施したものであることが分かる。また透過X線像で見えた合わせ目部分では、銀(Ag)が明瞭なピークとして現れており、銀鑑を用いた接合が行われているものと考えられる。

柄巻は顕微鏡観察により帯状に加工した金属線に規則的に凹凸が付けられている様子が観察できる（図版5）。これは大谷晃二氏によって詳細に観察、分類されている様に（大谷2016）、鑿を用いて作り出されたもので、金属線の厚さは薄い部類に属するようである。幅はデジタルマイクロスコープの計測機能を使ったところ、概ね1.6mmから広い部分で2mm弱という数値が得られている。また刻みを付ける鑿は左右でズレがあり、結果的にSあるいはZ字の様な刻みが形成されている。より複雑な刻み目の効果を狙ったものであろうか。材質は分析の結果、銀を主体として僅かに銅や金が検出されている。いわゆる銀線として問題ない組成である。

大刀110と111には、柄の部分に有機物が残る。古墳出土鉄刀の柄巻きや鞘巻きには様々な材質、方法のあることが沢田むつ代氏によって示されている（沢田2015）。110、111はどちらも遺存状態は良好ではないものの、広く平滑な面を形成するものと、その上に撫りのある糸が巻かれた状況が見て取れる。糸は111では特に疎らで糸の間に間隔が見られる。糸が巻かれた基盤材は、木質のような纖維質にも見えるが、木の細胞組織とは状況が異なっており、ここでは明確な同定は行い得ない。連続して何かを巻いたようなつなぎ目も見えず、広い面積の素材を用いているように思われる（図版6）。

この他、現場から土ごと取り上げた鞘についても調査を行った。この資料は石室内で大刀群の横から検出されたが、既に木質が失われ、表面の加飾と見られる金の塗膜のみが残存した状態であった。このため、塗膜の検出された範囲 $+ \alpha$ を土ごと切り取り、木箱に収めて養生した状態で取り上げたものである。透過X線撮影では、土の中にうっすらと鞘の形状を観察できる部分が認められる。特に鞘口部分は比較的明瞭であるほか、責金具、または足金物と見られる鞘に直行する影も観察できる（図版3）。剥離した金塗膜の破片を分析した所、金と水銀、銅が検出された。もちろんこの塗膜片が鞘のどの部分から落ちたものは分からず、結果が鞘全体の様相を示すものではないが、木の鞘に直接漆などで金箔を貼り付けるのであれば水銀は不要であり、現状、銅板の存在痕跡は認められないものの、金銅板による加飾が存在していたものと推測される。

②鉄鑑・刀子

特に鉄鑑は透過X線撮影により、肉眼観察では不明瞭な刃部や関部の形状を明瞭に捉えることができた（図版7）。また、茎に樹皮巻きと見られる有機物が残存している資料もある。

③胡籠

胡籠金具は現状、16片を図化している。筆者らはこれまで、元岡G-1号墳のような型式の胡籠について調査経験がなく、構造を十分に理解していないこともあり、胡籠の研究で知られる土屋隆史氏が本資料を実見した際のメモを参考に部材の分類、配置復元を試みている。しかし、今回は土屋氏から直接教示を受けたものではなく、誤認があった場合の責は筆者らにある。

元岡G-1号墳の胡籠は、坂靖氏による分類（坂1992）のC 1類に該当する。左右の吊り金具、

その間に付く矢束金具、方立部に取り付けられる帶状金具で構成され、下端の帶状金具には三葉文が表現されている。部材はいずれも現状、鉄鑄で覆われており、基本的な部分は鉄製であると考えられる。透過X線撮影では鉢の部分が濃く写る部分が見られる（図版9）。鉢頭部分の材質分析では、銀を中心に微量の金、銀の腐食に関わる臭素が検出されており、鉢頭は銀の薄板を被せる加飾を施していたものと推察される。そのような視点で透過X線像を見直すと、鉢頭部分の像を拡大することで、別の金属薄板を被せて鉢頭裏で折り返したような痕跡が見える箇所もある。

近隣の類例としては、大野市の善一田古墳群18号墳から複数種の金具が出土し、帶金具が幅広、鉢が二列で鉢頭の大きなもの（盛矢具①）、幅広、鉢二列で鉢頭の小さなものの（盛矢具②）、幅が狭く鉢が一列のもの（盛矢具③）の三種類に分類されている。鉢頭部分の分析では盛矢具①では錫、盛矢具②・③は銀が検出されている。盛矢具①・②は鞞、③は平胡籠とされ、①と②は同一個体の別部位の金具と推定されている（土屋2017・小林ほか2017）。同一遺跡の出土品で銀色を指向しながらも、異なる材質が用いられている点で興味深い事例といえる。

また、ほとんどの部材の裏側に有機物の付着痕跡が認められる。ただし、部材によって遺存傾向の濃淡はある。特に吊り金具とした部材では、いずれも部材の裏側全面に纖維が残存し、複数種の織物が層になっている状態が見える部分もある。部材を裏面から観察した場合、最初が鉄板、その直上に織り目の粗い纖維があり、次に織り目の細かい纖維が付着、残存している（図版10・11）。

次に、方立下部の三葉文が付く帶状の金具も、纖維質の残存が良好に見られる。ここでも裏面から見て、鉄板、織り目の粗い布、織り目の細かい布という層位が確認できる。また帶状の金具上端＝三葉文の下端には幅広の紐の痕跡が認められる。

同じく善一田古墳群出土の盛矢具については、付着する纖維等有機物の調査を沢田むつ代氏が行っている（沢田2018）。それによれば鞞は金具の内側に経錦と推測される織物と木質、胡籠は同じく筒目の平絹と、別な織物（経糸の詰まり具合から経錦風の織物の可能性も想定される）があり、また胡籠金具の端には伏組繡も見られるとされている。

元岡G-1号墳の胡籠金具では、金具の直上に来る目の粗い織物が筒目の平絹で、その上に目が詰まった織物が重なっている。方立下部の三葉文が付く金具に見られる伏組繡らしき痕跡も含め、類似した構造となっている。また、吊り金具では経糸が縦方向、方立の縁金具など横方向に配置される部材では経糸が横向きに観察され、部材によって布の使用方向が異なっていたようである。他、胡籠では矢を収める部分に毛皮が用いられていたようで、近年、実物調査に基づいた復元案も各種示されている（塚本ほか2012・杉本2012）。しかし、今回の調査では獸毛らしき痕跡は見出し得なかった。また、底板の存在も想定されるものの、明確な木質も観察できなかった。

④馬具

素環の環状鏡板を有する轡が一組分出土している。透過X線撮影の結果、環状鏡板では外観からはよく分からぬ立闘の取り付け部分が観察できる他、引手や銜端部の連結部分が、蕨手状に曲げられている様子が見て取れる（図版8-2）。

2) 装身具類

①石製玉類

石製玉類の石材は、石英、メノウ、碧玉については肉眼による判別である。樹脂化石である琥珀も、特に分析は行っていない。朱～橙色のメノウ丸玉は、最近、その出自を韓半島とする説が提示されている（吉田ほか2018）。全点、透過X線撮影を行っており、孔の状態（開け方）を見ることができる（図版12-2）。琥珀のNo.173は両側からの穿孔が玉の中央付近で行き違っている様子が観察されて

いる。

勾玉の内、2点（158、159）は白と緑が入り交じった色調を呈しており、これらについて材質分析等の調査を行った。まず比重測定を行った所、いずれも3.3となり、ヒスイ輝石（硬玉）の3～3.3に合致している。また、材質分析¹⁾ではいずれもケイ素を主成分としながら、ナトリウム(Na)、マグネシウム(Mg)、アルミニウム、カルシウム(Ca)、クロム(Cr)、鉄、ニッケル(Ni)といった元素が認められる。ナトリウム、アルミニウムはヒスイ輝石($\text{NaAlSi}_2\text{O}_6$)の構成元素であり、クロムは緑の発色に関わる元素とされる。これらの結果から2点の勾玉はヒスイ（硬玉）製であると考えられる。

②ガラス玉

ガラス製の玉類は全部で76点が出土、種類としては小玉、丸玉、勾玉がある（図版13）。丸玉は径が10mmを超えるものを機械的に区分している（表4）。色調はすべて青色系統で、6点が淡青、残り70点が青紺色に区分される。それぞれの色調の中には更に細かい濃淡の差異があり、特に183～187は通常光では黒く見える。

顕微鏡を使った透過光観察で気泡の流れなどから製作技法を読み取ると、小玉、丸玉では引き伸ばし（後、分割、再加熱）が最も多く、丸玉はほとんどが巻き付けと見られる。数点、外形や気泡の流れが特徴的なものが含まれる。

215の淡青色小玉は気泡が非常に多く、流れが読みにくい。小口片側が広がる外形から鋳型作りの可能性も考えられるが、孔の長軸方向に延びたような気泡も見られ、断定は困難である（図版15-3）。

213および270の小玉は、小口片面は凸凹しているのに対し、反対側小口面は滑らかな半球状を呈している。田村氏らの研究で変則引き伸ばしとされる資料である。市内では色調も含め桑原石ヶ元古墳群によく似た事例が認められる（図版15-4・5）。

277の小玉は側面観が算盤玉状を呈する。気泡は少なく流れが読みにくいが、形状は大賀氏や田村氏の研究で加熱貫入法とされているものと似通っている（図版15-7・8）。

材質分析では55点がソーダ石灰ガラス、18点がカリガラス、1点が鉛バリウムガラスであった。ソーダ石灰ガラスは更にアルミニウムの量で細分しているが、定量値ではなく色調なども考慮した主観による判断によるものである。最近の研究では特に古墳時代後期のソーダ石灰ガラスについて細分化が進められているが（Tamura and Oga2013）、今回の調査ではそこまでの比較検討は難しい。今後、改めて検討する機会を見つけたい。

全体的には古墳時代後期の様相として大きな違和感は無いものの、鉛バリウムガラスは弥生時代を代表するガラスであり、終末期古墳で出土する事例は珍しいと思われる。また、色調のバリエーションが増加する古墳時代後期以降の資料でありながら、地味、あるいは伝統的な色味を踏襲した様な組成ともいえる。

③銀製空玉

図示している5点の他、図化しきれなかった小片が4点ある。いずれも灰紫や茶色の腐食生成物に覆われ、土圧によるものか、大きく変形したものが多い。空玉は半球状の部材を二つ合わせて球体に成形するが、現状で球体を成すものは1点のみで、後は接合部分で破損して半球状となっている。球形を保つ資料は中央に部材を接合した際の段差を見る能够。

材質は表面の蛍光X線分析の結果、全点ともに銀、臭素(Br)、鉄(Fe)、塩素(Cl)、ケイ素、アルミニウムなどが検出されている。この内、臭素や塩素は銀の腐食生成物に伴うもの、ケイ素やアルミニウムは残留している土壤に伴うものと考えられる。鉄も土壤に豊富に含まれる元素であり、土壤由来の可能性が高い。となると、空玉そのものに関する元素は銀のみで、不純物をほとんど伴わないとい

うことになる。しかしこれらの結果が得られたのは腐食の著しい部分の分析であり、1点、破断面の分析で金や微弱な銅とみられるピークが検出された個体も存在することから、健全な部分では微量元素が検出される可能性もある。いずれにしても「銀製」空玉として問題ない結果といえる。

紐通しの孔は、先端の尖った工具で内側から開ける場合と外側からの場合があり、前者であれば半球を接合する前に作業を行ったことが推察できる。本資料ではいずれの資料においても腐食が著しく、明瞭な痕跡は観察できない。唯一、154では孔の内外面ともに孔の周囲が盛り上がった状況が看取される。この内、球体の内面は強い腐食を免れており、孔の縁際に鋭利な角が形成されている。これらの状況から、先端の尖った工具ではなく、ポンチのような孔を切り取るように開ける工具で内側から穿孔したものと考えたい。

また、半球の部材を合わせる際、鎌付けという方法も想定されるが、本資料においては観察、分析での痕跡は確認できなかった。先行研究でも同様の事例が報告されているほか（塚本1994）、過去、市内の出土例である東油山古墳群出土例について調査を行ったことがあるが、この時も同じ結果であった。金工作家の指導を受けながら銀製空玉の復元実験を行った際には、現代のバーナーを使ったものの、鎌材は用いずに金属の地金同士を部分的に溶解させて一体化する熔着により部材の接合を行った。古墳時代当時の道具や方法は不明ながら、銀製空玉では熔着が行われていたと考えられる。

④耳環

個別の観察、分析結果は表5に記す。

19点の耳環は観察と分析から見た製作技法により、次のように分類される。

A：芯材＝金－中間材＝無し－表層材＝無し（中実、細型）…130、131、132

B：芯材＝銅－中間材＝金薄板－表層材＝無し（中実、太型）…134、135、137、140、141、
144、148

C：芯材＝銅－中間材＝無し－表層材＝鍍金（中実、太型）…139、143

D：芯材＝銅－中間材＝銀薄板－表層材＝鍍金（中実、太型）…136、138、142、146、147

E：芯材＝銀－中間材＝無し－表層材＝無し（中実、細型）…133

F：芯材＝銅－中間材＝銀薄板－表層材＝無し（中実、太型）…145

A～Dは製作（使用）当時の見た目は金、E・Fは銀となる。ただし、金の場合も表面に現れる部分の金に含まれる銀の含有量によって微妙な色調は異なっていたものと考えられる。

これに外形的な情報も加味すると、134と135、139と143、140と141、142と146、144と148はセットと考えて違和感はない。

また、細型が金、銀合わせて4点あり、一古墳からの出土数としては多いといえる。同じ元岡・桑原遺跡群内の石ヶ元古墳群でも、群全体ではあるが金7点、銀4点の細型があり（比佐ほか2003）、他の元岡古墳群出土例も含め、この地域で市内出土事例の約半数を占める集中度となっている。

他、特徴的な要素について幾つか記す。

147では、開口部の隙間にガラス玉が挟まっている（図版20－6・7）。開口部にガラス玉を挟む事例は、近隣では同じ元岡・桑原遺跡群内の石ヶ元古墳群12号墳で2点確認、報告されている（松浦2003）。石ヶ元の場合、完形のガラス小玉を横位置、つまり小玉の小口面と耳環の開口面を接する形で挟み込んでいるが、147では、ほぼ半分に割れたガラス小玉を縦位置で挟み込んでいる。ガラスは青紺色で、材質分析では低マンガンのコバルト着色によるソーダ石灰ガラスであることを示す組成となっている。また、顕微鏡観察では孔の長軸に平行して引き延ばされた気泡が観察されており、引き延ばした管ガラスを細分し再加熱して丸くした製作技法で作られていると考えられる。

この様に開口部に何かを挟み込む事例は、耳環の使用方法解明に手がかりを与えるものとして注目される資料といえる²⁾。

透過X線撮影では一部の資料に特異な所見が認められた（図版17）。144、148では、環体主要部分と開口部付近でX線の透過度が大きく異なる様子が観察される。透過度の違いが左右で不均等であったり段階的に生じていれば、芯材の腐食と考えることもできるが、左右両方で急に画像の色調変化が生じている148などの場合、強い違和感を覚える。この様な現象は奈良県飛鳥寺塔芯礎出土耳環でも報告されているが（降幡ほか2017）、原因は不明である³⁾。

この他、145では微少な範囲ではあるが開口部付近に筋状のものが並ぶ付着物の痕跡が見られた。太さ100μmほどで10本程度が並んでいる。その状況や過去の調査経験⁴⁾から、人毛の可能性が考えられる。

⑤鏡・釧

鏡は小型の仿製鏡で表面のクリーニングによって外形や文様は十分に観察できる状態となっているが、内部の状態確認も兼ねて透過X線撮影を行った。材質分析では、特に鏡面側で銅、鉛(Pb)、錫(Sn)という青銅の成分が検出される他、ごくわずかにヒ素(As)のピーク(Kβ線)も認められる。他、鉄やケイ素も検出されるが、土壤由来と考えられる。鏡背面は顕微鏡で観察すると赤色の付着物が広範囲に認められる。しかしこの部分を狙った分析では朱の主要元素である水銀は検出されず、ベンガラの鉄も特に強いピークとはなっていない。鏡を構成する元素である銅や鉛が埋蔵環境下で酸化物等に変化して赤く発色している可能性が高いと考える⁵⁾。

また釧の内部には紐の残欠と見られる有機物が観察できるが、残存状況は悪くこれ以上の詳細観察や同定には至っていない。

この他、過去の保存処理記録によれば、クリーニング前にはハエの囮蛹殻と見られる物質が付着していたとのことで、この囮蛹殻片は別途保管されている⁶⁾。古墳の埋葬主体から出土する遺物等へのハエの囮蛹殻付着は、田中良之氏の研究により殯との関連が指摘され（田中2003）、以後、各地で事例の増加が認められる他（比佐ほか2006）、近年、昆虫考古学として新たな研究に発展しつつある（小畠2018）。ただし、殯との関連についてはヒメクロバエという種類の性質とも関係するもので、今回の囮蛹殻は詳細な種の同定に至っていないこともあり、その解釈には改めての詳細調査が必要である。

釧は2点ある。当初深く考えずに対になると考え調査に臨んだが、材質調査では異なる結果となつた。いずれも腐食が著しく、各所で破断、欠損が見られる。また、内部が空洞になったり、芯と皮の二重構造の様な状態になっている部分もある。ただし、2点とも開口部の破片が存在することから耳環のようにC字形を呈する構造であったことが窺える。環体に刻み目などの装飾は見られない。

材質分析では、腐食が著しく保存処理においてクリーニングも十分に行えていないことから、表装が失われて芯の様になった金属が露出した部分か、泥に覆われた表層を分析するしかなく、釧本来の表面の分析は行えていない。それぞれ、場所を変えて複数箇所の分析を行ったが、定性的には各分析箇所とも個体内においてほぼ同じ結果が得られた。

149は銅を主体に非常に微弱ではあるがヒ素のピークが認められる。土壤由来とみられる元素は省略する。

150はやはり銅が主要なピークとして検出されるが、他の微量元素が鉛、銀となっており、149とは異なる。1箇所、表層に近い部分で金と水銀の部分に微弱なピークが出る部分があり、鍍金の可能性も疑ったが、他に同様の結果が出る部分は無く、また顕微鏡観察でも鍍金の痕跡は認められなかつ

た。また、すべての分析箇所でセレン(Se)が明瞭なピークとして検出される。埋蔵文化財の金属製品調査ではこれまでに管見に触れた記憶が無い元素であり、由来は現状で不明とせざるを得ない。

この結果を受けて改めて資料を観察すると、太さや断面形状、あるいは腐食の状態などに違いが見られ、2点の釧にセット関係は薄いものと考えられる。

(4)おわりに

以上、元岡G-1号墳出土の各種資料について保存科学的調査を行ったが、これは業務の都合上、十分に時間をかけたものではない。本来であれば得られた情報を元に何らかの考察をすべきところであるが、そこまで至らないまま時間切れとなってしまっている。まずは事実報告として情報の提示を行い、機を見て改めて検討を加えることができればと考える。本調査報告が新たな研究のきっかけや素材になれば幸いである。

【註】

- 1) 石材に対しては電圧を30kVに設定し真空中で分析を行った。
- 2) 耳環を耳に装着するには開口部で耳朶を挟む方法と、耳朶に孔を開け、開口部から通す方法などが想定される。他に辻村純代氏は、藤ノ木古墳の石棺内資料が頸椎との位置関係から耳よりも下がった所から出土することから、耳環に紐などを通して耳に掛ける方法を想定している（辻村1997）。しかし、埋蔵環境下での移動や、長年重たい耳環を耳朶に付けていた場合に耳朶が相当下がる事も考えられることから、ここでは除外して考える。開口部が完全に閉じている、細型タイプでよく見られるように開口部が交差する、そして開口部に異物が挟まっているといった事例では、耳朶に挟む方法は不可能となる。
- 3) 降幡氏は透過度の異なる部分を「別パート」と解釈しているが、製作技法の観点からは首肯しがたい。
- 4) 八女市鶴見山古墳で出土した銅鏡片に同様の痕跡があり、太さや、鏡が人体頭部付近に副葬されることが多い事などから人毛と推定した（比佐2005）。
- 5) 赤色部分のX線回折分析も試みたが、同定には至っていない。
- 6) 他に、耳環にも付着していたとの記録がある。

【参考文献】

- Katsuhiko Oga and Tomomi Tamura 2013 「Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere:Chemical compositions,chronologies,provenances and Trade Routees of Imported Glass Beads in the Yoyoi-Kofun periods(3rd Century BCE-7th Century CE)」『Journal of INDIAN OCEAN ARCHAEOLOGY』 Number 9,2013
大谷晃二 2016 「金鈴塚古墳の金銀装大刀はどこで作られたか？」『金鈴塚古墳展－甦る東国古墳文化の至宝－』
木更津市郷土博物館金のすず
大坪志子 2015 『縄文玉文化の研究－九州ブランドから縄文文化の多様性を探る－』 雄山閣
小畑弘己 2018 『昆虫考古学』 角川選書 角川学芸出版
木更津市郷土博物館金のすず 2016 『金鈴塚古墳研究』 第4号
肥塚隆保 1996 「化学組成からみた古代ガラス」『古代文化』 第48巻第8号 財團法人古代學協會
肥塚隆保 2010 「古代ガラスの科学」『月刊文化財』 566号 第一法規
肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010 「材質とその変遷」『月刊文化財』 566号 第一法規
小林啓・安木由美 2017 「善一田古墳出土盛矢具の材質分析」『乙金地区遺跡群23 善一田遺跡第4次』 大野
城市文化財調査報告書第159集 大野城市教育委員会

- 齋藤大輔2018「古墳時代武器研究史のなかの刀剣研究」『古代武器研究会』vol.14 古代武器研究会・山口大学考古学研究室
- 沢田むつ代2015「古墳出土の鉄刀と鉄剣の柄巻きと鞘巻きの種類と仕様」『文化財と技術』第7号 特定非営利活動法人 工芸文化研究所
- 沢田むつ代2017「善一田古墳出土の盛矢具に付着する纖維等について」『乙金地区遺跡群23 善一田遺跡第4次』大野城市文化財調査報告書第159集 大野城市教育委員会
- 杉本和江2012「香川県善通寺市所在 王墓山古墳出土ころくの復元案」『日本文化財科学会第29回大会研究発表要旨集』 日本国文化財科学会
- 田中良之2003「人骨およびハエ團蛹殻からみた殯について」『葉佐池古墳』松山市文化財調査報告書92 松山市教育委員会
- 谷澤亜里2011「弥生時代後期におけるガラス小玉の流通—北部九州地域を中心にして—」『九州考古学』第86号 九州考古学会
- 塚本敏夫1994「銀製空玉の製作技法」『团子塚九号墳 出土遺物保存処理報告書（平成3・4・5年度 国庫補助事業）』静岡県袋井市教育委員会・（財）元興寺文化財研究所
- 塚本敏夫・小村眞理・福山博章・内田真雄・中村栄順・小林正夫2012「胡籠の復元製作—今城塚古墳出土品をモデルとして—」『日本文化財科学会第29回大会研究発表要旨集』 日本国文化財科学会
- 辻村純代1997「耳環考」『古文化談叢』第39集 九州古文化研究会
- 土屋隆史2017「善一田18号墳出土盛矢具の意義」『乙金地区遺跡群23 善一田遺跡第4次』大野城市文化財調査報告書第159集 大野城市教育委員会
- 坂靖1992「胡籠の系譜」『同志社大学考古学シリーズV 考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 比佐陽一郎2005「鶴見山古墳出土金属器の保存科学的事前調査について」『鶴見山古墳2 福岡県八女市大字豊福所在古墳の確認調査報告書』八女市文化財調査報告書第72集 八女市教育委員会
- 比佐陽一郎2008「古賀市内出土資料の保存科学的調査」『古賀市内埋蔵文化財発掘調査に伴う出土品自然科学的分析調査報告』古賀市文化財調査報告書第52集 古賀市教育委員会
- 比佐陽一郎2018「福岡市内出土石製玉類の用材について」『福岡市埋蔵文化財センターレポート』第37号 福岡市教育委員会
- 比佐陽一郎・片多雅樹・村上隆2003「装身具類の調査—ガラスと耳環を中心として—」『九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 元岡・桑原遺跡群2—桑原石ヶ元古墳群調査の報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第744集 福岡市教育委員会
- 比佐陽一郎・大澤元裕・大塚恵治2006「古墳出土金属器表面に残る有機物痕跡の一例」『日本文化材科学会第23回研究発表要旨集』日本文化材科学会
- 降幡順子・諫早直人・石橋茂登2017「飛鳥寺塔芯礎出土耳環の調査」『日本文化財科学会第34回大会研究発表要旨集』 日本国文化財科学会
- 松浦一之介(編)2003『九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 元岡・桑原遺跡群2—桑原石ヶ元古墳群調査の報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第744集 福岡市教育委員会
- 横田義章1985「圭頭と頭椎—柄頭の取り付けと柄作り手順—」『九州歴史資料館研究論集』11 九州歴史資料館
- 吉田東明・小嶋篤2018「三国時代玉類の日本列島における展開—古墳時代中期～後期に見られる多様な玉類—（赤メノウ製玉類）」『玉—古代を彩る至宝—』ハーベスト出版

表4 元岡G-1号噴出土玉類一覧

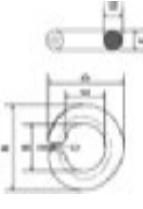
通番	図	番号	遺物No.	材質	細目	註記	色調	(mm)			(g)	推定される製作技法	分析による所見
								径	厚さ	孔径			
1	20	157	10063	水晶	勾玉	床面直上	透明	測定不能	測定不能	4.20~2.23	4.834		
2	20	158	10096	硬玉	勾玉	No.28	白・緑	測定不能	測定不能	3.55~2.18	7.201		
3	20	159	10097	硬玉	勾玉	No.40	白・緑	測定不能	測定不能	2.80~1.73	7.142		
4	20	161	10099	碧玉	管玉	No.41	濃緑	7.16	23.72	4.48~1.65	1.911		
5	20	162	10098	碧玉	管玉	No.38	濃緑	8.33	20.00	3.51~1.60	2.303		
6	20	163	10100	碧玉	管玉	No.53	濃緑	8.65	22.78	5.01~2.37	2.860		
7	20	164	10101	碧玉	管玉	No.55	濃緑	8.55	22.19	4.52~1.93	2.889		
8	20	165	10060	水晶	切子玉	No.52	透明	13.23	20.71	4.33~1.44	5.097		
9	20	166	10057	水晶	切子玉	No.42	透明	14.29	18.96	4.06~1.80	4.551		
10	20	167	10059	水晶	切子玉	No.51	透明	15.26	21.62	4.81~2.10	6.065		
11	20	168	10058	水晶	切子玉	No.48	透明	14.41	17.47	3.59~1.58	3.809		
12	20	169	10061	水晶	切子玉	No.56	透明	13.28	17.17	3.58~1.85	3.470		
13	20	170	10062	水晶	切子玉	No.74	透明	11.94	18.39	3.68~1.82	3.465		
14	23	258	10135	水晶	切子玉	2面敷石NO.1120531	透明	11.73 ~13.22	16.79	1.79~3.87	3.366		
15	20	171	10065	水晶	丸玉	No.25	透明	13.89	11.59	3.86~1.69	3.191		
16	23	259	10124	水晶	丸玉	2面G-5土	透明	11.41	10.04	1.85~3.81	1.858		
17	20	172	10056	琥珀	棗玉	No.24	茶褐				2.564		
18	20	173	10064	琥珀	棗玉	No.35	茶褐				1.817		
19	20	174	10102	瑪瑙	小玉	床面直上	橙	7.74~6.87	6.38	1.75	0.435		
20	23	260	10125	瑪瑙	小玉	2面G-5土	橙	7.60	5.03~6.13	2.05	0.467		
65	21	218	10001	ガラス	小玉	100723	青紺	4.11	2.39	1.82	0.065	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
67	21	220	10002	ガラス	小玉	100723	淡青	3.84~3.48	3.40	1.82~1.15	0.064	引き延ばし	高A1ソーダ石灰
59	21	212	10003	ガラス	小玉	No.116100805	青紺	4.53	2.54	1.02	0.079	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
73	21	226	10004	ガラス	小玉	No.117100805	青紺	3.63	2.29	1.28	0.047	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
62	21	215	10005	ガラス	小玉	No.120100805	淡青	3.79	4.21	1.16	0.065	引き延ばし	カリ
60	21	213	10006	ガラス	小玉	石室内第2面検出時水洗出土100715	青紺	3.82	2.96~2.66	1.37	0.066	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
64	21	217	10007	ガラス	小玉	石室内第2面検出時水洗出土100715	青紺	3.43	1.95	1.51	0.029	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
75	23	264	10008	ガラス	小玉	石室内第2面検出時水洗出土100715	青紺	3.56	1.61	1.67	0.029	引き延ばし	カリ
70	21	223	10009	ガラス	小玉	石室内第2面検出時水洗出土100715	青紺	2.99	1.50	1.51	0.022	引き延ばし	カリ
63	21	216	10010	ガラス	小玉	100716	青紺	4.02	2.13	1.94	0.042	引き延ばし	カリ
66	21	219	10011	ガラス	小玉	100716	淡青	3.46	1.75	1.61	0.030	引き延ばし	高A1ソーダ石灰
72	21	225	10012	ガラス	小玉	100802	青紺	3.86	2.23	1.67	0.045	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
74	21	227	10013	ガラス	小玉	玄室内清掃時流入土除去111006	青紺	4.30	1.77	1.76	0.051	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
71	21	224	10014	ガラス	小玉	玄室内清掃時流入土除去111006	青紺	3.62	1.97	1.66	0.039	引き延ばし	カリ
61	21	214	10015	ガラス	小玉	玄室内清掃時流入土除去111006	青紺	3.51	2.00	1.19	0.036	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
68	21	221	10016	ガラス	小玉	玄室内清掃時流入土除去111006	青紺	3.55~3.02	2.35	1.32	0.044	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
58	21	211	10017	ガラス	小玉	床面直上	青紺	3.71	2.47	1.68	0.048	引き延ばし	高A1ソーダ石灰
69	21	222	10018	ガラス	小玉	床面直上	青紺	2.97	1.52	1.40	0.021	引き延ばし	高A1ソーダ石灰
35	21	188	10019	ガラス	小玉	No.119	青紺	8.47~7.72	6.25	2.03	0.627	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
36	21	189	10020	ガラス	小玉	No.120100805	青紺	8.21	6.56	2.01	0.672	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
41	21	194	10021	ガラス	小玉	No.31	青紺	7.44	5.91	2.77	0.453	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
38	21	191	10022	ガラス	小玉	No.32	青紺	7.95	5.93	1.90	0.570	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
42	21	195	10023	ガラス	小玉	No.33	青紺	7.77~6.55	6.19~5.23	2.46~1.97	0.467	引き延ばし	カリ
39	21	192	10024	ガラス	小玉	No.34	青紺	8.38~7.90	5.91	1.60	0.651	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
45	21	198	10025	ガラス	小玉	No.37	青紺	8.70~7.72	6.10	1.97	0.604	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
30	21	183	10026	ガラス	小玉	No.43	青紺	11.22	8.37	4.08~3.23	1.259	巻き付け	低A1ソーダ石灰
31	21	184	10027	ガラス	小玉	No.45	青紺	10.68	8.03	3.92	1.027	巻き付け	低A1ソーダ石灰
32	21	185	10028	ガラス	小玉	No.46	青紺	10.77	7.64	3.69	1.111	巻き付け	低A1ソーダ石灰
40	21	193	10029	ガラス	小玉	No.47	淡青	8.27	6.03	4.09~3.42	0.546	巻き付け	鉛バリウム
34	21	187	10030	ガラス	小玉	No.49	青紺	10.16	8.52	4.49~3.24	1.026	巻き付け	低A1ソーダ石灰
33	21	186	10031	ガラス	小玉	No.54	青紺	10.76	8.73	4.38~3.31	1.237	巻き付け	低A1ソーダ石灰
51	21	204	10032	ガラス	小玉	石室内第1面検出時水洗出土	青紺	6.58~7.34	5.44~6.16	2.43~2.95	0.392	引き延ばし	カリ?
37	21	190	10033	ガラス	小玉	掃除したさいご?の土中から出土100802	青紺	8.84	5.96	2.53~1.81	0.752	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
44	21	197	10034	ガラス	小玉	掃除したさいご?の土中から出土100802	青紺	7.69	6.87	2.15	0.675	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
53	21	206	10035	ガラス	小玉	床面直上-1	青紺	6.48~6.05	4.18~3.26	2.60	0.216	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
57	21	210	10036	ガラス	小玉	床面直上-2	青紺	5.58	3.78~3.36	2.68~2.03	0.162	引き延ばし	カリ
54	21	207	10037	ガラス	小玉	床面直上-3	青紺	6.35~5.79	4.28	2.17	0.256	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
52	21	205	10038	ガラス	小玉	床面直上-4	青紺	6.08~4.96	5.09~4.51	2.01	0.233	引き延ばし	カリ
50	21	203	10039	ガラス	小玉	床面直上-5	青紺	5.91	5.35	2.38	0.299	引き延ばし	カリ
49	21	202	10040	ガラス	小玉	床面直上-6	青紺	7.91~6.68	5.51~4.98	1.38	0.453	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
43	21	196	10041	ガラス	小玉	床面直上-7	青紺	9.15	6.92	3.18~2.24	0.876	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
46	21	199	10042	ガラス	小玉	床面直上-8	青紺	8.61~7.93	5.35	2.32	0.576	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
48	21	201	10043	ガラス	小玉	床面直上-9	青紺	7.24	4.04	1.48	0.326	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
47	21	200	10044	ガラス	小玉	床面直上-10	青紺	6.35	4.82	2.03	0.327	引き延ばし	低A1ソーダ石灰
55	21	208	10045	ガラス	小玉	床面直上-11	青紺	6.25	3.93~3.08	2.27	0.208	引き延ばし	低A1ソーダ石灰

通番	図	番号	遺物 No.	材質	細目	註記	色調	(mm)			(g)	分析による 製作技法
								径	厚さ	孔径		
56	21	209	10046	ガラス	小玉	床面直上-12	青紺	6.12～5.66	3.66	1.96	0.222	引き延ばし
22	20	175	10047	ガラス	丸玉	No.12	青紺	13.33	8.98	4.12	2.235	巻き付け?
23	20	176	10048	ガラス	丸玉	No.13	青紺	13.04	9.04	3.41	2.115	巻き付け?
24	20	177	10049	ガラス	丸玉	No.26	青紺	12.30	8.60	3.41	1.806	巻き付け?
25	20	178	10050	ガラス	丸玉	No.27	青紺	13.09	10.14	3.26	2.278	巻き付け?
26	20	179	10051	ガラス	丸玉	No.29	青紺	13.24	9.59～8.39	3.11	2.273	巻き付け?
29	21	182	10052	ガラス	丸玉	No.30	青紺	13.72	9.43	4.02	2.360	巻き付け?
28	21	181	10053	ガラス	丸玉	No.36	青紺	12.99	9.38	3.54	2.016	巻き付け?
27	21	180	10054	ガラス	丸玉	床面直上	青紺	12.17	9.62	3.45～2.76	1.929	巻き付け?
21	20	160	10055	ガラス	勾玉片	No.121100805	淡青	測定不能	測定不能	2.81	1.281	高A1ソーダ石灰
77	23	261	10103	ガラス	小玉	2面F-5土120824	淡青	5.07～6.13	4.20	1.90	0.205	引き延ばし
78	23	262	10104	ガラス	小玉	2面F-5土120824	青紺	5.32	5.18～6.15	1.55	0.269	引き延ばし
79	23	263	10105	ガラス	小玉	2面F-5土120824	青紺	5.49	3.97	1.79	0.175	引き延ばし
80	23	265	10106	ガラス	小玉	2面F-5土120824	青紺	5.38～6.09	4.96	1.67～1.95	0.243	引き延ばし
81	23	266	10107	ガラス	小玉	2面F-5土120824	青紺	5.85	4.07	2.09	0.194	引き延ばし
82	23	267	10108	ガラス	小玉	2面F-5土120824	青紺	5.83～6.50	4.40	1.88	0.253	引き延ばし
83	23	268	10109	ガラス	小玉	2面F-5土120824	青紺	5.67～6.16	4.27	1.84～2.40	0.207	引き延ばし
84	23	269	10110	ガラス	小玉	2面F-5土120824	青紺	5.01	4.73	1.89	0.154	引き延ばし
85	23	270	10111	ガラス	小玉	2面F-5土120824	青紺	7.84	3.78	1.98	0.284	引き延ばし
86	23	271	10112	ガラス	小玉	2面F-5土120824	青紺	7.98～9.07	6.15	2.32	0.729	引き延ばし
87	23	272	10113	ガラス	小玉	2面G-5土	青紺	7.62	6.67	2.45	0.552	引き延ばし
88	23	274	10114	ガラス	小玉	2面G-5土	青紺	5.92～6.34	5.57	2.26	0.325	引き延ばし
89	23	273	10115	ガラス	小玉	2面G-5土	青紺	6.00～6.52	4.98	2.50	0.289	引き延ばし
90	23	275	10116	ガラス	小玉	2面G-5土	青紺	6.16	3.03	1.96	0.185	引き延ばし
91	23	276	10117	ガラス	小玉	2面G-5土	青紺	6.05～6.31	5.31	2.65	0.289	引き延ばし
92	23	277	10118	ガラス	小玉	2面G-5土	青紺	7.33	4.33	2.11	0.296	加熱貫入?
93	23	278	10119	ガラス	小玉	2面G-5土	青紺	7.48	5.63	1.51	0.486	引き延ばし
94	23	279	10120	ガラス	小玉	2面G-5土	青紺	7.41	4.48～5.18	1.73	0.433	引き延ばし
95	23	280	10121	ガラス	小玉	2面G-5土	青紺	5.50～6.89	5.37	1.60～2.29	0.339	引き延ばし
96	23	281	10122	ガラス	小玉	2面G-5土	青紺	6.68	5.11～599	3.22	0.374	引き延ばし
76	23	297	10123	ガラス	丸玉	2面G-5土	青紺	13.26	8.08～9.32	3.81	2.094	巻き付け
97	22	228	10066	土	土玉	No.44	黒	7.18	4.97	2.03	0.295	
98	22	229	10067	土	土玉	No.50	黒	7.52～6.76	測定不能	測定不能	0.241	
99	22	230	10068	土	土玉	No.6	黒	8.82～7.94	6.87	1.86	0.544	
100	22	231	10069	土	土玉	No.63	黒	8.37～7.61	6.28	2.01	0.415	
101	22	232	10070	土	土玉	No.7	黒	8.28～7.55	7.05	1.63	0.505	
102	22	233	10071	土	土玉	100802	黒	7.00	4.57	2.28	0.244	
103	22	234	10072	土	土玉	100802	黒	6.76	5.00	1.86	0.222	
104	22	235	10073	土	土玉	床面直上土玉1	黒	7.29～6.47	5.49	1.81	0.240	
105	22	236	10074	土	土玉	床面直上土玉2	黒	7.24～6.60	5.35	1.84	0.285	
106	22	237	10075	土	土玉	床面直上土玉3	黒	7.70	4.77	1.95	0.267	
107	22	238	10076	土	土玉	床面直上土玉4	黒	7.47	5.02～4.65	2.04	0.276	
108	22	239	10077	土	土玉	床面直上土玉5	黒	6.91	5.46～4.92	2.12	0.258	
109	22	240	10078	土	土玉	床面直上土玉6	黒	7.49～7.05	5.63	1.59	0.287	
110	22	241	10079	土	土玉	床面直上土玉7	黒	6.99～6.41	5.48	1.85	0.260	
111	22	242	10080	土	土玉	床面直上土玉8	黒	6.88	5.45	1.72	0.261	
112	22	243	10081	土	土玉	床面直上土玉9	黒	7.02	6.07	1.89	0.243	
113	22	244	10082	土	土玉	床面直上土玉10	黒	7.21	5.29	2.12	0.262	
114	22	245	10083	土	土玉	床面直上土玉11	黒	6.81～5.85	5.30	1.69	0.211	
115	22	246	10084	土	土玉	床面直上土玉12	黒	7.07	5.40	2.07	0.288	
116	22	247	10085	土	土玉	床面直上土玉13	黒	7.52	5.98	1.81	0.325	
117	22	248	10086	土	土玉	床面直上土玉14	黒	7.63	6.04	1.83	0.331	
118	22	249	10087	土	土玉	床面直上土玉15	黒	8.41～7.70	5.54	2.26	0.356	
119	22	250	10088	土	土玉	床面直上土玉16	黒	7.10	4.38	1.95	0.247	
120	22	251	10089	土	土玉	床面直上土玉17	黒	7.49～6.76	5.31	2.25	0.245	
121	22	252	10090	土	土玉	床面直上土玉18	黒	6.93	5.19	2.03	0.265	
122	22	253	10091	土	土玉	床面直上土玉19	黒	6.63	5.87～4.88	1.99	0.234	
123	22	254	10092	土	土玉	床面直上土玉20	黒	8.17～6.97	5.53～4.68	2.55～1.62	0.251	
124	22	255	10093	土	土玉	床面直上土玉21	黒	7.06	6.50	1.63	0.293	
125	22	256	10094	土	土玉	床面直上土玉22	黒	7.18	5.45	1.96	0.274	
126	22	257	10095	土	土玉	床面直上土玉23	黒	7.11	5.02	1.89	0.268	
127	23	282	10126	土	土玉	2面B-2土	黒	7.93	6.66	2.16	0.481	
128	23	283	10127	土	土玉	2面D-2土120820	黒	7.65～8.81	6.79	2.26～2.92	0.451	
129	23	284	10128	土	土玉	2面F-2土120824	黒	8.05	7.19	1.97	0.446	
130	23	285	10129	土	土玉	2面G-1土120821	黒	7.38～8.02	7.35	2.08	0.432	
131	23	286	10130	土	土玉	2面G-1土120821	黒	7.33～8.24	6.81	2.37	0.384	
132	23	287	10131	土	土玉	2面G-1土120821	黒	7.83	6.48	1.92	0.381	
133	23	288	10132	土	土玉	2面G-1土120821	黒	8.36	7.71	1.81	0.517	
134	23	289	10133	土	土玉	2面H-1土120821	黒	7.30	5.26	0.87	0.361	
135	23	290	10134	土	土玉	2面H-1土120821	黒	7.44～8.47	7.36	1.88	0.447	
136	23	291	10136	土	土玉	2面敷石NO.2120531	黒	8.70	7.14	2.07	0.530	
137	23	292	10137	土	土玉	2面敷石NO.2120531	黒	8.06～8.50	6.69～7.15	1.76	0.507	
138	23	293	10138	土	土玉	2面敷石A-1,B-1120531	黒	7.80～8.60	6.18～6.87	1.99	0.442	
139	23	294	10139	土	土玉	2面敷石B-2120531	黒	8.29	7.12	1.89	0.515	
140	23	296	10140	土	土玉	2面敷石B-2120531	黒	7.44～7.89	6.79	2.05	0.346	
141	23	295	10141	土	土玉	石室内第2面f石室部埋土121016	黒					

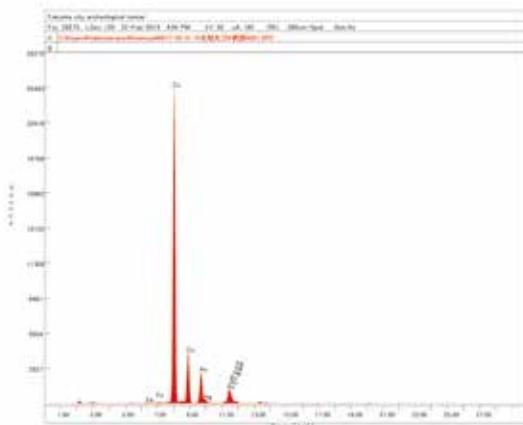
表5 元岡G-1号墳出土環調査所見一覧

通番	遺物登録番号	観察結果	分析結果	報告書掲載Fig	計測値 (A ~ Gは単位mm、重量はg)				特記事項		
					A	B	C	D			
1	100120054	表装材は金色を呈する。開口部は絞り歫がみられるが、丁寧に仕上げられている。また、開口部に破損箇所があり、内部の芯材は黒色を呈する。	表面からは金、銀、銅が検出される。水銀は検出されない。芯材は銅と微弱な鉛(と鉄)。	19-134 む) 薄板(中実)	21.75	14.00	0.75	20.00	13.00	4.00	4.49
2	100120055	表装材は金色を呈する。また、開口部は絞り歫がみられるが、丁寧に仕上げられている。工具痕跡あり。	表面からは金、銀、銅が検出される。水銀は検出されない。芯材は銅と微弱な鉛(と鉄)。	19-135 む) 薄板(中実)	22.00	14.00	0.75	20.00	11.25	4.25	4.40
3	100120056	表装材は、黄色みを帯びた銀色と黒色を呈する。開口部から表面からは金、銀、銅、水銀と鉛(と鉄)。	表面からは金、銀、銅と鉛(と鉄)が検出される。芯材は銅と鉛(と鉄)。	19-138 銀金(中実)	24.50	14.25	0.25	23.00	13.25	7.00	5.25
4	100120057	表装材は鉛(と鉄)が金色を呈する。腐食生成物は、黒色直線状で黒色を呈する。開口部に絞り歫があり。	表面からは金、銀、銅と鉛(と鉄)が検出される。芯材は銅(と鉄)。	19-136 銀金(中実)	23.00	13.00	2.00	21.25	12.00	8.00	5.92
5	100120058	表装材は金色と鉛(と鉄)が金色がみられる。開口部に絞り歫あり、緑青もみられる。	表面からは金、銀、銅と鉛(と鉄)が検出される。芯材は銅(と鉄)。	19-144 む) 薄板(中実)	33.25	19.50	0.75	28.50	16.00	7.25	7.00
6	100120059	表装材は金色を呈する。開口部に絞り歫があり、一部破壊している。工具痕跡が確認できる。また、開口部付近に明瞭な工具痕跡が確認できる。	表面からは金、銀、銅と鉛(と鉄)が検出される。芯材は銅と鉛(と鉄)。	19-137 む) 薄板(銀を含む)	26.25	17.75	-	25.00	16.50	4.50	4.50
7	100120060	表装材は銀色を呈する。銀の腐食とみられる黒色箇所があり。太さは細型で破損部はない。X線で中実を確認。	表面からは銀と銅、鉛(と鉄)が検出される。芯材は銀。	19-133 銀無垢(中実)	24.00	20.00	0.50	24.75	21.00	2.00	2.48
8	100120061	表装材は金色を呈する。X線で中実を確認。開口部の先端が、同線線上に重なる。	表面からは金、銀、銅と鉛(と鉄)が検出される。芯材は金。	19-132 金無垢(中実)	25.00	22.00	3.50	26.25	23.50	1.50	2.25
9	100120062	表装材は金色を呈する。太さは細型で破損部はない。X線で中実を確認。	表面からは金、銀、銅と鉛(と鉄)が検出される。芯材は金。	19-131 金無垢(中実)	26.75	23.75	1.50	26.75	23.25	1.50	2.17
10	100120063	表装材は金色と鉛(と鉄)が金色を呈する。開口部の先端が、同線線上に重なる。X線で中実を確認。開口部後、研磨されている。	表面からは金、銀、銅と鉛(と鉄)が検出される。芯材は銀。	19-148 む) 薄板(銀を含む)	32.50	19.00	1.00	29.00	16.00	7.25	7.00
11	100120064	表装材は銀色を呈する。太さは細型で破損部はない。X線で中実を確認。開口部の先端が、片方のみが研磨されている。	表面からは金、銀、銅と鉛(と鉄)が検出される。芯材は銀。	19-130 金無垢(中実)	27.00	24.00	0.50	29.25	26.25	1.50	2.13
12	100120065	表装材は、銀色を呈しており、芯材の鋼由来の緑青がみられる。X線で絞り歫を確認。開口部に欠けたガラス小玉が嵌入。	表面からは金、銀、銅と水銀が検出される。芯材は銅(と鉄)。	19-147 銀金(中実)	32.00	17.00	-	29.00	19.50	8.50	7.50
13	100120066	表装材は銀色を呈し、銀の腐食とみられる黒色箇所がある。また、破損部から銀青がみられる。絞り歫を確認。	表面からは銀、銅、芯材は銅(と鉄)が検出される。芯材は銀と微弱な鉛(と鉄)。	19-145 実) 薄板(中実)	32.00	16.50	1.25	29.00	14.25	8.00	16.38
14	100120067	表装材は銀色で、銀の腐食とみられる黒色の箇所もある。X線で絞り歫を確認。	表面からは金、銀、銅、水銀が検出される。芯材は銅と鉛(と鉄)。	19-146 銀金(中実)	30.00	15.25	0.50	28.25	14.00	7.50	7.50
15	100120068	表装材は、黄色みを帯びた銀色を呈する。表装材の大部部分が剥がれており、芯材箇所には緑青がみられる。X線で絞り歫を確認。	表面からは銀と水銀と微弱な鉛(と鉄)が検出される。芯材は銅と鉛(と鉄)。	19-143 実) 薄板(中実)	29.75	18.50	2.50	25.50	15.00	5.50	8.68
16	100120069	表装材は銀色を呈しており、芯材箇所には緑青がみられる。X線で絞り歫を確認している。開口部に絞り歫があり、芯材は銀。	表面からは金、銀、銅と水銀と微弱な鉛(と鉄)が検出される。芯材は銅と鉛(と鉄)。	19-139 銀金(中実)	30.25	18.00	2.00	25.00	15.00	5.75	6.00
17	100120070	表装材内側にも銀青が寄つていている箇所が見て取れる。破損部から銀青がみられる。	表面からは金、銀、銅が検出される。芯材は銅(と鉄)。	19-140 む) 薄板(中実)	28.75	18.00	1.00	27.00	16.50	5.50	11.35
18	100120071	表層材は銀色を呈しており、C字中央部内側に一部黒色箇所があり、芯材箇所には緑青と銀青とみられる。開口部に絞り歫があり。	表面からは金、銀、銅と水銀が検出される。芯材は銅(と鉄)。	19-142 銀金(中実)	31.00	16.00	0.50	28.00	14.00	7.50	14.7
19	100120072	表装材は、金色を呈しており、一部黒色箇所があり、芯材は銀(と鉄)。開口部付近に明瞭な道具痕跡が確認できる。	表面からは金、銀、銅が検出される。芯材は銅(と鉄)。	19-141 む) 薄板(中実)	30.00	18.75	1.00	27.00	17.00	5.50	10.63

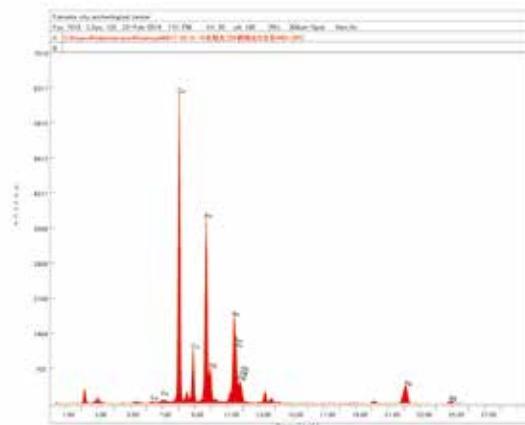
※定量値は参考値(簡単に作成した標準資料と比較して大きさ誤差は認められない)



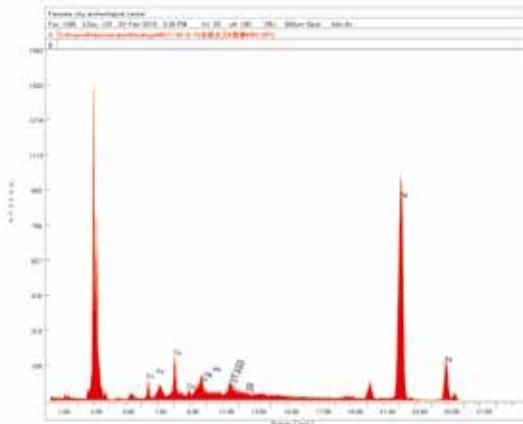
保存科学調査図版1



1.圭頭大刀圭頭金銅板部分



2.圭頭大刀圭頭袋部合わせ目(銀鑑)



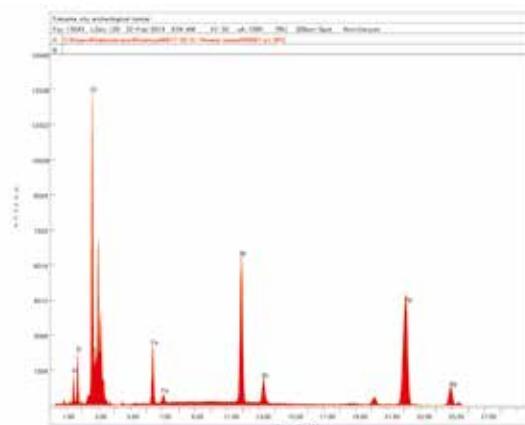
3.圭頭大刀銀線



4.鞘から脱落した金塗膜

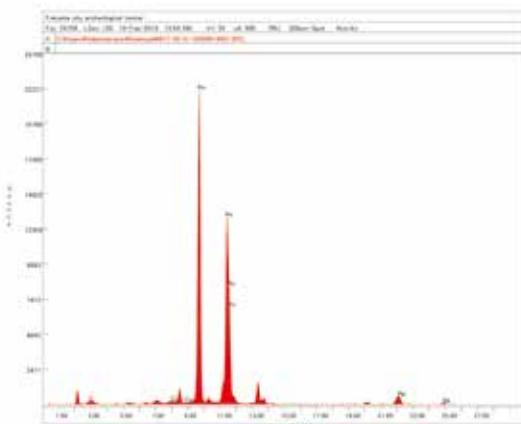


5.胡籠金具鉗頭

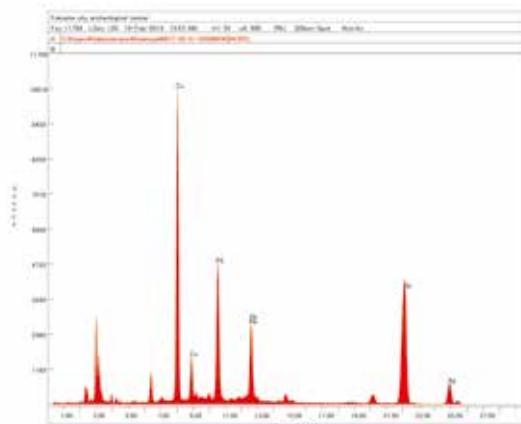


6.銀製空玉

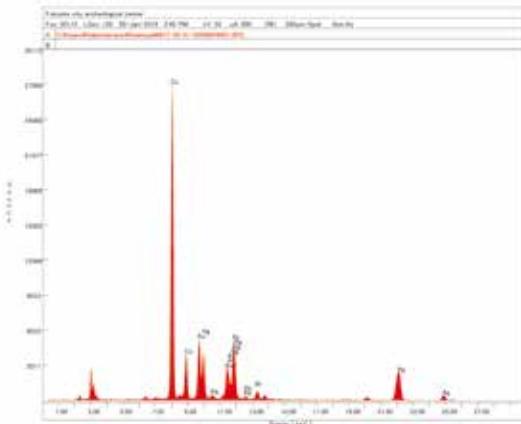
蛍光X線分析の結果(1)



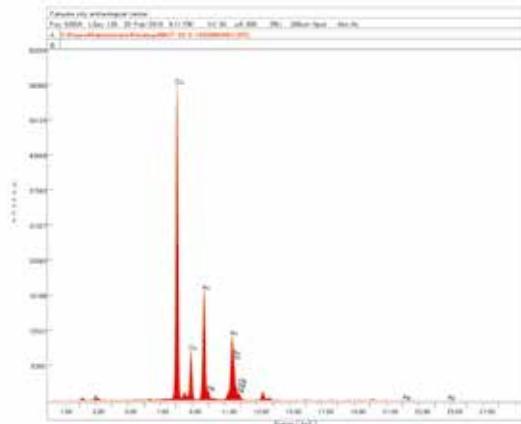
1.耳環132(金無垢)



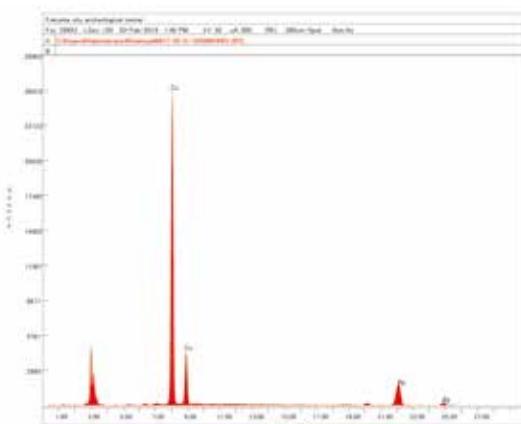
2.耳環133(銀無垢)



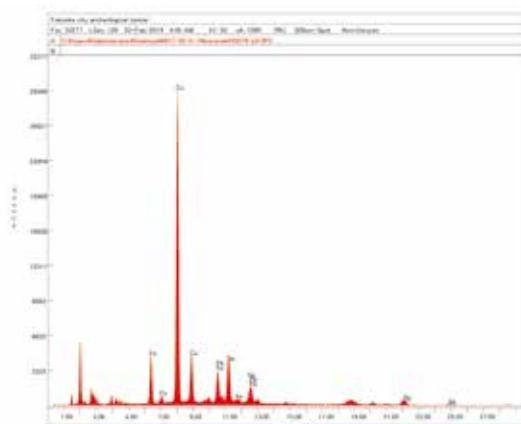
3.耳環138(銅芯-銀薄板-鍍金)



4.耳環143(銅芯-鍍金)

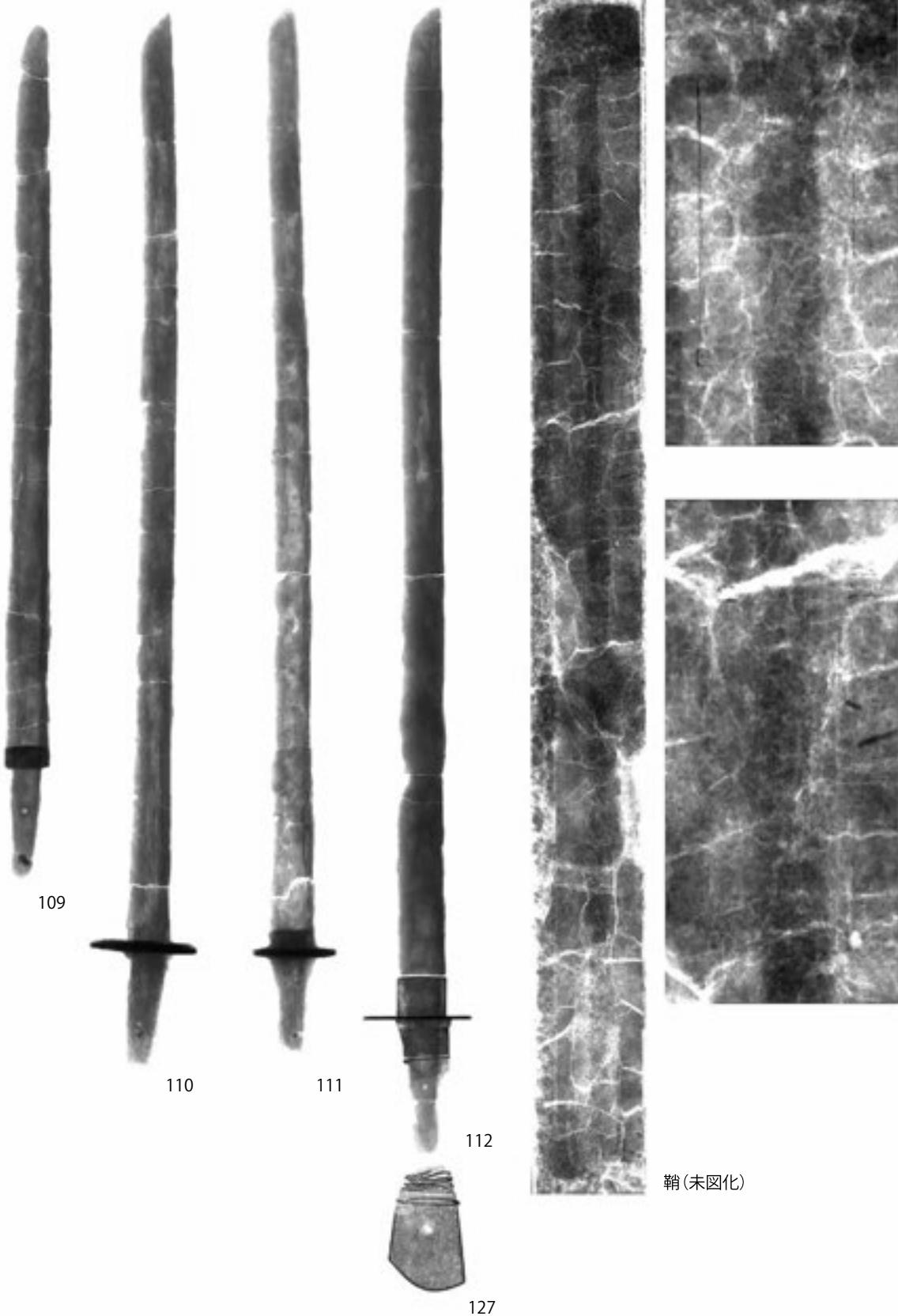


5.耳環145(銅芯-銀薄板)

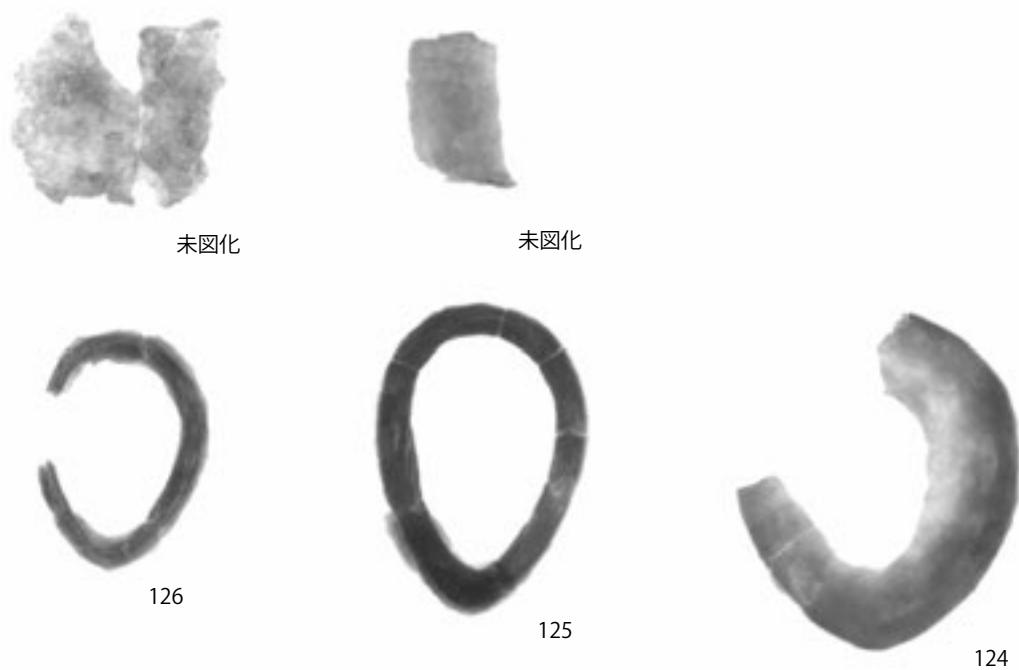


6.銅剣

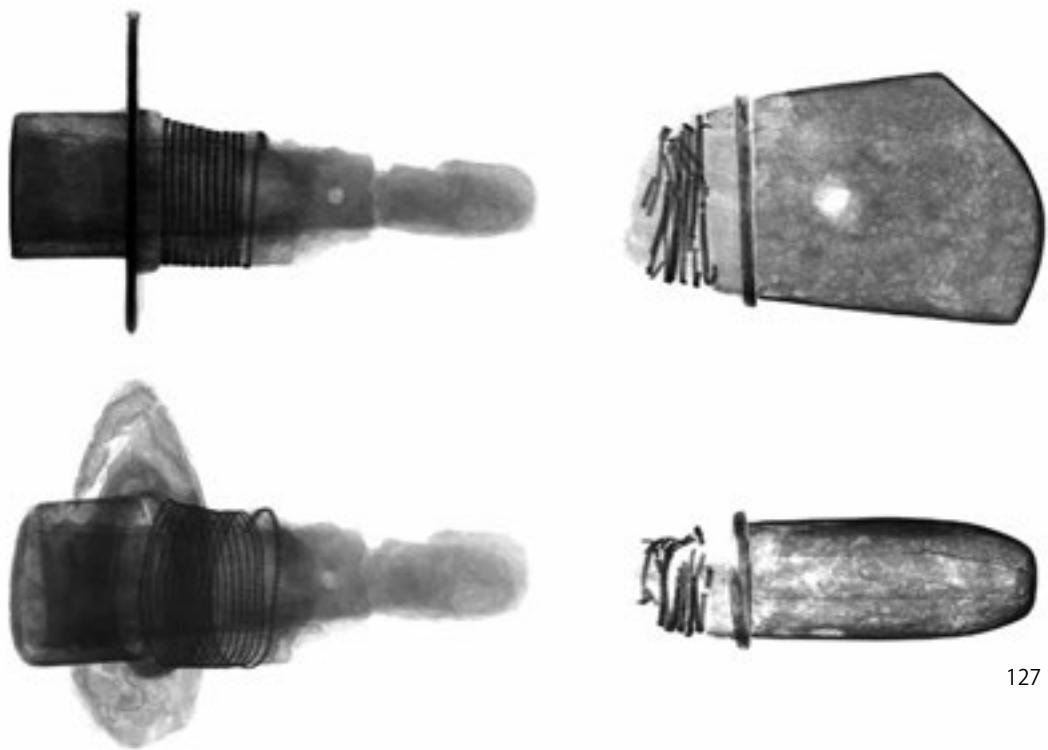
蛍光X線分析の結果(1)



大刀の透過X線像



1. 刀装具類の透過X線像



2. 圭頭大刀装具部分の透過X線像



1. 柄頭基部



2. 柄巻



3. 柄巻(2の反対面)



4. 鍔金具と鍔



5. 柄巻銀線



6. 柄巻銀線



7. 柄巻銀線

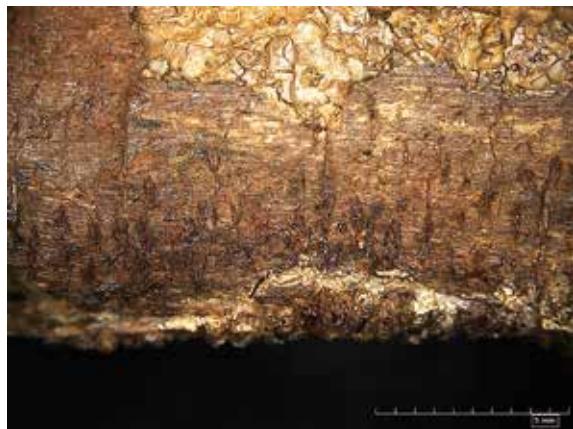


8. 柄巻銀線

圭頭大刀装具部分の接写(1~4)およびデジタルマイクロスコープ画像(5~8)



1. 大刀110柄巻(接写)



2. 大刀110(デジタルマイクロスコープ画像)



3. 大刀110(デジタルマイクロスコープ画像)



4. 大刀110(デジタルマイクロスコープ画像)



5. 大刀111柄巻(接写)



6. 大刀111(デジタルマイクロスコープ画像)

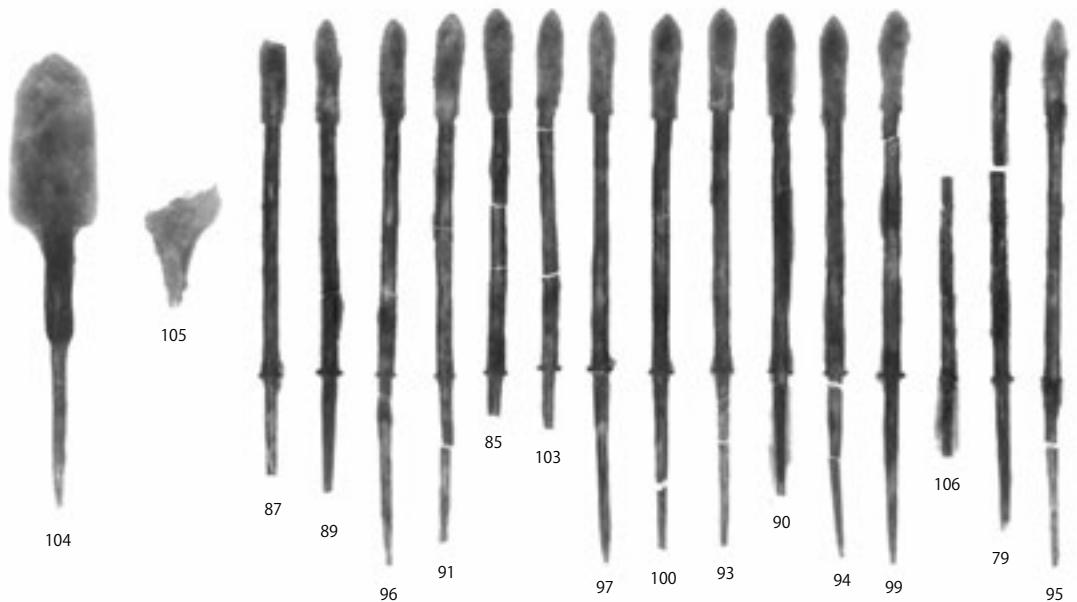


7. 大刀111(デジタルマイクロスコープ画像)

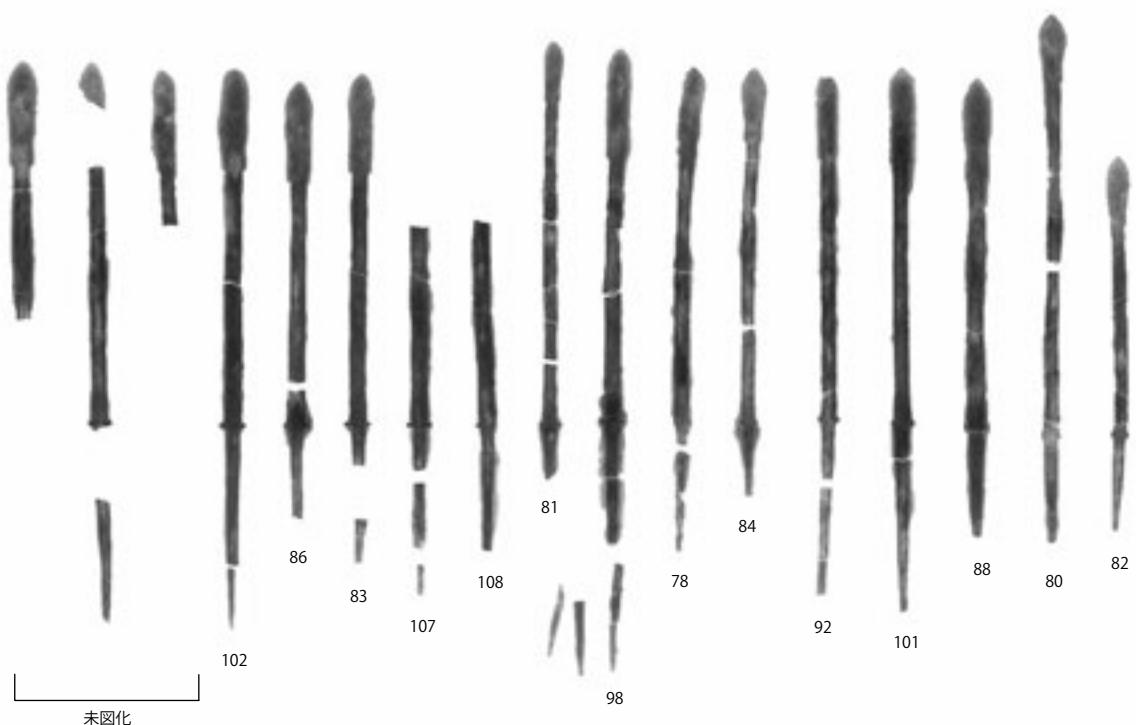


8. 大刀111(デジタルマイクロスコープ画像)

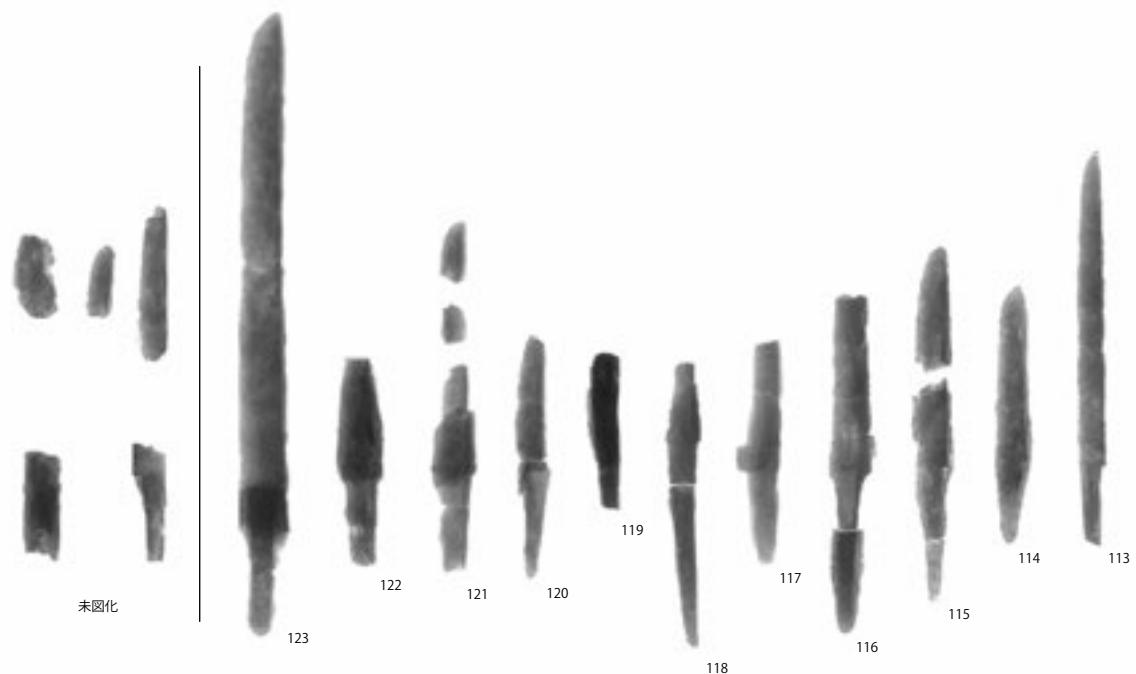
大刀110・111柄巻の接写およびデジタルマイクロスコープ画像



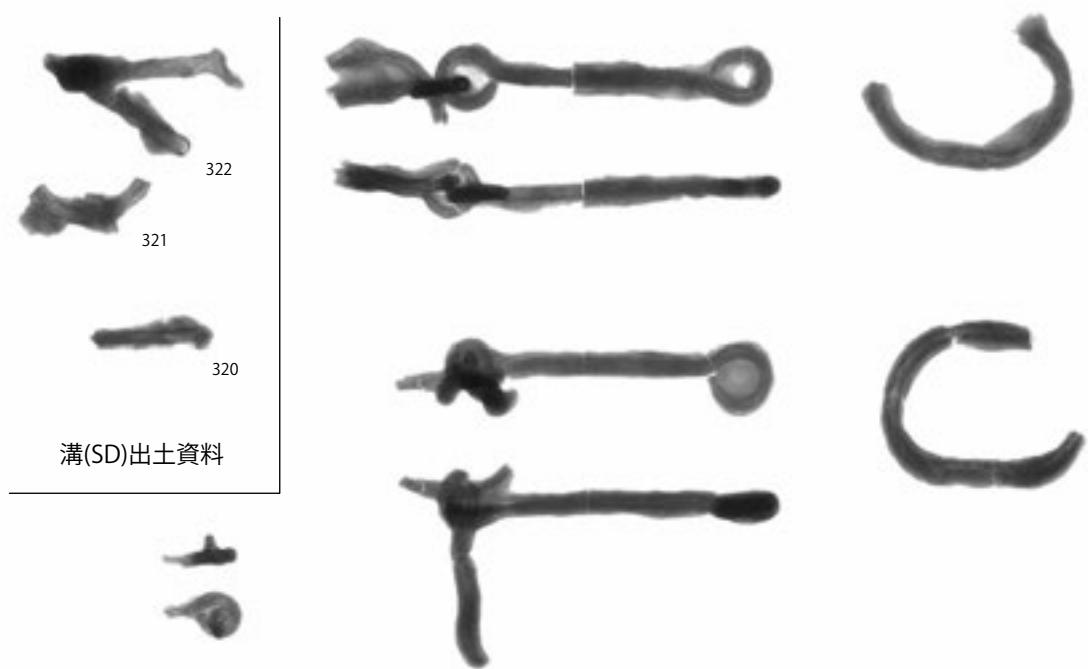
1. 鉄鎌の透過X線像(1)



2. 鉄鎌の透過X線像(2)

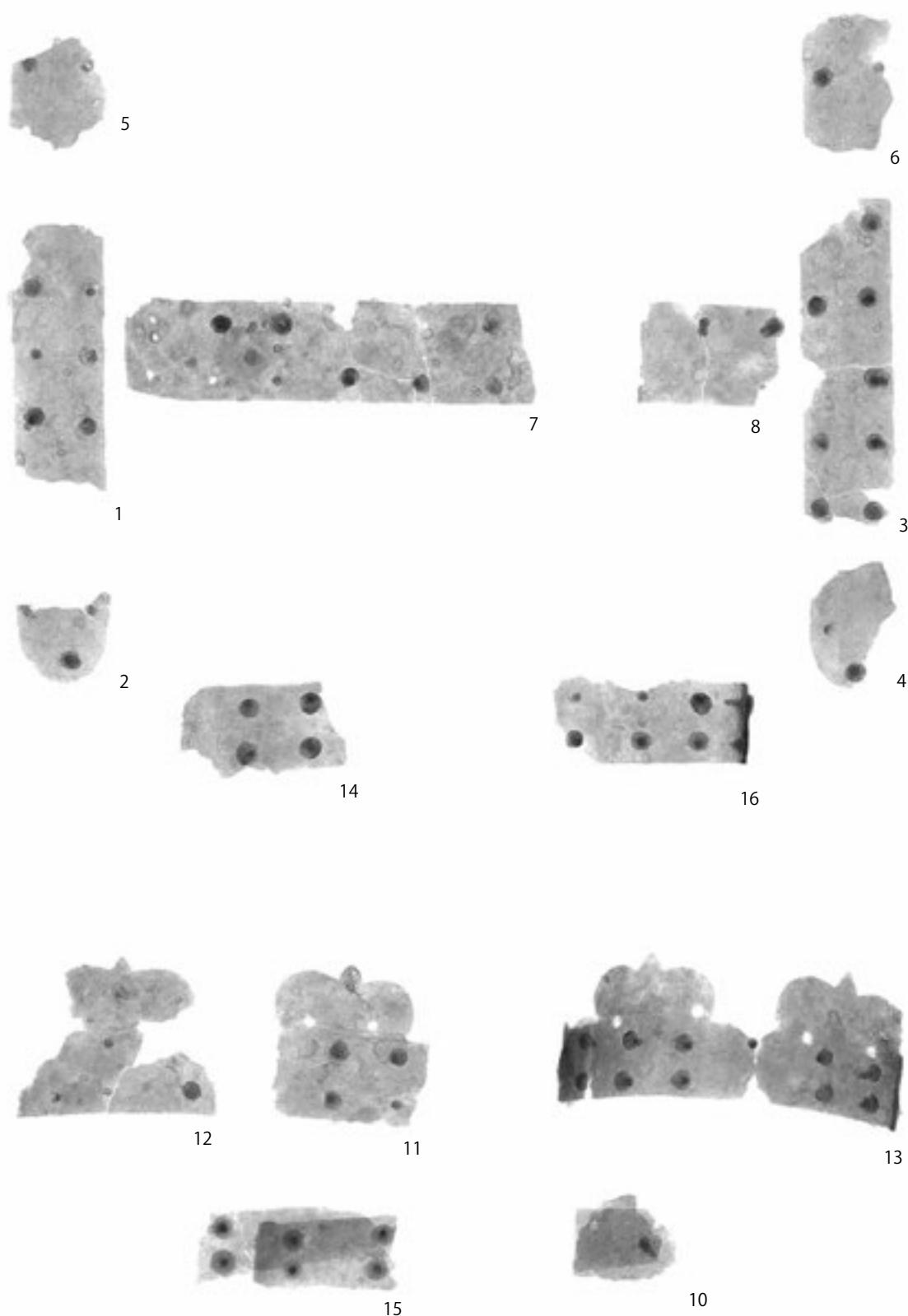


1. 刀子類の透過X線像



※番号を付したもの以外は未図化

2. 馬具(轡部材)の透過X線像



※番号は実測図中の部材番号

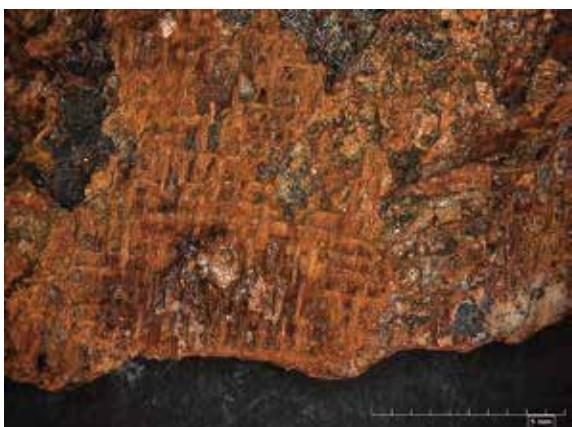
胡籠金具の透過X線像



1. 部材1(目の詰まった平織り)



2. 部材1(同左拡大)



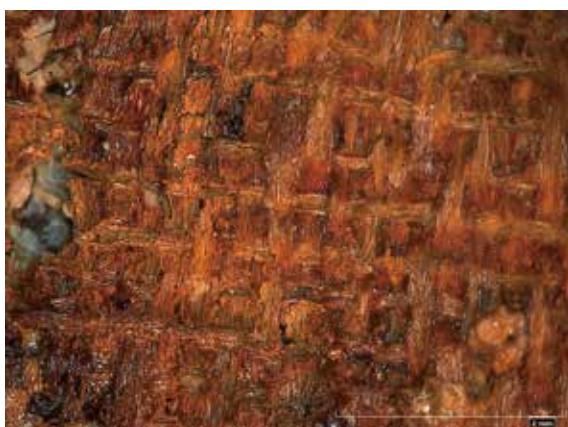
3. 部材1



4. 部材1(簀目の平絹か)



5. 部材3(目の詰まったく平織り)



6. 部材3(同左拡大)



7. 部材4(端部での織物の乱れ)

胡籠金具裏面に残る有機物の顕微鏡・デジタルマイクロスコープ画像(1)



8. 部材6(目の詰まったく平織り)



1. 部材6(簇目の平絹か)



2. 部材5(織物の重なった状況)



3. 部材5(織物の重なった状況)



4. 部材12(簇目の平絹か)



5. 部材12(伏組繡か)



6. 部材13(簇目の平絹)



7. 部材13(目の詰まつた平織り)

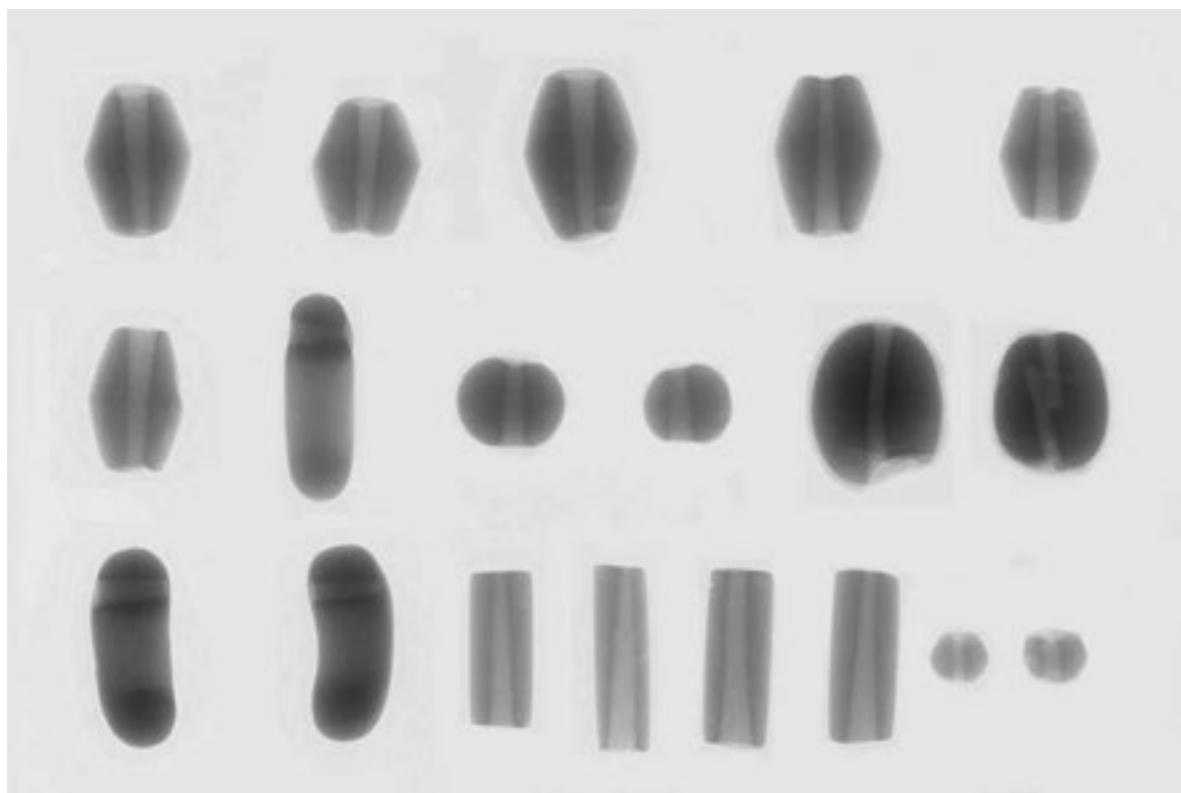
胡籠金具裏面に残る有機物のデジタルマイクロスコープ画像(2)



8. 部材13(同左拡大)

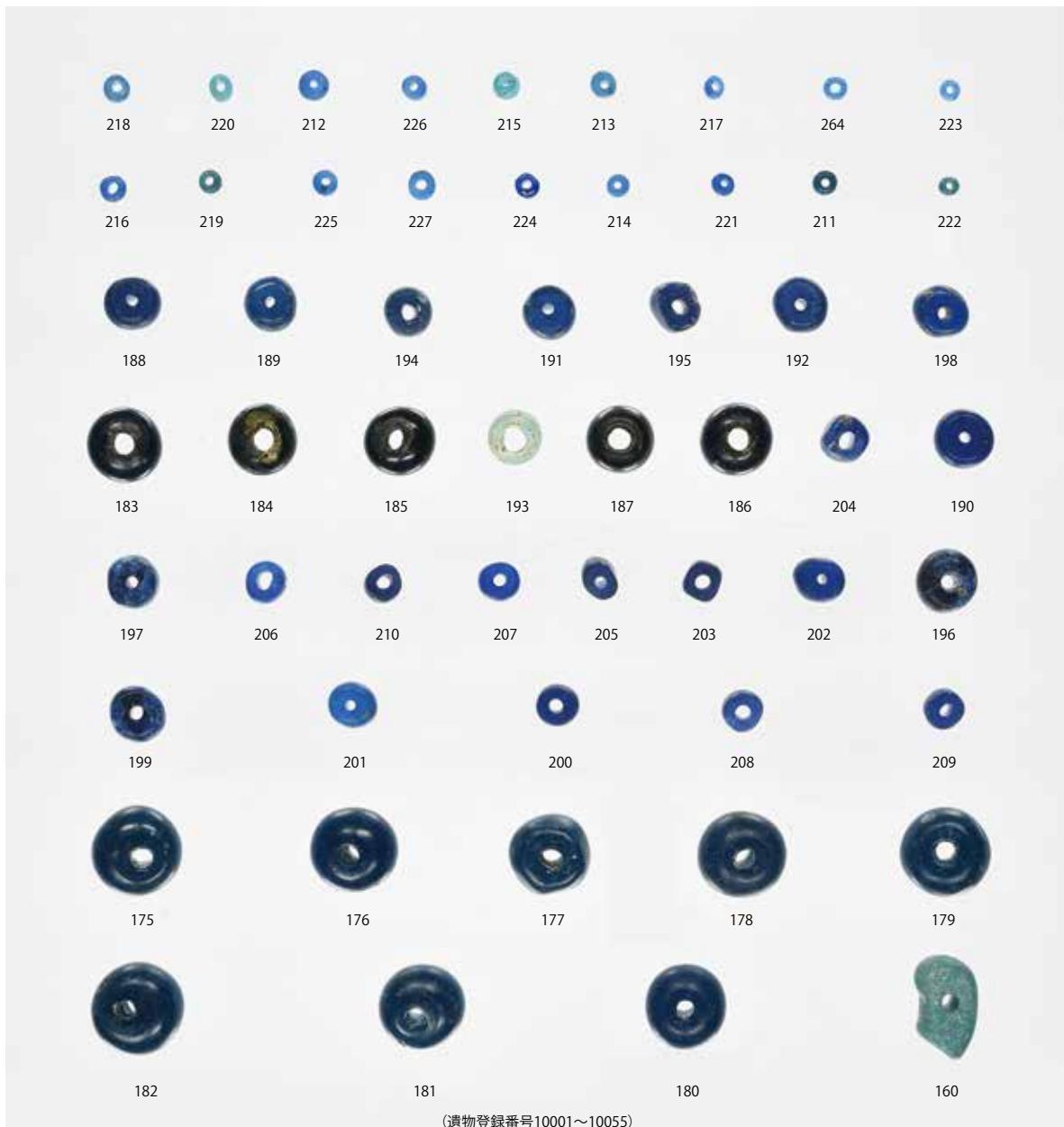


1. 石製玉類の外観（概ね実寸大）



2. 透過X線像

一部孔を観察するために外観像と向きを変えて撮影している。
また、材質により透過度を調整した画像を合成している。



ガラス玉全体像（概ね実寸大）



1. 図番号160(遺物登録番号10055)



2. 図番号193(遺物登録番号10029)



3. 図番号186(遺物登録番号10031)



4. 図番号186(遺物登録番号10031)



5. 図番号190(遺物登録番号10033)



6. 図番号190(遺物登録番号10033)



7. 図番号222(遺物登録番号10018)

ガラス玉のデジタルマイクロスコープ画像(1)



8. 図番号222(遺物登録番号10018)



1. 図番号203(遺物登録番号10039)



2. 図番号203(遺物登録番号10039)



3. 図番号215(遺物登録番号10005)



4. 図番号213(遺物登録番号10006)



5. 図番号270(遺物登録番号10111)

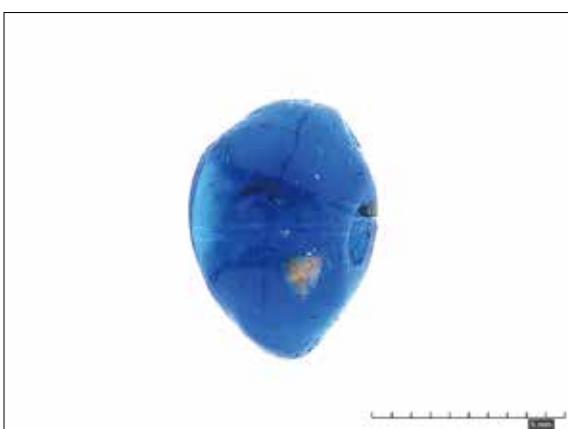


6. 図番号271(遺物登録番号10112)



7. 図番号277(遺物登録番号10118)

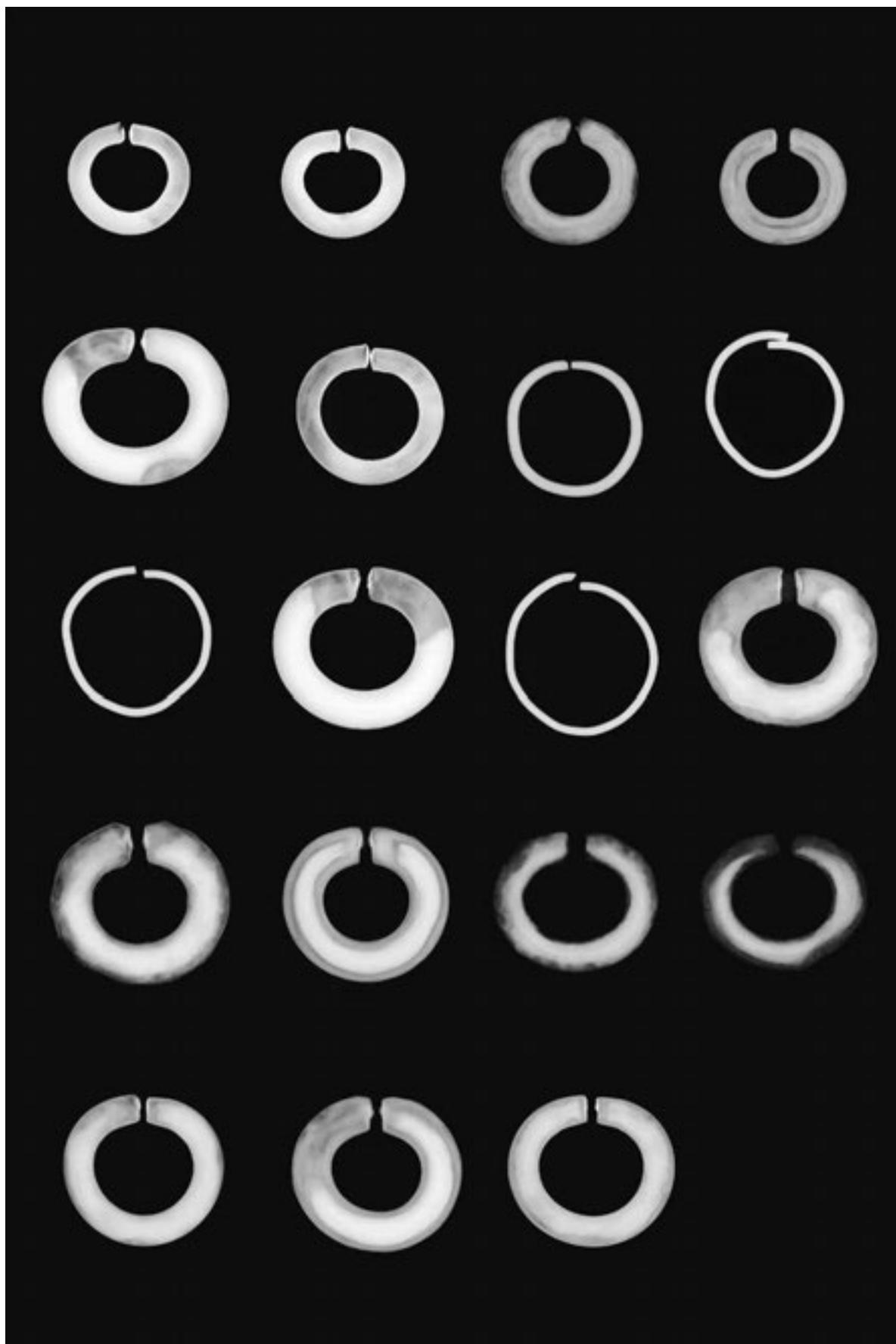
ガラス玉のデジタルマイクロスコープ画像(2)



8. 図番号277(遺物登録番号10118)



耳環の全体像（概ね実寸大）



耳環の透過X線像



1. 図番号130(遺物登録番号20064)



2. 図番号130(遺物登録番号20064)



3. 図番号131(遺物登録番号20062)



4. 図番号132(遺物登録番号20061)



5. 図番号133(遺物登録番号20060)



6. 図番号134(遺物登録番号20054)



7. 図番号135(遺物登録番号20055)

耳環のデジタルマイクロスコープ画像(1)



8. 図番号136(遺物登録番号20057)



1. 図番号137(遺物登録番号20059)



2. 図番号137(遺物登録番号20059)



3. 図番号138(遺物登録番号20056)



4. 図番号139(遺物登録番号20069)



5. 図番号140(遺物登録番号20070)



6. 図番号140(遺物登録番号20070)

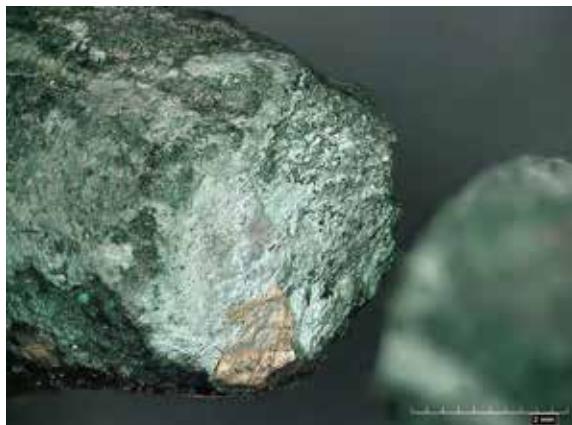


7. 図番号141(遺物登録番号20072)

耳環のデジタルマイクロスコープ画像(2)



8. 図番号142(遺物登録番号20071)



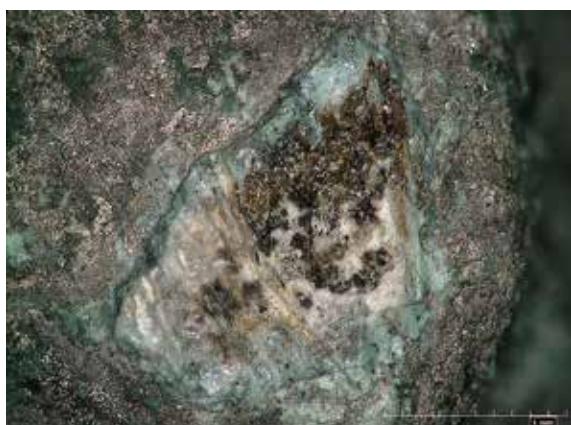
1. 図番号143(遺物登録番号20068)



2. 図番号144(遺物登録番号20058)



3. 図番号145(遺物登録番号20066)



4. 図番号145(遺物登録番号20066)



5. 図番号146(遺物登録番号20067)



6. 図番号147(遺物登録番号20065)



7. 図番号147(遺物登録番号20065)

耳環のデジタルマイクロスコープ画像(3)



8. 図番号148(遺物登録番号20063)



1. 鏡・釧の外観



2. 透過X線像

5 おわりに

本調査の中心は、元岡古墳群G－1号墳である。墳丘・石室ともにほとんど破壊されていたにもかかわらず、圭頭大刀をはじめとする豊富な副葬品群が出土した。本墳の北西には、「大歳庚寅正月六日庚寅日時作刀凡十二果□」銘大刀が出土したG－6号墳があり、本墳との関連も注目される。石室の位置づけについては、宮元氏の論考を参照いただき、その他の点について簡単に問題点をまとめる。

墳形

墳丘はほぼ削平されているが、北・南側にわずかに溝が残されている。両溝をすなおに見れば、一辺約16m前後の方墳とみることができよう。ただし、問題点が1点ある。この溝は東側（古墳中央・尾根中央）に行くと次第に浅くなり、尾根中央付近で消滅する。尾根上にある群集墳の場合、尾根の高い側は、いわゆる丘尾切断による周溝が作られ、その底面は尾根中央付近が高く、両側が低くなっている。当古墳もそれと同じ状況であると考えれば、溝底が傾斜を成し、尾根の高い部分が削平によって溝が消滅していることは理解できる。しかし、その反対側（東側）の溝が、残存している部分と逆の傾斜で下がっていく部分が遺存していて良いはずであるが、それらしき痕跡は認められない。

北側溝の断面図を見ると、下部に墳丘土と考えられる比較的明るい層がレンズ状に堆積し、その上部に腐葉土が形成されている。その腐葉土内に古墳時代遺物が包含されており、通常の後期古墳の周溝内埋土の状況と変わることろがない。このような状況から、本古墳は方墳の可能性が高いものの、遺存状況の悪さが、断定するのに躊躇を覚える。2本の溝を周溝としたときの墳丘長約16mとなり、当古墳群北側の石ヶ元古墳群の円墳群と比べてわずかに大きい程度である。G－6号墳も18mの規模であり、近い時期の方墳である早良区夫婦塚古墳1号墳（22m）、同2号墳（35m）、早良区浦江1号墳（円墳25m）と比較するとかなり小さい。今後、総合的な検討が必要となる。

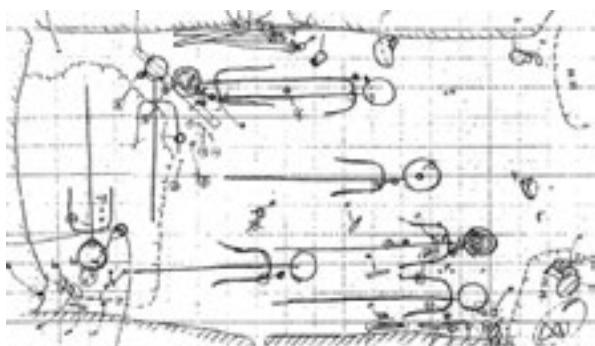
石室・築造時期など

G－1号墳の石室は、石ヶ元古墳群12号墳・同28号墳の石室形態に近い。両古墳の時期や当古墳周辺で出土した須恵器坏（56～60・323・326）などから、6世紀末～7世紀初め前後の時期が考えられ、圭頭大刀が出土した他の古墳の時期とも概ね合致する。庚寅銘大刀が出土したG－6号墳より1～2世代前くらいの築造と考えられよう。

副葬品は、比佐の分析にあるとおり、多種多様なものが出土している。本来ならここで詳細な分析を行うべきであるが、編者にその力量がなく、また時間不足のためかなわなかった。それでも出土した多種多彩な副葬品は、元岡地区のみならず、福岡周辺において突出する内容であると考えられる。

埋葬者数

G－1号墳から出土した須恵器は破片が多く、完形に近いものはさほど多くはなく、出土須恵器から追葬年代を検討するのは困難である。下記の図は吉留が作図した埋葬場所の復元案である。出土した耳環は19点に上り、仮にすべてが、被葬者が両耳に1点ずつ装着していたとすると、10人の被葬者がいたことになる。他の古墳では、10人以上の埋葬例もあることから、数自体は問題ではない。ただし、P 53の註で比佐が書いているように、耳環の装着方法等の問題もあり、簡単にはいかない。



本調査は、冒頭に書いたように、埋蔵文化財第2課吉留秀敏が調査担当者として、平成22年4月に調査を開始した。前述のとおり10月からG-1号墳を除いて重機による埋戻しを行ったが、その後吉留に病気が発見され、平成25年3月5日に永眠した。闘病の間にも当調査区の整理を進め、遺構図の整理・復元、出土土器の報告書用レイアウト等を終えていた。大型の石室に豊富な副葬品が出土したことから、その関心は高かったものと思われる。

遺構図面や出土遺物の実測図はていねいに整理されており、報告書制作時には比較的容易に図面を探すことができた。しかし吉留がいつも書いている調査中の野帳をこの調査に関しては見つけることができなかつた。吉留の逝去後に編者（米倉）が報告書作成を担当した元岡・桑原遺跡群18次や千里遺跡第2次には、野帳に詳細な遺構や土層の記述があつたため、報告書作成の際の十分な参考とすることができたが、今回は、図面や写真のみから執筆・編集をせざるを得ず、吉留の調査内容を十分伝えきれなかつた可能性が高い。また編者は福岡市博物館学芸課長の席にあり、調査報告書作成に十分な時間を割くことができず、中途半端な報告書になった感も否めない。その上で、G-1号墳及び元岡地区の古墳群の重要性を認識できるのは、副葬品を分析した比佐の文章と、北九州市立自然史・歴史博物館の宮元香織氏の玉稿に書かれているとおりである。本書に執筆した者は、いずれも吉留の恩顧を受けた者である。

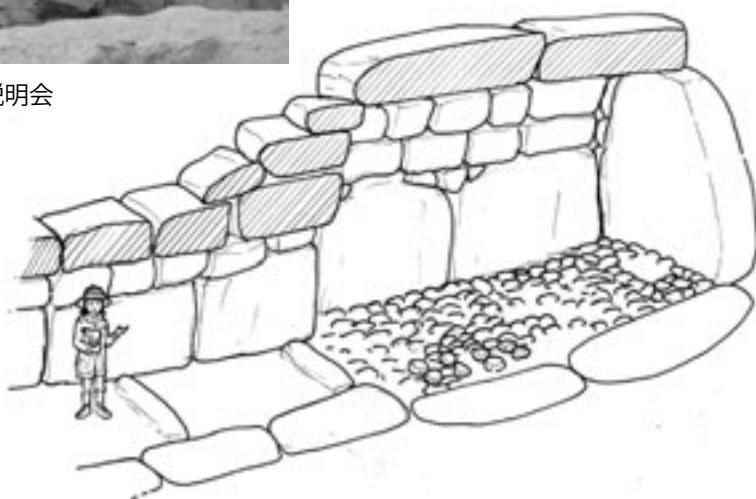
本年度作成する本書を含めた3冊の本と一般向けパンフレットによって、平成7年度から続いた九州大学統合移転に関する伊都キャンパス地区の埋蔵文化財関係の業務は終了する。足かけほぼ四半世紀にわたり、作成した報告書は33冊におよぶ。これらの報告書が、学術面で、教育面で、あるいは地域の歴史にとって役に立つことができれば、吉留や筆者にとって、望外の喜びである。（米倉）



小雨の中の現地説明会

G-1号墳石室復元図

（吉留秀敏画）



元岡・桑原遺跡群における横穴式石室の構造について

北九州市立自然史・歴史博物館 宮元香織

5世紀代の様相

ここでは、元岡・桑原遺跡群における横穴式石室の構造変遷について確認し、G-1号墳の石室構造について考えてみたい。本遺跡群内に初めて横穴系の埋葬施設が形成されるのは、桑原石ヶ元33号墳の竪穴系横口式石室である。33号墳の玄室は、長さが約2.6m、奥壁幅1.15m、前壁幅が0.94mと羽子板形の長方形を呈する。玄室には長さ0.64m～0.86mの短い羨道が付設し、幅は羨道側で0.59m、墓道側で0.78mと若干外に向かってハの字状に開いている。閉塞は羨道部に塊石を積んでおこない、開口部の地山は外側へ向かって立ち上がる。残存する壁体の石材はいずれも小ぶりで若干平たく、同じ形状の石材を積み上げて全体を構成していたとみられる。報告者は33号墳を含めた竪穴系横口式石室の一群は、5世紀中頃の建築とみており、壁体の石材や玄室の構造等からみて首肯できる。近くに建築された30～36号墳についても、床面の構造からその規模等を知るに過ぎないが、33号墳と同様の形状をしているとみられ、出土した須恵器などから5世紀中頃の建築とみられる。

さて、この地域には列島において比較的早い段階で横穴系の埋葬施設が造られており、5世紀前半に建築された前方後円墳で全長84.6m以上の西区周船寺丸隈山古墳や、5世紀中頃の建築とみられる糸島市神在の直径30mの円墳、釜塚古墳などがある。桑原石ヶ元33号墳と同時期に造られた釜塚古墳の埋葬施設は竪穴系横口式石室であり、玄室奥幅2.89m、長さ3.8m、羨道幅1.67m、長さ2.47mとかなり大型で、玄室平面形は羽子板形の長方形で、羨道はハの字状に開いている。玄門部は2石の板石を配して広く開け、羨道も遺体を運ぶ通路として十分な広さを保っており、後の横穴式石室につながる形態をしている。石室壁体の石材は扁平な板石の多段積みである。首長墓と群集墳という差はあるものの、羽子板形の平面形やハの字状の羨道など、桑原石ヶ元33号墳の石室構造と共通する。

5世紀末にこの周辺で横穴系埋葬施設が造られるのは、西区飯氏の兜塚古墳や糸島市富の井ノ浦古墳である。元岡・桑原遺跡群内にはこの時期建築の石室が確認されないことから、一時的に古墳の建築が停止した可能性も指摘されている。

兜塚古墳は墳丘全長53m以上の前方後円墳であり、玄室は長さ4.4m、奥幅2.4mの長方形で、羨道の長さが0.9m、幅は0.8mである。玄室形状は羽子板形の長方形である。羨道部と玄門は小ぶりの塊石を積み上げて構成しているが、奥壁の最下段や側壁の一部にやや大きめの石材を配しており、石室石材の大型化が始まっている。玄門に樋石があり、閉塞は塊石でおこなったとみられる。

一方、直径10.5mの円墳である井ノ浦古墳の玄室長は2.38m、奥壁幅は1.91mの正方形に近い平面形で、前幅より奥幅が若干広い羽子板形を呈している。玄門の樋石付近で板石により閉塞する。羨道の長さは0.96m、幅は0.62mと狭く、通路というよりも横口状を呈しており、床面は外に向かって立ち上がらない。報告者はこれを竪穴系横口式石室に分類している。奥壁最下段には他と比べて大ぶりの石材を、左右の壁体にもやや大きめの塊石を用いており、5世紀末の建築である。近くの辻ノ田古墳群などと同じ中小の群集墳であり、新たに正方形に近い平面形が採用されていることが注目される。

6世紀代の様相

6世紀前半になると、桑原石ヶ元古墳群に再び石室が造られるようになり、19、21号墳などが該当する。19号墳は基底部の石材しか残存していないが、玄室は羽子板形の長方形で、ハの字状に開く羨道が付設している。詳細は不明ながら玄門には立柱石とみられる石材が配されているが、天井石までは届かず、上部を塊石で数段積んだとみられる。奥壁沿いに仕切石が並んでおり、遺体安置空間を明示していることも特徴である。同じ時期に建築された21号墳は平面正方形であるが、19号墳と

同じく羽子板形で、羨道はハの字状に開く。玄門部には同様に立柱石をもっており閉塞とした板石が残存していた。同一群集墳内で、長方形プランと正方形プランが混在し始めた状況がみてとれる。なお、29号墳からも19・21号墳と同じ時期の須恵器が出土しているが、側壁を1石もしくは2石で構成するような石材の大型化と、追葬時に一部延長されたとはいえかなり長く、幅広の羨道が付設することから、やや下って6世紀中頃から後半の築造と考えたい。また、石室構造はほとんど不明ながら、桑原A-5号墳やA-8号墳からも同時期の須恵器が出土することから、群集墳が広がりを見せ始めた状況をうかがうことができる。

元岡N-1号墳には胴張り正方形の石室が造られる。玄室長は2.30m、奥幅は2.35mで、羨道の長さは0.8m、幅は玄門付近で0.75mである。玄門には樋石があり、閉塞は塊石を積み上げておこなっている。基底石の一部しか残存していないが、6世紀前半の築造とみられる。

首長墓においては、全長24.5mの前方後円墳である西区飯氏二塚古墳に横穴式石室が築かれる。石材の残りが非常に悪いものの平面形は正方形に近く、玄門には樋石が置かれる。閉塞は短い羨道の途中で板石によってなされている。側壁基底石はおよそ2~3石を並べており、首長墓においても石材大型化が進んでいることがわかる。飯氏二塚古墳の横穴式石室は小型とはいえ前方後円墳に造られた埋葬施設であり、群集墳に端を発するとみられる正方形の横穴式石室が導入されていることは興味深い。

6世紀中頃になると、元岡・桑原遺跡群において古墳の築造数がかなり増加する。桑原A-2~4、6号墳、桑原石ヶ元5、7、23号墳、元岡M-2号墳などがこれにあたる。

桑原A群の4基はいずれも構造が正方形に近く、基底石を中心に石材が残存している。袖石が羨道よりやや内側に突出しており、袖部がよく認知される。玄門には樋石があり、羨道の長さは玄室の半分ほどとやや長い。

桑原石ヶ元5号墳、23号墳ともに石材の残存がほとんどないことから7号墳の石室を中心に検討する。7号墳は玄室長が2.93m、奥幅が1.7mの長方形で、玄門に樋石がみられる。閉塞は樋石より外側に板石と塊石でおこなっている。奥壁の石材は不明であるが、側壁にはやや大ぶりな石材を使う。5号墳には、玄門の樋石とともに羨道途中に仕切石があり、両者の間は1mも離れていない。元岡M-2号墳は石室の構造が不明であるが、出土資料からこの時期に築造されたと考えられている。

首長墓としては、谷上B-1号墳や元岡古墳群内の元岡石ヶ原古墳などがこの時期に造られたとみられる。谷上B-1号墳は全長約37mの前方後円墳で、埋葬施設は正方形に近い羽子板形で、羨道は外に向かってハの字状に開いている。玄室長は2.6m、奥幅2.3m、羨道長さ1.2m程度でさらに素掘りの墓道が付設する。玄門には板状の樋石が置かれ、閉塞も板石によってなされている。玄室奥壁ならびに側壁の基底石にはやや大ぶりな石材が配され、ここでも石材の大型化が進んでいることがうかがえる。

全長49mの前方後円墳、元岡石ヶ原古墳の玄室は長さ3.6m、奥幅2.1mの長方形で、羨道長は2.0mである。羨道途中には桑原石ヶ元5号墳と同様、仕切石がみられ、玄門の樋石との距離は1m以下とかなり近い。また、閉塞は羨道の仕切石で板石を用いておこなう。

6世紀後半になると、桑原石ヶ元4、6、11、20、28号墳や元岡O-3号墳、元岡I-1号墳などが造られる。桑原石ヶ元4号墳は玄室長2.28m、奥幅1.29mの長方形プランの玄室をもち、羨道は長さ2.15mと比較的長い。玄門に樋石、羨道途中に仕切石をもち、羨道の仕切石上で塊石を積み上げて閉塞する。なお、4号墳羨道には一部天井石が架構されている。報告者は本墳を6世紀中頃の築造とみるが、構造は若干新しい様相を示している。同じく11号墳は4号墳と似た時期に築造された横穴式石室で、玄室平面形は正方形に近く長い羨道が付設する。羨道の一部は追葬時の継ぎ足しがあるものの、4号墳と同様羨道に天井石が架構される。玄門に樋石、羨道途中に仕切石をもち、両者は1mほ

ど離れている。追葬時の閉塞は塊石で積み上げたものだが、初葬時の閉塞は不明である。

桑原石ヶ元6号墳は石材がほぼ持ち去られているが、側壁基底石は2石で構成し、奥壁も1石であることから石材の大型化がさらに進行しているといえる。また28号墳はやや正方形に近い玄室で、4、6、11号墳などと同じく、奥壁を大型の石材1石で構成しており、石材の大型化がさらに進行したといえる。なお、28号墳の奥壁石材は福岡城築城の際に割り取られているが、かなり大きなものであった。玄門には樋石があり、そこから約1.5m離れた羨道中央に仕切石がみられ、ここで板石による閉塞をおこなった。

元岡O-3号墳は小型の横穴式石室で、玄室長は1.57m、奥幅が0.73mの幅狭の長方形の石室である。天井石はすでに失われているが、玄門に樋石、羨道に仕切石があり、ここで板石閉塞をおこなう。石室幅が狭いことから、縦方向の埋葬をしたとみられる。元岡I-1号墳は側壁のみが残存しているものの、詳細については不明である。

6世紀後半の首長墓として全長24.5mの前方後円墳、飯氏B-14号墳がある。平面形は玄室長3.34m、幅2.0mの長方形で、羨道長は3.25m、幅は約1.0mである。羨道には天井石が架構され、素掘りの墓道が付設する。玄室基底石は1~2石で構成、奥壁にも鏡石を配し、玄門袖石は2段で積み上げるなど、さらに石材の大型化が進んでいる。閉塞は羨道天井石が架構されない墓道と羨道の間で、塊石によっておこなっている。玄門に樋石、羨道中央に仕切石が配され、両者の距離は1.5m程度である。

6世紀末には、桑原石ヶ元12、14号墳や元岡J-1号墳、桑原A-10号墳などが築造される。桑原石ヶ元12号墳は奥壁に鏡石を1石配し、その高さは冠石上部とほぼ同一である。玄室側壁の基底石もおおむね2石で構成するなど大型化し、その上部も大きめの塊石を積み上げる。玄門に樋石、羨道の中ほどに仕切石を配し、ここで板石閉塞する。樋石と仕切石の距離は1.5m程度と離れている。初葬時の玄室床面は、奥壁沿いに屍床仕切石を配して、遺体安置空間を意識している。

桑原A-10号墳は玄室長が1.9m、幅が0.78mで、奥幅が前幅より狭い逆羽子板形の長方形石室である。羨道の長さは1.9m、幅は0.53mで外に向かってハの字状に開き、やや曲がっている。玄門には樋石、羨道中央には仕切石がみられる。

7世紀代の様相

7世紀前半に築造された元岡G-6号墳は玄室長2.5m、幅1.68mと正方形に近く、羨道長は約3m、幅1.45m、そこに天井石を架構しない石積み墓道が約1.5m続く横穴式石室である。奥壁には天井まで届く大型石材を配しており、玄室・羨道の側壁もおよそ2段に石材を積む。石材の大型化がさらに進み、羨道幅と玄室幅の差が少ないと、壁体の持ち送りが少なくなったことによって、玄室と羨道が一体化している。玄室は正方形であるが、奥幅より前幅のほうが広い逆羽子板形を呈している。玄門には樋石、羨道に仕切石を配するが、両者は約2m以上離れている。閉塞は仕切石部分でおこなわれた。なお、本報告にある元岡G-1号墳は、玄室平面形が長方形であり、玄門に樋石、羨道中央に仕切石が確認されている。石積みなどからG-6号墳に先立って築造されたと考える。

その他、元岡N群には7世紀代に造られた横穴式石室が8基確認されている。全体の形状が確認されたものがないが、N-5号墳の玄室は正方形プランとみられる。袖石は斜めに据えられており、玄室と羨道の境は不明確である。玄室壁体も縦方向に目地を通すなど、これまでの古墳の石積み方法とは若干異なっている。N群には7世紀以降、8世紀代まで追葬をおこなう横穴式石室もある。

まとめ

元岡・桑原遺跡群においては5世紀中頃から7世紀までの長い期間、横穴式石室が造られてきた。5世紀中頃には羨道をもたない竪穴系横口式石室が小規模墳において造られたが、この地域の首長墓

に初期横穴式石室が造られたことと決して無関係ではない。おそらく首長墓における新来の墓制の導入に伴って、群集墳の被葬者たちも新しい墓制を取り入れたとみられる。初期の横穴系埋葬施設は玄門周辺で板石閉塞がなされ、樋石と不可分のものであった。

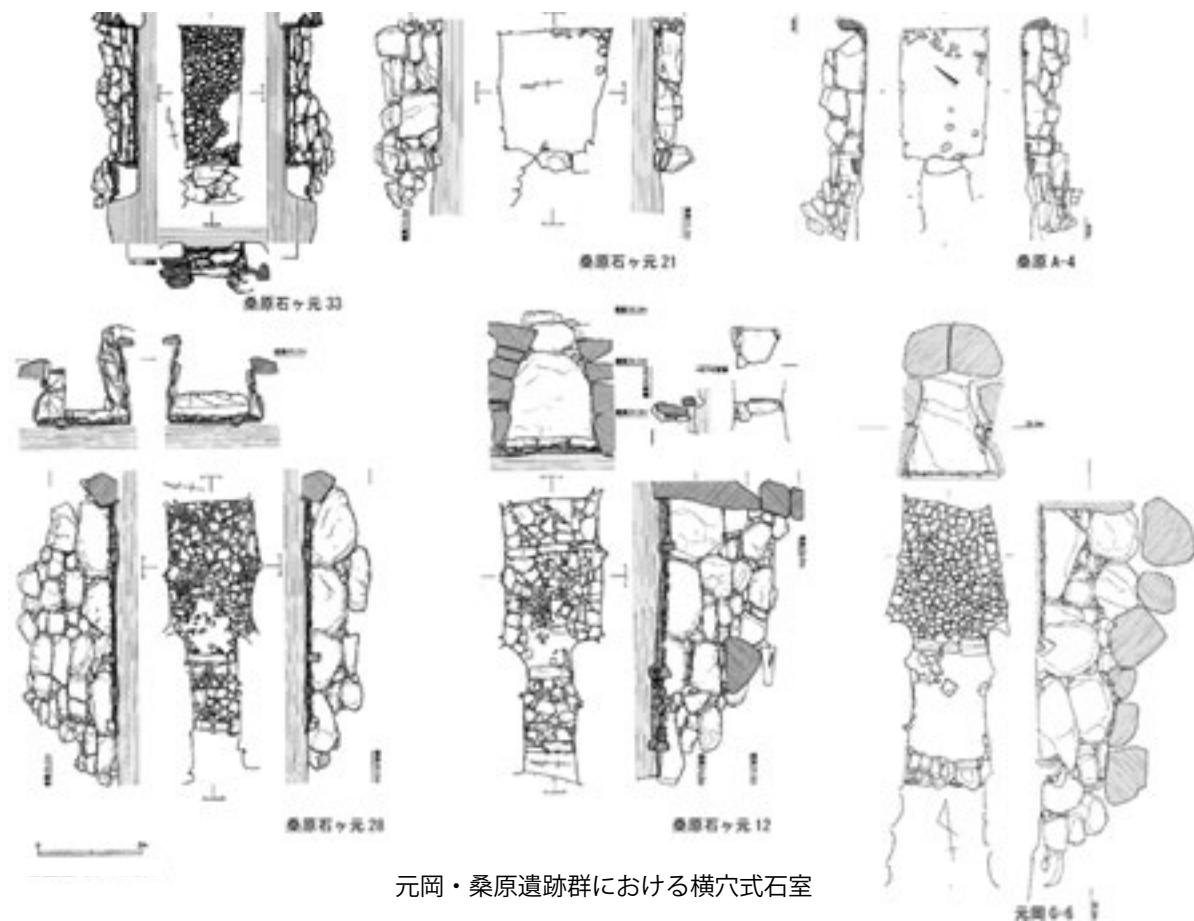
その後、しばらくは首長墓・群集墳とともに縦長長方形の玄室に、狭くて天井石のない羨道を持つ石室が構築され、元岡の基本的な石室構造となった。また、玄門の板石閉塞に端を発した樋石は、埋葬空間としての玄室と、通路としての羨道を明確に分ける役割を果たすことになった。6世紀中頃に石室の閉塞が羨道での塊石多段積みへと移行した際も、樋石のような仕切石を設置することで、内と外を明確に区分けしている。特に玄門樋石と羨道途中の仕切石という組合せの使用は7世紀代まで継続する。

一方で5世紀末から6世紀前半頃にかけて、一部の小型墳で長方形を簡略化した正方形の石室が造られるようになった。また6世紀中頃以降、石室構築技術の発達に伴い、石材の大型化も始まった。

6世紀後半頃には、首長墓や中小墓に限らず、造墓数が増えるとともに追葬が盛んにおこなわれるようになり、全国的に石室空間すなわち遺体安置空間を広く取るという傾向がみられるようになる。この傾向への対応として、福岡県内においてはしばしば複室の横穴式石室が造られ、隣の早良平野において導入されるものの、糸島平野周辺、特に今宿や元岡周辺では複室横穴式石室は導入されることがほぼなく、代わりに羨道幅を広げ、羨道途中に仕切石を配することでこれを解決した。今宿地区古墳群の分布調査からみても、飯氏、徳永、女原、新開、谷原、相原などの群集墳には複室墳が造られていない。

以上の流れのなかでみると、元岡G群の石室は本地域の中での構造変化の流れの中にある、全国的な石材の大型化、石室空間の大型化の影響も受けつつ造られた古墳であるといえる。

※紙幅の都合上、参考文献については割愛した。



元岡・桑原遺跡群における横穴式石室



元岡古墳群G-1・2号墳周辺全景（北側丘陵伐採後：南から）



元岡古墳群G-1・2号墳周辺全景（北側丘陵伐採前：南から）

図版2



調査区全景（東から）



G-1号墳北側から旧今津湾を望む（北から）（2010年9月30日）



G-1号墳全景（2010年6月4日）



周溝（2010年7月20日）

図版4



表土剥ぎ（2010年5月14日）



表土剥ぎ（2010年5月14日）



表土剥ぎ（2010年5月15日）



西側周溝（2010年7月20日）



西側周溝（2010年7月20日）



西側周溝土層断面
(2010年7月20日)

図版6



石室全景（2010年6月8日）



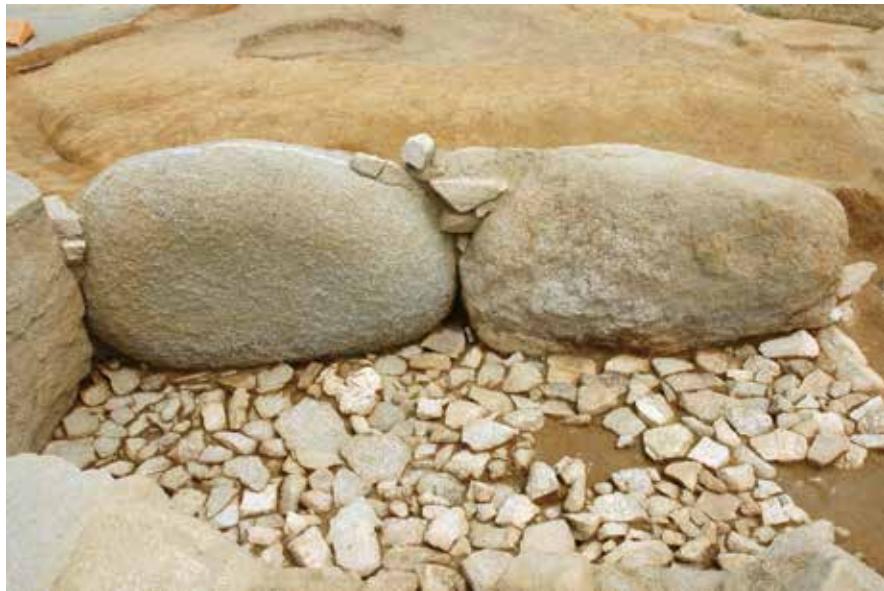
石室全景（2010年6月16日）



石室全景
(2010年8月3日撮影)



奥壁
(2010年8月3日撮影)



側壁
(2010年8月3日撮影)

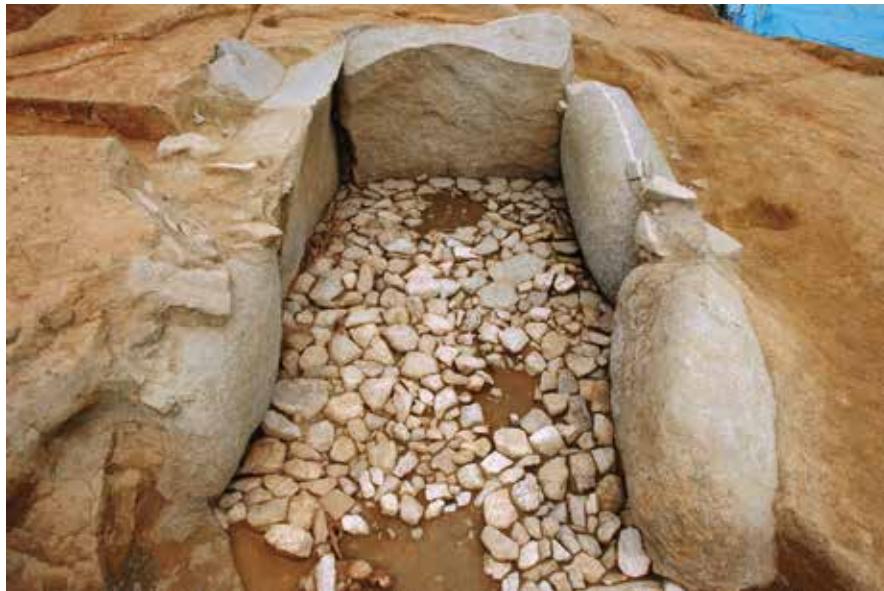
図版8



側壁
(2010年8月3日)



床面1
(2010年6月8日)



床面2
(2010年8月3日)



遺物出土状況（2010年5月28日）



遺物出土状況（2010年8月3日）



遺物出土状況（2010年8月16日）



遺物出土状況（2010年6月4日）



遺物出土状況（2010年6月4日）



遺物出土状況（2010年6月8日）



遺物出土状況（2010年6月8日）



遺物出土状況（2010年8月3日）

図版10



遺物出土状況（2010年6月11日）



遺物出土状況（2010年6月11日）



遺物出土状況（2010年6月4日）



遺物出土状況（2010年6月10日）



遺物出土状況（2010年6月10日）



遺物出土状況（2010年7月9日）



遺物出土状況（2010年6月2日）



G-2号墳

図版12



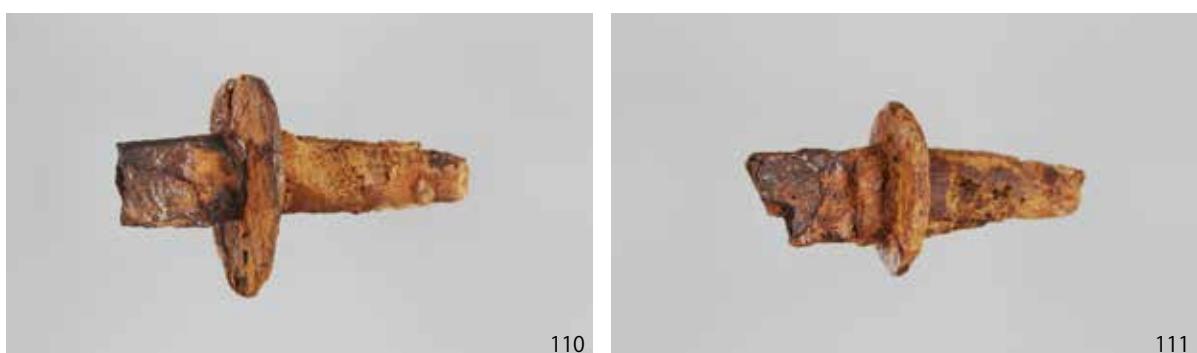


G-1号墳出土遺物（須恵器）

図版14



G-1号墳出土遺物（須恵器・土師器）



G-1号墳出土遺物（金属器）

図版 16



G-1号墳出土遺物（上：刀子、下：胡籤金具）



※番号のないものは未掲載

G-1号墳他出土馬具



G-1号墳出土耳環

図版18



G-1号墳他出土玉類



調査区出土石器

III 56次調査1・2区の報告

1. 調査の経緯とこれまでの報告内容

56次の調査区が位置する谷については平成16年から42次・52次調査として5年間の調査が実施され、弥生時代後期の遺物を主とする縄文時代～古墳時代の遺物が大量に出土しており、この成果をうけて谷全体の重要性が認識されてきた。当初、尾根の大半が削られ、谷部にも盛土が厚く施工される造成計画であったため、尾根部を含む造成範囲の確認調査として56次調査が着手された。調査期間は平成22年（2010年）9月14日から平成23年（2011年）12月28日までである。

尾根上に4本設定された試掘トレンチは表土直下で花崗岩盤に達し、古墳に関連する痕跡は全く確認できなかったが、1地点で幅2m、深さ1.5mの大型の掘り込みを検出し、周辺の調査事例などから、中世の堀切状遺構である可能性が高い。この試掘調査は平成23年1月まで行われ、2月から1区の調査を開始した。さらに4月から5月にかけて1区の調査と並行して2区の調査を実施した。

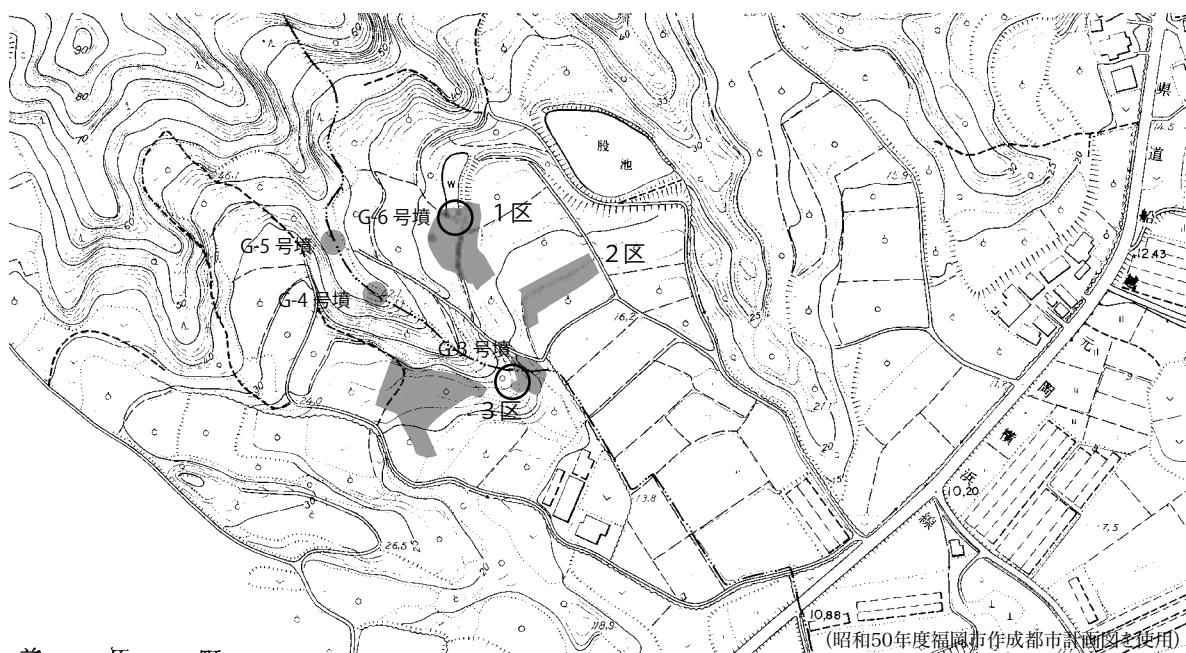
9月に入り、G-6号墳の庚寅銘大刀が確認されて以降、G-6号墳を保存前提で調査を進め、並行して3区の調査を実施した。56次の全調査が終了したのは平成23年12月28日である。

その後、G-6号墳と庚寅銘大刀に関して速報的な報告が強く求められたため、G-6号墳と副葬品に関しては他の56次の成果よりも先行して調査の次年度に報告を行い、現在までG-6号墳の報告（『元岡・桑原遺跡群22』）と、保存処理・考察編（『元岡・桑原遺跡群30』）が刊行されている。今回の報告は、G-3号墳、G-6号墳以外の調査成果を記載するものである。

2. 1区調査概要

（1）調査区概要・調査経緯

1区は56次調査区全体の中で最北側に位置する。地形的には南に開口する谷の谷奥部の西側斜面中位の平坦に段造成された箇所から下方斜面までを調査範囲とした。調査面積は1021.5m²、標高は



第1図 56次調査区位置図 (1/4000)



第2図 56次調査区付近地図 (1,1000)

19m～24mで、特に中世の遺構が濃密に分布する造成面の標高は22～23mである。

調査はG-6号墳の調査を先行し、その後の表土除去の段階でG-6号墳の南側で柱穴や土坑等の遺構を確認したため、G-6号墳の調査と並行して実施した。1区のうちG-6号墳以外の範囲の調査は平成23年8月末に完了している。

検出された遺構は、土坑・貯蔵穴、溝状遺構・自然流路、掘立柱建物・柵列等で、出土遺物から遺構の時期が弥生時代中期後半と中世前半の2時期に分かれることが判明している。また、遺構覆土からは古墳時代～古代の遺物は出土せず、G-6号墳の時期には遺構はなかったとみられる。

中世の遺構は斜面を造成した平坦面上に作られており、造成面の斜面際には浅い溝状遺構が遺存する。この造成段はその後、遺構の廃絶とともに自然埋没したものとみられる（第3図）。

(2) 土坑・貯蔵穴(S K)

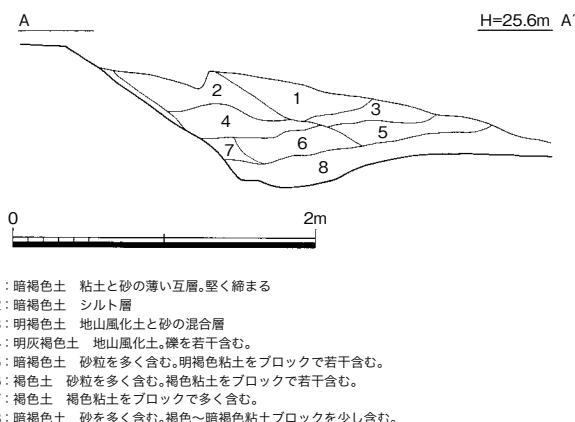
SK-03 (第5図・図版3-3)

調査区南端で検出した遺構で、東半分は後世の段造成のため削られているが、本来は長方形又は方形のプランを呈するとみられる。遺構軸線は北東一南西方向に向き、長5.4m以上、幅4.0m以上と確認できる。遺構面からの深さは西側で80cmで、各壁面は緩い傾斜で、断面形は低い台形とみられる。床面はほぼフラットで、一部わずかに高くなっている部分があるが、この部分は幅1.5mの岩脈が走り、堅くて掘れなかつたことによると思われる。遺構南側は床面から40cm高い段状で、縁に沿って幅40cm深さ20cmの溝が掘られる。段の幅は1.1m以上とみられる。

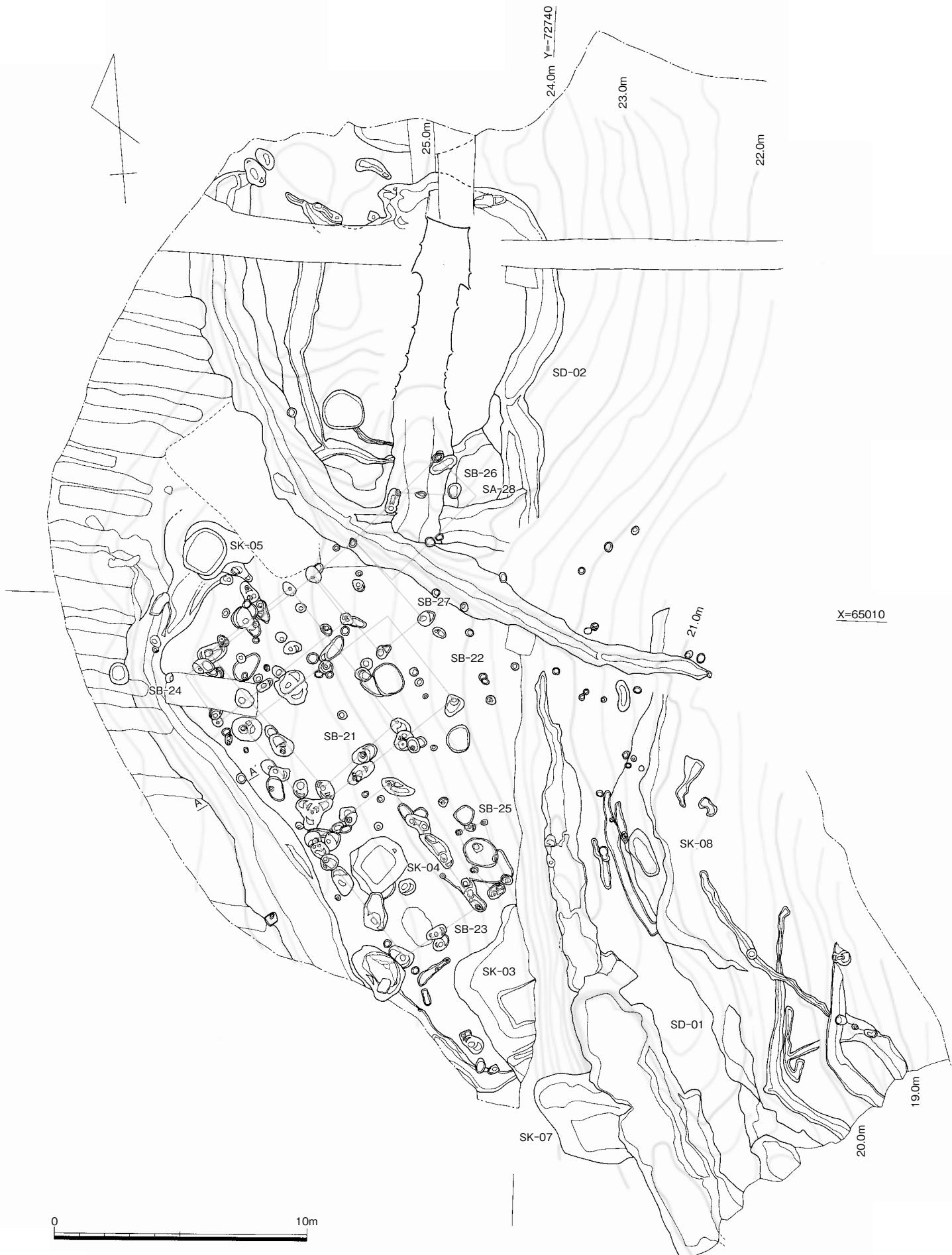
出土遺物（第6図）1～4は弥生中期の甕形土器。1は口縁部外側の突出は短く太めで、内側にもやや太めの突出部が見られる。器壁外面は剥落のため、調整不明。2は口縁上面が平坦で緩く弧を描く。口縁部は外側に強く張り出し、内側への突出は小さく、断面は逆L字形に近い。胴部外面はナデ調整。3は小型の甕で、口縁部は外側に短く張り出し、内側にも丸く張り出す。外面は剥落が進み、器面調整は不明。4は甕の底部とみられ、底部は平底で、底部と胴部の境界は明瞭である。外面に丹塗り痕跡が残り、底部外面に黒斑がみられる。5は弥生中期の壺形土器で、口縁部と胴部は接合しないが同一個体の可能性が高く、口縁部は小片のため、径が広めに復元されている可能性が高い。口縁部は緩く外反して開き、胴部は胴部が張る。外面はナデ、内面はナデで胴部内面に横方向の工具痕が残る。6は弥生中期の鉢形土器。全体に椀状に開く器形で、胴部上部で緩く屈曲して、口縁部はわずかに外反する。全体に器壁が厚めで、内外面ともナデ調整で、内面には縦方向の工具痕跡が残る。7は中世の土師器皿。口径7.5cmで、底部外面は糸切りで仕上げる。遺構内に切り込んでいたとみられる中世の柱穴からの混入とみられる。

SK-04 (図版4-1)

調査区南端部で検出した土坑。平面形は不整橢円形で、長2.3m、幅1.5m、遺構面から床面までの深さ75cmを測る。遺構内で長1.6m、幅1.0mの巨石を検出したこと、覆土に締まりがなく古い時期の遺構と見られないことから、転石を埋め込むために掘削された投棄土坑とみられる。遺構内からの出土遺物はないが、近世以降の遺構とみられる。



第3図 56次1区造成段堆積土層図 (1/50)



第4図 56次1区全体図 (1/200)

SK-05 (第7図・図版4-2)

調査区南側で検出された貯蔵穴または竪穴遺構とみられる遺構。平面形は隅丸方形で、壁面は北東辺が外側に膨らむ他は直線的に延びる。遺構の規模は長2.0m、幅1.9m、床面は長さ1.3m、幅1.0mを測る。床面はほぼ水平で、壁は床面からやや開き気味に立ち上がる。

遺構覆土はいずれの層も粘性が高い。最下層の黒色粘土は地山ブロックを多く含み、埋没開始直後から壁面の崩落が進んだとみられ、その後地山土が一時に大量に流入して明褐色粘土層が形成されたとみられる。各層は西側から流れ込んでおり、土砂の流入が丘陵上方からだったことが伺える。

SK-06 (第7図・図版4-3)

調査区の西側で検出された、貯蔵穴または竪穴遺構とみられる遺構。遺構東側上部は広い範囲が崩れて漏斗状に広がり、遺構の埋没過程で壁が地滑り状に崩落したものとみられる。

遺構の平面形は隅丸方形で、遺構の規模は検出面で長1.7m、幅1.6m、深さ90cmである。床面は平坦で高低差は無く、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。

遺構覆土は、上層より黒褐色粘土、灰色粘土、黒褐色粘土、灰色粘土で、上層の堆積土は地山の明褐色粘質土ブロックを多く含んでいることから、壁面の崩落とともに堆積した層とみられる。土層断面図では各層はほぼ水平に堆積している。

遺構内からの出土遺物はビニール小袋1袋で、弥生土器の破片のほか、須恵器小片、陶器小片がある。図示できる遺物はなく、遺構の時期を明確に示す遺物は出土していない。

SK-07 (第8図・図版5-1)

調査区南側下段の、SD-01の流路西側に位置する。遺構の規模は長さ4.1m、奥行き2.8mで、最高所の北西上端から最低所の北側床面まで遺構内の比高差は最大3mに及ぶ。遺構内部は北側の溝状の低い部分と南側の一段高い平坦面から構成され、南側の平坦面は長さ1.5m、幅1.7mの広さで東に緩く傾斜している。

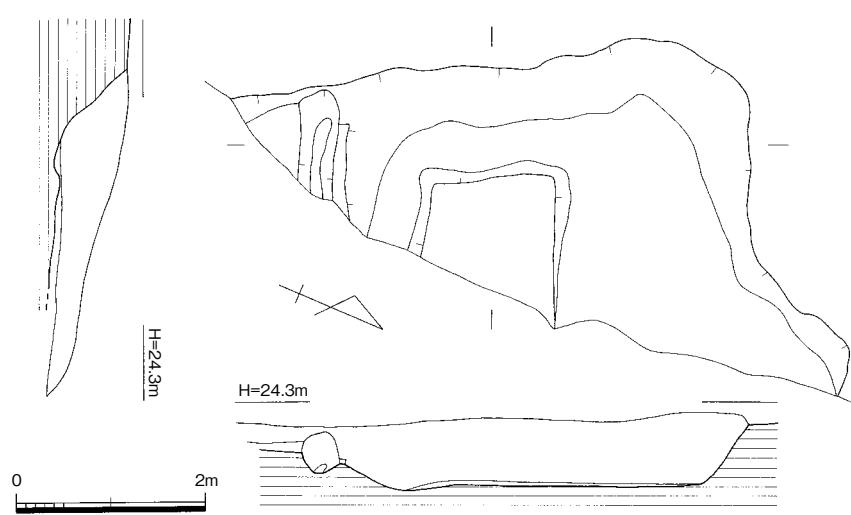
北側の溝状部分は床面の凹凸が著しく、自然流路の様相を呈する。この溝状部分の位置は上段の造成面の周囲に廻る排水溝が落ちる部分にあたるため、本来は竪穴状の土坑だったとみられる。

遺構内からの出土遺物には須恵器・瓦・陶器・染付碗の破片がある。いずれも小片で図化できるものはない。遺構の時期は中世後半から近世の幅の中で考えたい。

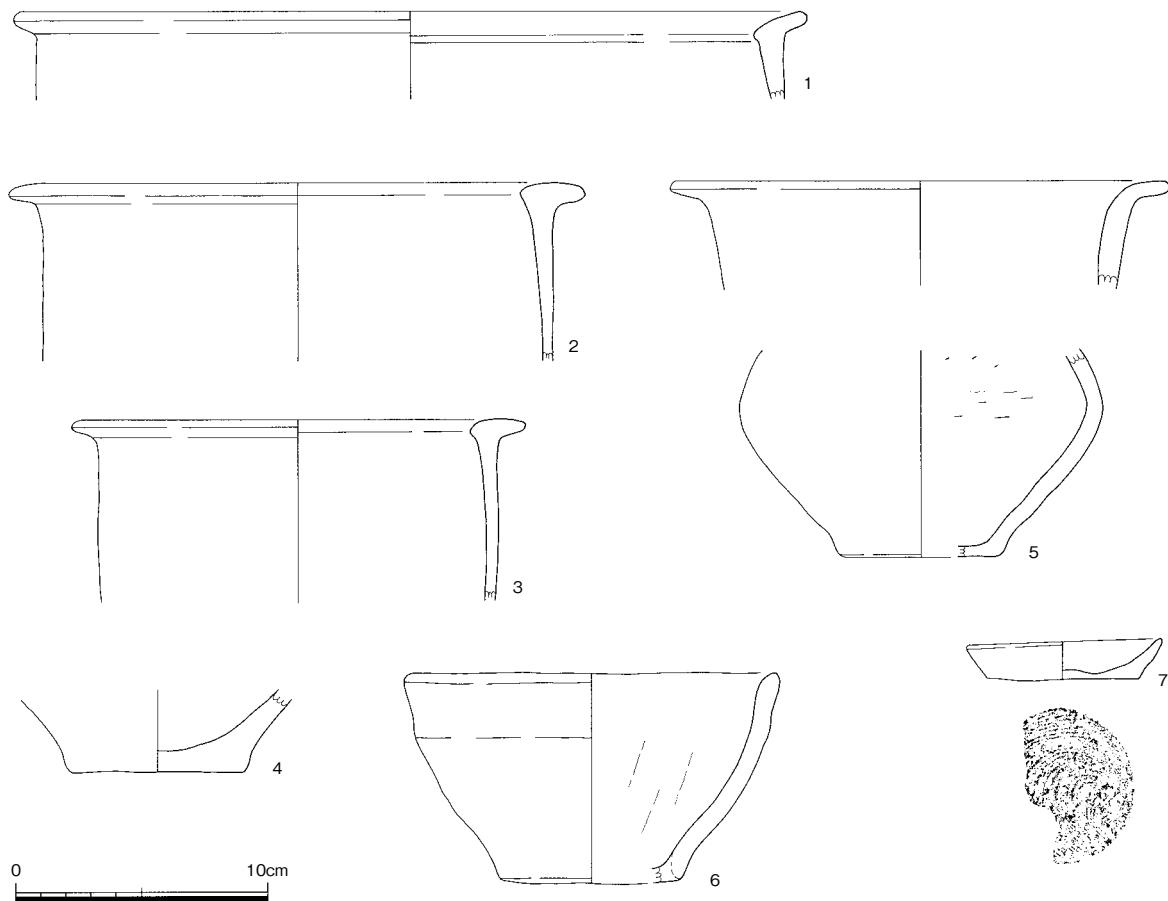
SK-08 (第8図・図版5-2)

調査区下段で検出された土坑で、検出時には南北に主軸をとる楕円形土坑として検出されたが、本来は方形の土坑とみられ、斜面の削平によって現在の形状になったとみられる。土坑の規模は長さ1.94m、幅90cmで、土坑西側で深さ40cm、東側で5cmを測る。

遺構内から中世の摺鉢小片が1点出土している。口縁下で屈曲する形態である。



第5図 SK-03実測図 (1/80)



第6図 SK-03出土遺物実測図 (1/3)

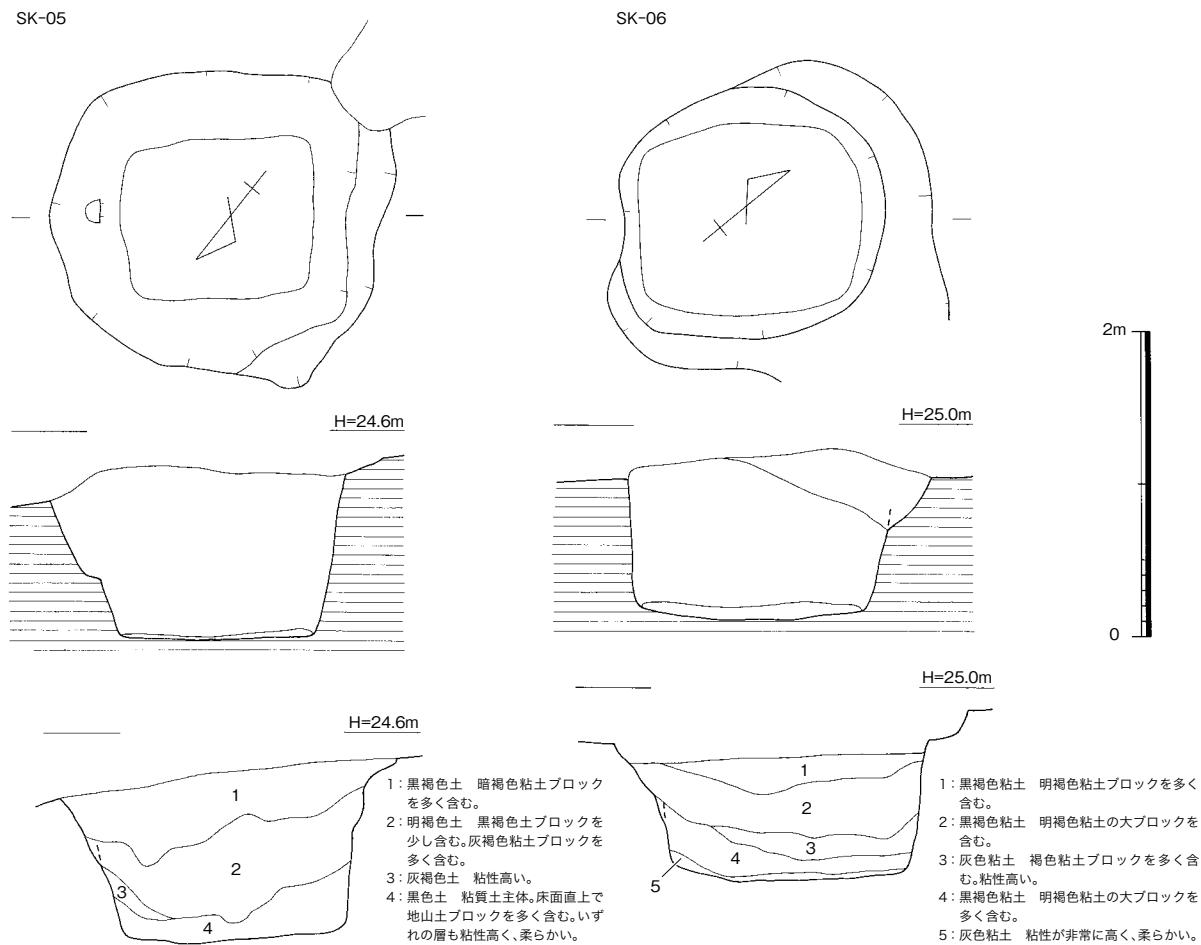
(3) 溝状遺構(S D)

SD-01・SD-02 (図版2-3・3-1~2)

SD-01は調査区東側の、下段の造成面の丘陵際に掘られた溝状遺構で、下段の造成工程と密接に関連する遺構と見られるが、その後斜面の雨水を流す自然流路的な機能を持つようになったと考えられる。SD-02はG-6号墳の周囲を廻るように掘られた溝で、その下流はSD-01に直接繋がり、G-6号墳周囲の雨水や湧水はSD-02を通じてSD-01に流れる。SD-01とSD-02の両遺構は本来別々の機能を持つ遺構として別個の段階に掘削され、後に一体化したと考えられる。調査時には便宜上、G-6号墳の墓道よりも古墳側をSD-02、南側をSD-01と区分して調査を進めた。

SD-01は調査区内で約24mを検出しており、さらに下流へ続いているとみられる。北側端部は削平によって細くなっているが、調査区南端では幅2.6m、深さ1mを測る大溝となっている。溝の形状は造成段の形状に従って緩くカーブしている。南端と北端の比高差は溝床面で2.4mで傾斜度10%と緩い傾斜になっている。溝床面には3段の低い段差が認められ、また南端部付近では床面に凹凸が目立つ。また、壁面の凹凸も著しい。

SD-02はG-6号墳の石室周囲を廻る溝で、最上流はG-6号墳の墳丘Ⅱ区で確認できる。溝の流路は蛇行しながら石室奥壁石の際を迂回し、羨道の東側を並行してSD-01へ繋がるように進んでいる。SD-02の土層断面はG-6号墳のトレンチ調査でも確認され、Bトレンチの14~22層、Cトレンチの12~22層はSD-02に伴う土層である。いずれの層も粗砂や礫を多く含み、急流だったことを示唆している。(『元岡・桑原遺跡群22』PP.17~19)



第7図 SK-05・06実測図 (1/50)

出土遺物（第9図）8・9はSD-01出土遺物。8は朝鮮陶器で皿の底部。高台は径8.0cmで高く直立する。胎土は灰赤褐色で、内面は施釉され刷毛目で同心円を描き、外面にも刷毛目文様が施される。9は朝鮮陶器の小皿。碁笥底で、外面底部付近は露胎、内面は灰白色に施釉される。胎土は薄赤褐色。

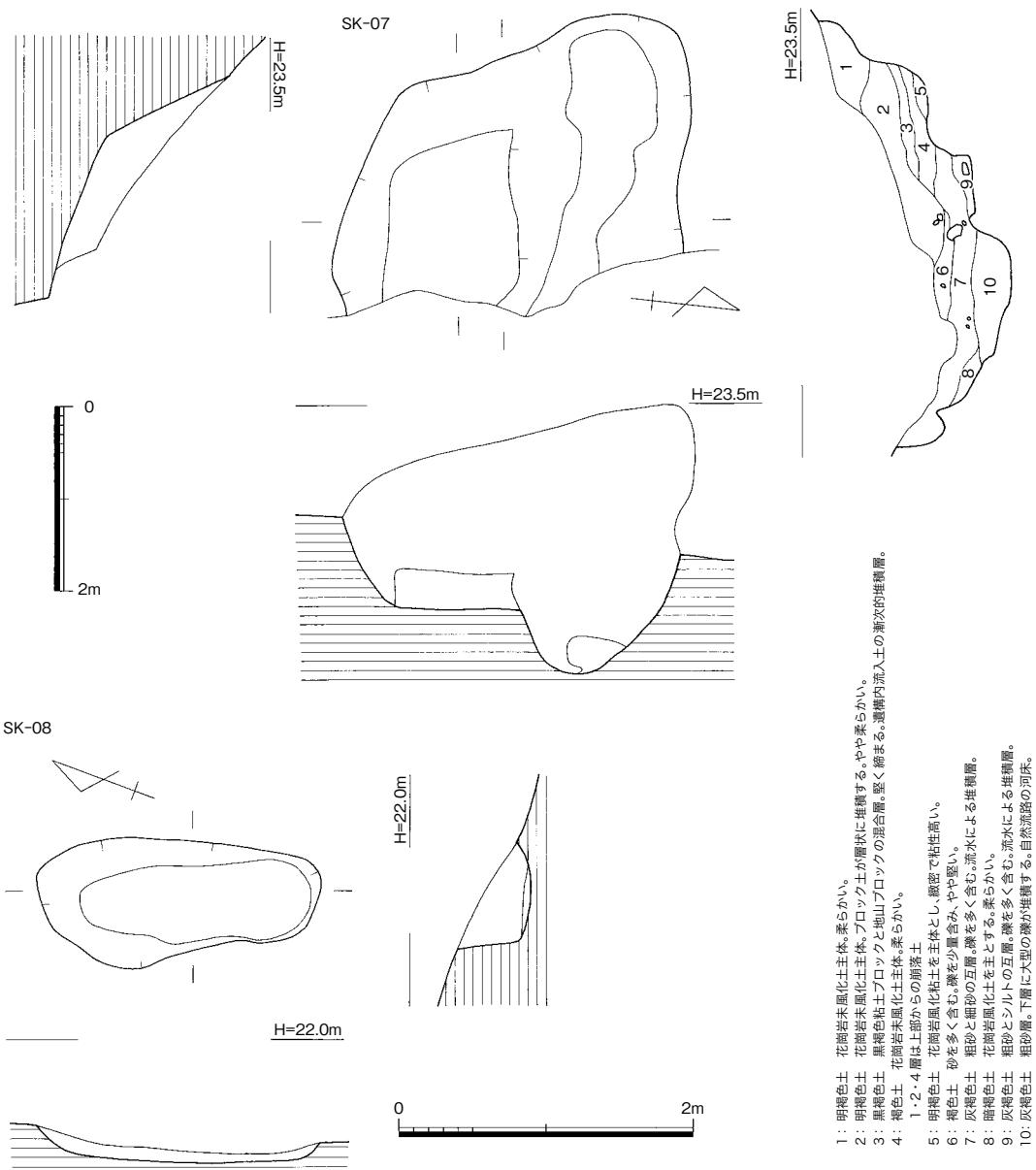
10～12はSD-02出土。10は白磁塊の底部。高台は厚く、低い。外面は高台直上まで施釉され、釉色は灰白色を呈する。内面見込みに沈線で圈線が1条入る。11は朝鮮陶器で、皿とみられる。高台は低く、断面三角形突帯のような形状である。外面は胴部下部まで施釉され、釉色は薄青灰色を呈する。内面は蛇の目状に釉を掻き取っており、また染付で圈線を描く。12は染付小杯。破片で、全体の文様は明らかにできない。高台は薄く、直立する。これら図示したものの他に、SD-02のG-6号墳奥壁際の箇所で中世前半期の白磁の小片が出土している。

出土遺物から、SD-01・02は中世後半期に埋没した可能性が高いと考えられる。掘削時期については、斜面造成や掘立柱建物群との時期と強く関連するとみられ、12世紀から13世紀にかけての時期に掘削されたと考えられる。

(4)掘立柱建物(SB)・柵列(SA)

SB-21(第10図)

調査区上段ほぼ中央に位置する掘立柱建物。2間×3間で主軸は北西—南東へ向く。桁行6.8～7.2m。



第8図 SK-07・08実測図 (1/80・1/50)

梁行4.0m、柱間は2.2～2.6mを測る。柱穴は径70cm～1.0mで、楕円形・不整円形の平面形を呈し、深さは50cm～1mで、北東側は斜面の削平のため検出面からの深さが浅くなる。他柱穴との切り合いも少ないとみられる。

出土遺物 柱穴から土師器・須恵器の小片が出土している。図示できるものはない。

SB-22 (第10図)

調査区上段中央に位置する掘立柱建物。2間×3間で主軸は北東—南西方向で、SB-21とほぼ重複する位置にあるが主軸は直交する。桁行7.4m、桁行5.4mで、北東隅の柱穴は削平のため検出できない。南西の柱穴は花弁状に周囲から掘り込みがあり、柱材を抜き出した痕跡とみられる。

南東側桁行の柱穴の切り合いから、SB-22はSB-21よりも後出するとみられる。

柱穴から土師器の小片が出土している。図示できるものはない。

SB-23 (第11図)

調査区上段南側に位置する掘立柱建物。2間×3間で主軸は北西—南東方向にとり、SB-21と建物方向が一致する。桁行5.8cm、梁行3.7m、柱間は2.0mを測る。柱穴の細かい切り合いが多く、また北西隅の柱穴も著しく重複していることから、同一箇所での建替又は修復が繰り返し行われたとみられる。建物内にSK-05が位置し、柱穴がSK-05を切るため、建物の時期はSK-05よりも後出する。

柱穴から土師器の小片が出土しているが、図示できるものはない。

SB-24 (第11図)

調査区上段北西側に位置する掘立柱建物で、SB-22と平行する。1間×3間の建物と見られるが、北西隅、南西隅の柱穴を欠き、北東隅は他の柱間よりも広いため、復元には不確実な点がある。

桁行7.8m、梁行1.8mで柱間は1.8～最大3.8mを測る。柱穴径は40cm～70cmと小型で、遺構面からの深さも30cm程度と他の建物よりも浅く、細い柱材を使用した簡便な建物と考えられる。SB-22と桁長がほぼ一致し、建物方向も平行していることから両者が関連していたとみられる。

SP-128から土師器の甕の破片とみられる破片が1点出土しているが小片で図示できない。

SB-25 (第11図)

調査区上段南東端に位置する小型の掘立柱建物。2間×2間の側柱建物だが、梁行の柱間が極めて短く、細長い長方形プランを呈する。桁行2.6～2.8m、梁行90cm～1.0mで、桁行が屈曲する平面形であるが、周囲には他に柱穴がなく、このプランでの建物を復元せざるを得ない。

柱穴径は20～40cmと小さく、小型の簡素な建物が建てられていたものとみられる。

SB-26 (第12図)

G-6号墳の墓道に重複する位置にあたる掘立柱建物。1間×2間の建物が復元できるが、南東隅、北東隅の柱穴を欠くため、建物の復元に際しては不確実な点が多い。

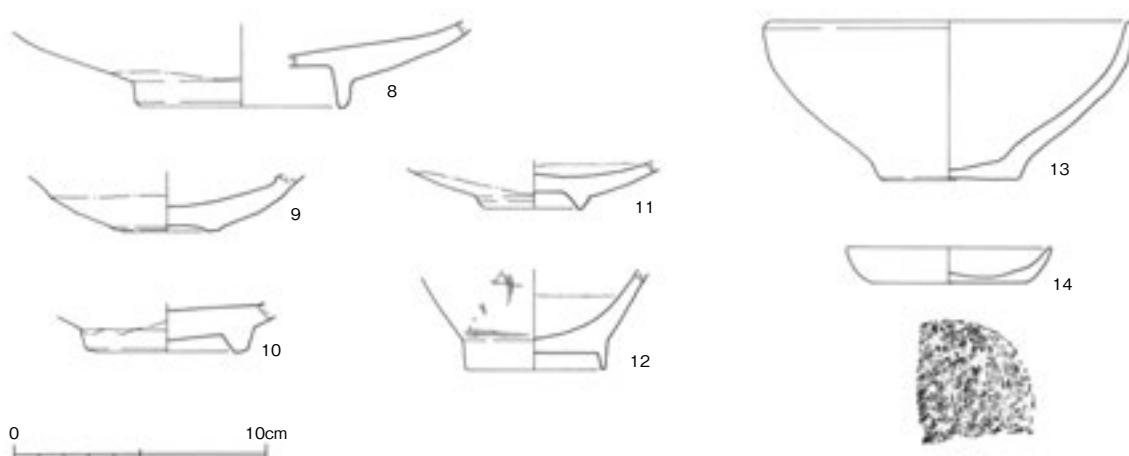
桁行4.8m、梁行2.0mで、柱間は2.1～2.9mを測る。柱穴径は30～40cm、遺構面からの深さは30cm程度だが、墓道埋没後の建造と想定すれば柱穴掘方はさらに20～50cm深いとみられる。

SB-24と北側桁行のラインが一致するため、同時期に平行して建てられていた可能性が高い。

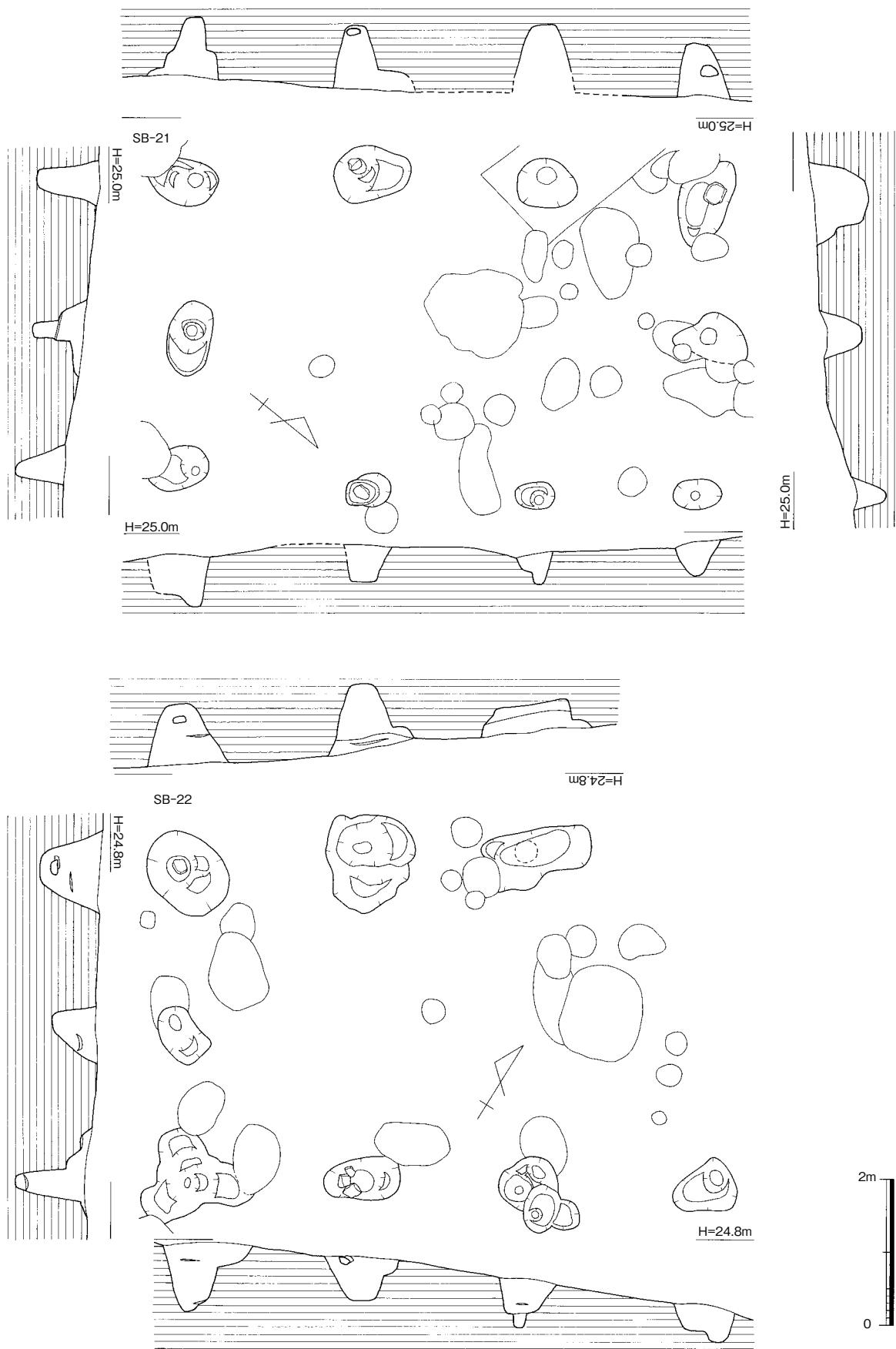
SB-27 (第12図)

調査区上段北側に位置する掘立柱建物で、1間×2間の建物とみられる。桁行4m、梁行2.2m、柱間2.0mで、柱穴径50～60cmを測る。北東隅の柱穴はSB-26と重複している。

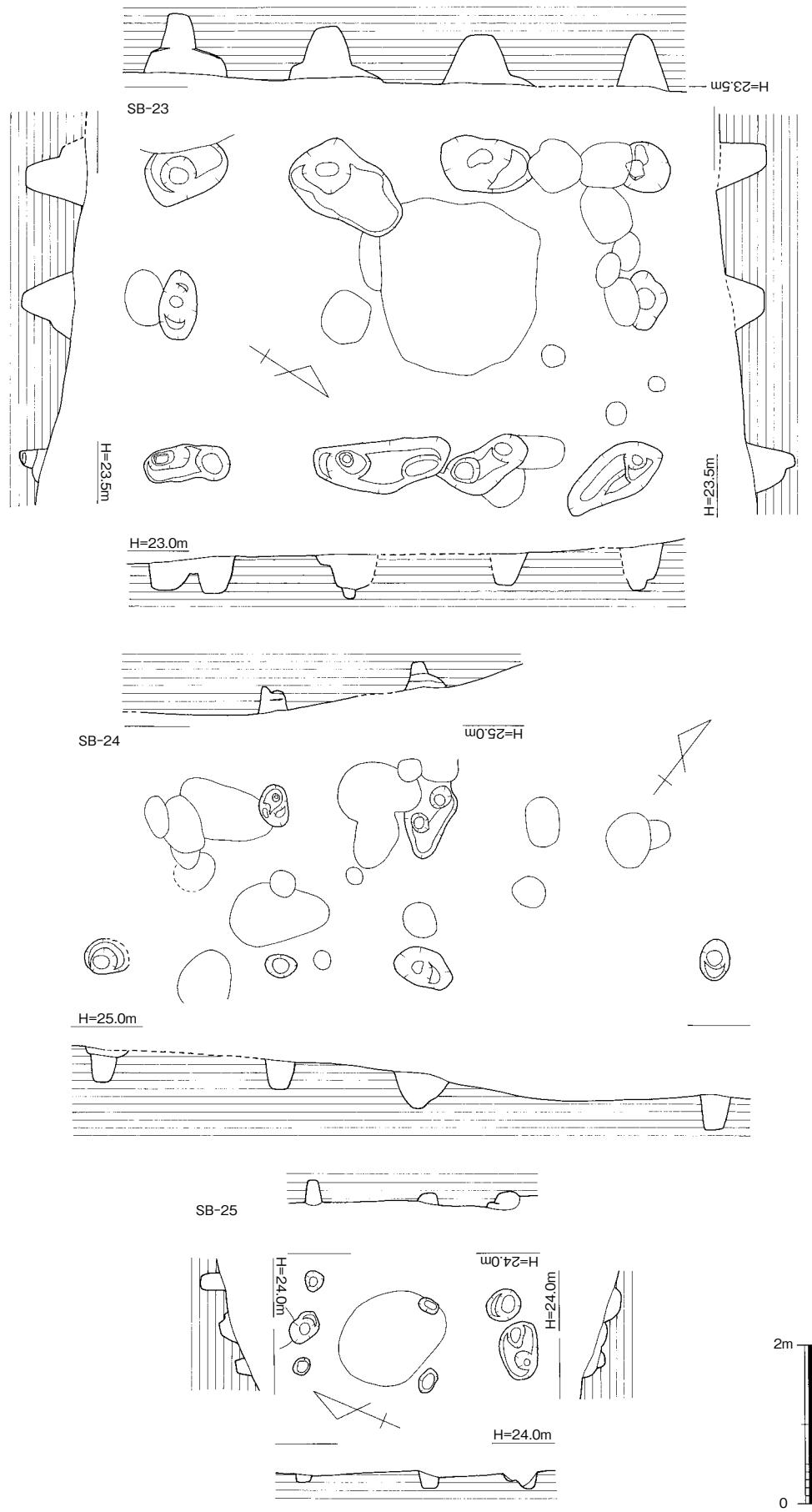
建物主軸方向は北西—南西方向で、SB-21と北側梁行のラインが一致するため、同時期に併行して建てられていた可能性が高い。



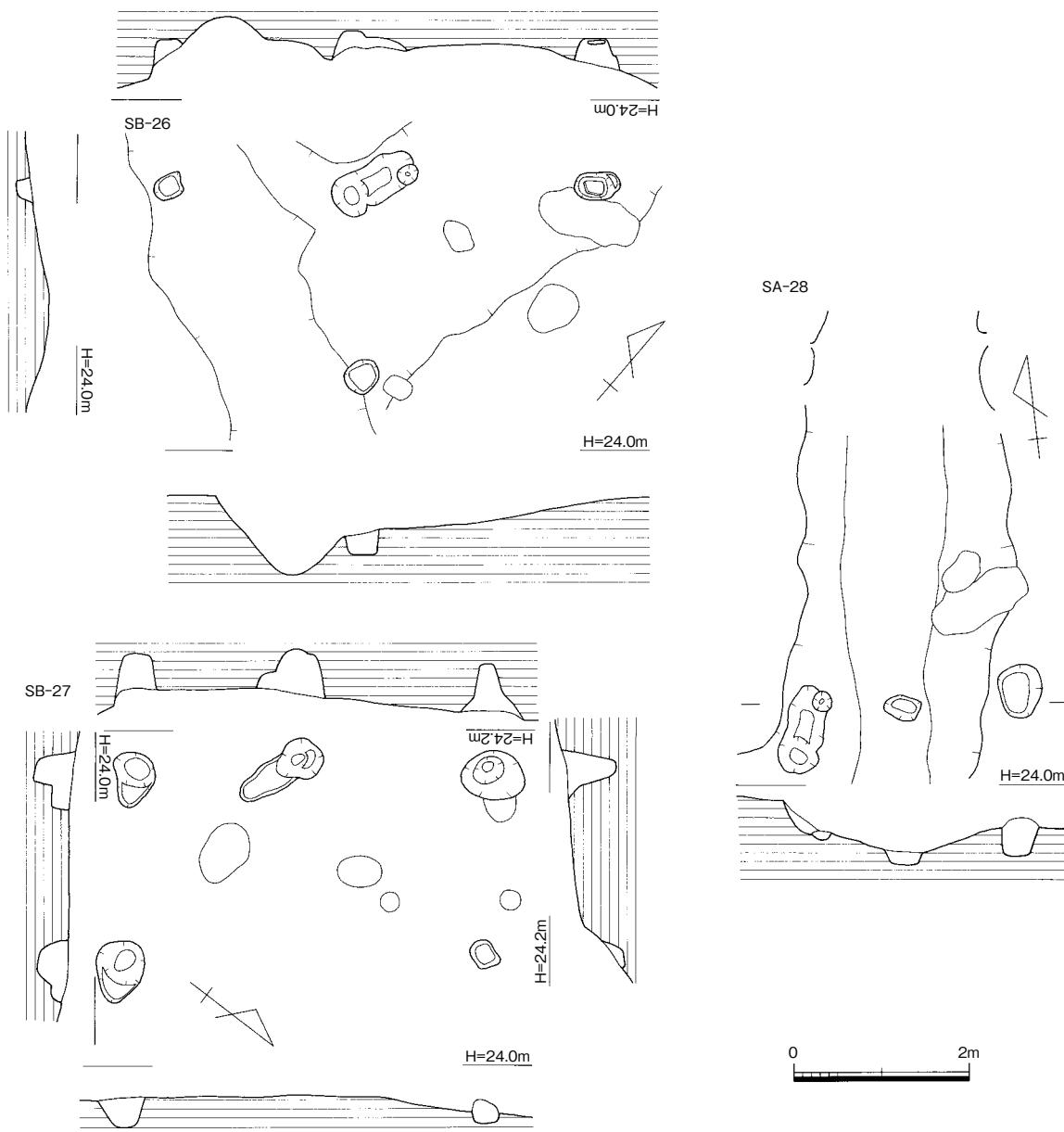
第9図 SD・SP出土遺物実測図 (1/3)



第10図 掘立柱建物実測図1 (1/80)



第11図 掘立柱建物実測図2 (1/80)



第12図 掘立柱建物実測図3 (1/80)

SP-129から1cmに満たない土師器の小片が出土している。

SA-28 (第12図)

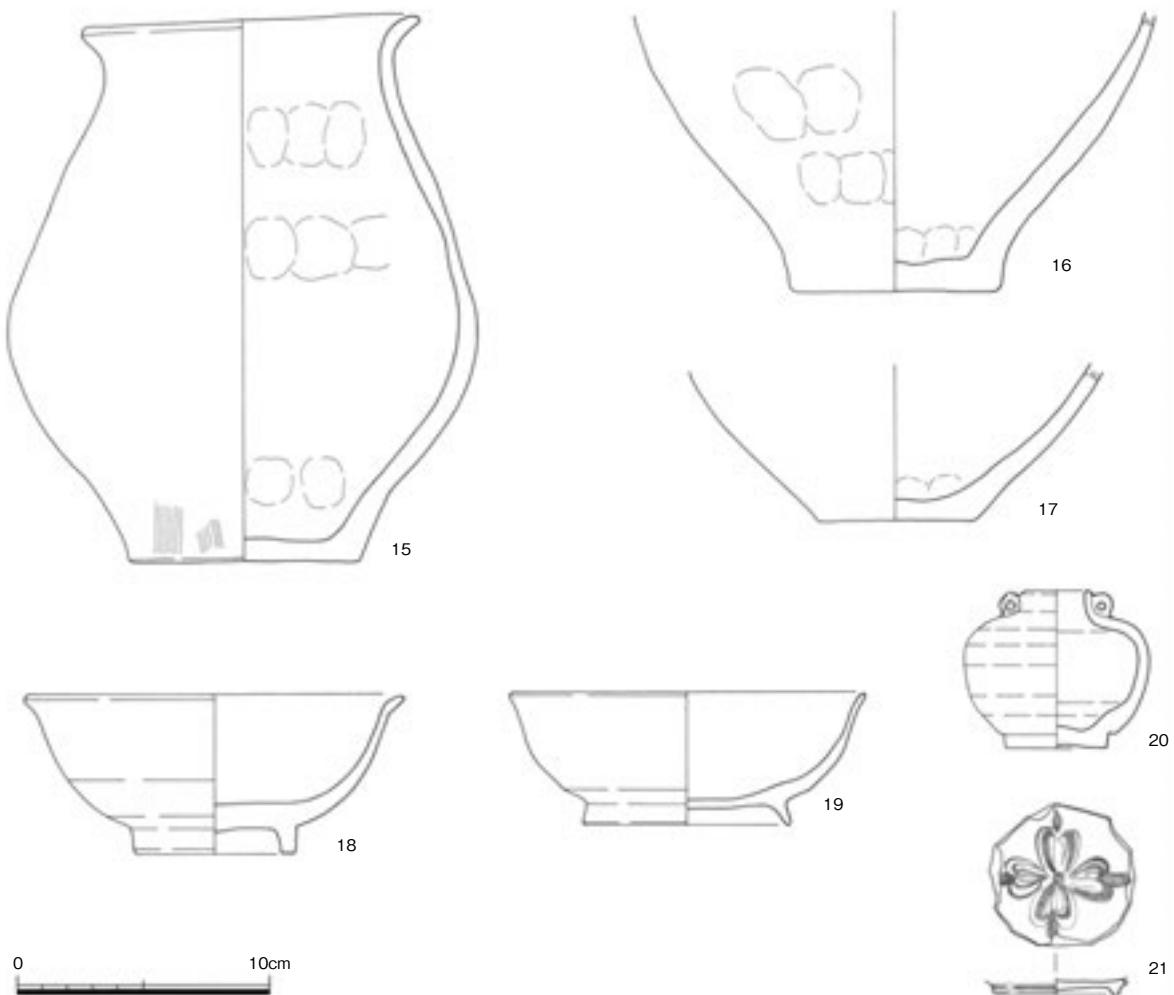
G-6号墳の墓道上に、墓道に直交する方向に設置された柵列。遺構覆土は暗灰色砂混じり土で、墓道埋土の黒色粘質土とは明らかに異なり、中世以降の遺構とみられる。

柱穴は3基確認され、柱穴径は20～50cmを測る。地山面からの深さは10～30cm程度だが、墓道埋没後の建造と想定すれば柱穴掘方はさらに20～50cm深くなる。中央の柱穴の底部が両側柱穴よりも深くなっていることから、中央部に強固な柱が建てられていたと考えられる。

G-6号墳が中世に開口していたことから、古墳と建物区画を仕切る柵や門などが想定できる。

(5) その他の遺物 (第9図・第13図)

13はSP-106から出土した弥生土器の鉢。底部は平底で体部は半球状に膨らむ。器壁は丁寧に整



第13図 1区出土遺物実測図 (1/3)

形されており凹凸が少ない。内面は若干白っぽく、化粧土がかかっていた可能性がある。14はSP-124出土の土師器皿。口径7.8cmで、底部は糸切り。胎土は細かく、砂を多く含む。

第13図は遺構面上層の包含層・トレンチ等からの出土遺物。15は調査区上段の包含層から出土した弥生時代前期の壺形土器で、ほぼ完形。頸部と胴部の境界には粘土の継ぎ目が明瞭に残る。底部外面にハケ目がわずかに残るが、全体に風化が進み、全体の器面調整は不明。内面に成形時の指圧痕跡が多く残る。16は調査区上段の包含層から出土した弥生前期～中期の壺形土器の下部。胴部は球形で、器壁がやや厚めである。内外面とも調整はナデで、成形時の指圧痕跡が残る。17はSD-01東側の包含層から出土した弥生時代中期の壺形土器の底部。内外面ともに摩耗が進み、調整は不明。

18は調査区上段の包含層から出土した青磁碗。内外面とも文様は見られず、青緑色の釉が厚く施され、外面は畠付まで施釉され、高台内側は施釉後蛇の目状に釉を掻き取る。19は谷奥部の試掘トレンチから出土した土師器の塊。外面下部は回転ヘラケズリ、外面上部と内面は回転横ナデ。

20は調査区西側の段落ち部包含層から出土した青磁の小壺。口縁の両側に円筒状の耳が2つ貼付され、底部は円盤状に高台を作る。外面はオリーブ緑色の釉がかかり、底面と内面は露胎である。21は染付皿の底部を瓦玉としたもので、G-6号墳の東側斜面下端で出土した。周囲は丁寧に打ち欠いて整形されており、上面には十字花文が描かれている。底部外面に2条の横線が染付で描かれる。中世末以降のものであろう。

3. 2区調査概要

(1) 調査区概要・基本層序

2区は1区の南東側に位置し、谷を横断する細長い調査区である。42・52・55次調査区が位置する谷の上流に位置し、調査時点での標高は18m前後であった。

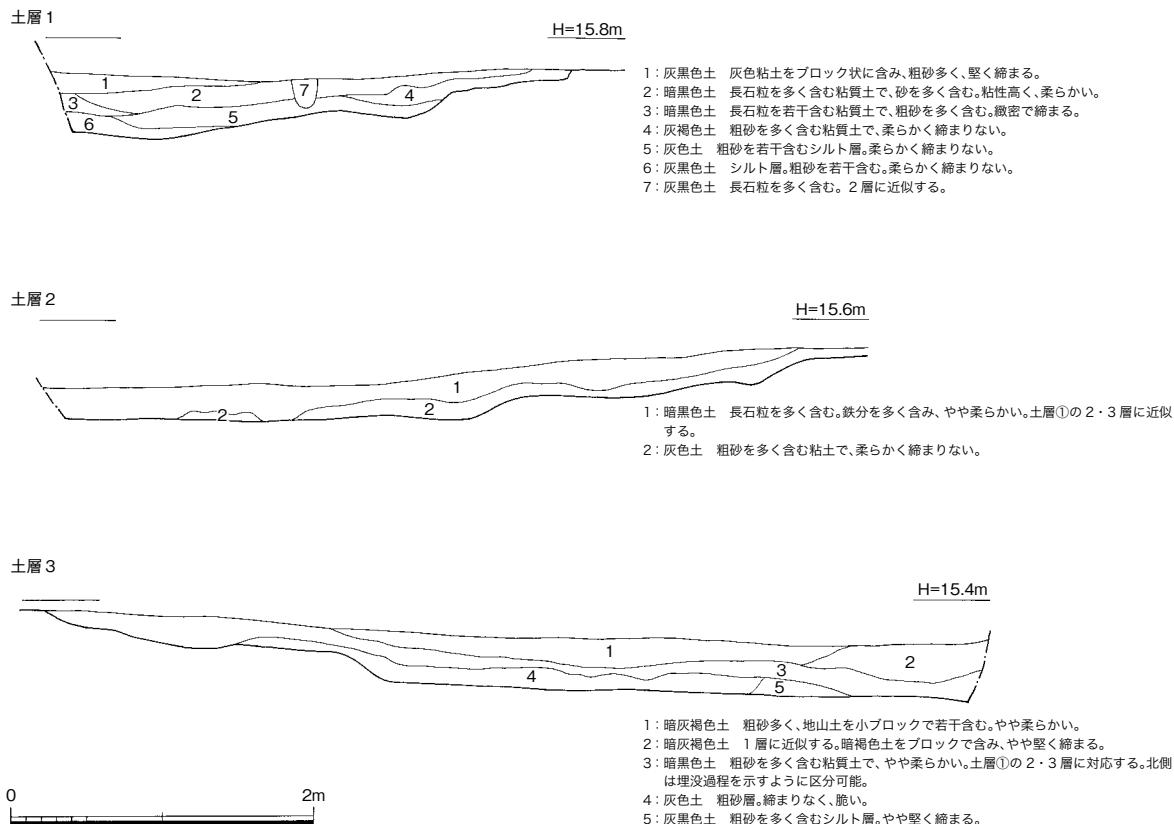
当初の開発計画では2区が位置する部分に道路が新設される予定であり、2区は道路予定部分を対称とした発掘調査として設定されたが、1区のG-6号墳から庚寅銘大刀が出土するなど重要な発見が相次いだことから、計画が変更されて結果として2区は調査後埋め戻して現地に保存されることになった。2区周辺の未調査部分についても遺構を保存するという条件で造成が行なわれている。

調査対象になった弥生時代の遺構面は現況地表面よりも3m下層で検出された。地表面の下は客土、水田耕作土の下に前代の耕作面が4～5面確認できるが、これらの層からは遺構・遺物は確認できていない。ただ各層の途中で段差がみられる部分があり、旧水田の地割の痕跡とみられる。

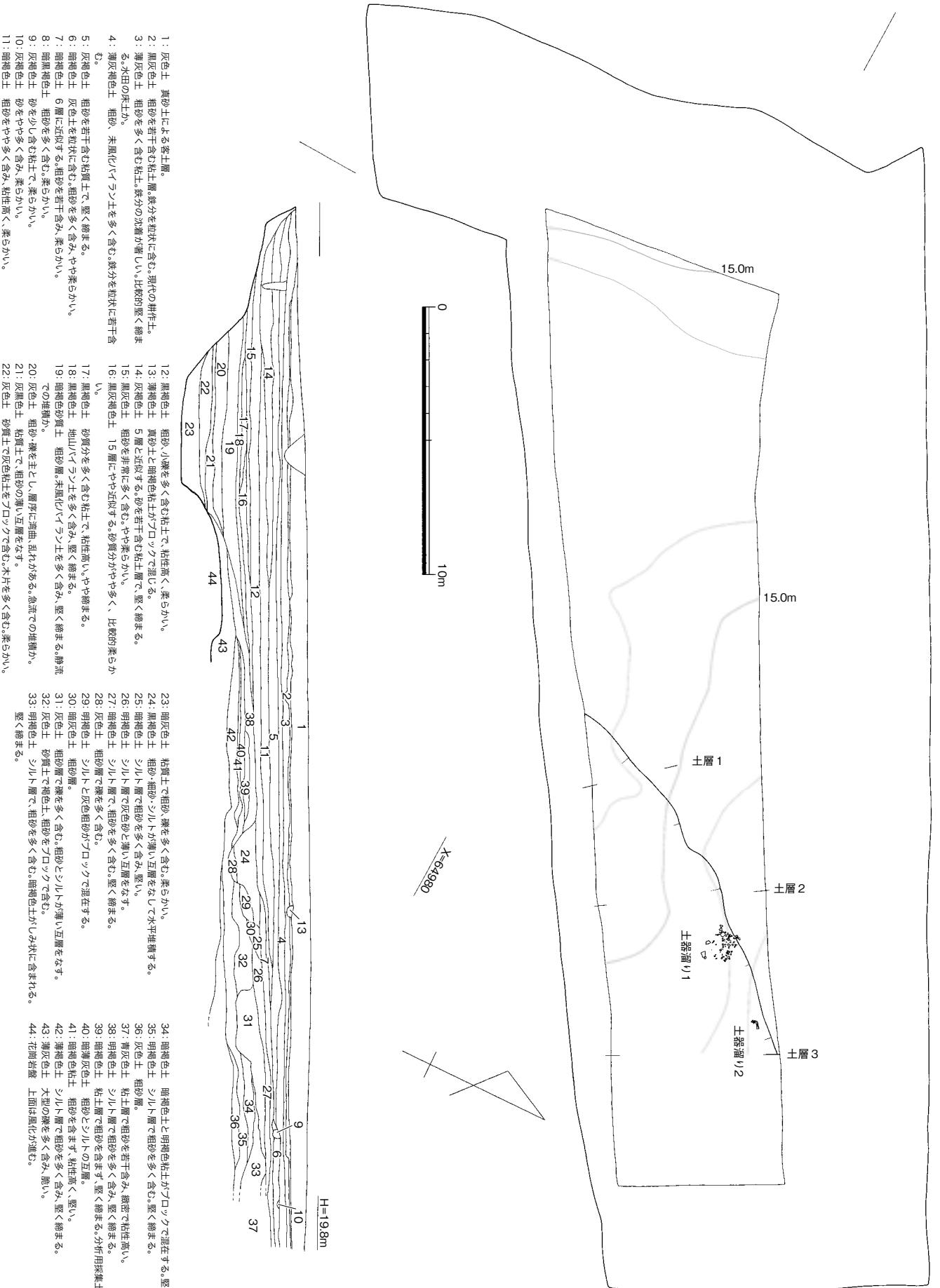
現地表から1.5m以下は谷の埋没にともなう自然堆積層が確認できる。特に本流とみられる谷西側の流路の他に中央部やや東側で幅3.5mの流路があったことが土層から看取できる。この流路は下層の堆積層を切り込んでおり、流路が谷の中で動いていたことが分かる。

弥生時代の遺構は灰色シルトの上面で検出され、調査区の東側で土器溜まり2箇所を検出した。土器溜まりは流路の際の緩斜面状になっている部分で確認されており、土器の出土状態から見て別の地点からの流れ込みによる堆積ではなく、この場所での土器の供献や廃棄が行われたものとみられる。

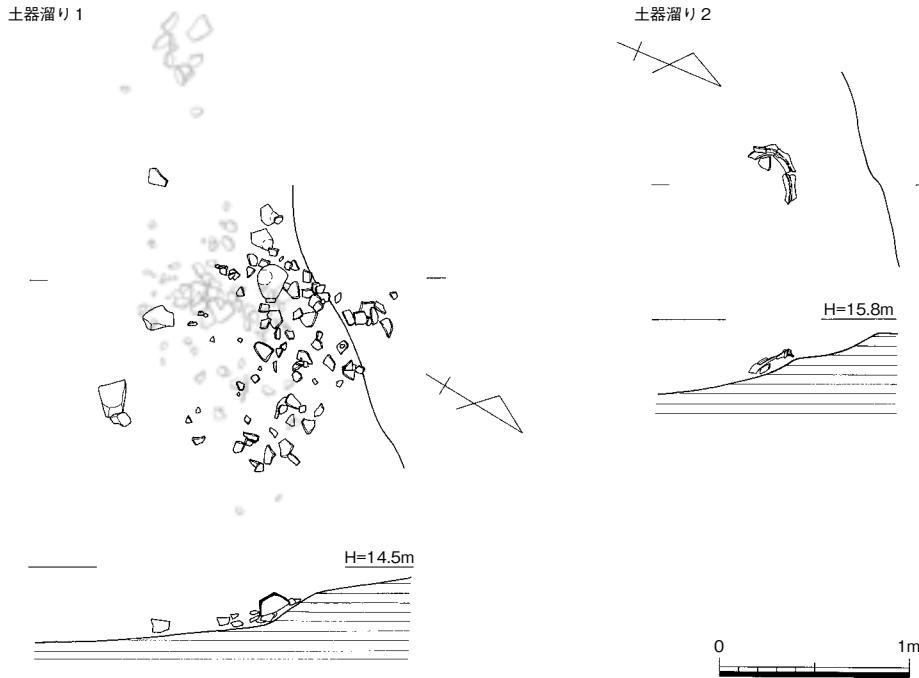
弥生時代の遺構面の下層も掘り下げてみたが、湧水が著しく、遺構・遺物は確認できていない。



第14図 56次2区包含層土層図 (1/50)



第15図 56次2区全体図 (1/200)



第16図 2区土器溜り1・2実測図 (1/40)

(2) 土器溜り

土器溜り1 (第16図・図版6-1)

調査区東側で検出された土器溜りで、上層・下層の2層に分けて検出・遺物取り上げを行ったが、上下のレベル差はほとんどなく、基本的に同一層の堆積とみられる。

土器溜りの範囲は東西幅1.5m、南北幅1.5mで、

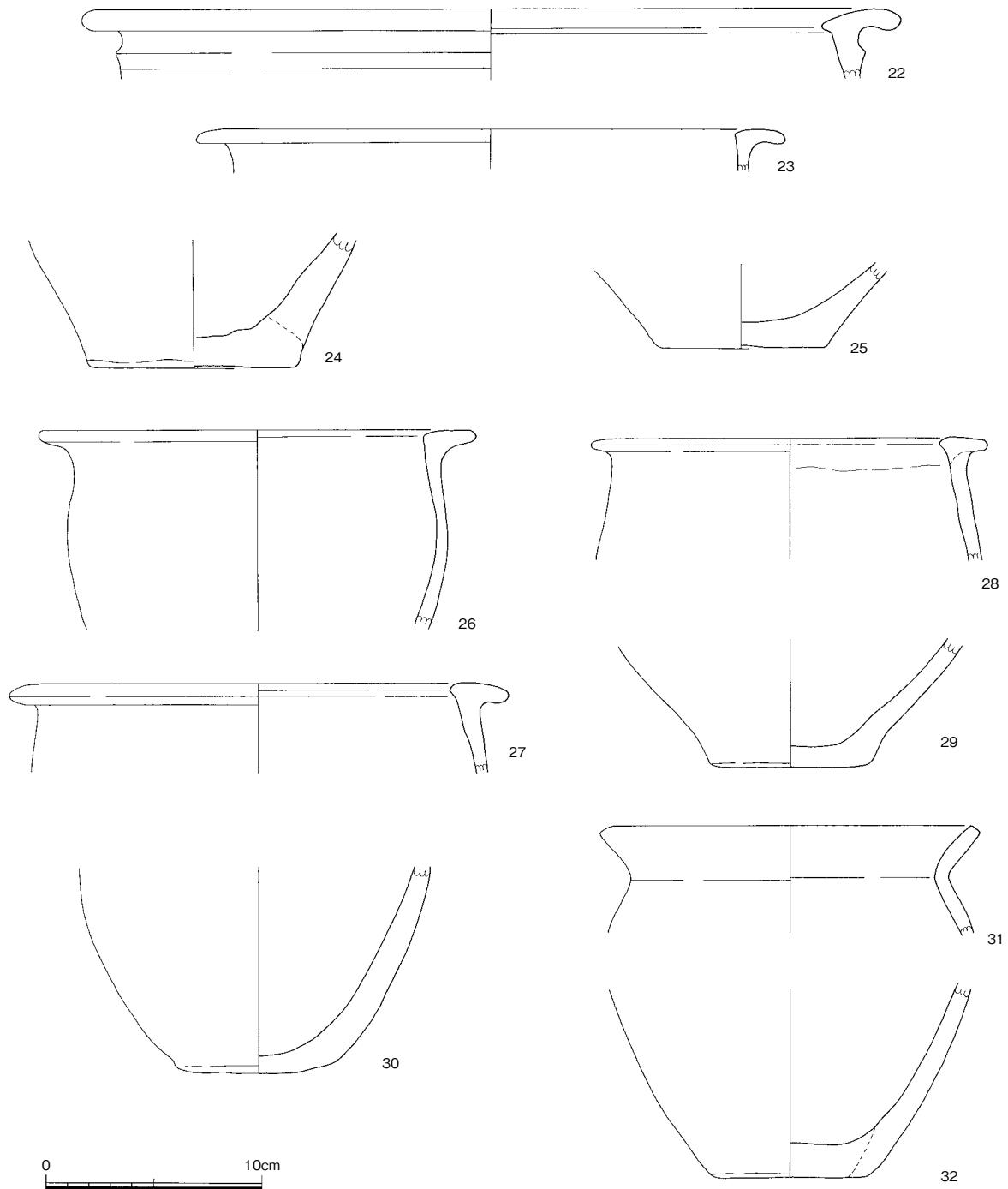
分布域は略円形を呈している。破片は10cm～20cmの大きさのものが多く、摩滅した小片は少ない。地形的には北から南へ緩く傾斜する緩斜面の落ち際に形成されており、土器の分布レベルも北ほど高く、南ほど傾斜面に沿って低くなる。堆積のレベルは北側の高い部分で14.5m、南側で14.0mで、その差は50cmである。

破片のうち、底部破片は比較的大型で、底面を上にしたものが目立つ。一方、胴部や口縁部の破片は上層では小型のものが多い。一方下層では大型の胴部破片が見られることから、下層の胴部破片は割れた直後に埋没し、上層の破片は数度にわたって衝撃をうけ、小片になったものとみられる。大型の破片が多く、これらの土器はこの場所で投棄されたものである可能性が高い。

出土遺物（第17・18図）22～25は土器溜り上層の黒色包含層から出土した弥生土器。22・23は弥生中期の甕形土器の口縁部。22は鋤先形を呈し、内側への短い突出もみられる。口縁直下に断面三角形突帯が1条貼り付けられる。23は口縁部が逆L字形で、口縁下の突帯はない。胴部の張りのないタイプとみられる。24は甕又は壺の底部。分厚く作られ、底部内外面に成形痕が残る。25は壺の底部。内外面とも丁寧にナデて仕上げられる。

26～32は上層から出土した弥生中期後半～後期前半の土器。26は甕で、口縁は緩い逆L字形を呈する。内外面ともにナデ調整。27は口縁の屈曲が強く、口縁上面が外傾するもの。内側にも短い突出部がある。外面に丹塗り痕が残る。28は甕で胴部が口縁直下で緩く絞られ、外面は器面の剥落が進むがナデまたはミガキ調整とみられ、丹塗り痕が残る。29は壺の底部。底部と胴部の境界はや丸みを帯び、胴部は球形とみられる。内外面ともナデ調整。30は甕の底部とみられ、底面はレンズ状に近く、底部と胴部の境界は丸みを帯びる。胴部外面下部に二次焼成による剥落が見られる。内外面ともナデ調整。31は甕口縁部破片で、く字形に屈曲し、口縁端部は軽く面取りする。口縁外面に黒色顔料痕が残る。32は甕底部破片。平底で、底部と胴部の境界は丸みを帯びる。

37～40は下層からの出土。37は壺形土器の胴部上位～口縁部の破片で、口縁部は外側に強く屈曲する。口縁直下に横方向の沈線が1条施文される。38は壺の口縁部。39は壺の底部破片。底部は



第17図 包含層・土器溜り出土遺物実測図 (1/3)

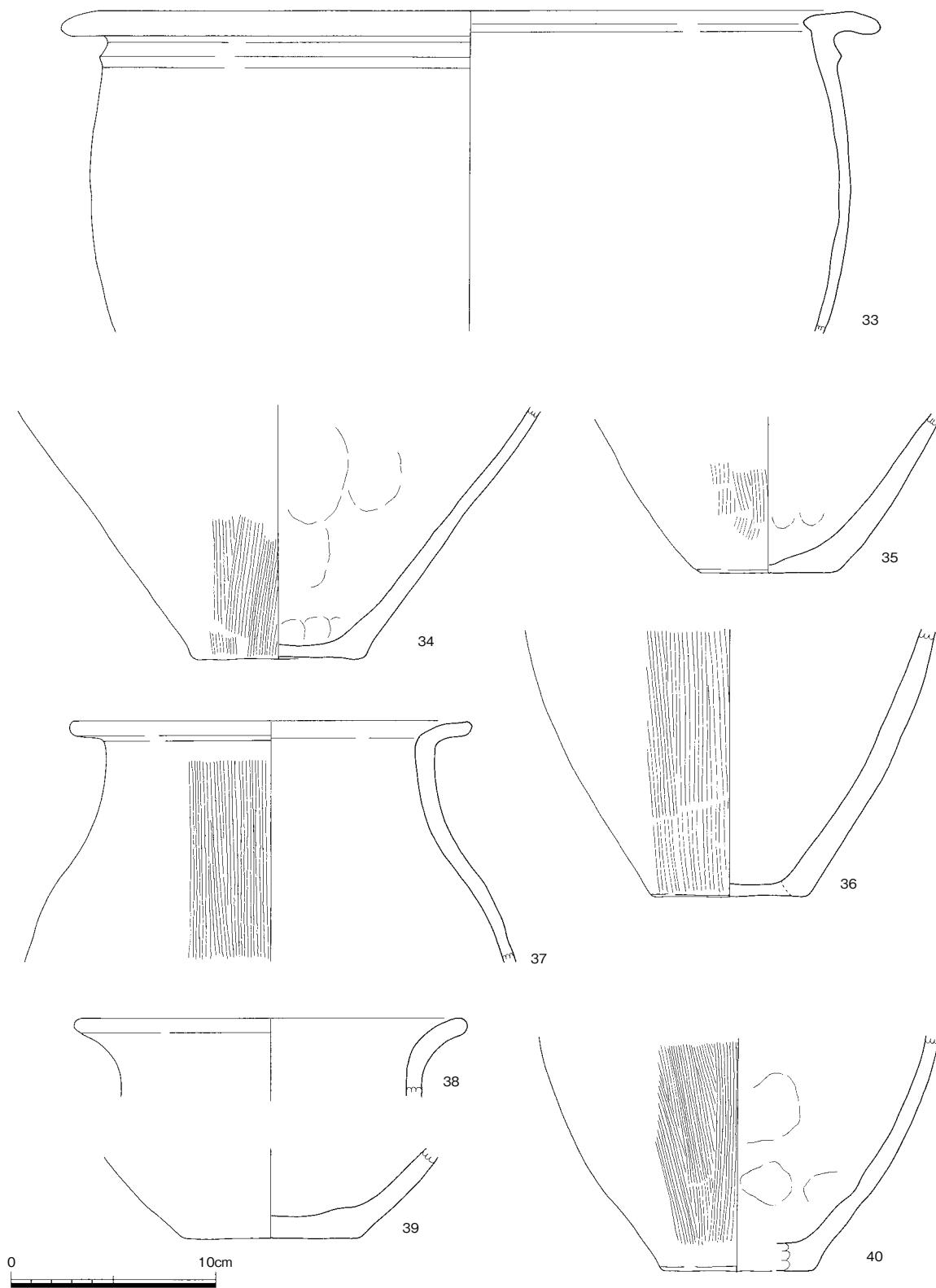
平底で、胴部はナデ調整。内面はには成形時の指圧痕による凹凸がみられる。40は甕の胴部下部。外面は縦方向ハケ目、内面はナデで指圧痕が残る。

土器溜り2 (第16図・図版6-2)

調査区東端で検出された土器溜りで、弥生中期の甕形土器の口縁部が正置で出土している状況を捉えたものである。検出レベルは14.4mで、土器溜り1下層と同一層にあたる。

破片は口縁全体の2/3程度遺存しており、4~5片に分かれているものの、破片が投棄された状態から位置を大きくえていないものとみられる。

出土遺物 (第18図) 土器溜り1と同様に弥生時代中期後半~後期前半の土器が含まれる。33は出土



第18図 土器溜り（下層）出土遺物実測図（1/3）

状況を図示した甕口縁部破片。口縁部は鋤先状で、口縁直下に低い断面三角形突帯が貼付される。外面は器壁の剥落が著しく、調整不明。34は甕の底部。胎土や形状から33と同一個体の可能性が高い。外面は縦方向ハケ目、内面はナデで指圧痕が残る。35は甕の底部で33・34よりも後出する時期のもの。底部は平底で、底部と胴部の境界は丸みを帯びる。外面は粗いハケ目、内面はナデ。

4. 元岡・桑原遺跡第56次調査1区・2区における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

(1) 元岡・桑原遺跡第56次調査1区における放射性炭素年代測定

1) はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

2) 試料と方法

次表に、放射性炭素年代測定試料の採取箇所と種類および前処理・調整法と測定法を示す。

試料No.	地点・層準	種類	前処理・調整法	測定法
No. 1	古墳石室内、炭化種実	炭化種実（オオムギ）	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

3) 測定結果

加速器質量分析法（AMS）によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代（較正年代）を算出した。次表にこれらの結果を示し、図1に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

試料	測定 (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代：年BP (暦年較正用)	暦年代（較正年代）：cal-	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
1	19793	-24.97 ± 0.10	470 ± 20 (472 ± 20)	AD1425-1445(68.2%)	AD1415-1450(95.4%)

BP : Before Physics (Present), cal : calibrated, AD : 紀元後

① デルタ $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正する。

② 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は 5730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いた。統計誤差 (±) は 1 シグマ σ (68.2% 確率) である。 ^{14}C 年代値は下 1 術を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下 1 術を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

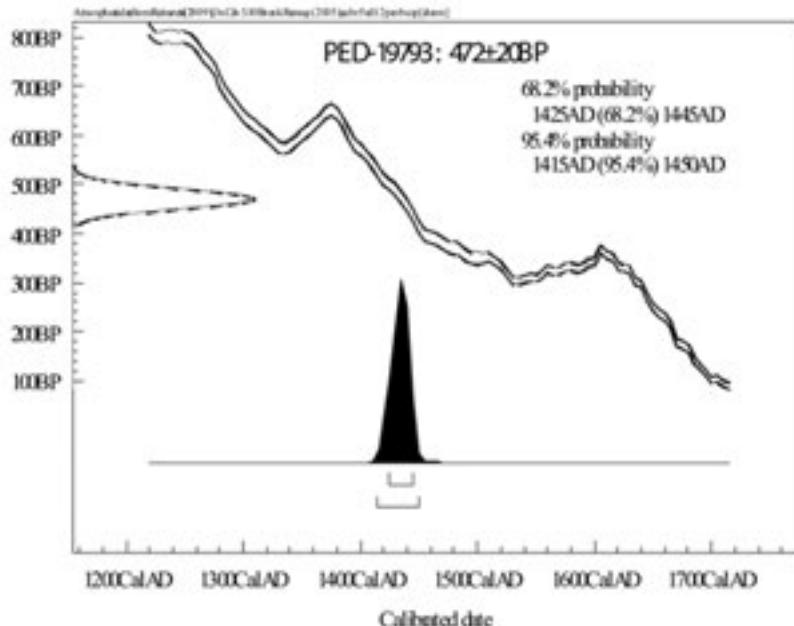
③ 暦年代 (Calendar Age)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、放射性炭素 (^{14}C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 09、較正プログラムは OxCal 3.1 である。

暦年代（較正年代）は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により1シグマ σ （68.2%確率）と2 σ （95.4%確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。()内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4) 所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、No.1の炭化種実（オオムギ）では 470 ± 20 BP（2 σ の暦年代でAD1415～1450年）の年代値が得られた。



(2)元岡・桑原遺跡第56次調査1区における種実同定

1) はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内などに残存している場合がある。堆積物や遺構埋土などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や植物利用の実態を明らかにすることができる。

2) 試料

試料は、古墳石室内から採取された土壤試料1点である。

3) 分析法

以下の手順で、種実の抽出と同定を行った。

- 1 試料500cm³に水を加えて泥化
- 2 攪拌した後、0.25mmの篩で水洗選別
- 3 双眼実体顕微鏡下で検鏡・計数

同定は種実の形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4) 結果

①分類群

分析の結果、草本4分類群が同定された。分析結果を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に形態的特徴と写真に示したものの大さきを記載する。

[草本]

オオムギ *Hordeum vulgare* L. 果実(炭化) イネ科 長さ×幅: 5.28mm × 3.00mm、4.39mm × 2.84mm、4.91mm × 3.17mm

炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。

ナデシコ科 *Caryophyllaceae* 種子 長さ×幅: 0.99mm × 0.92mm
黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

マメ科 *Leguminosae* 種子 マメ科 長さ×幅×厚さ: 1.60mm × 1.53mm × 0.94mm
黒色で楕円形を呈し、縦に一本の溝状の筋が走る。

カラスウリ *Trichosanthes cucumeroides* Maxim. 種子 ウリ科 長さ×幅: 5.92mm × 6.26mm
灰褐色でいびつな五角形を呈す。中央は帯状に隆起し、その表面は粗い。

②種実群集の特徴

すべて草本であり、オオムギ種実3、ナデシコ科種子1、マメ科種子1、カラスウリ種子1が検出された。

5) 所見

古墳石室内から採取された土壤試料について種実同定を行った。その結果、オオムギ種実3、ナデシコ科種子1、マメ科種子1、カラスウリ種子1が検出された。オオムギは栽培植物であり、ナデシコ科、マメ科、カラスウリは畑や集落などの乾燥した人為地およびその縁辺に生育する草本類である。

放射性炭素年代測定(第I章)では、オオムギで470±20年BP(暦年代: AD1415~1450年)の年代値が得られていることから、今回の試料は古墳が築造された当初ではなく、後代に入り込んだ堆積物に由来する可能性が考えられる。

(3) 元岡・桑原遺跡第56次調査1区における放射性炭素年代測定

1) 試料と方法

次表に、放射性炭素年代測定試料の採取箇所と種類および前処理・調整法と測定法を示す。

試料No.	地点・層準	種類	前処理・調整法	測定法
No. 1	谷部下層出土、木片	木片	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS

AMS: 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

2) 測定結果

加速器質量分析法(AMS)によって得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(¹⁴C)年代および暦年代(較正年代)を算出した。次表にこれらの結果を示し、図1に暦年較正結果(較正曲線)を示す。

試料	測定 (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代：年BP (曆年較正用)	曆年代 (較正年代) : cal-	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
1	19794	-25.03 ± 0.11	1945 ± 20 (1947 ± 22)	AD20-80(68.2%)	AD1-130(95.4%)

BP : Before Physics (Present), cal : calibrated, AD : 紀元後

①デルタ $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正する。

②放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いた。統計誤差 (±) は 1 シグマ σ (68.2%確率) である。 ^{14}C 年代値は下 1 桁を丸めて表記するのが慣例であるが、曆年較正曲線が更新された場合のために下 1 桁を丸めない曆年較正用年代値も併記した。

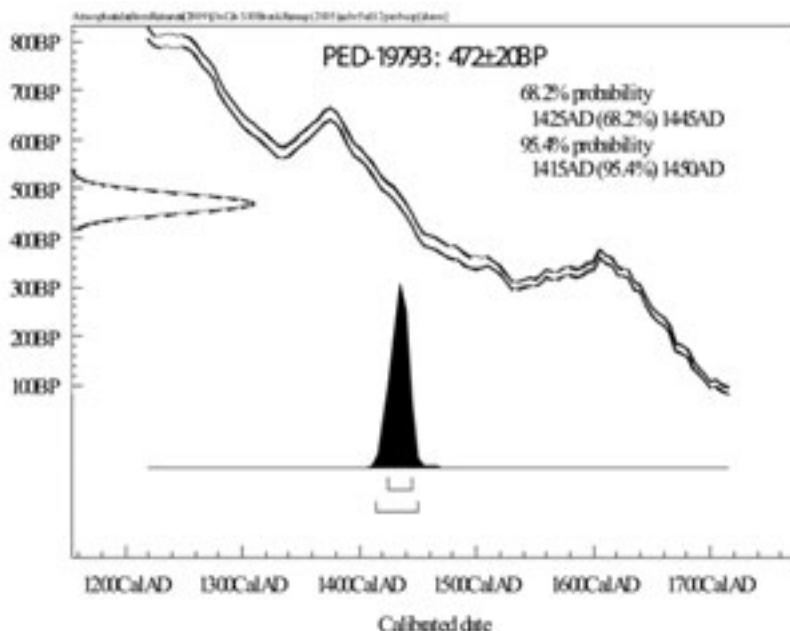
③曆年代 (Calendar Age)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、放射性炭素 (^{14}C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。曆年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 09、較正プログラムは OxCal 3.1 である。

曆年代 (較正年代) は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅で表し、OxCal の確率法により 1 シグマ σ (68.2%確率) と 2 σ (95.4%確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の 1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。() 内の % 表示は、その範囲内に曆年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

3) 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No. 1 の木片では 1945 ± 20 年 BP (2 σ の曆年代で AD1 ~ 130 年) の年代値が得られた。



(4) 元岡・桑原遺跡第56次調査1区におけるテフラ(火山灰)分析

1) はじめに

テフラ層の岩石学的諸特性（重軽鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスの屈折率）を明らかにすることにより、指標テフラとの対比を試みた。なお、テフラの岩石学的諸特性や年代については新編火山灰アトラス（町田・新井, 2003）などを参照した。

2) 試料

分析試料は、堆積土層採取試料1点である。

3) 分析方法

テフラの岩石学的諸特性（重軽鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスの屈折率）について、以下の方法で分析を行った。

①前処理

湿式用の篩（ $2 \sim 4 \phi$ ）を用いて水洗しながら各粒径ごとに篩分けを行い、 $2 \sim 3 \phi$ （0.250～0.125mm）と $3 \sim 4 \phi$ （0.125～0.063mm）の粒子について超音波洗浄を行って分析対象とした。

②重軽鉱物組成

$3 \sim 4 \phi$ （0.125～0.063mm）の粒子を対象にテトラブロムエタン（比重：2.96）を用いて重液分離を行い、重鉱物と火山ガラスを含む軽鉱物のフラクションに区分した。重鉱物のフラクションで得られた鉱物粒子は、磁性分離して磁性鉱物を秤量した。重鉱物粒子はレーキサイドセメントで封入してプレパラートを作成し、100倍の偏光顕微鏡下で重鉱物の鑑定を行った。

③火山ガラスの形態分類

火山ガラスの形態分類は、吉川（1976）や町田・新井（1978）の分類があるが、ここでは気泡（bubble）の大きさ、ガラスの厚さ、気泡の形状などを指標にして定めた遠藤・鈴木（1980）の分類基準に従った。以下にその基準を示す。

A型：気泡の曲率半径が大きく火山ガラスの壁が薄い平板状の火山ガラス

A'型：気泡と気泡の接合部が気泡の壁の平板上にXやY字状の稜を持つ火山ガラス

B型：平板状であるが火山ガラスの壁が異常に厚く屋根瓦状、カマボコ状やフレーク状の火山ガラス

C型：A、A'型に比べて小さな曲率を持つ火山ガラスで透明なガラスの壁に幾つかの気泡が集まつてできた火山ガラス

D型：C型とほぼ同じ曲率で、その気泡が管状に細長く引き伸ばされ、透明な火山ガラスに数本の平行した稜を持つ火山ガラス

E型：D型よりも管が細長く纖維を束ねた形状を示す火山ガラス

F型：最も曲率半径が小さく、不定形の多数の気泡を持った軽石状の火山ガラス

④火山ガラスの屈折率測定

テフラに含まれる火山ガラス（n1）について、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質社製、MAIOT2000）を用いて屈折率測定を行った。

4) 分析結果および考察

テフラの岩石学的諸特性（重軽鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスの屈折率）を表1および図2に示す。

堆積土層採取試料は、重鉱物の含有率が17.9%であり、このうち83.6%が普通角閃石、8.7%が単斜輝石、2.4%が斜方輝石、0.4%が黒雲母、0.4%がジルコンである。 $3 \sim 4 \phi$ （0.125～0.063mm）

の粒子には火山ガラスが含まれていないが、 $2 \sim 3 \phi$ ($0.250 \sim 0.125\text{mm}$) の粒子にはA'型（写真3）やC型の火山ガラスがわずかに含まれていた。これらの火山ガラスをハンドピッキングで集めて12個について屈折率（n1）を測定した結果、火山ガラスの屈折率（n1）は1.4995-1.5008の値を示した。この値は姶良Tn火山灰（AT、約2.6～2.9万年前）の屈折率の範囲に入る（図2）。したがって、本試料には極めて少量ながらATに由来する火山ガラスが含まれていると考えられる。

文献

- 吉川周作（1976）大阪層群火山灰層について。地質学雑誌, 82, p.497-515.
- 町田洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—姶良Tn火山灰の発見とその意義。科学, 46, p.339-347.
- 町田洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰。第四紀研究、17, p.143-163.
- 遠藤邦彦・鈴木正章（1980）立川・武藏野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学, No.13, p.19-30.
- 笠原安夫（1985）日本雑草図説、養賢堂, 494p.
- 笠原安夫（1988）作物および田畠雑草種類。弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣出版, p.131-139.
- 吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出。月刊考古学ジャーナルNo.355, ニューサイエンス社, p.2-14.
- 南木睦彦（1993）葉・果実・種子。日本第四紀学会編 第四紀試料分析法、東京大学出版会, p.276-283.
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の14C年代, p.3-20.
- 町田洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺—。東京大学出版会, p.58-63.
- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, p.355-363.
- Paula J Reimer et al., (2009) IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, p.1111-1150.

表1 元岡・桑原遺跡群第56次調査1区における種実同定結果

分類群	和名	部位	1区
学名			
Herb	草本		
<i>Hordeum vulgare</i> L.	オオムギ	果実（炭化）	3
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	1
Leguminosae	マメ類	種子	1
<i>Trichosanthes cucumeroides</i> Maxim.	カラスウリ	種子	1
Total	合計		6
		(500c m ³ 中 0.25mm 篩)	

表2 元岡・桑原遺跡群第56次調査2区におけるテフラ分析結果

試料重量 (g)	0.357	
軽鉱物 (g)	0.289	
重鉱物 (g)	0.064	
磁性鉱物 (g)	0.004	
回収重量合計 (g)	0.357	
重鉱物組成 (個)	斜方輝石	7
	単斜輝石	25
	普通角閃石	240
	カンラン石	0
	黒雲母	1
	ジルコン	1
	不明・その他	13
	合 計	287
火山ガラス (個)	0	
非火山ガラス (個)	380	
火山ガラス形態分類 (個)	A型	0
	A'型	0
	B型	0
	C型	0
	D型	0
	E型	0
	F型	0

軽鉱物の含有率 (重量%)	80.95	
重鉱物の含有率 (重量%)	17.93	
磁性鉱物の含有率 (重量%)	1.12	
合 計	100.00	
回収率 (%)	100.00	
重鉱物組成比 (個数%)	斜方輝石	2.44
	単斜輝石	8.71
	普通角閃石	83.62
	カンラン石	0.00
	黒雲母	0.35
	ジルコン	0.35
	不明・その他	4.53
	合 計	100.00
火山ガラス形態分類 (個数%)	A型	0.00
	A'型	0.00
	B型	0.00
	C型	0.00
	D型	0.00
	E型	0.00
	F型	0.00
火山ガラス含有率 (個数%)	0.00	
3 φ 火山ガラス屈折率 (n_i)	最大値	1.5008
	最小値	1.4980
	平均値	1.4995

元岡・桑原遺跡群第56次調査の種実



5. 考察

(1) 中世の 56 次 1 区・G – 6 号墳

1) 掘立柱建物の規模と配置

今回の調査では、1 区で中世の掘立柱建物を大小合わせて 6 棟確認されている。建物の規模は大型の建物で床面積 30m²、小型の建物で 8m² の広さで、機能に応じた規模の建物が築造されているものと考えられる。

大型の建物は SB – 21 ~ 23 の 3 棟で、いずれも規模が 2 間 × 3 間、梁行 7m、桁行 4m、柱穴底径 30cm で、各建物の規模が近似しており、何らかの規格に基づいて建てられた可能性が高い。さらに建物の配置も梁行・桁行の方向が並行しており、建て替えの際に前代の建物の配置を踏襲している可能性が高く、間を置かずに連続して建物が建て替えられたものとみられる。

建物の配置と建て替えの状況をもう少し詳しく見ていくと、大型の建物はいずれも造成段の奥に配置され、各建物の軸線は平行または直交しており、建物配置でも高い規格性を有している。建物の位置関係と重複状況から同時期と見られる建物群をグルーピングすると以下のように考えられる。

(A グループ) SB – 21・SB – 27

(B グループ) SB – 22・SB – 24・SB – 26

(C グループ) SB – 23・SB – 25

C グループは A、B グループとは重複せず、両グループのいずれとも並行した可能性がある。A、B グループは建物が重複しており、柱穴の切り合いかから SB – 22 が SB – 21 より後出するものとみられるため、「A グループ → B グループ」の順で建て替えが行われたと推定される。

このグルーピングから、同時期の建物群は「大型建物 1 棟 + 小型建物 1 ~ 2 棟」で構成され、これに C グループの「大小建物各 1 棟」が加わるものと考えられ、一般的な「集落」と考えるには建物の棟数や規模が少ないようと思え、この建物群の性格についてさらに検討する必要があろう。

2) G – 6 号墳と掘立柱建物

この建物の機能について考える際に重要なのが、建物群の北側に隣接する G – 6 号墳である。G – 6 号墳の石室内の土層観察で、炭化物を多く含む 5 ~ 10cm の黒色土層が検出され、この面で青磁・白磁等の輸入陶磁器や陶器が出土するなど、中世の時期に人が入り込んで大掛かりに火を焚いた痕跡が認められている。(『元岡・桑原遺跡群 22』P.28・PP.34 – 35) この堆積層について科学的分析を試みた所、石室内の炭化物から大麦・豆・カラスウリ等の果実・種子が確認され、AMS による暦年代で AD1415 ~ 1450 年の測定値が得られている(本書 P.129)。玄室内から出土した青磁・白磁の時期とは 1 世紀ほど時期差があるものの、炭化物の堆積状況からみて、非常に長期間継続して玄室内で火を焚いたことが想定でき、堆積開始時期を示す資料と考えられる。

1 区から出土した青磁碗等は AMS の暦年代に近い時期のもので、建物群と石室内部の炭化物層との強い関連性が伺え、建物群は石室内で火を焚いた行為と関係するものであろう。

石室内で火を焚く行為、焼け残った炭化物に大麦やカラスウリ、豆類が含まれる意味については具体的な答えを提示するのは難しい。何かを生産・作成するための焚火ではなく、宗教的・儀礼的な焚火とみるほうが適当であろうか。そうなると、建物群は一番的な住居ではなく、祭祀を執り行うための施設としてみたほうが良さそうである。

SD – 01・02 の形状も、建物と G – 6 号墳の両者の関係を推し量るための資料となる。56 次の段

造成は、斜面を矩形に切り込んで造成し、斜面際に浅い溝を廻らしている（第3図）。また、段造成の前面には溝SD-01・02を設置して区画している。SD-01・02は建物が立つ造成面前面では斜面を横切るように直線的に延びており、G-6号墳北側で古墳を迂回して古墳奥壁石の際を回りこむ。SD-01・02の溝内を1つの境界とみると、境界の中で建物とG-6号墳が取り込まれて隣接する景観が復元される。

3) 建物群の性格と56次調査区の地理的位置

さらにこの建物群、ひいてはG-6号墳の中世における位置付けを考える上で、この56次の地理的な位置関係が一つの参考になるかもしれない。

1区は標高26mで、調査区からは南側に眺望が開けている。この調査区内からは、南に糸島平野と高祖山・井原山を望み、晴れた日には遠くに脊振山頂を望むことも可能である（本書P.142 図版2-2）。この、脊振山を直接目視できる条件が、建物群の存在や石室内での焚火に関係する可能性がある。

脊振山は古来より宝満山や英彦山と並ぶ山岳仏教的一大拠点で、山頂には上宮本坊として東門寺が、中腹には中宮靈仙寺が建立され、山中では経塚群や配石墓群が確認されており、脊振山自体が信仰のシンボル的な存在として認知されていたことは十分想定できる。

標高30m以下の、通常生活圏内の範囲で脊振山頂を展望できる地点は、糸島半島内では56次調査地点付近に限られる。脊振山を望めるこの地点が特別な場所として考えられ、関連の強い施設が作られたことも想定できなくはない。

（2）56次2区の弥生時代の土器溜りについて

谷部の調査である56次2区の土器溜りは規模としては小さいものの、単なる流れ込みによる堆積ではなく、その場で投棄された可能性の高い遺構として、当時の人々の活動を直接示す資料として考えられるものである。

2区が位置する谷は、南側の谷開口部付近は42・52次調査として弥生時代中期後半～後期初頭を中心とした縄文時代～古代の膨大な資料が堆積する大規模な土器溜りを検出・調査している。また、上游の谷奥側では58次調査で縄文早期の比較的規模の大きな遺構群・包含層を検出している。

42・52次調査区でも流路東側の河岸段丘面で縄文草創期の包含層が認められるが、流路の比較的高所で縄文時代草創期～早期の古い時期の遺構・遺物が分布する傾向が認められる。一方、谷中央部の低地は最下層で縄文晚期の遺物堆積が見られるが、本格的な遺物の投棄は弥生時代中期後半以降である。

56次2区で検出した土器溜りは弥生時代中期後半に位置付けられ、42・52次の土器投棄開始時期にあたるものとみられる。このことから、土器投棄の最初の段階では谷開口部の42・52次から中腹の56次2区まで広範囲にわたって投棄行為が行われたものと考えられる。その後、56次2区で継続的な土器投棄が認められないことから、時間の経過とともに土器投棄範囲が谷開口部に集中し、その結果として限定された範囲内に大量の土器が投棄されるという状況が生じたものとみられる。

投棄範囲の変化が、投棄する主体である集団形態の変化なのか、投棄行為そのものの変化やその背景にある祭祀意識の変化にあるのかは不明である。

付録 元岡古墳群G－6号墳石室デジタルデータについて

1. 概要

福岡市教育委員会では、元岡古墳群G－6号墳の遺構の保全と活用の両立を図るため、古墳石室を埋め戻す前に石室の正確な形状を記録すべく、石室内の三次元レーザースキャンとデジタルオルソ画像の作成を平成24年度に実施した。業務は株式会社パスコに委託し、概要は以下の通りである。

- ①石室内の三次元レーザースキャン・三次元石室モデルの作成
 - ②石室内の高精細デジタルオルソ画像作成
 - ③石室内部のCGムービー作成
- ①・②は以下に成果の一部を掲載する。③は今後展覧会等での放映等での活用が期待される。

2. 石室CG画像及びデジタルオルソ画像



石室外観（東から）



羨門から内部を覗く



玄室内俯瞰（南東から）



羨道内から見た玄室



石室床面俯瞰（西から）



玄室から見た羨道

前面



天井面



左側面



底面



右側面



背面



0 1 2 3 (単位 : m)



1 元岡・桑原遺跡群遠景（南東から） ※矢印が56次調査地点



2 1区全景（北東から）

図版2



1 1区全景（南東から）



2 1区全景（北西から）



3 SD-01 南側部分
(南から)



1 SD-02 G-6北側部分
(西から)



2 SD-02 土層 (北から)



3 SK-03 (南から)

図版4



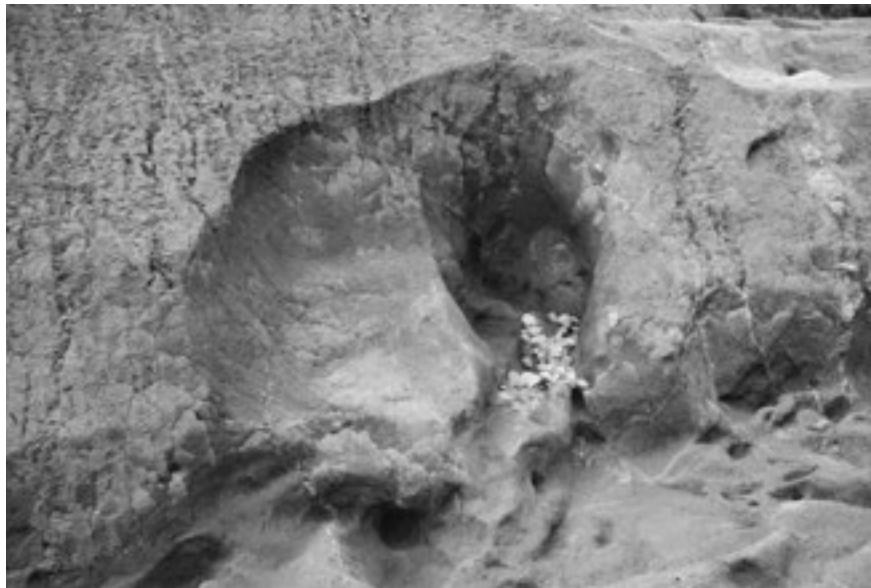
1 SK-04 (西から)



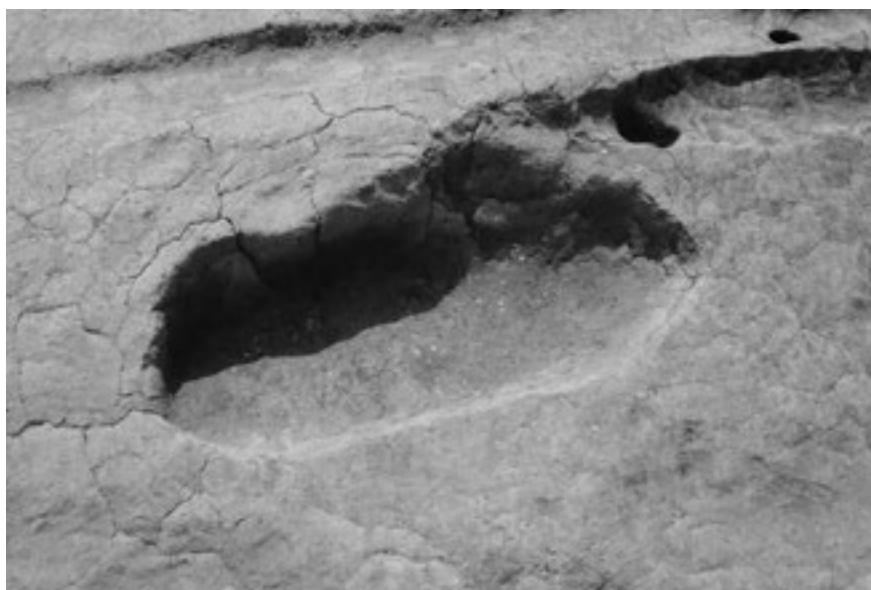
2 SK-05 (北から)



3 SK-06 (北西から)



1 SK-07 (東から)



2 SK-08 (南東から)



3 2区全景 (東から)

図版6



1 2区土器溜り1
(南東から)



2 2区土器溜まり2
(東から)



3 2区調査区北壁土層
(東から)

VI. 56次調査3区の報告

1. 調査の概要

調査区は、西区大字元岡に所在し、糸島市との市境に位置する。現況は盛土造成され平場となっているが、本来は南東方向に開口する谷地形で、北東側の丘陵上には元岡古墳群G群が位置する。以前は果樹園が営まれ、果実運搬用のモノレールが設置されていた。

発掘調査は、九州大学農学部演習圃場地造成に伴い、約2000m²を対象として開始した。平成23年7月21日に伐採作業を行い、同月25日から表土剥ぎに着手した。盛土が非常に厚く、表土剥ぎにはおよそ1か月を要した。表土を除去し、本来の谷地形とその覆土（包含層）を検出した。谷の北東斜面は、地山（花崗岩風化土）を削り出して段造成されていたが、谷の覆土と切り合う複数の流路が確認された。谷の覆土では、弥生時代から中世までの包含層と遺構面を確認した。まずは、谷の埋没状況の確認を行うとともに、調査区の西半部（谷の上部）から遺構の掘削を進め、10月13日・19日に西半部の全景写真を撮影した。

しかし、調査の途中で造成計画の見直しがあったため、西半部の調査にとどめ、東半部は谷の埋没状況を確認するためのトレンチ調査のみを行い、平成23年11月に調査を終了し、現状保存を行った。

2. 調査の内容

以下、遺構別に検出遺構と出土遺物について記載する。なお、出土遺物の法量等の詳細については、表2の遺物観察表を参照されたい。

(1) 谷

S X 0 1 (第3・5図)

南東方向に開口する谷で、西南側の立ち上がりが調査区外に伸びるため、全体の幅は不明だが、北東側の立ち上がりから谷底までの幅が約13mであるため、全体の幅は約26mと推測される。

まず、谷の埋没状況を確認するため、谷を横断するトレンチを設定した（第3図）。谷の包含層は、

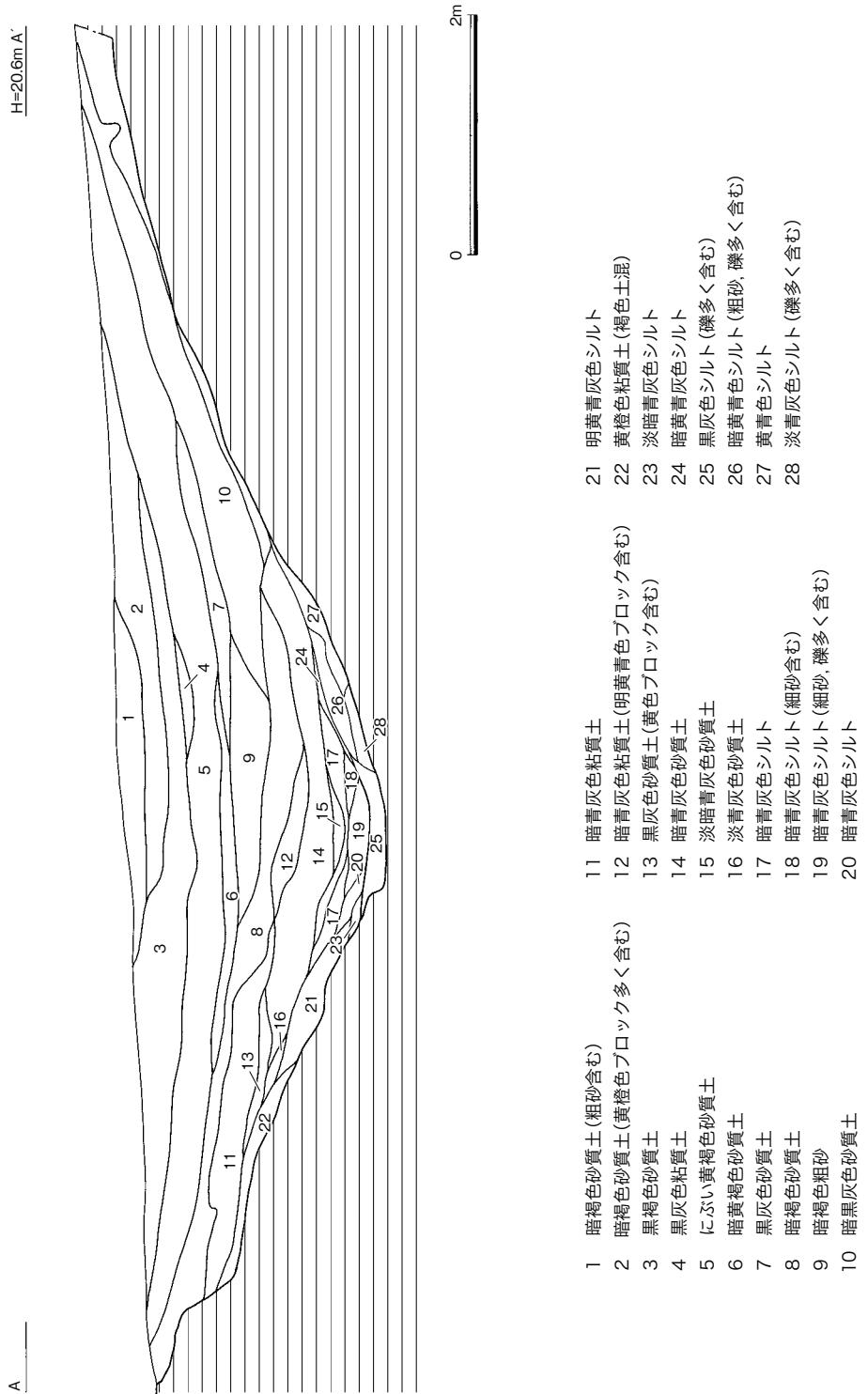


第1図 56次調査区遠景（南から）

右手が56次1・2区、左手が3区

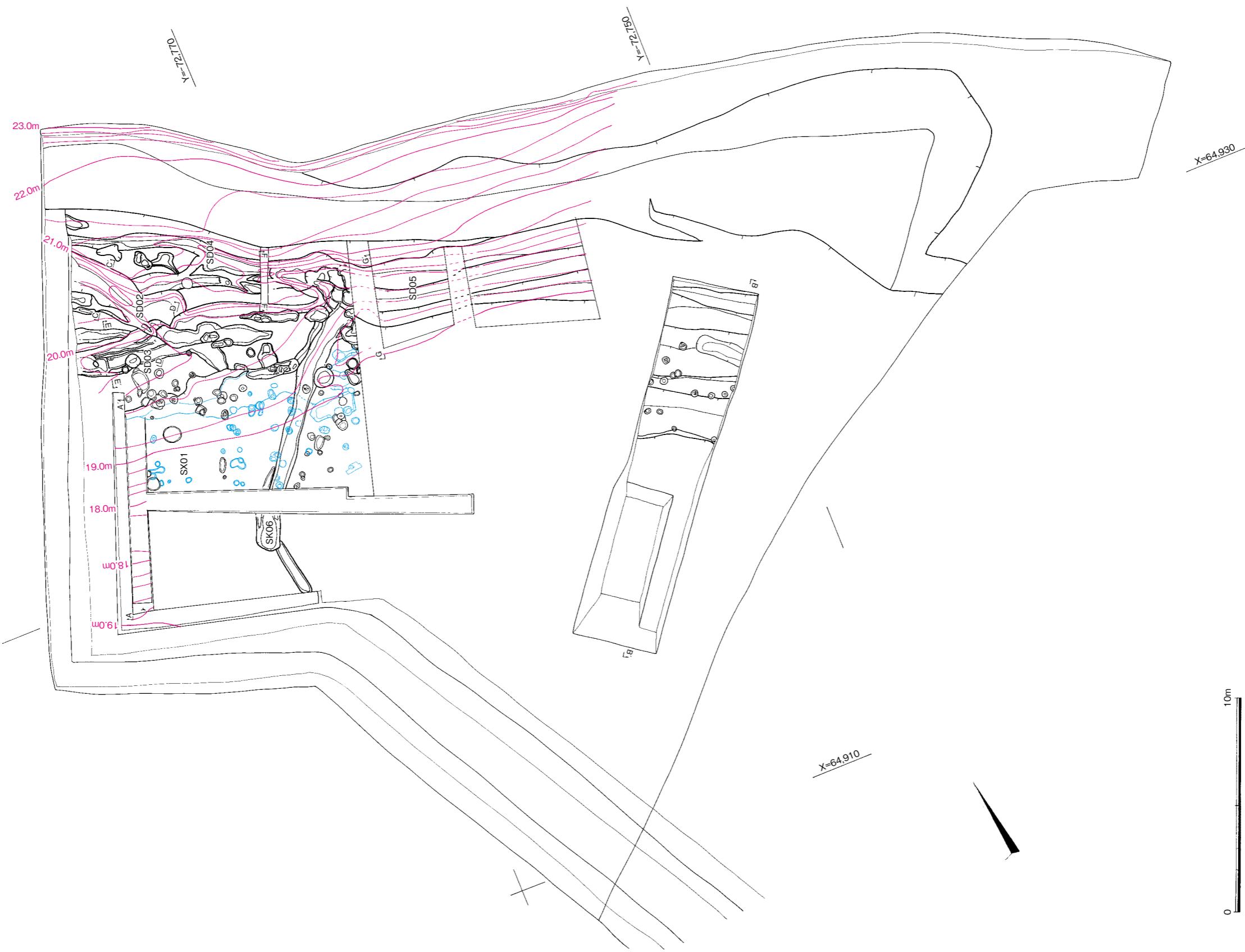


第2図 SX01 遺構検出状況（東から）



第3図 SX01 土層断面実測図 (1/60)

第4図 56次3区調査区全景 (1/200)

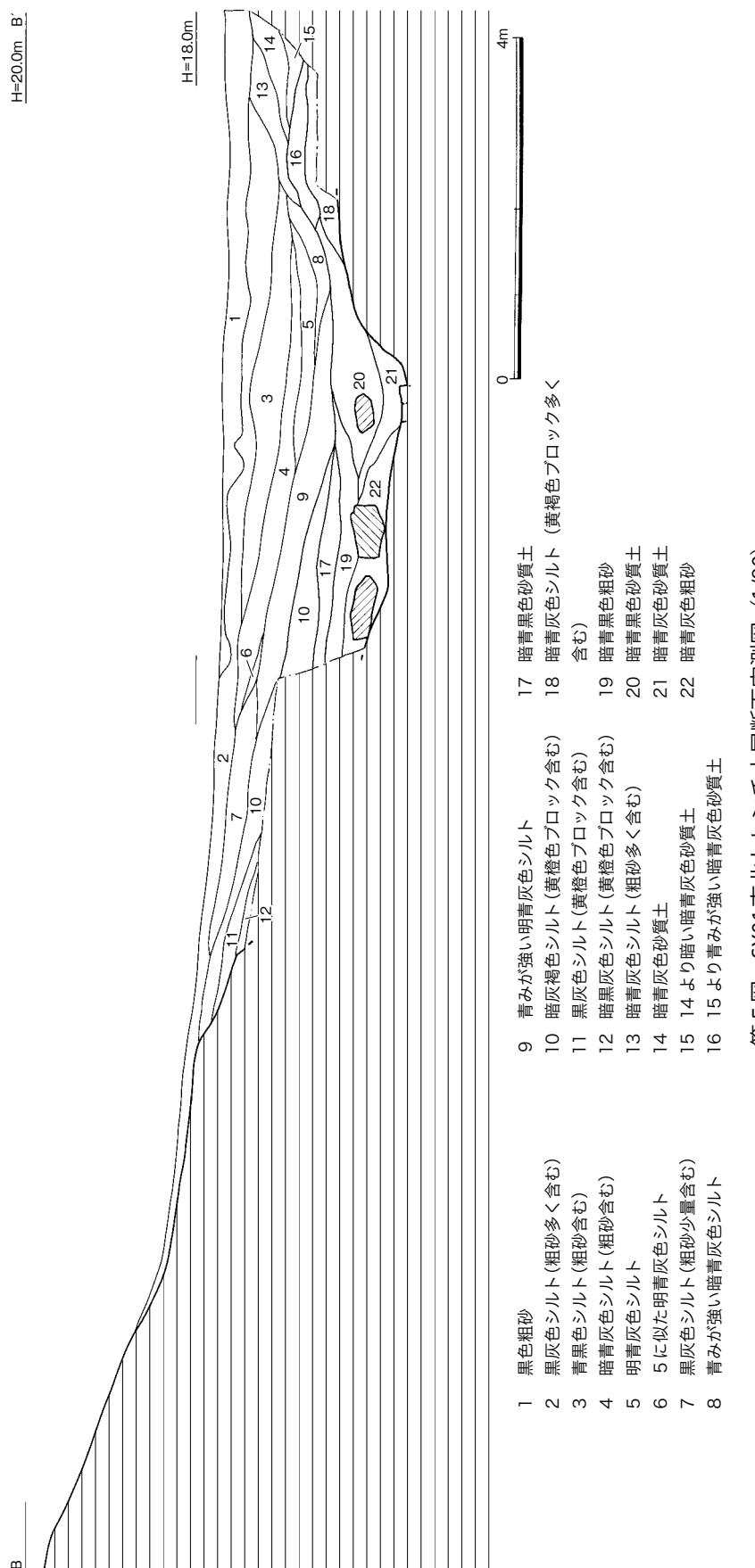


上層：第1～4層の黒褐色砂質土（古代～中世）、中層：第5～6層の黄褐色砂質土（古代）、下層：第7～10層の黒灰色シルト（古代）。最下層：第11～28層の青灰色シルト（弥生時代中～後期）の4つの大別できる。土層断面からみて、弥生時代～古代にかけては急傾斜の落ち込みであったが、古代～中世期には比較的緩慢な傾斜地であったと分かる。埋没状況は、谷の東半部に設定した南北トレーンチ（第5図）でも同様であることを確認した。

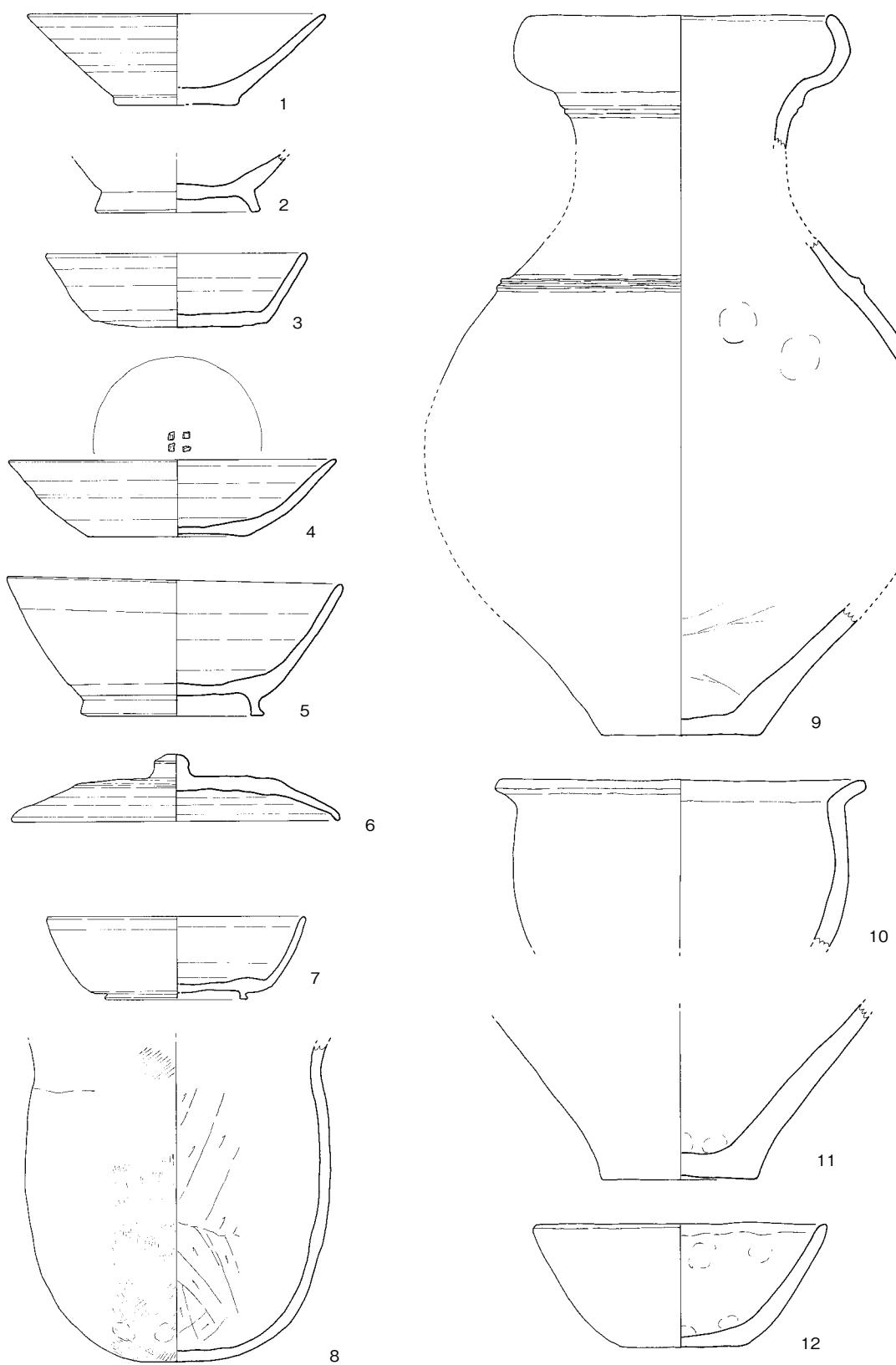
谷の北東斜面には自然流路（SD02～SD05）があり、山水の激しい流れがみてとれる。また、斜面には遺構が形成されなかったか、あるいは後世の段造成により削平されたためか、遺構は確認できない。

谷の覆土上では、便宜的に上層上面（第1面）と下層上面（第2面）を検出面として調査し、土坑SK06やピット、土器の集積を確認した。しかし、第1面では谷の覆土と遺構の埋土の違いが判然としなかったため、第2面で検出した遺構が実際には上層から掘り込まれている可能性もある。柱穴には柱痕跡が残るものもあり、掘立柱建物が数棟存在した可能性があるが、建物の復元には至っていない。

また、土層（A-A'）において、花粉分析のための試料を採取



第5図 SX01南北トレーンチ土層断面実測図（1/80）



第6図 SX01出土遺物実測図 (1/3)

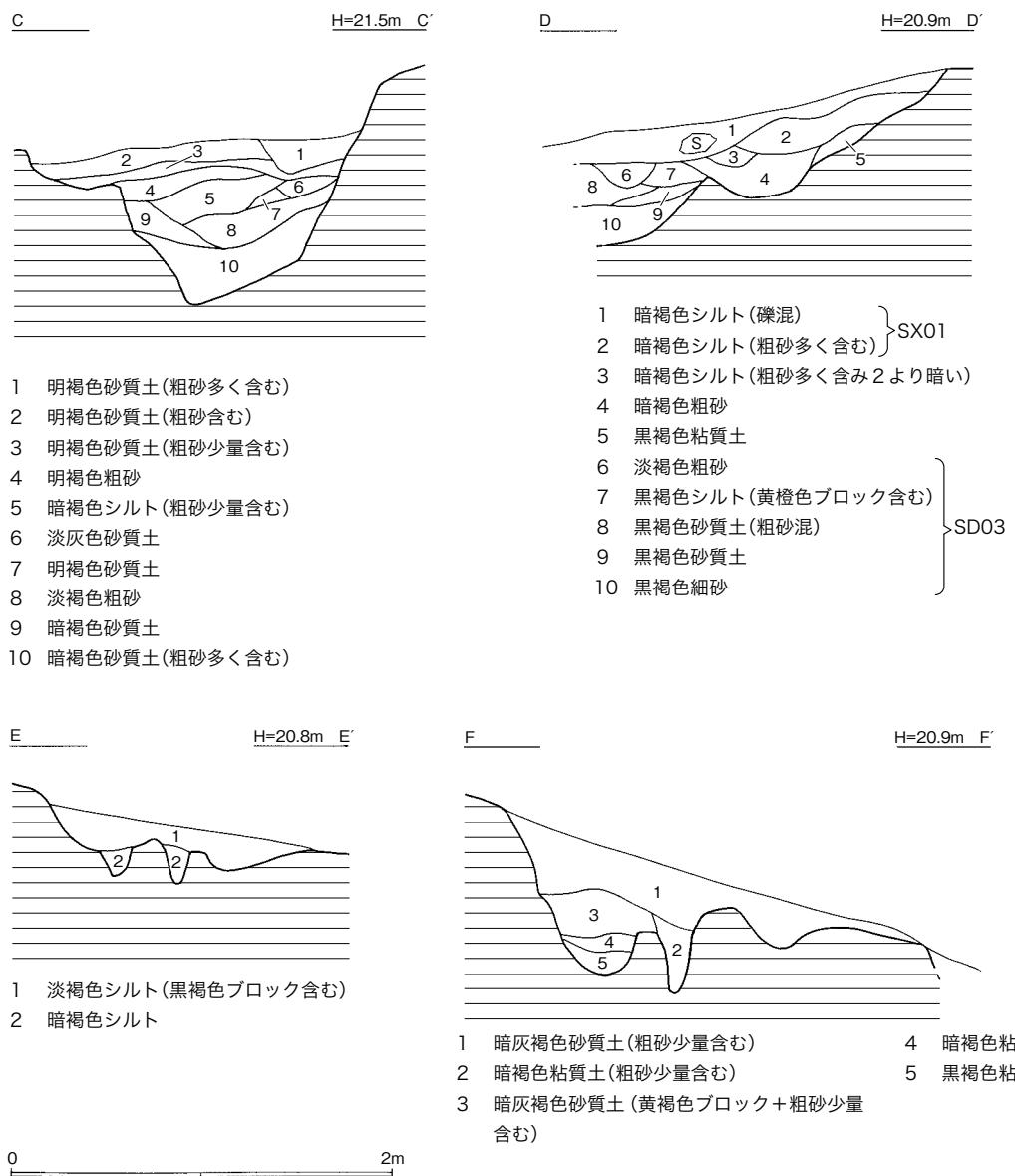
0 10cm

した。試料①—第27層、試料②—第26層、試料③—第25層、試料④—第21層、試料⑤—第19層、試料⑥—第14層、試料⑦—第12層、試料⑧—第8層、試料⑨—第10層、試料⑩—第2層の計10サンプルを採取した。その結果は「3. 花粉分析」に記す。

遺物は、弥生土器、須恵器、土師質土器、陶磁器のほか、図示していないが鉄滓が出土した。

出土遺物（第6図）

1は越州窯系の青磁碗。低い輪高台で、体部は直線的に開く。釉は灰オリーブで透明感はなく、外底脇までかかる。上層出土。2は土師器・椀の底部。やや高い高台は若干外に開く。全体に磨滅が著しい。上層出土。3は、須恵器・壺。底部は平底で、直線的に外に開く。底面はヘラ切り未調整。内底部は回転ナデ後、不定方向にナデる。上層出土。4は土師器・壺。底部は平底で、やや丸みを帯びながら、外に開き、口唇部もやや外反する。外部には回転ナデの痕跡が強く残る。内底部には中央に刻印のような4つの小さな窪みが残る。中層出土。5は土師器・高台付椀。高台はやや外に開き、接地面が外反する。体部はやや丸みを帯びながら外に開く。内外面ともに磨滅が著しい。中層出土。6



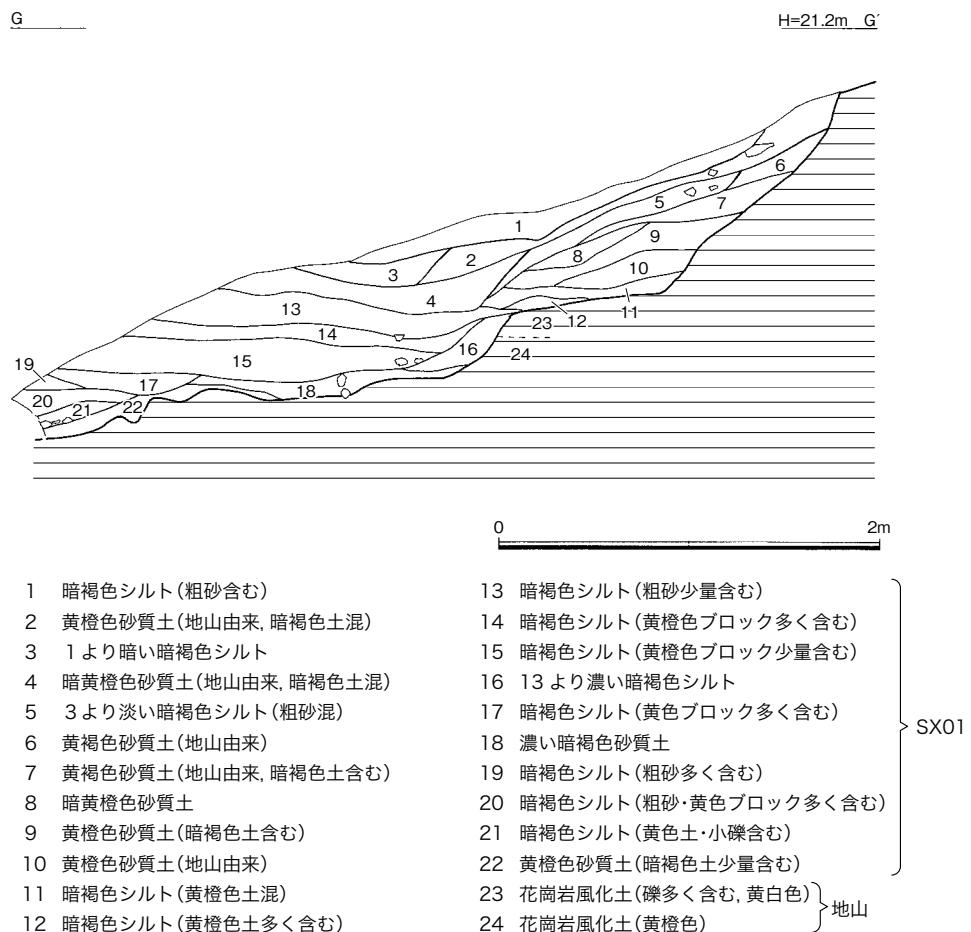
第7図 SD02・03・04土層断面実測図（1/40）

は須恵器のつまみ付き蓋。口縁部は丸く仕上げる。天井部は平坦で、ヘラケズリを残す。中層出土。7は須恵器・高台付坏。高台は短く、若干外に開く。体部は回転ナデで仕上げる。下層出土。8は弥生土器・甕。口唇部のみ欠損する。口縁はやや外反し、胴部は若干膨らむ。底部はやや丸みを帯びた平底である。中層出土。9は弥生土器の丹塗り袋状口縁壺。丸く仕上げた袋状口縁の下部と肩部に凸帶をめぐらす。底部は平底で、内面に板状工具の痕跡が残る。外面全体に丹塗りを施す。中層出土。10は弥生土器甕の口縁から胴部片。口縁は「く」の字形に屈曲する。最下層出土。11は弥生土器・甕の底部片。平底の底部から直線的に開く。全体に磨滅が著しい。最下層出土。12は弥生土器・鉢。底部や平底で、体部は直線的に外に開き、後円部は丸く仕上げる。内面には指押さえの痕跡が残るが、外面は磨滅が著しい。最下層出土。

(2) 溝

SD02 (第7図)

谷の落ち際を流れる幅1.5～2m、深さ0.7～1mmの自然流路で、SD03を切り、上部には谷SX01上層で覆われる。覆土は、基本的に地山由来の明褐色砂質土で、粗砂を多く含む。遺物は、土器片が少量出土したのみで、図示はできなかった。



第8図 SD05土層断面実測図 (1/40)

SD03 (第7図)

谷の落ち際を流れる幅1.2～1.7m、深さ30～40cmの自然流路で、SD02に切られる。溝の底面は深く抉れ、水流の勢いが看取される。

遺物は、須恵器片が出土した。

出土遺物 (第10図)

13は須恵器の返り付きの蓋片。外面一部に回転ヘラケズリが残る。

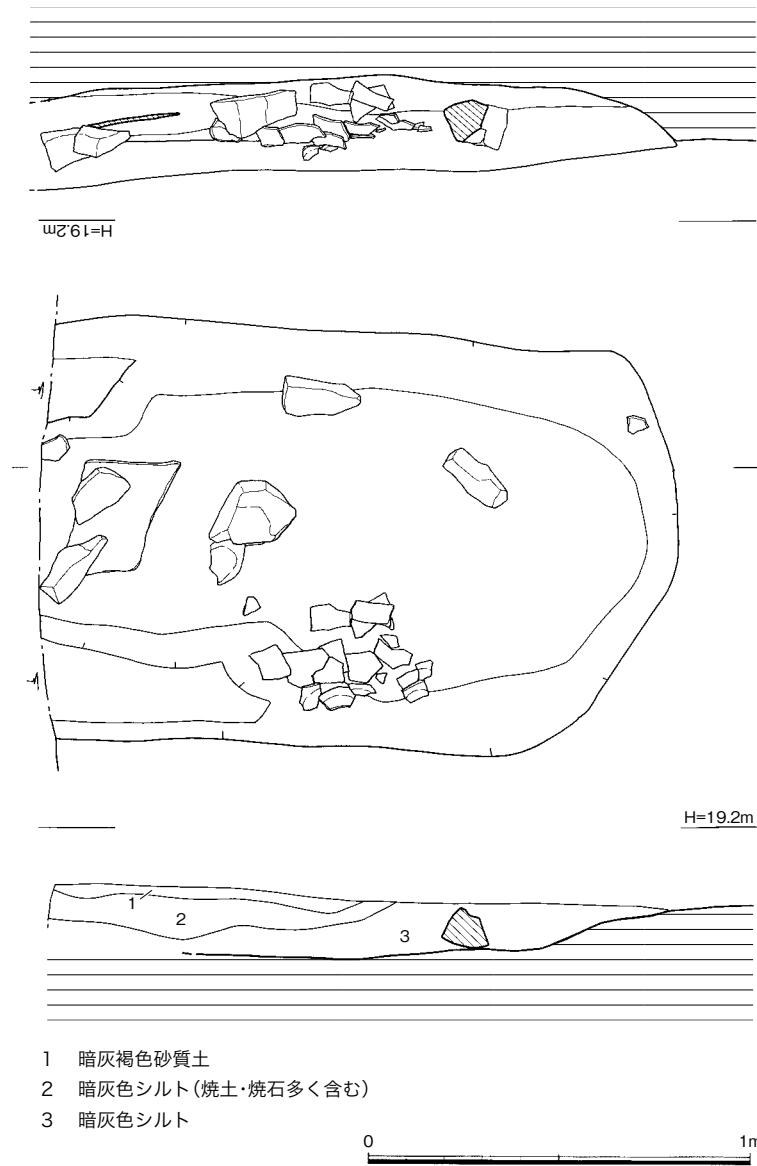
SD04 (第7図)

谷の落ち際を流れる幅0.8～1m、深さ20～90cmの自然流路である。SD03と同様に溝の底面は深く抉れ、水流の勢いが看取される。

遺物は、土師器が出土した。

出土遺物 (第10図)

14は土師器・皿。外底部には回転糸切り痕と板状圧痕を残す。体部は丸みを帯びながら短く立ち上がる。



第9図 SK06実測図 (1/20)

SD05 (第8図)

谷の落ち際を流れる幅2.5～3m、深さ50～70cmの自然流路で、SX01上層を切る。覆土は、基本的に地山由来の明褐色砂質土で、粗砂を多く含む。

遺物は、土器片が少量出土したのみで、図示はできなかった。

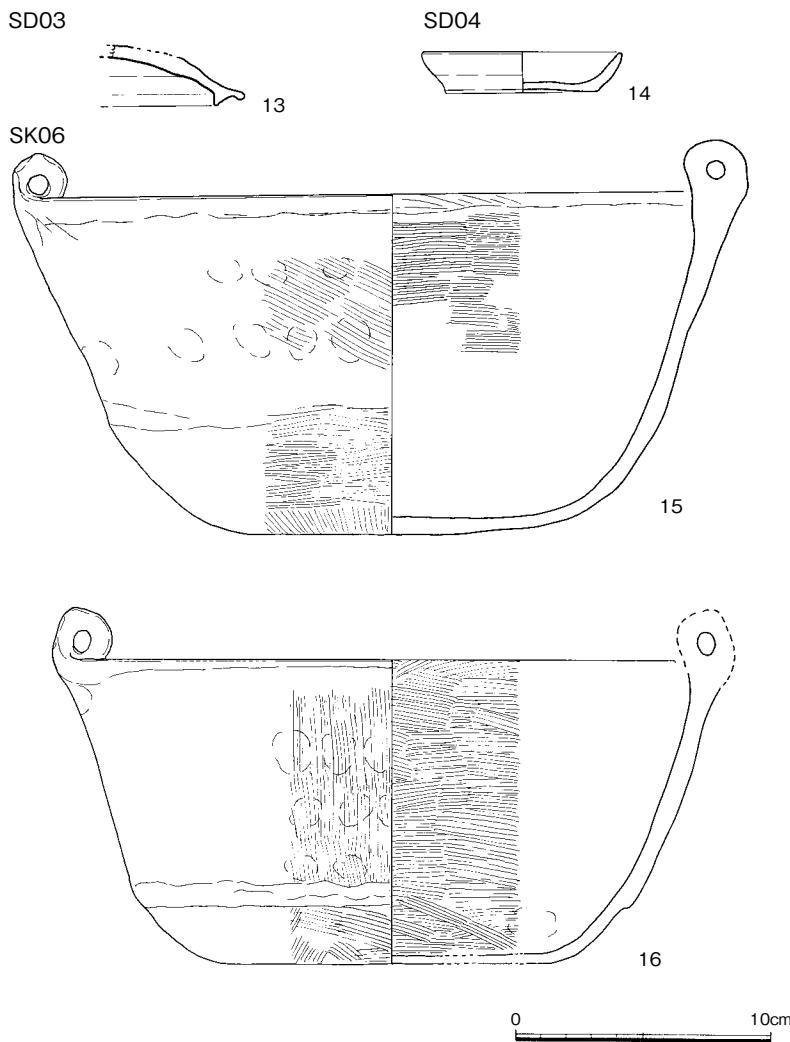
(3) 土坑

SK06 (第9図)

SX01第1面で確認された土坑で、短軸1.1m、長軸1.7m以上を測る。覆土には焼土や焼石を多く含む。土坑内には被熱した土師質の鍋が出土した。

出土遺物 (第10図)

15・16は、土師器・鍋。15は底部が平底で、体部は直線的に立ち上がり、丸い孔を空けた耳を2か所付ける。内面は横方向、体部外面は斜め方向、外底部は縦・横方向に細かい刷毛調整を施す。外面全体にススが付着する。16は、平底からやや丸みを帯びながら体部が立ち上がる。15と同様に、丸い孔を空けた耳を2か所付ける。内面は横方向、体部外面は縦方向、外底部は縦・横方向に細かい刷毛調整を施す。外面全体にススが付着する。



第10図 SD03・SD04・SK06出土遺物実測図 (1/3)

3. 花粉分析

株式会社 古環境研究所

(1)はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

(2)試料

分析試料は、SX01から採取された計10点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図(第11図)に示す。

(3)分析法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm³を秤量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加えて15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水し、アセトトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す
- 6) 再び冰酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比を行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(ー)で結んで示した。イネ属については、中村(1974、1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

(4)結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉3、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉9、シダ植物胞子2形態の計17である。なお、寄生虫卵は認められなかった。分析結果を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真(第12図)を示す。以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

クマシデ属ーアサダ、シイ属、コナラ属コナラ亜属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科—イラクサ科、ユキノシタ科、バラ科

[草本花粉]

イネ科、イネ属型、ギシギシ属、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

单条溝胞子、三条溝胞子

2) 花粉群集の特徴

下位の試料①、試料②では花粉が検出されなかったが、試料③ではアブラナ科が少量検出された。試料④、試料⑤では、ヨモギ属などが検出されたが、いずれも少量である。試料⑥では、花粉密度が低く、草本花粉の占める割合が87%と極めて高い。草本花粉では、ヨモギ属が優勢で、タンポポ亜科、イネ科、アブラナ科、セリ亜科、キク亜科などが伴われる。樹木花粉では、クマシデ属—アサダ、シイ属、コナラ属コナラ亜属が認められた。試料⑦では、花粉が検出されなかった。試料⑧、試料⑨ではイネ科、ヨモギ属などが検出され、試料⑩ではイネ属型も認められたが、いずれも少量である。中世包含層の試料⑪では、イネ科が少量検出された。

(5) 花粉分析から推定される植生と環境

地山とされる層準では、花粉がほとんど検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたこと、土層の堆積速度が速かったこと、および水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが考えられる。

弥生時代包含層の試料⑥では、花粉密度が比較的低いことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、当時はヨモギ属を主としてタンポポ亜科、イネ科、アブラナ科、キク亜科なども草本類が生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属やコナラ属コナラ亜属なども樹木が分布していたと推定される。

弥生時代包含層のその他の層準では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、試料⑥と同様にヨモギ属などの草本類が生育していた可能性が考えられる。花粉が検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

古代包含層および中世包含層でも、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、古代包含層の試料⑨では少量ながらイネ属型が認められることから、周辺で稻作が行われていた可能性が示唆される。

文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p.

中村純（1967）花粉分析. 古今書院、p.82-110.

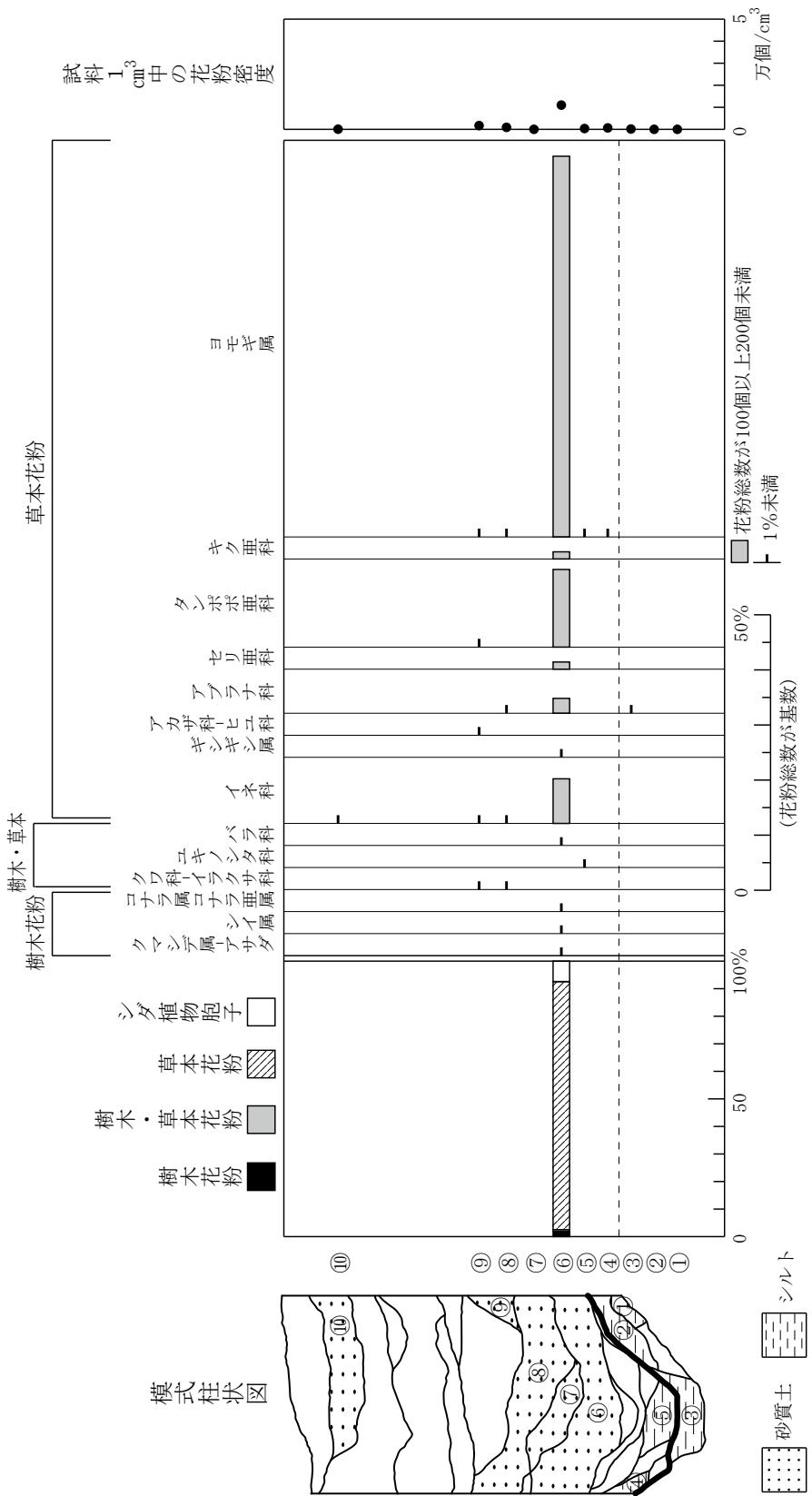
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究、13、p.187-193.

中村純（1977）稻作とイネ花粉. 考古学と自然科学、第10号、p.21-30.

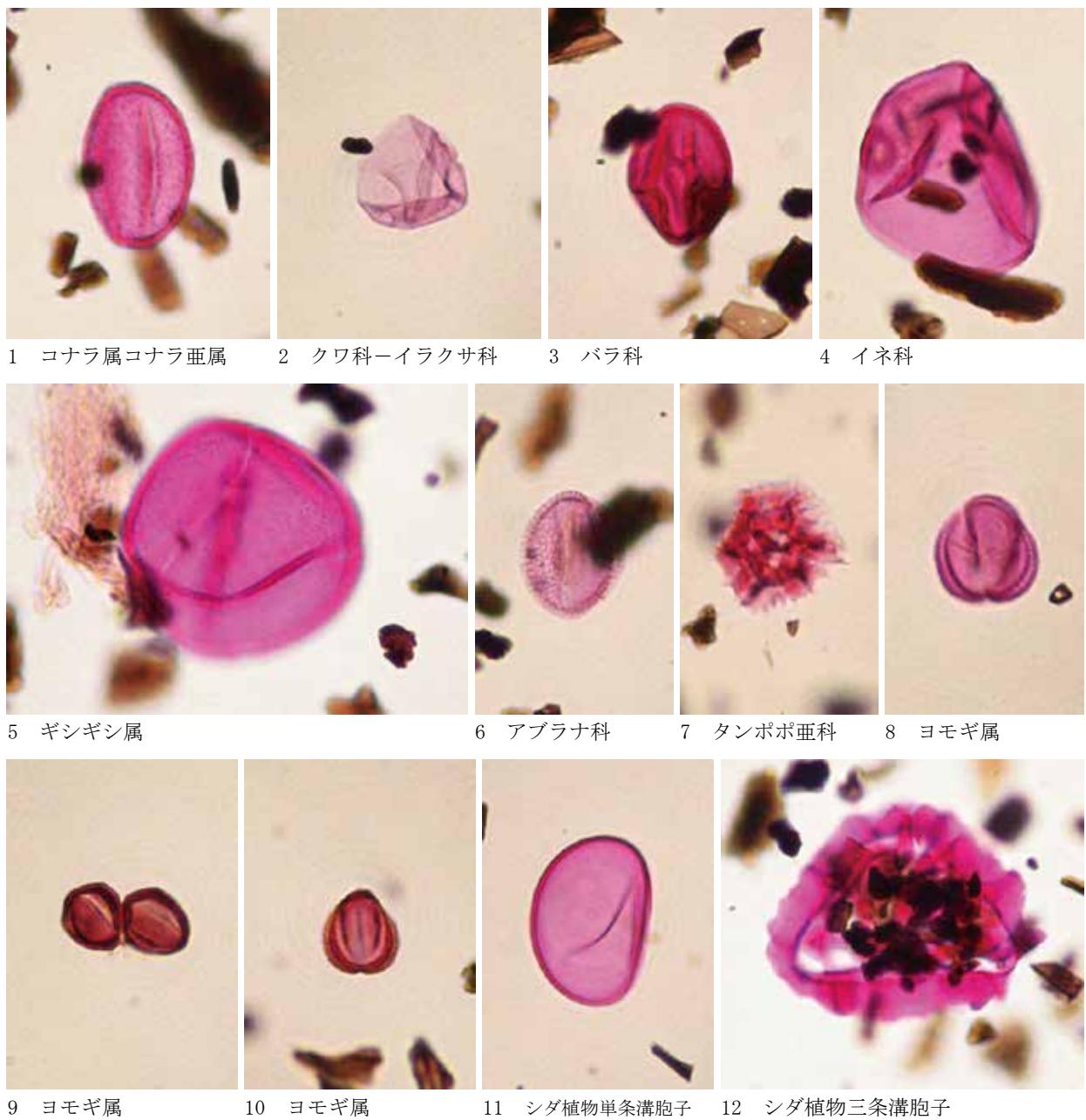
中村純（1980）日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p.

表1 56次調査3区花粉分析結果

分類群	和名	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
Arboreal pollen	樹木花粉										
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシテ属-アサダ										
<i>Castanopsis</i>	シイ属										
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ属	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉										
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科										
Saxifragaceae	ユキノシタ科										
Rosaceae	バラ科										
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉										
Gramineae	イネ科										
<i>Oryza type</i>	イネ属型										
<i>Rumex</i>	ギシギシ属										
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科										
Cruciferae	アブラナ科										
Apioidae	セリ亞科										
Lactucoideae	タンポポ亞科										
Astroideae	キク亞科										
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属										
Fern spore	シダ植物胞子										
Monolate type spore	単条溝胞子										
Trilate type spore	三条溝胞子										
Arboreal pollen	樹木花粉										
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉										
Nonarboreal pollen	草本花粉										
Total pollen	花粉总数	0	0	1	1	6	4	145	0	14	3
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度			1.4	6.4	3.6	1.1	149	0	15	24
		×10	×10	×10	×10	×10	×10	×10 ³	×10 ³	9.0	27
Unknown pollen	未同定花粉			1	1	6	0	12	0	4	1
Fern spore	シダ植物胞子	0	0	1	2	0				2	1
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(-)	(+)	(+)	(+)	(++)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)



第11図 SX01における花粉ダイヤグラム



— 10 μ m

1. 3. 5. 6. 11. 12は3区⑥より検出
2. 4. 7. 8. 9は3区⑨より検出
10は3区⑧より検出

第12図 SX01で検出された花粉

4.まとめ

今回、元岡・桑原遺跡群西端部の谷内について、調査を行った。調査前には、鉄・鉄器生産に関する遺構の検出を想定していたが、今回の調査では確認できなかった。一方、谷の覆土に形成された包含層では、弥生時代中期以降の土器や、8世紀初頭以降の須恵器・土師器・陶磁器が出土した。花粉分析によれば、弥生時代から比較的乾燥した環境であったことや、周辺にシイ属やコナラ属コナラ亜属など人間の利用しやすい樹木が生育していたことから、弥生時代以降、何らかの目的でこの土地が利用されていたのであろう。

56次調査区周辺の谷・丘陵部は、古今津湾の最奥部にあたり、今津湾を一望できる好所である。弥生時代から古代にかけて、政治・経済・文化的に重要な場所であったことは、42次調査や56次調査、元岡古墳群G群などの調査成果からも疑いない。今後、総括的な考察が行われることを期待したい。

表2 56次3区出土遺物観察表

番号	出土遺構	種類	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調
1	SX01上層	青磁	椀	(14.2)	(6.0)	4.3	精緻	堅緻	胎土:灰色 釉薬:灰オリーブ
2	SX01上層	土師器	椀	—	8.0	—	精緻、1mm以下の赤色粒、雲母多量、微量の白色粒含む	やや軟質	橙(7.5YR,6/6)
3	SX01上層	須恵器	壺	12.6	8.3	3.5	精緻、3mm以下の白色粒、1mm以下の黒色粒を含む	堅緻	灰色
4	SX01R-4 (中層)	土師器	壺	15.6	7.5	3.6	精緻、2mm以下の赤色粒、1mm以下の白色粒含む	良好	橙(7.5YR,7/6)
5	SX01R-2 (中層)	土師器	椀	16.1	8.7	6.6	精緻、6mm以下の白色粒、赤色粒、微量の雲母含む	軟質	橙(7.5YR,7/6)
6	SX01中層	須恵器	蓋	15.6	—	3.2	精緻、5mm以下の白色砂、1mm以下の黒色砂粒少量含む	堅緻	灰色
7	SX01中層	須恵器	高台付壺	(12.4)	(6.9)	3.9	精緻、3mm以下の白色粒多量、2mm以下の黒色粒含む	堅緻	灰色
8	SX01R-7 (中層)	弥生土器	甕	—	6.0	—	粗い、2mm以下の石英、長石粒、雲母多く含む	良好	灰褐色 (7.5YR,6/4)
9	SX00中層	弥生土器	壺	(14.2)	(7.6)	—	粗い、5mm以下の石英、長石、雲母を含む	良好	にぶい黄橙 (10YR,7/3)
10	SX01最下層	弥生土器	甕	(17.6)	—	—	粗い、3mm以下の石英、長石多く含む	良好	にぶい橙 (7.5YR,6/4)
11	SX01最下層	弥生土器	甕	—	(7.4)	—	粗い、3mm以下の石英、長石粒多量、雲母少量含む	良好	橙(7.5YR,6/6)
12	SX01最下層	弥生土器	鉢	(14.0)	5.4	5.8	粗い、2mm以下の石英、長石多量、2mm以下の赤色粒極少量含む	良好	橙(7.5YR,6/6)
13	SD03	須恵器	蓋	—	—	—	精緻、2mm以下の白色粒、黒色微粒子を含む	堅緻	灰色
14	SD04	土師器	皿	8.0	6.0	1.7	精緻、1mm以下の白色粒、赤色粒多量、雲母少量含む	良好	橙(7.5YR,6/6)
15	SK06R-7・9	土師器	鍋	28.8	10.0	13.5	精緻、1mm以下の白色粒含む	良好	橙(7.5YR,7/6)
16	SK06R-1～11	土師器	鍋	26.0	15.0	14.0	精緻、細かい砂粒含む	良好	橙(7.5YR,7/6)



調査区全景（北から）



SX01 土層断面（南から）

図版2



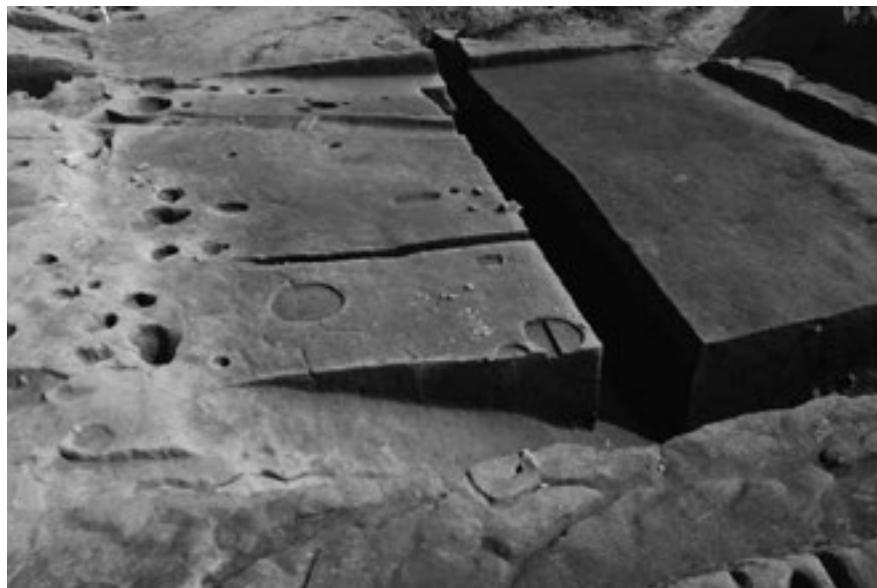
調査区全景（北西から）



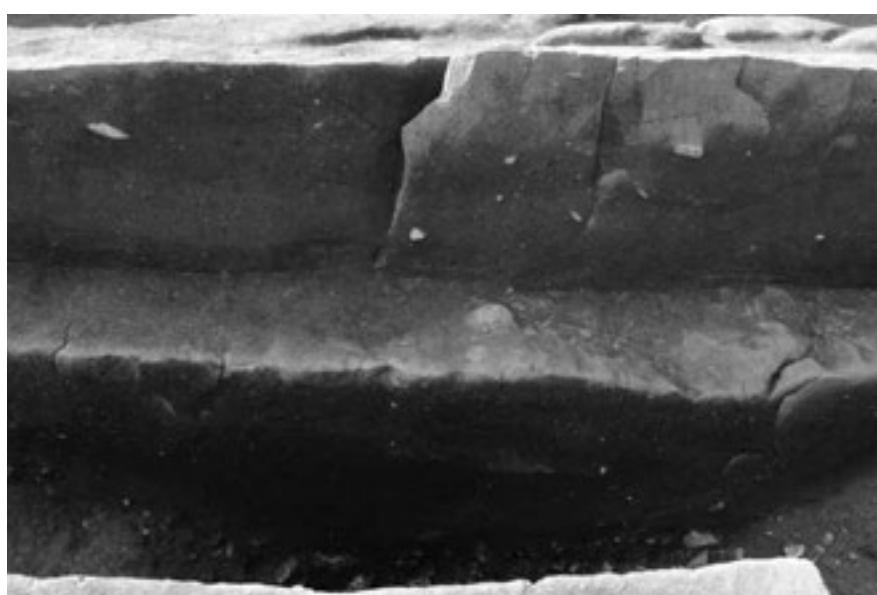
調査区全景（上が南東）



SX01 第1面遺構掘削状況
(西から)



SX01第1面遺構掘削状況
(北から)



SX01 土層断面 (南東から)



SX01 包含層遺物出土状況

図版4



SD02 土層断面(南東から)



SD03 土層断面(北西から)



SD04 土層断面(北西から)



SD05 土層断面 (南東から)

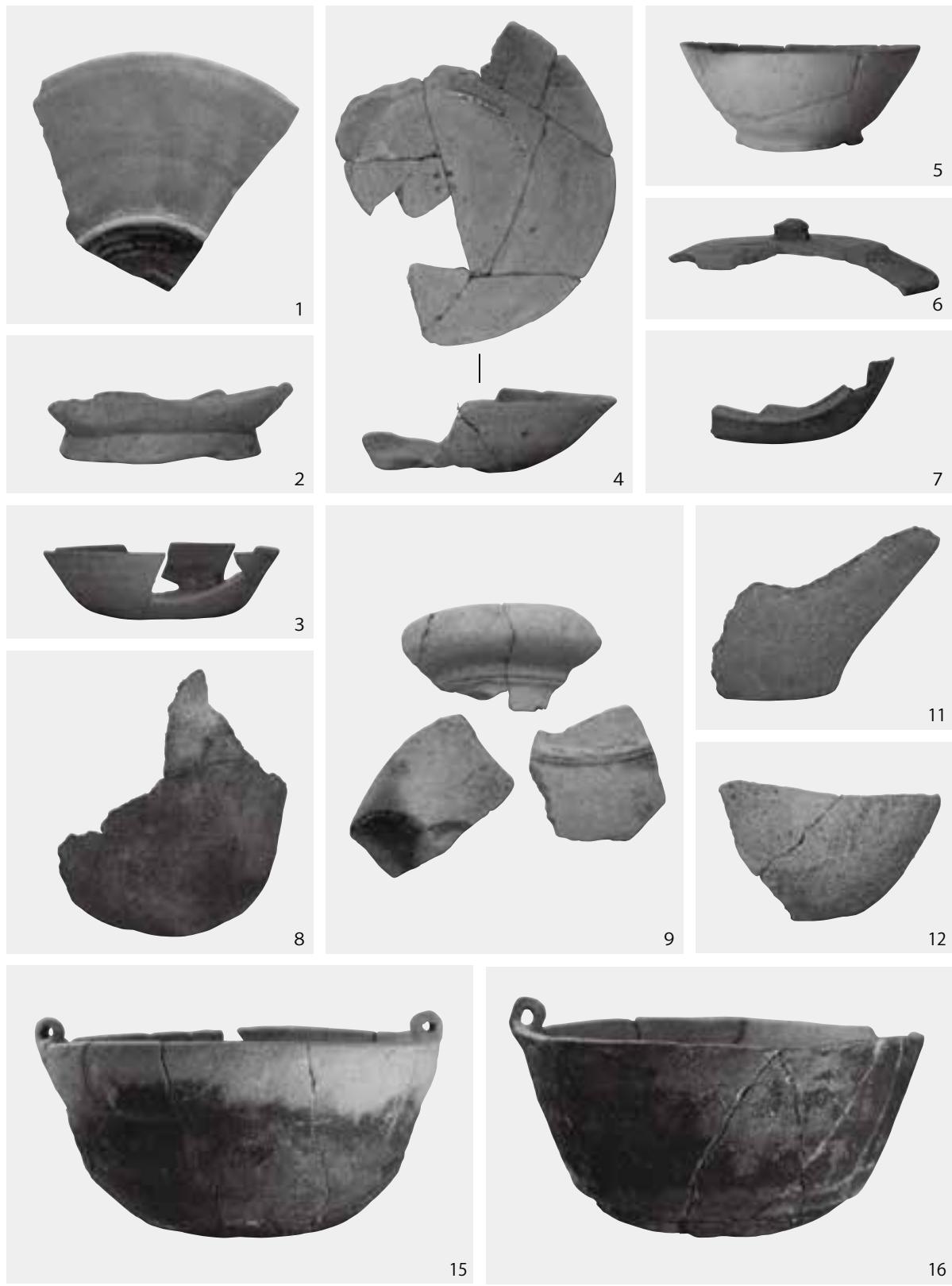


SK06 遺構掘削状況
(東から)



SK06 断面 (西から)

図版6



出土遺物

V. 「庚寅銘大刀」の重要文化財指定について

1. はじめに

いわゆる「庚寅銘大刀」は、国による文化財調査を経て、平成31年3月18日に、文化審議会から重要文化財指定の答申を得た。ここでは指定に至る経緯について概要を記すとともに、指定となることが決まった資料の全容について掲載するものである。

2. 指定に至る経緯

庚寅銘大刀の出土、銘文の発見から保存処理に至る経緯については、既刊の報告書において詳細が記されているので、そちらを参照いただきたい。国内で9例目の古墳出土有銘刀剣はそのほとんどが国の重要文化財や国宝に指定されている。庚寅銘大刀も銘文発見当初からこれらに匹敵するとの評価が聞かれており、銘文の表出によって象嵌が金であることが確認され、その声は更に高まることとなった。

そのような中、平成28年10月に九州・沖縄地区を対象とした、文化庁主催による重要考古資料に関する懇談会が開催された。これは各都道府県が挙げた文化財的価値の高い資料について、有識者による意見を聞きながら、優先的に重要文化財指定を見据えた再整理作業を行う対象を選定する会議である。福岡市からは庚寅銘大刀を含む6件が検討候補として上程された。ここで一定の評価が得られ、博多遺跡群出土品（平成29年9月指定）に次ぐ優先順位に位置づけられたことで、指定に向けた調査作業が動き出すこととなった。

以後、文化庁の担当調査官による現地での調査が行われることとなった。調査の回数や時期は表1に示すとおりである。

年	月	日	内 容
平成28年	10月	13・14日	重要考古資料に関する懇談会に候補として上程
平成29年	11月	21・22日	文化庁横須賀調査官による指定に向けた調査指導（1）
	4月	19・20日	文化庁横須賀調査官による指定に向けた調査指導（2）
平成30年	10月	5日	文化庁横須賀調査官による指定に向けた調査指導（3）
	11月	7・8日	文化庁原田主任調査官による指定に向けた最終確認

表1 指定に至るまでの作業

調査の中ではまず、庚寅銘大刀はもちろんのこと、同じ古墳から出土した共伴遺物をどこまで含めるか、また、これらを一括で指定候補とするのか、あるいは大刀を指定の中心にして、他を附とするかが検討された。結果として後者が選択され、以後、候補の選定、絞り込みが進められた。

附資料については、庚寅銘大刀と共に古墳時代の資料であること、そして石室の出土資料と、墳丘、周溝の出土土器で古墳や大刀の年代決定に関係する資料を前提とし、更に資料の残存状態を勘案した選定が行われた。その結果、大刀一口と、附は金属製品134点、玉119点、須恵器・土師器34点の計287点が指定候補とされた。指定名称は「金錯銘大刀」（大歳庚寅正月六日庚寅の銘がある／福岡県元岡G群6号墳出土）とされることとなった。

最終的に、平成31年2月9日に文部科学大臣から文化審議会への諮問が行われ、平成31年2月28日～3月2日に実施された10名の考古学者から成る専門調査会考古資料部会での審議を経て、平成31年3月18日に文化審議会から文部科学大臣へ指定の答申が出されたのである。

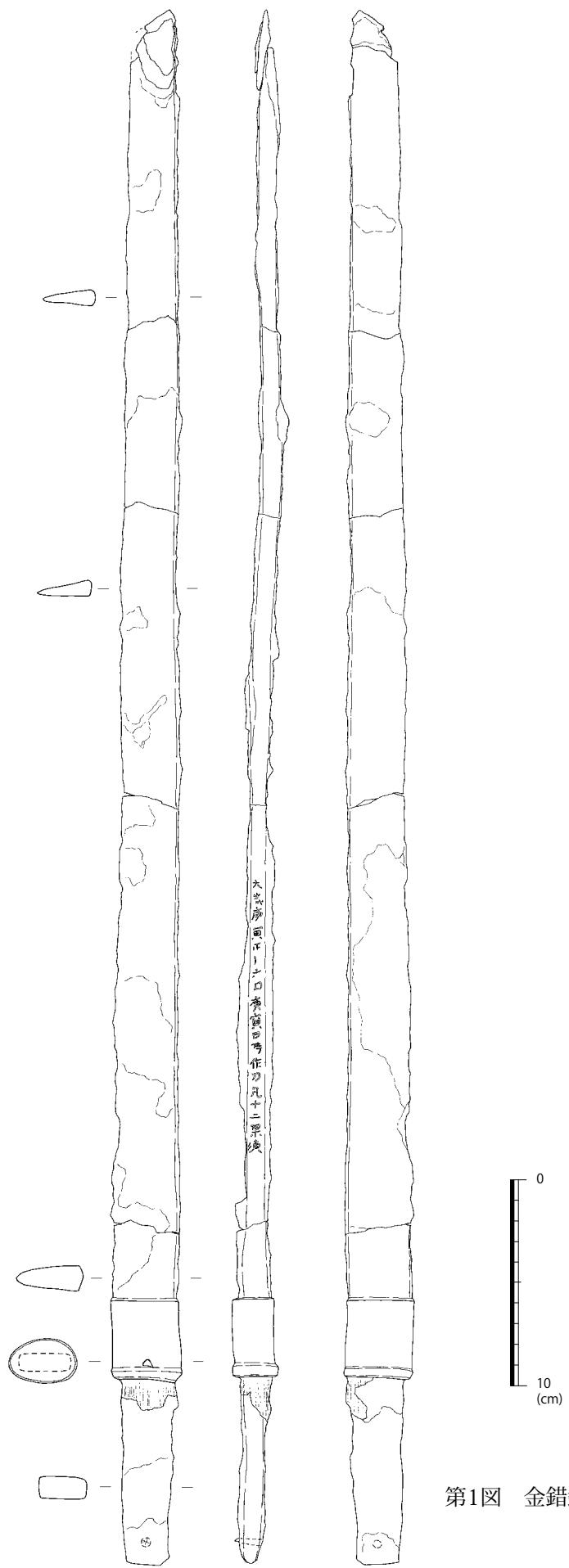
福岡市における有形文化財、考古資料の重要文化財指定は平成29年の博多遺跡群出土品に次いで10件目となった（表2）。

	指定名称	員数		所在の場所	所有者又は管理者	指定年月日	※国宝
1	銭弘倣八万四千塔	1	基	九州国立博物館	(宗)誓願寺	明治44年4月17日	
2	金印 (印文「漢委奴國王」) 福岡県糟屋郡志賀島村出土	1	顆	福岡市博物館	福岡市	昭和6年12月14日	
3	有柄細形銅劍・内行花文鏡 福岡県糸島郡怡土村大字三雲字鏃溝出土	2	1口 1面	(宗)聖福寺	(宗)聖福寺	昭和27年3月29日	
4	銅戈鎔范 福岡県糸島郡怡土村大字三雲字鏃構出土	1	箇	(国大)九州大学	(国大)九州大学	昭和30年2月2日	
5	青釉経筒 伝筑前国四王寺址経塚出土	1	合	九州国立博物館	(財)田中丸コレクション	昭和30年6月22日	
6	壺形土器 福岡県福岡市城ノ原出土	1	箇	福岡市埋蔵文化財センター	福岡市	昭和42年6月15日	
7	壺形土器 長崎県壱岐郡勝本町立石唐神出土	1	箇	福岡市美術館	福岡市	昭和42年6月15日	
8	筑前吉武遺跡出土品	645	点	福岡市博物館	文化庁	昭和62年6月6日	
9	福岡県博多遺跡群出土品	2138	点	福岡市埋蔵文化財センター	福岡市	平成29年9月15日	

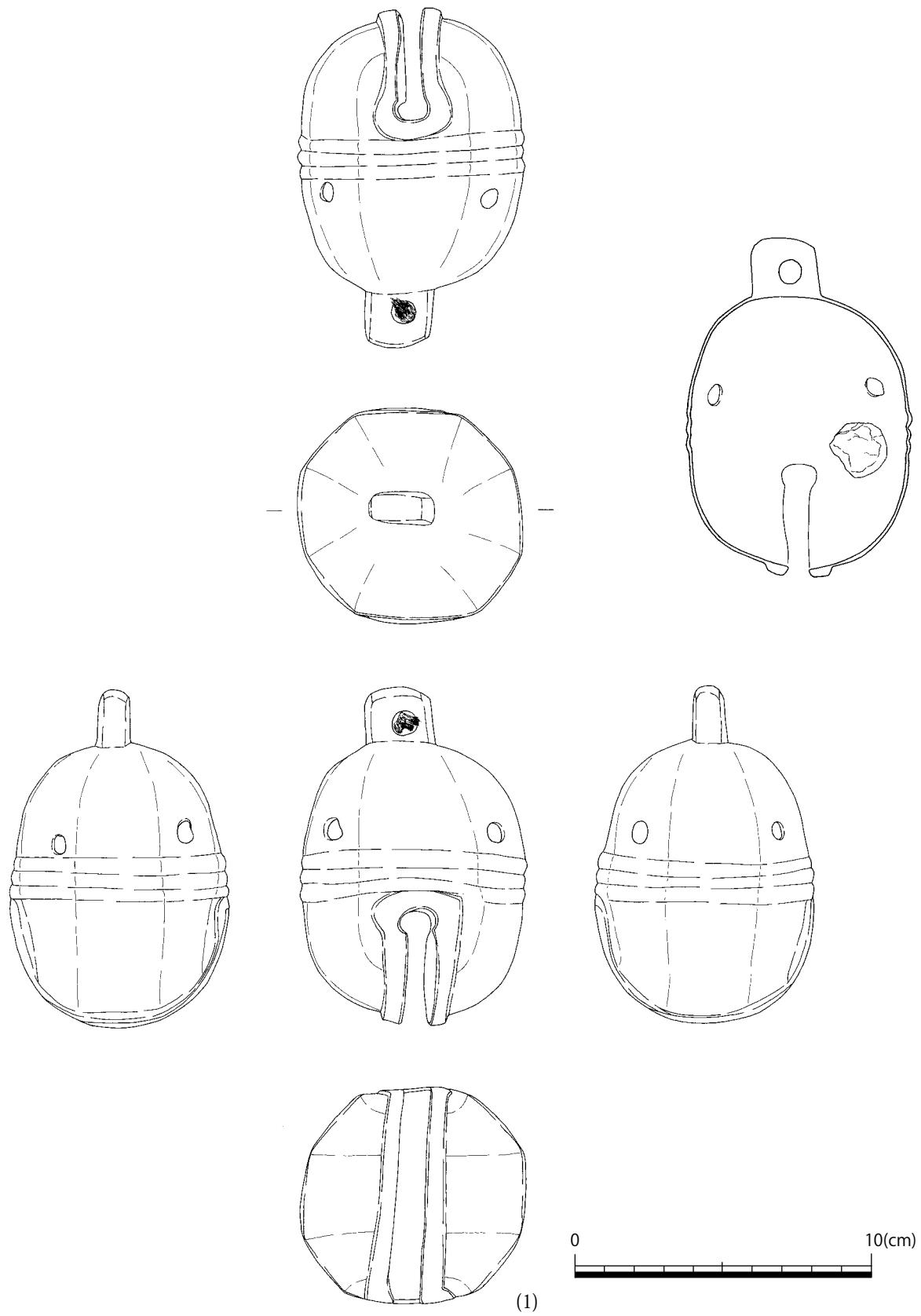
表2 福岡市内の重要文化財（考古資料）

3. 指定された資料について

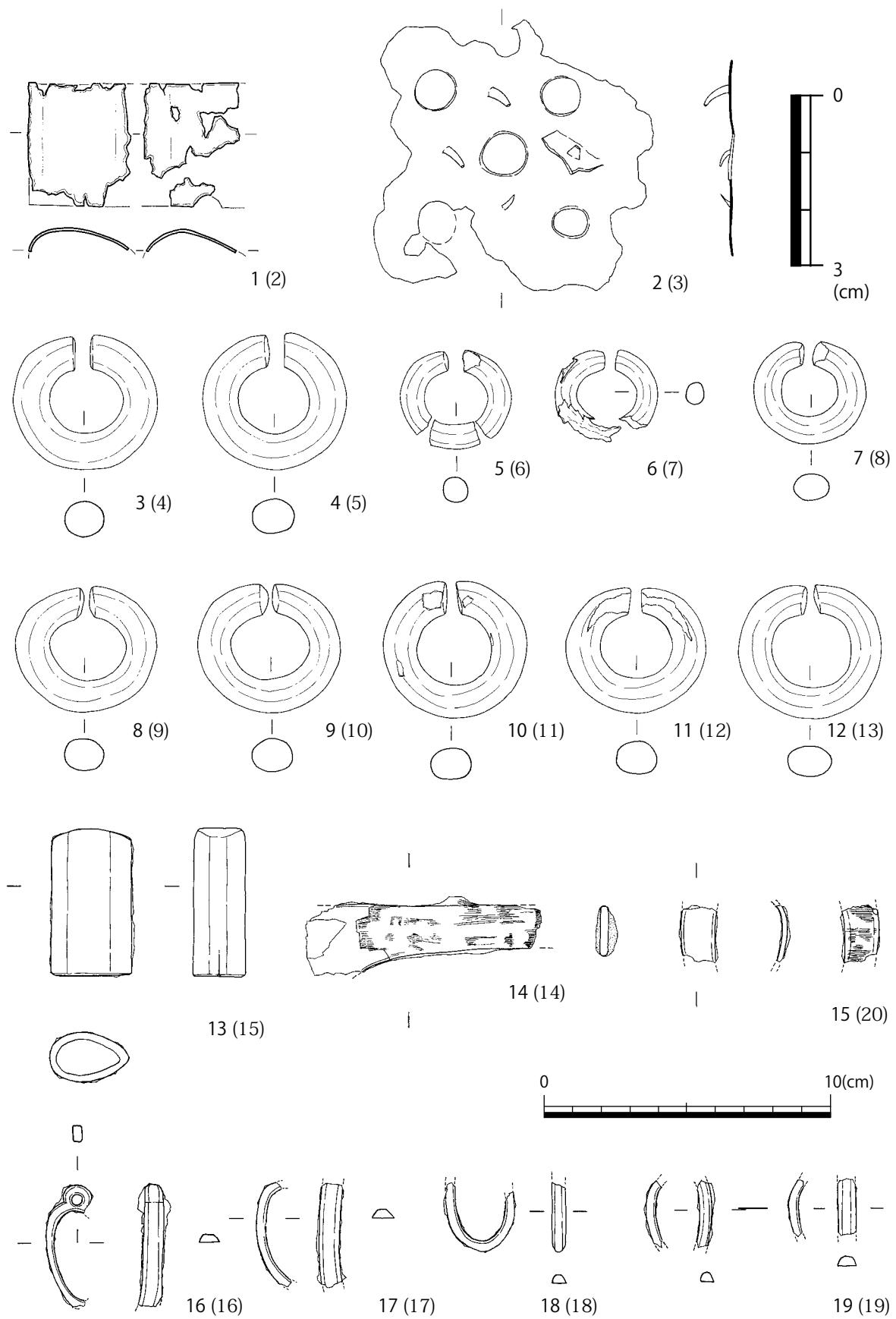
指定された資料全点の実測図と、主要な資料の写真、一覧表を以下に掲載する。



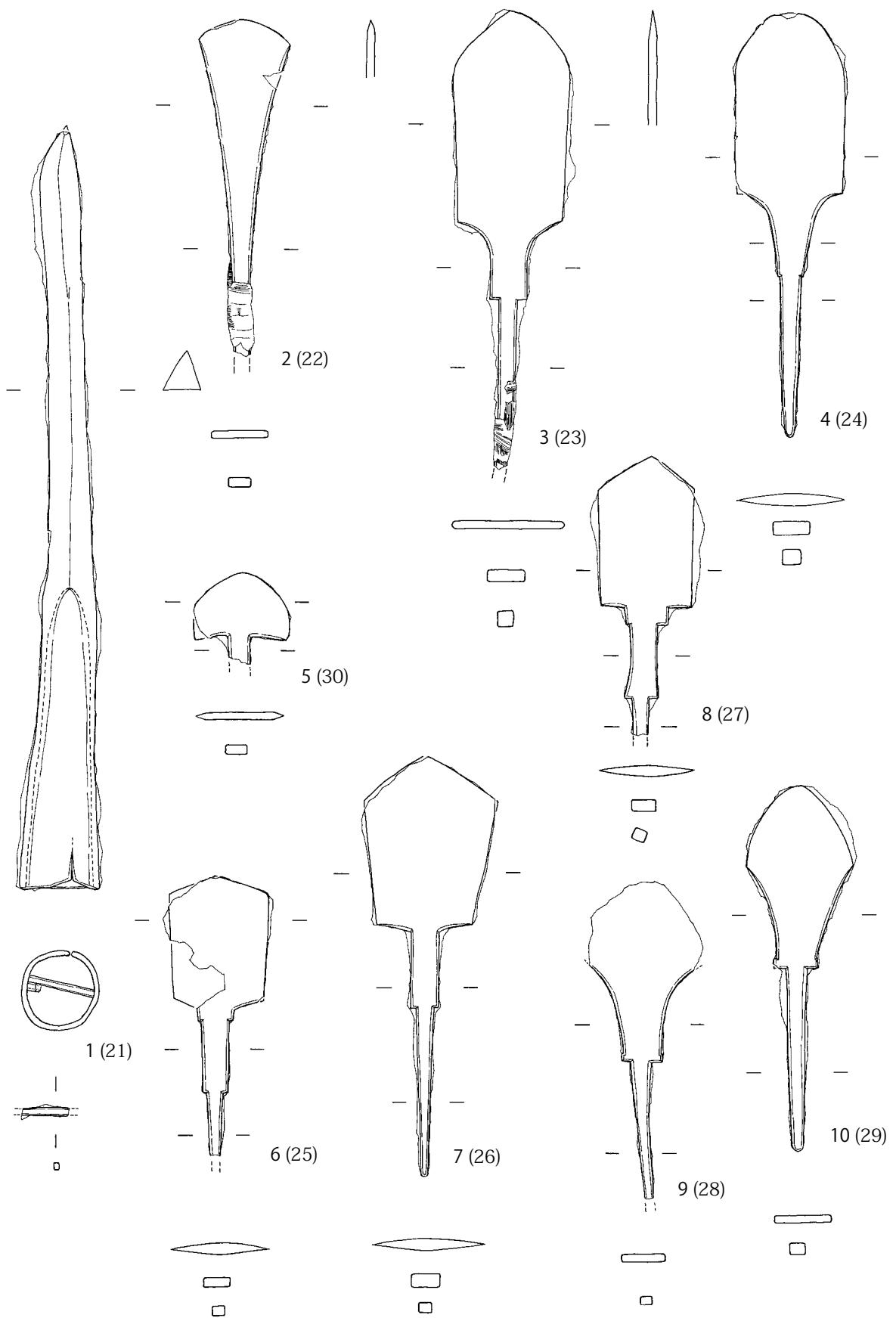
第1図 金錯銘大刀(縮尺1/3)



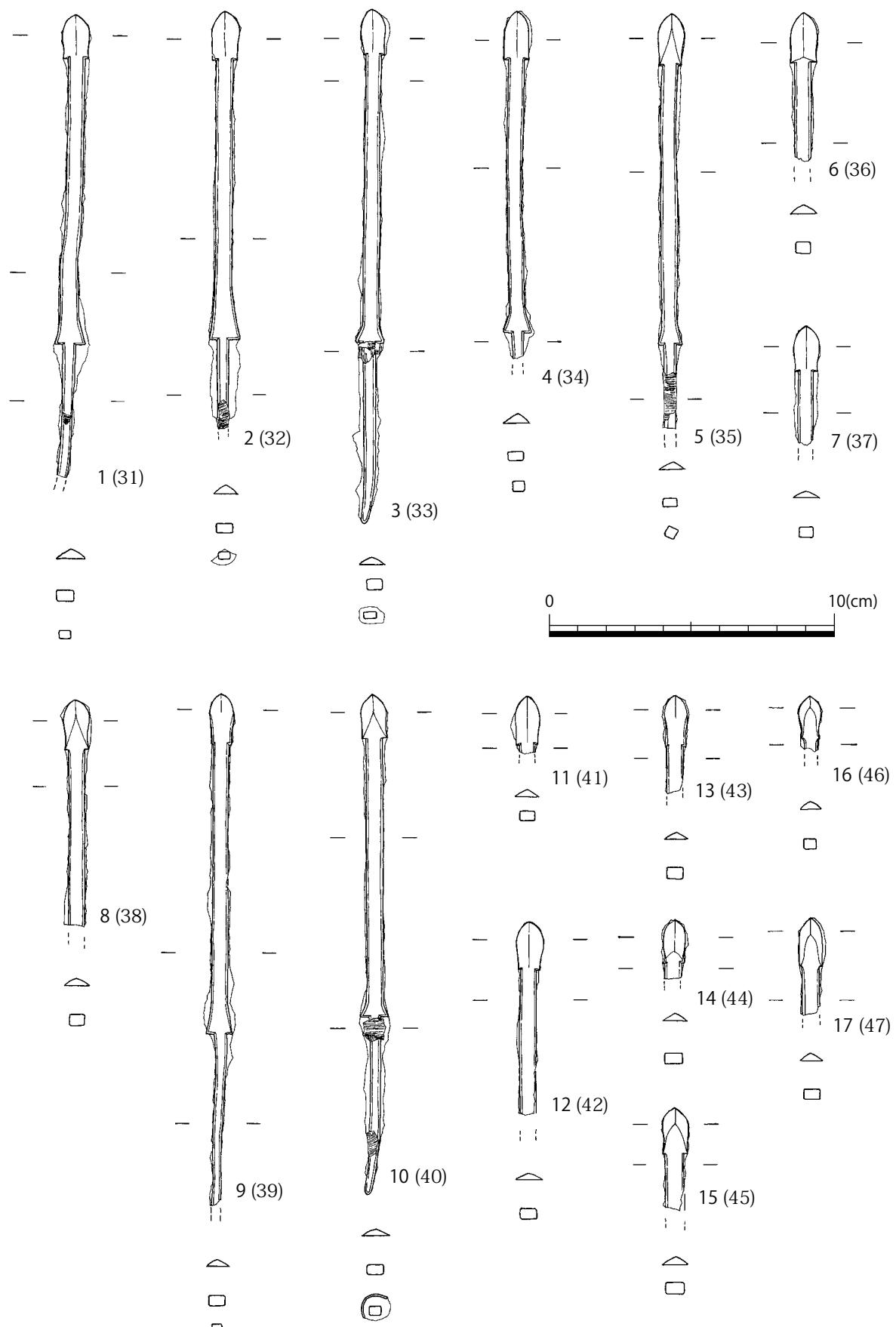
()内の数字は巻末の目録内通番、附番号 以下同じ
第2図 附資料実測図(1)(縮尺1/2)



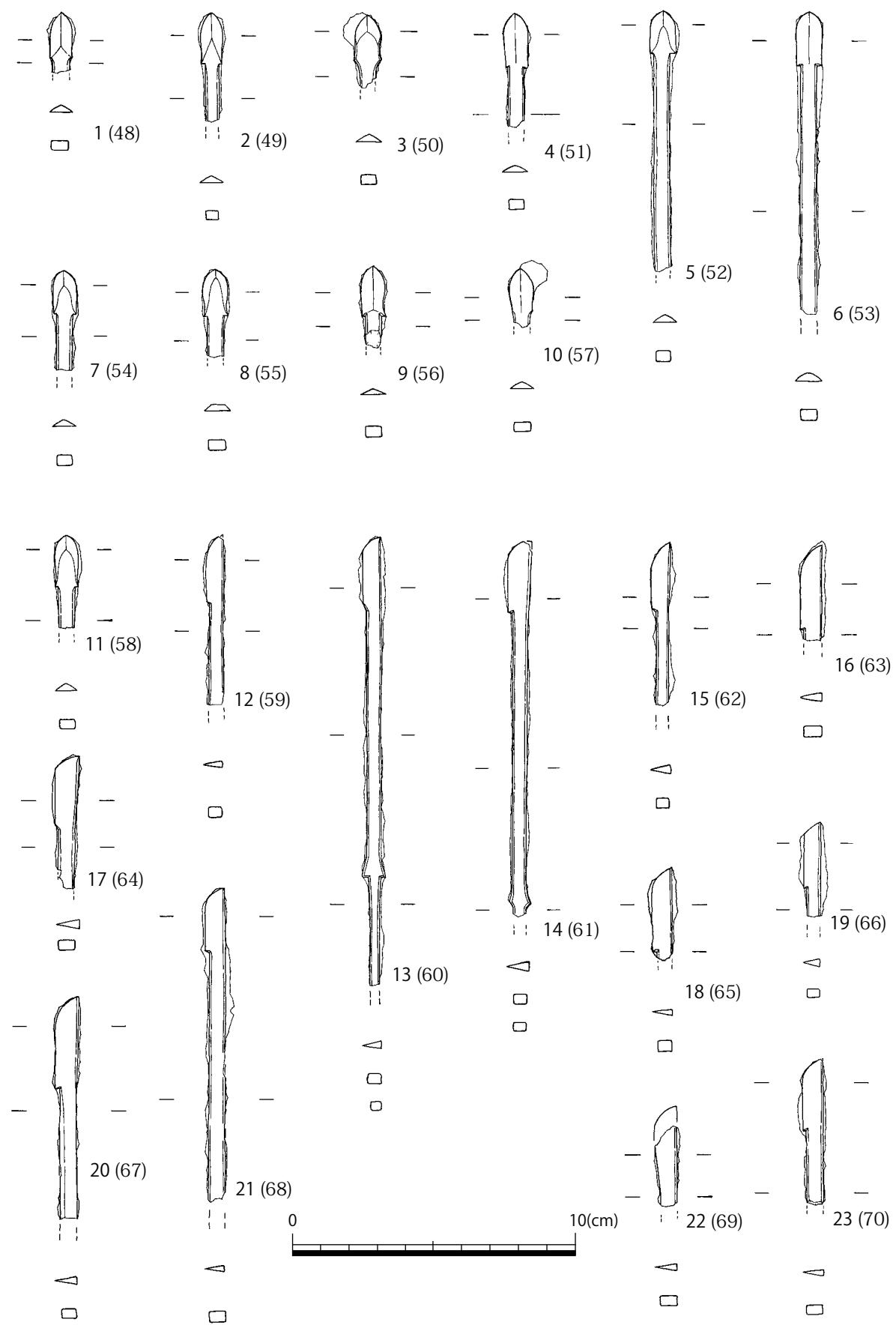
第3図 附資料実測図(2)(縮尺1/1・1/2)



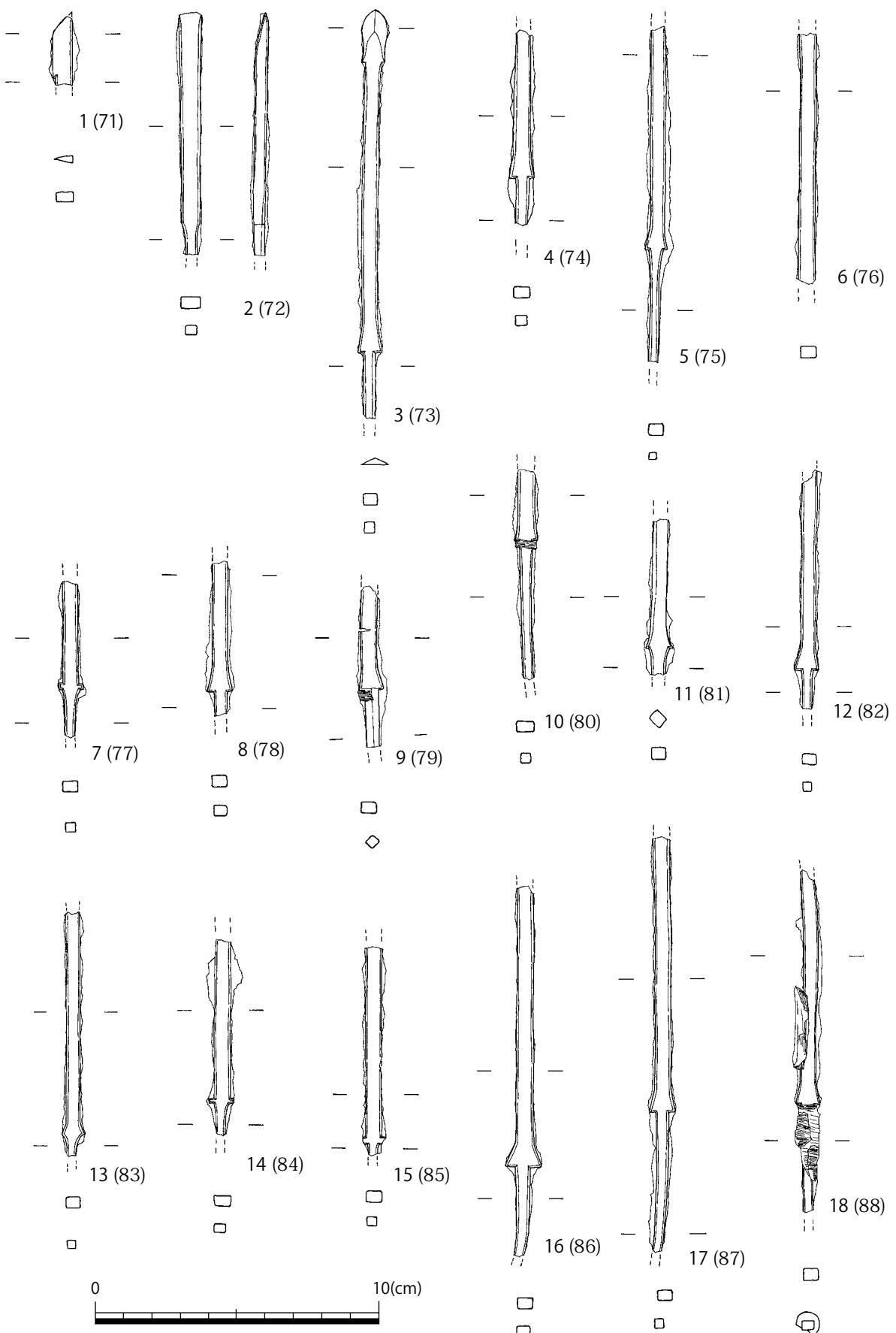
第4図 附資料実測図(3)(縮尺1/2)



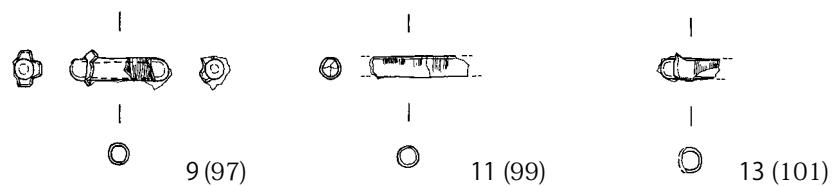
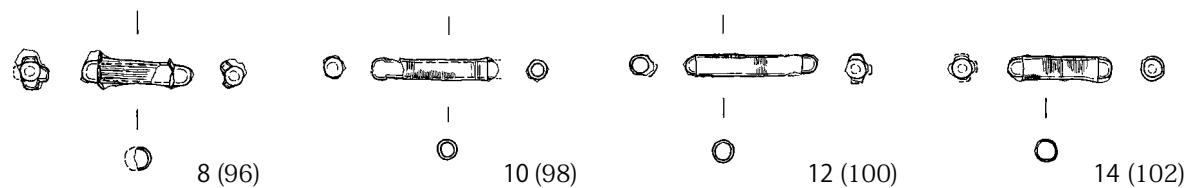
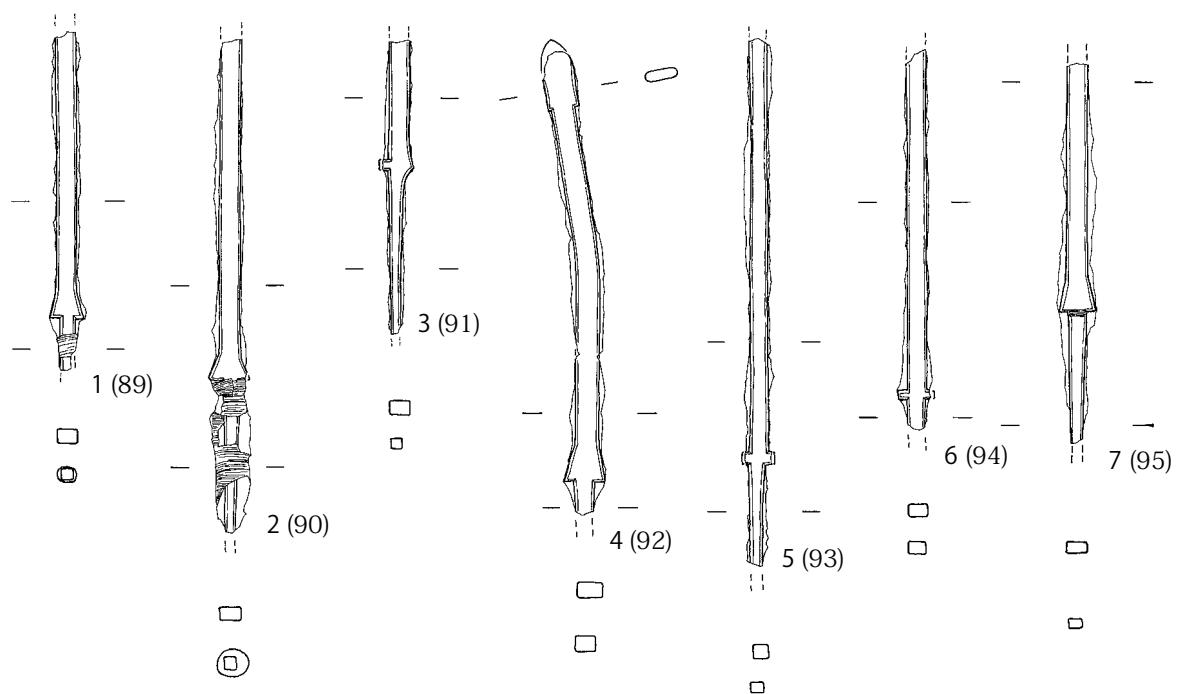
第5図 附資料実測図(4)(縮尺1/2)



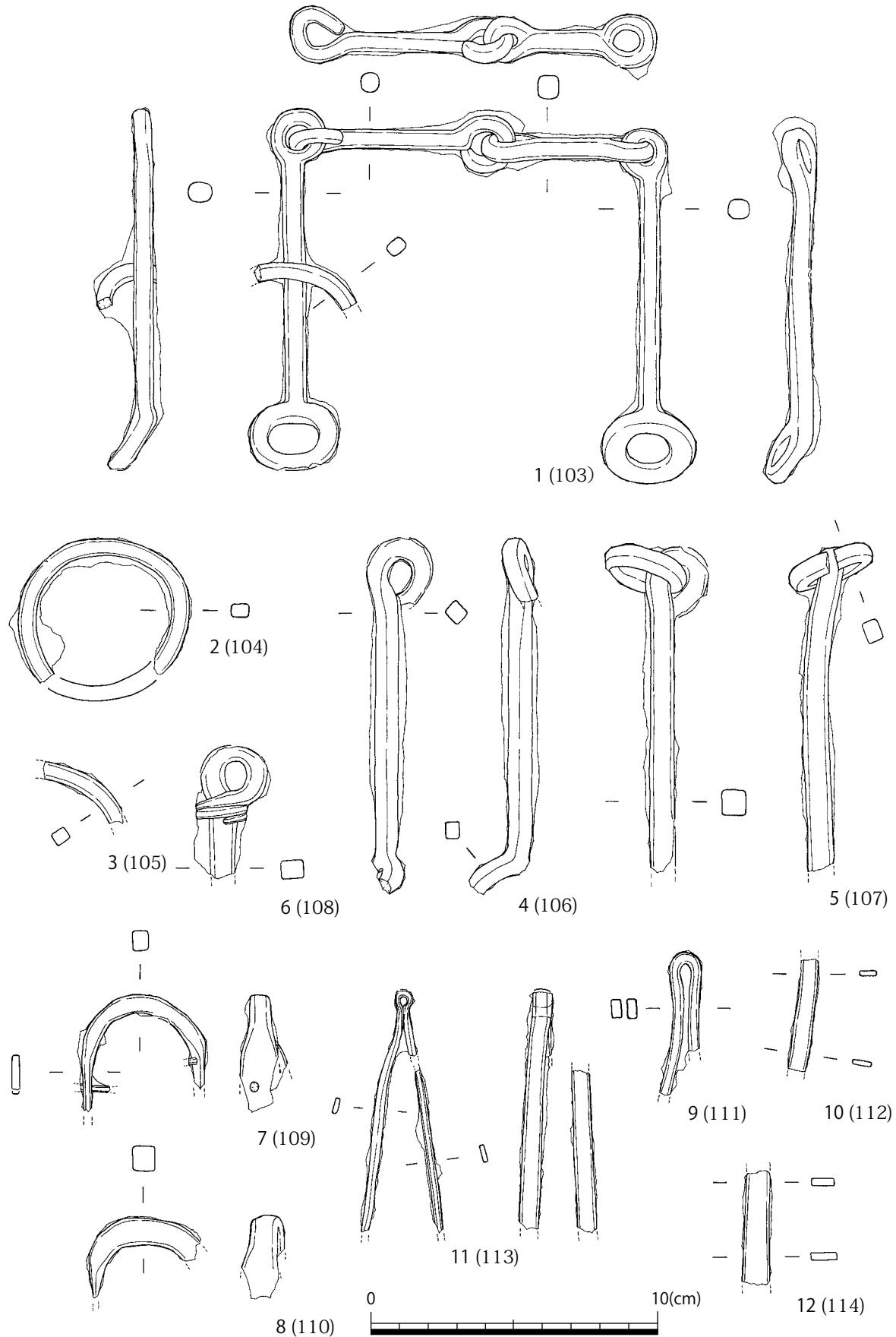
第6図 附資料実測図(5)(縮尺1/2)



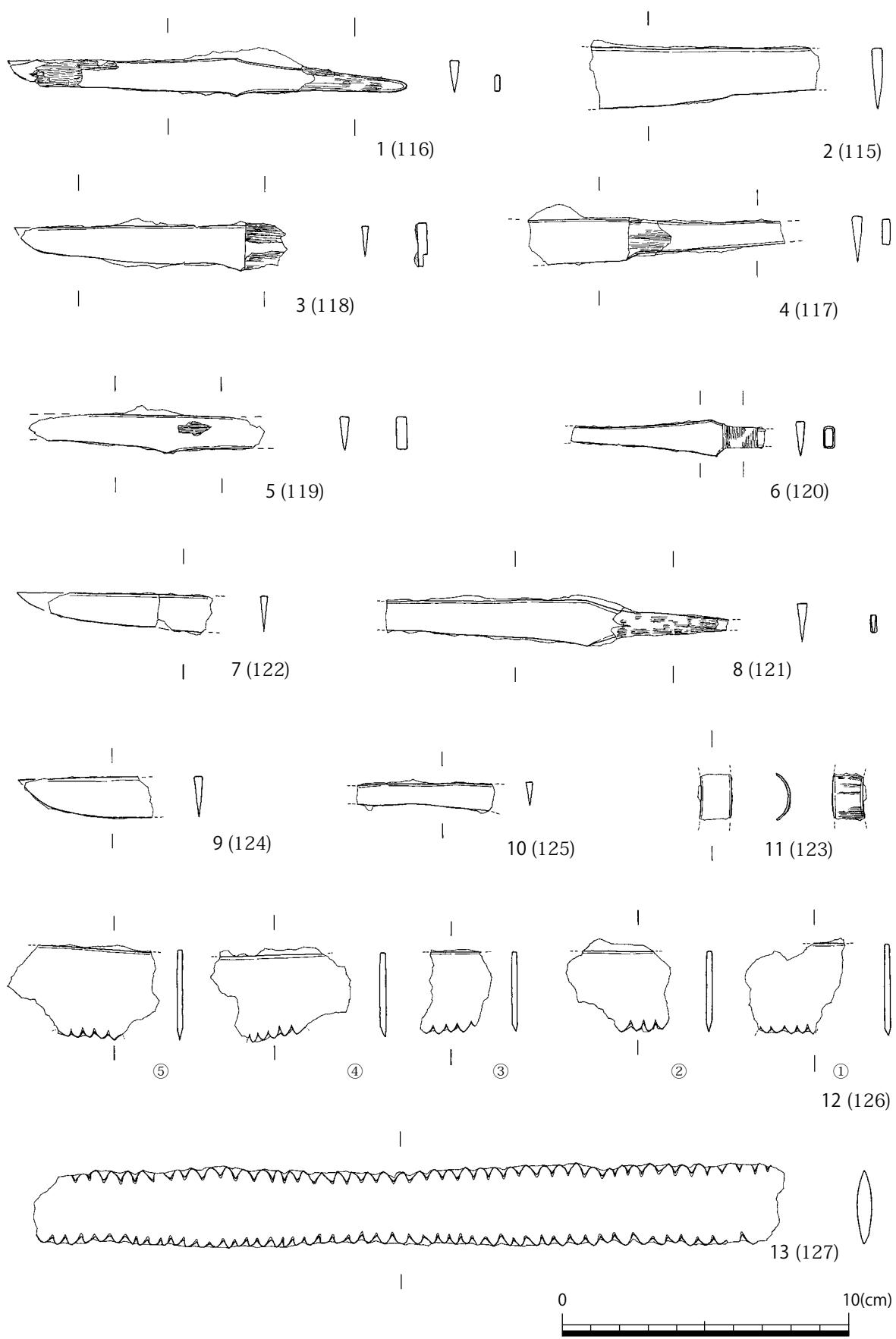
第7図 附資料実測図(6)(縮尺1/2)



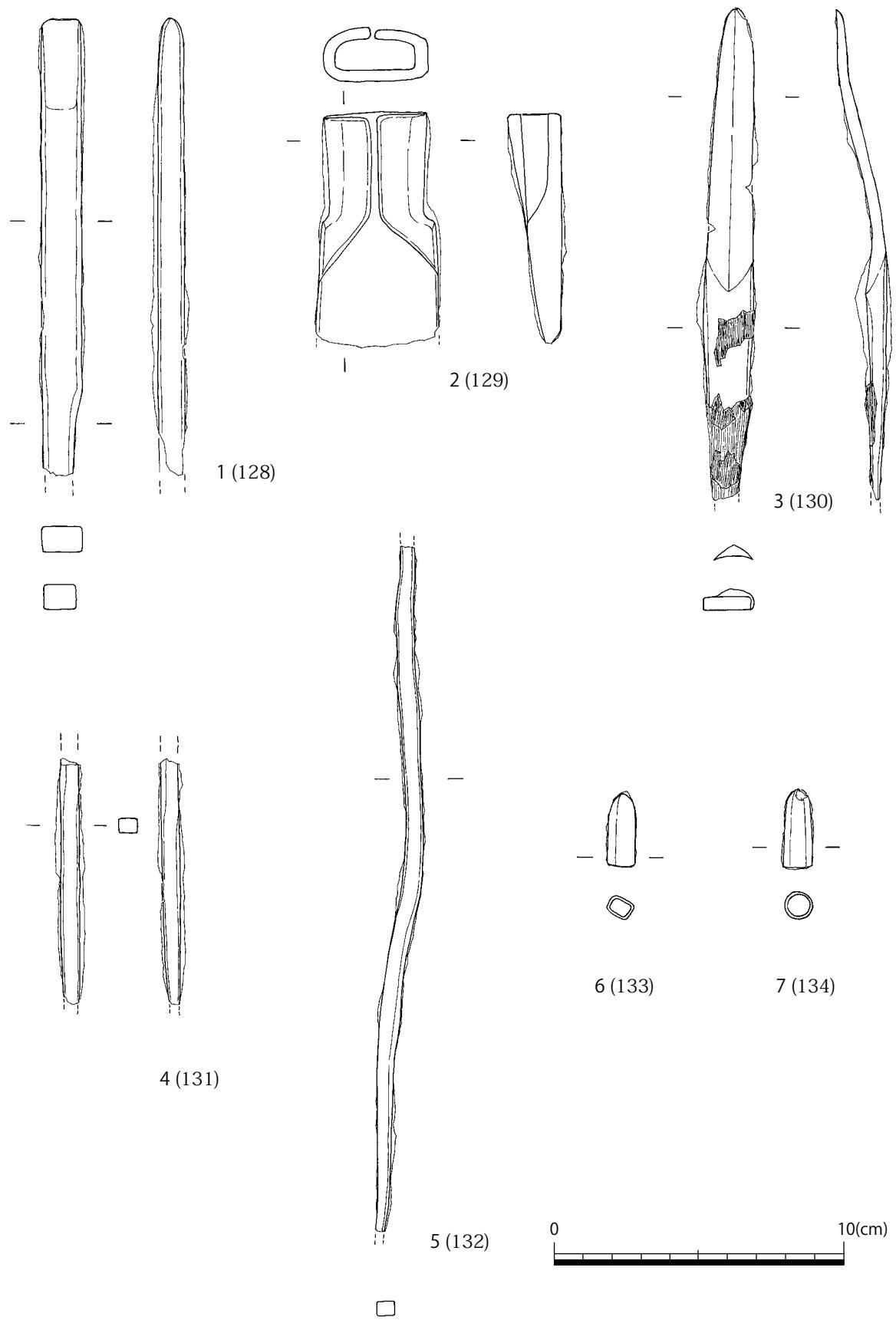
第8図 附資料実測図(7)(縮尺1/2)



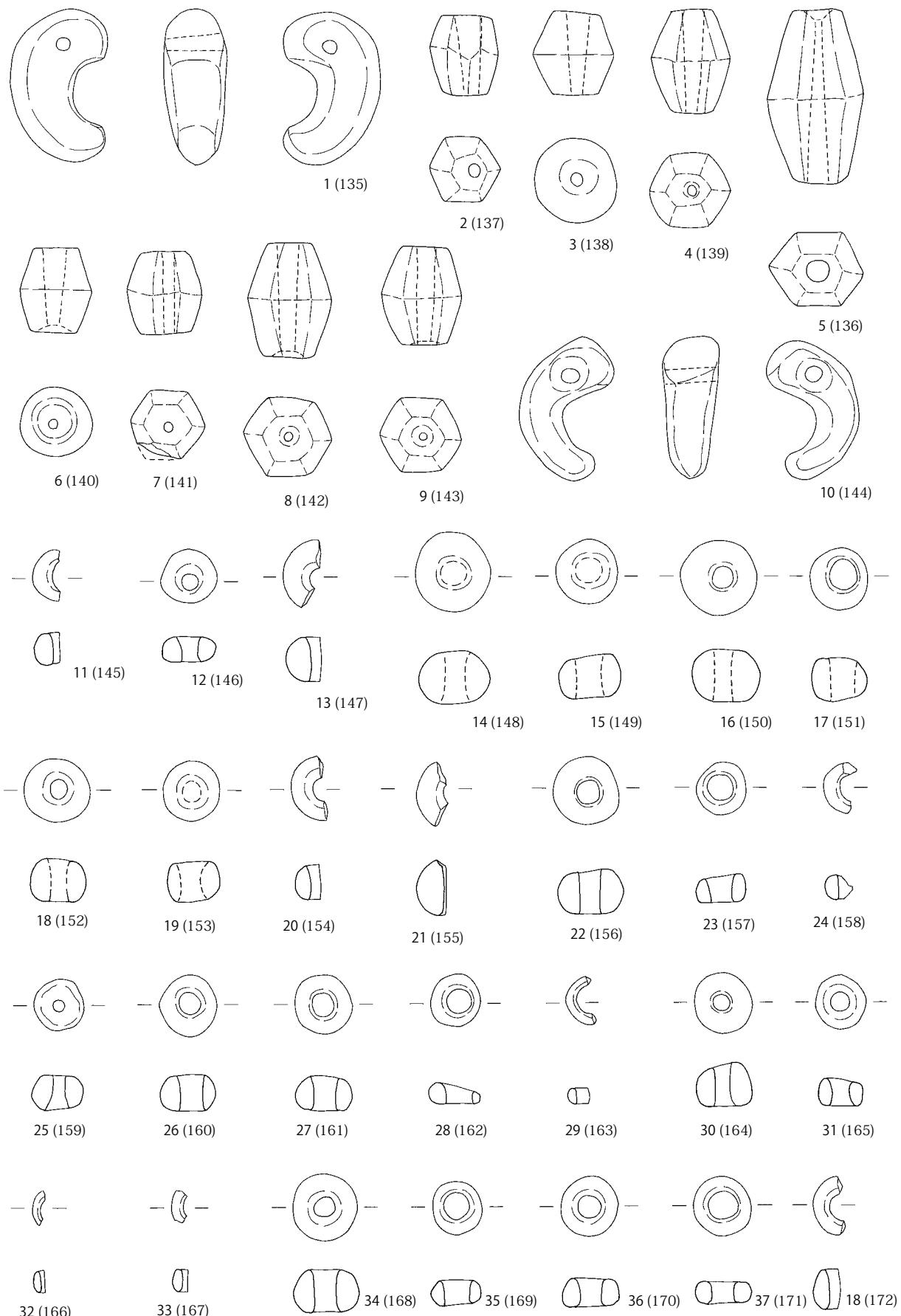
第9図 附資料実測図(8)(縮尺1/2)



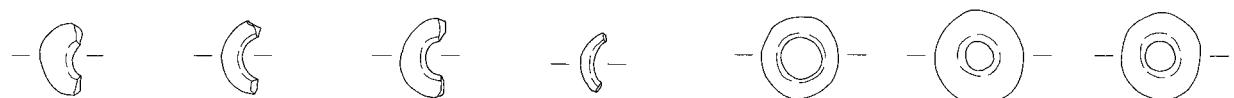
第10図 附資料実測図(9)(縮尺1/2)



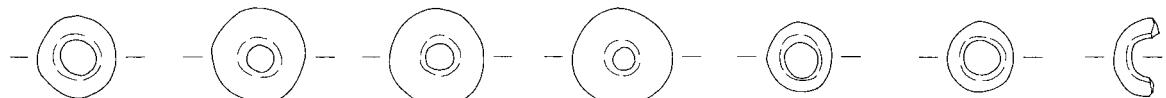
第11図 附資料実測図(10)(縮尺1/2)



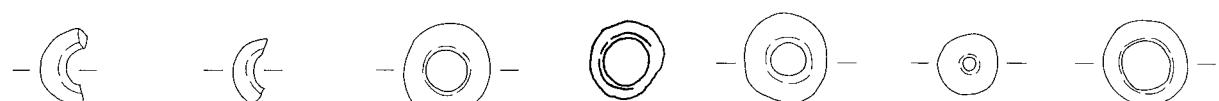
第12図 附資料実測図(11)(縮尺1/1)



1~7 (173~179)



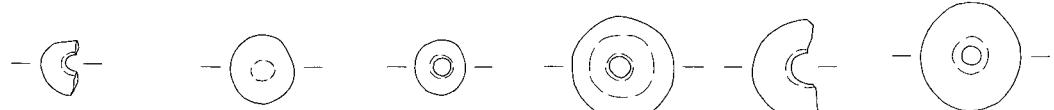
8~14 (180~186)



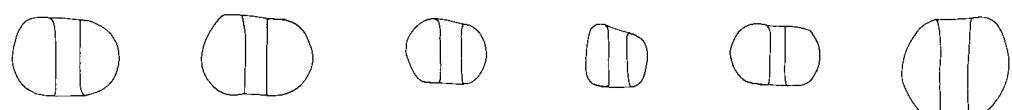
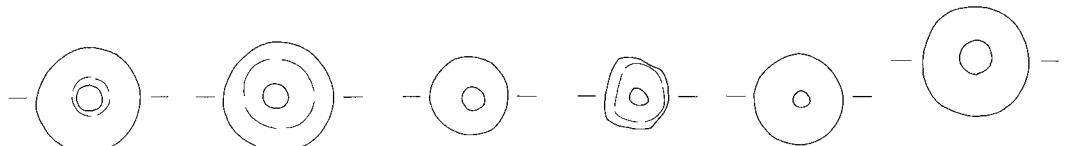
15~21 (187~193)



22~28 (194~200)

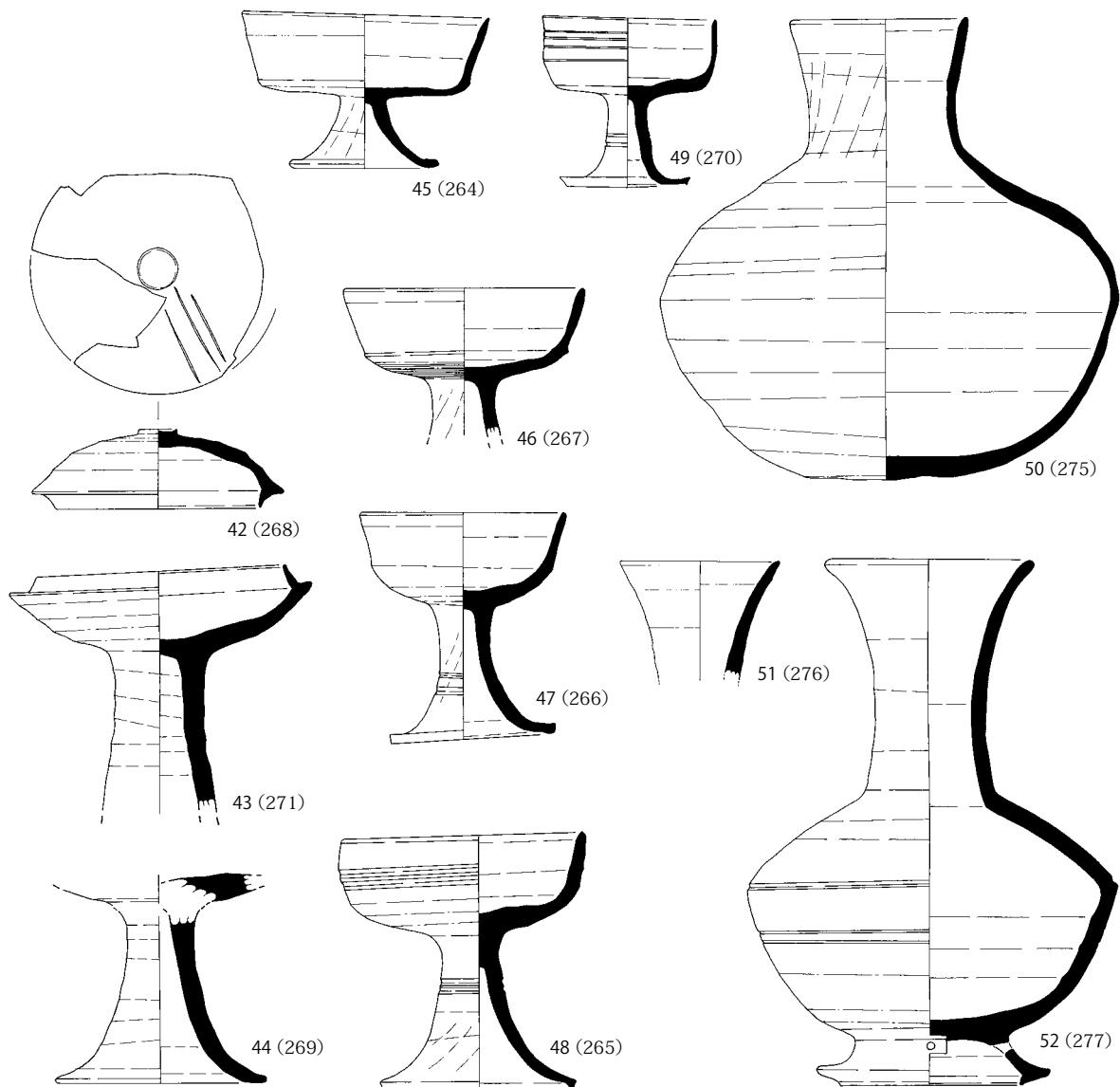
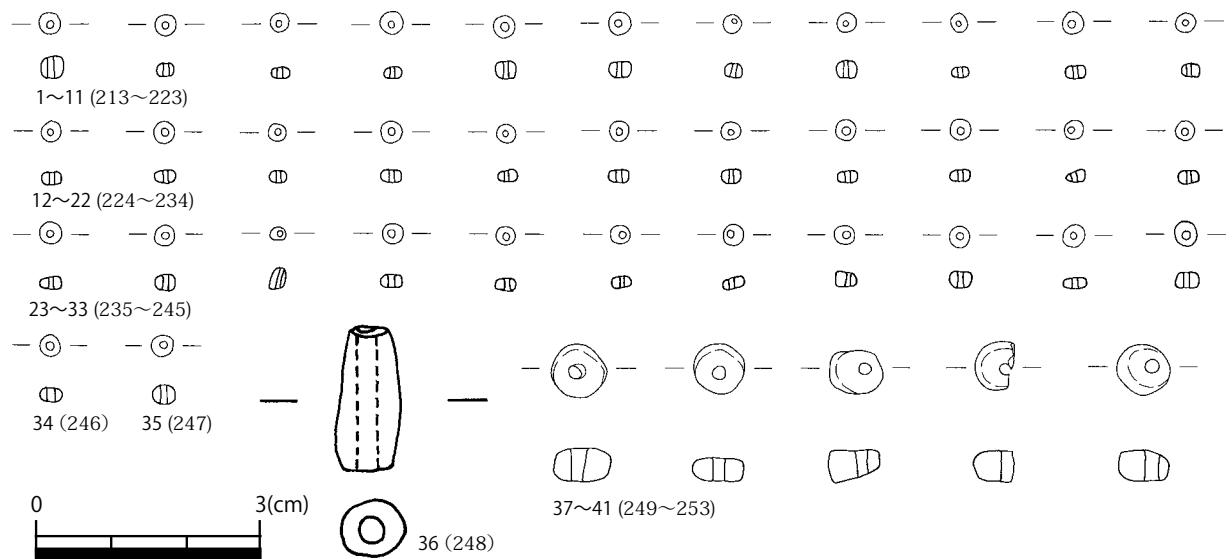


29~34 (201~206)

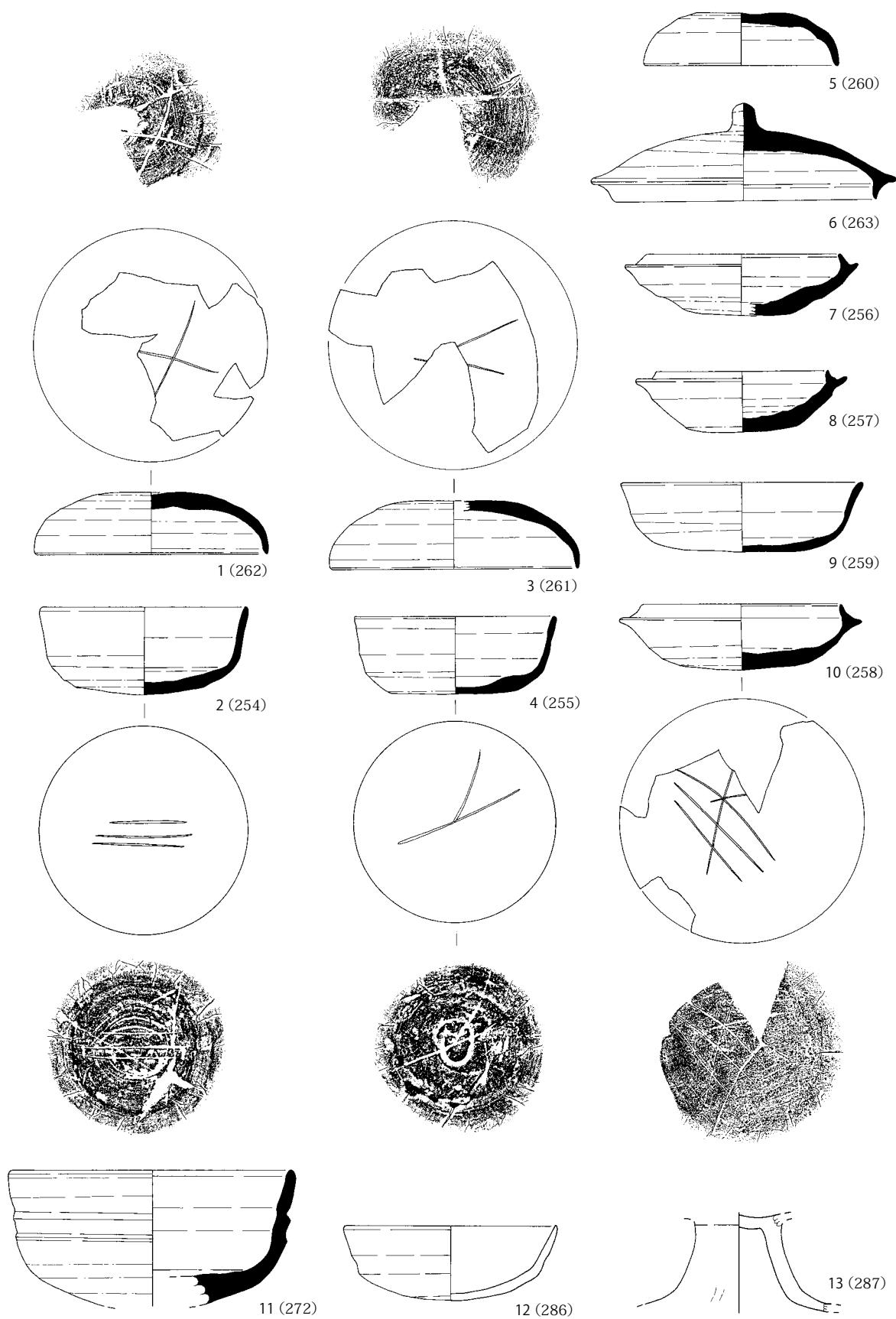


35~40 (207~212)

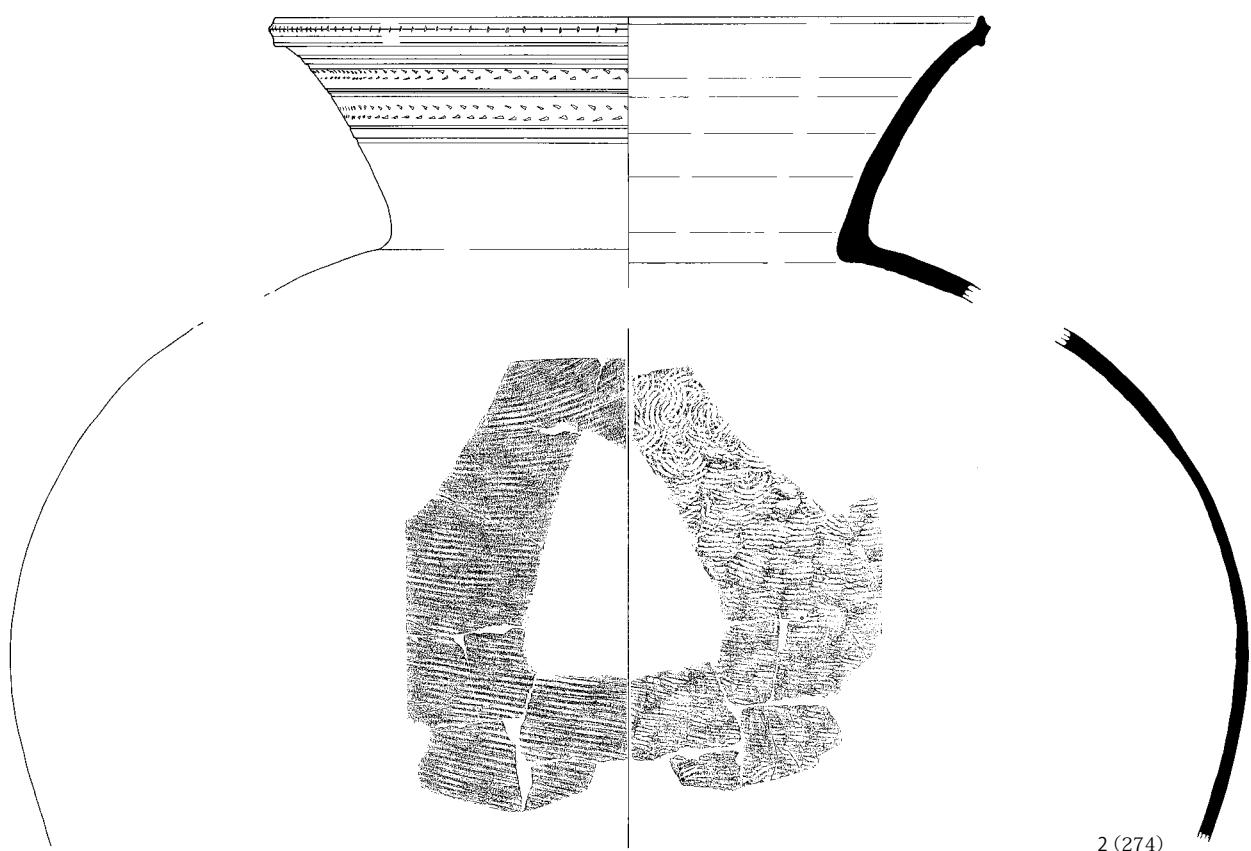
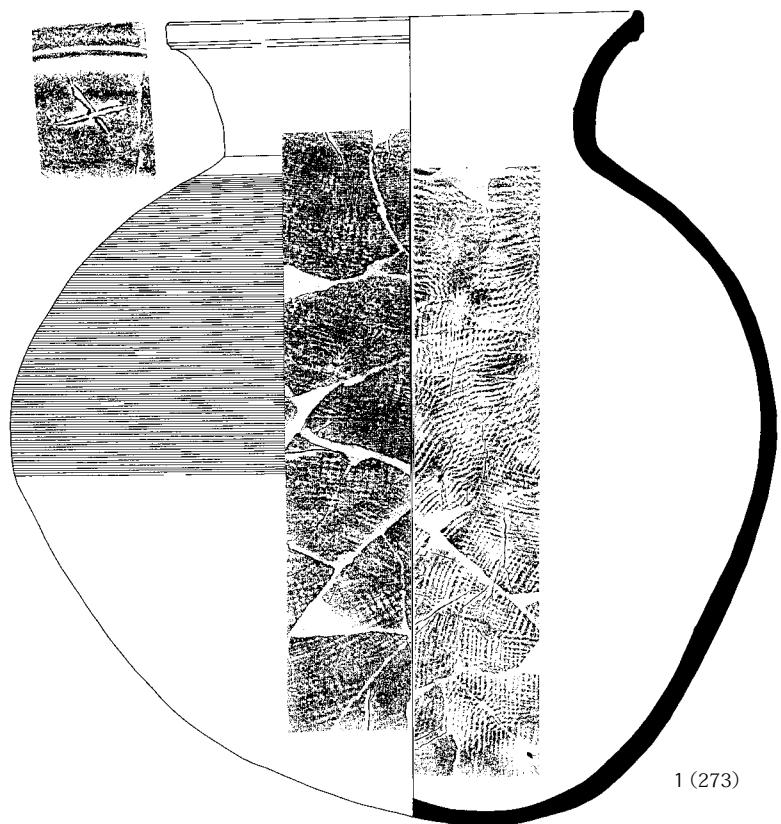
第13図 附資料実測図(12)(縮尺1/1)



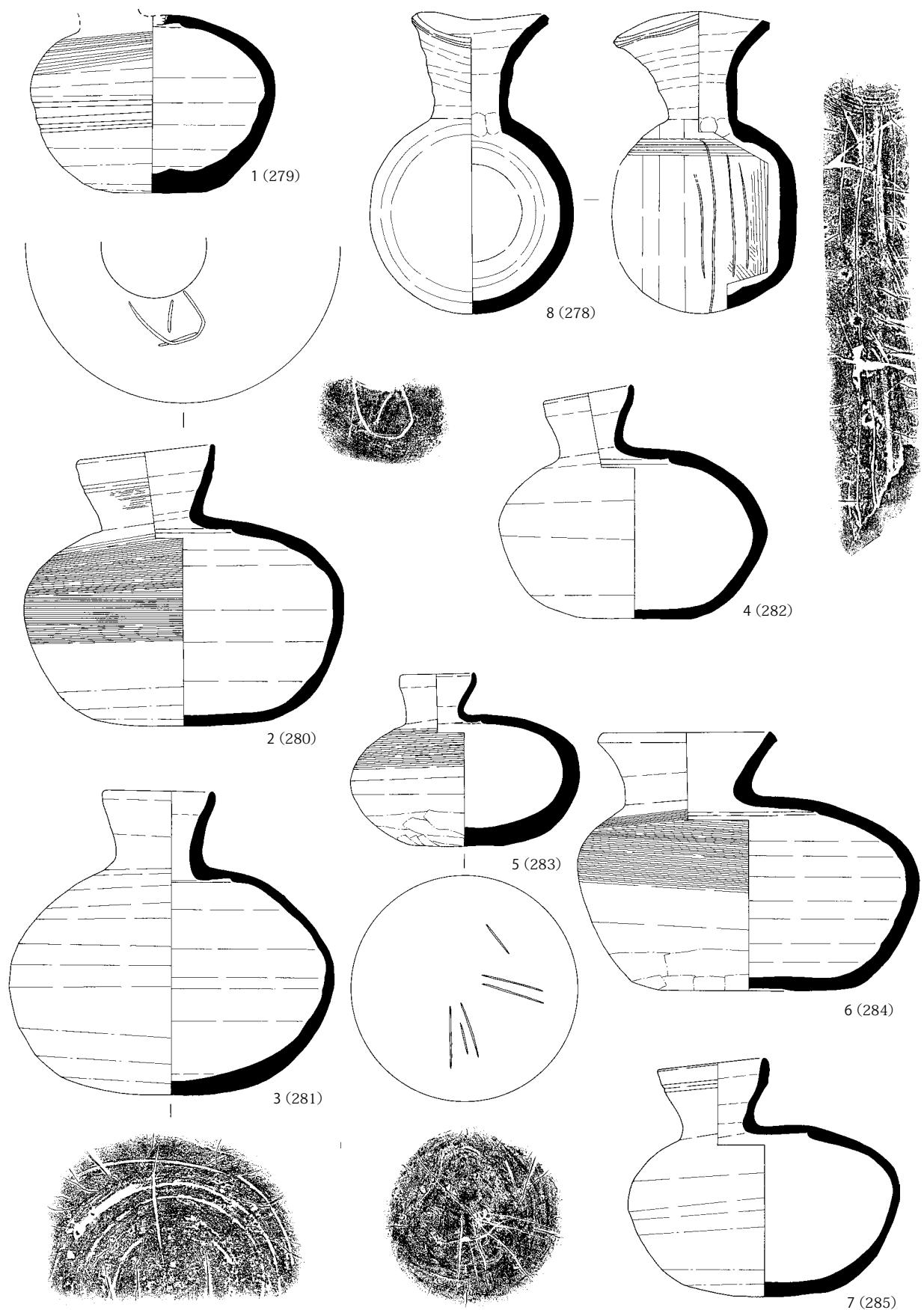
第14図 附資料実測図(13)(縮尺1/1・1/3)



第15図 附資料実測図(14)(縮尺1/3)



第16図 附資料実測図(15)(縮尺1/3・1/6)

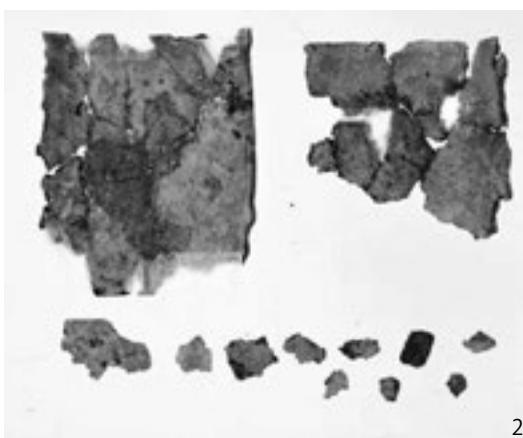


第17図 附資料実測図(16)(縮尺1/3)

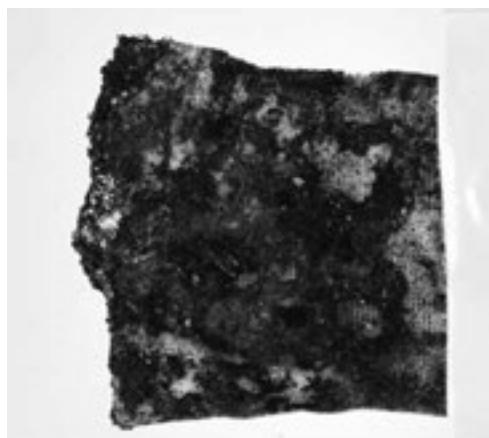
図版 1



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11

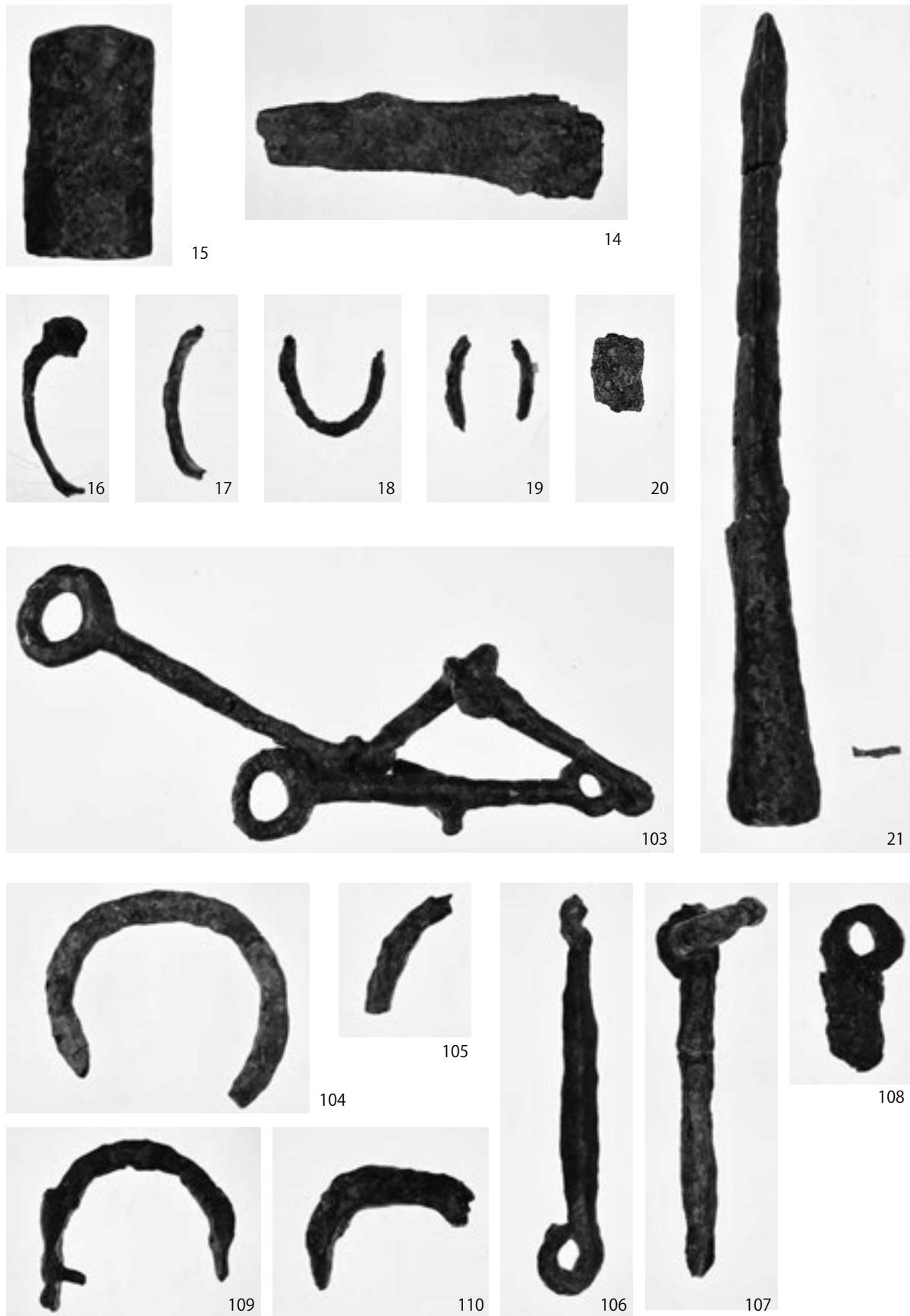


12



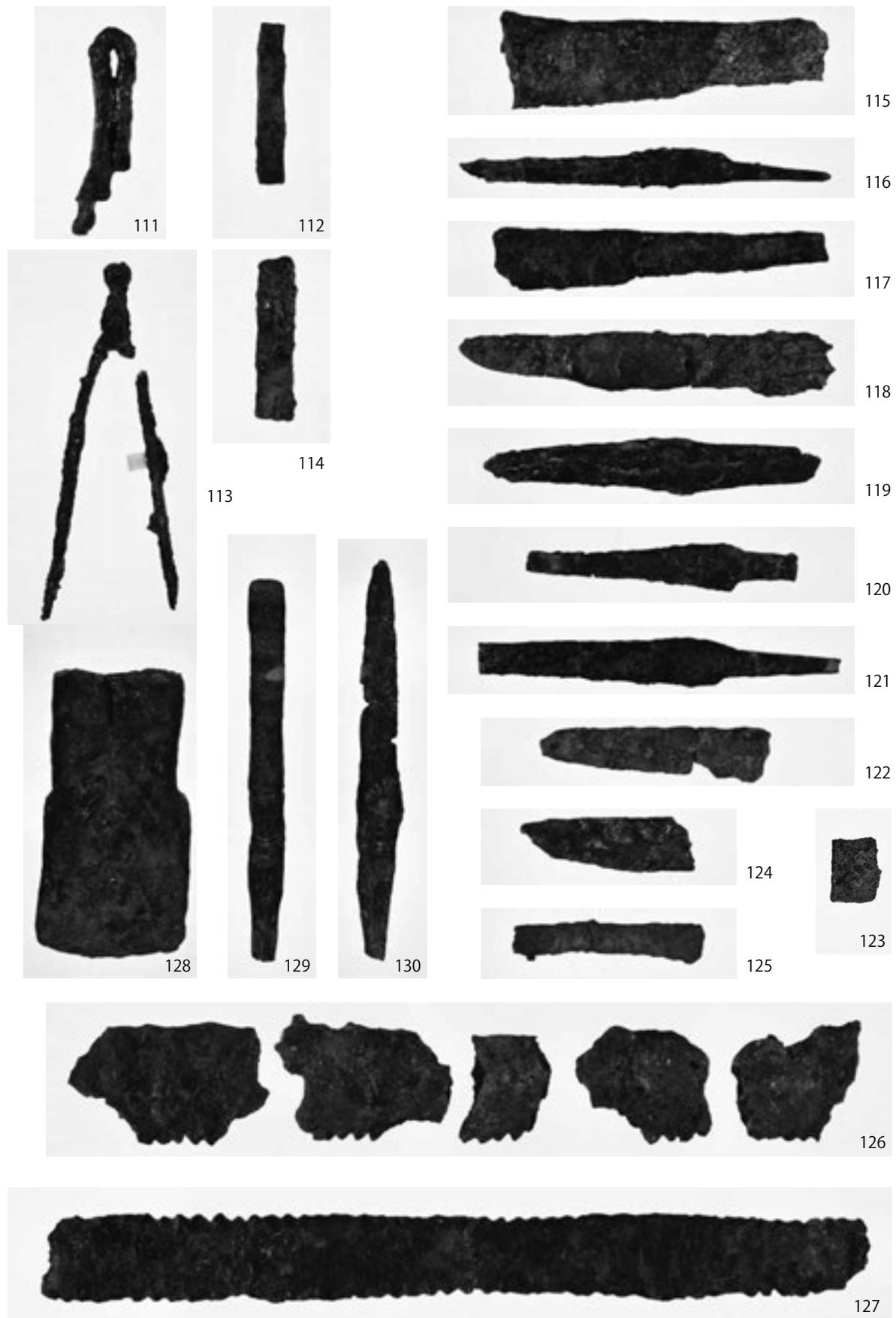
13

※数字は巻末目録の通番（附番号）に一致 以下同じ
金銅製品



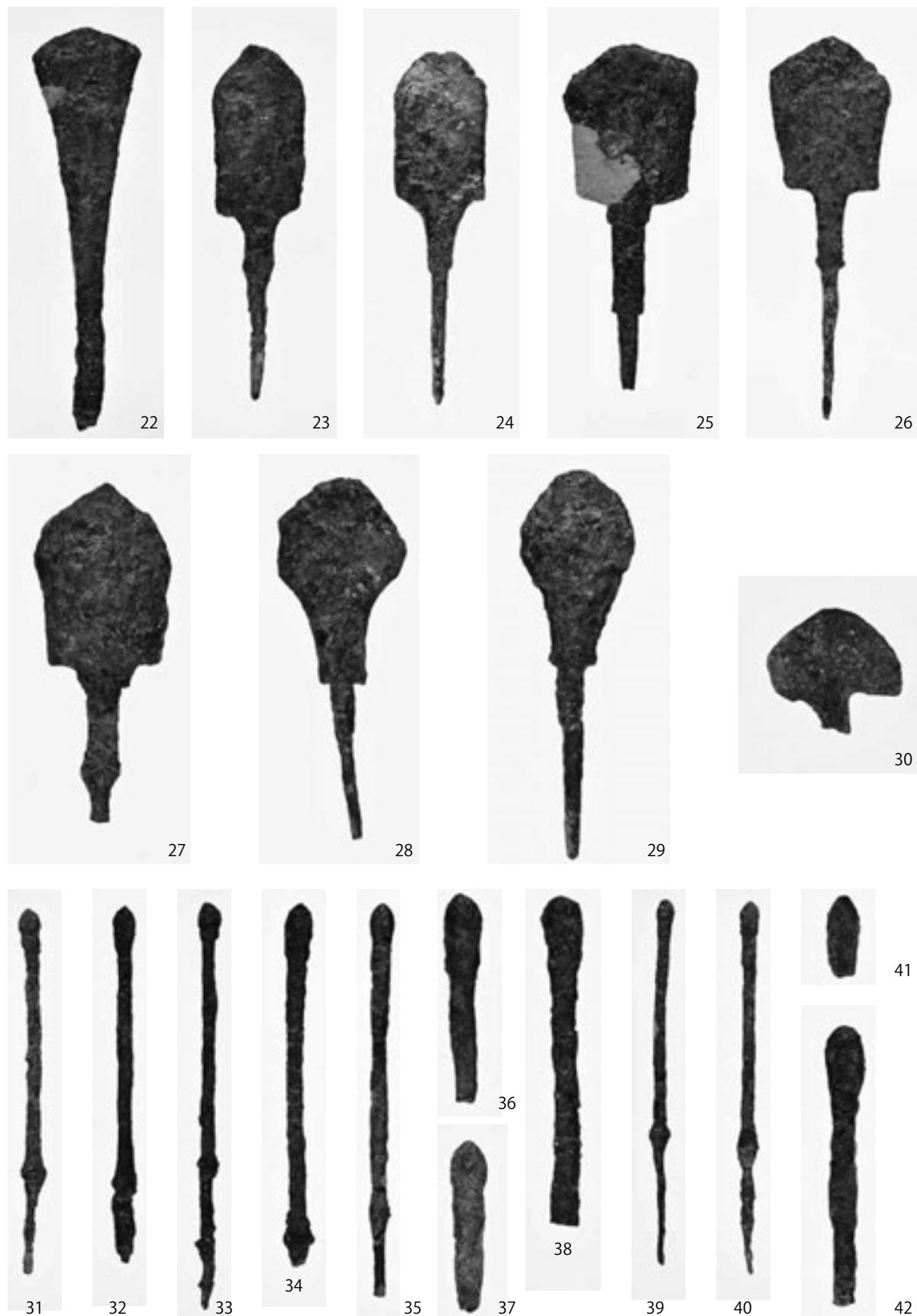
刀・刀装具、鉄鎌、馬具

図版3



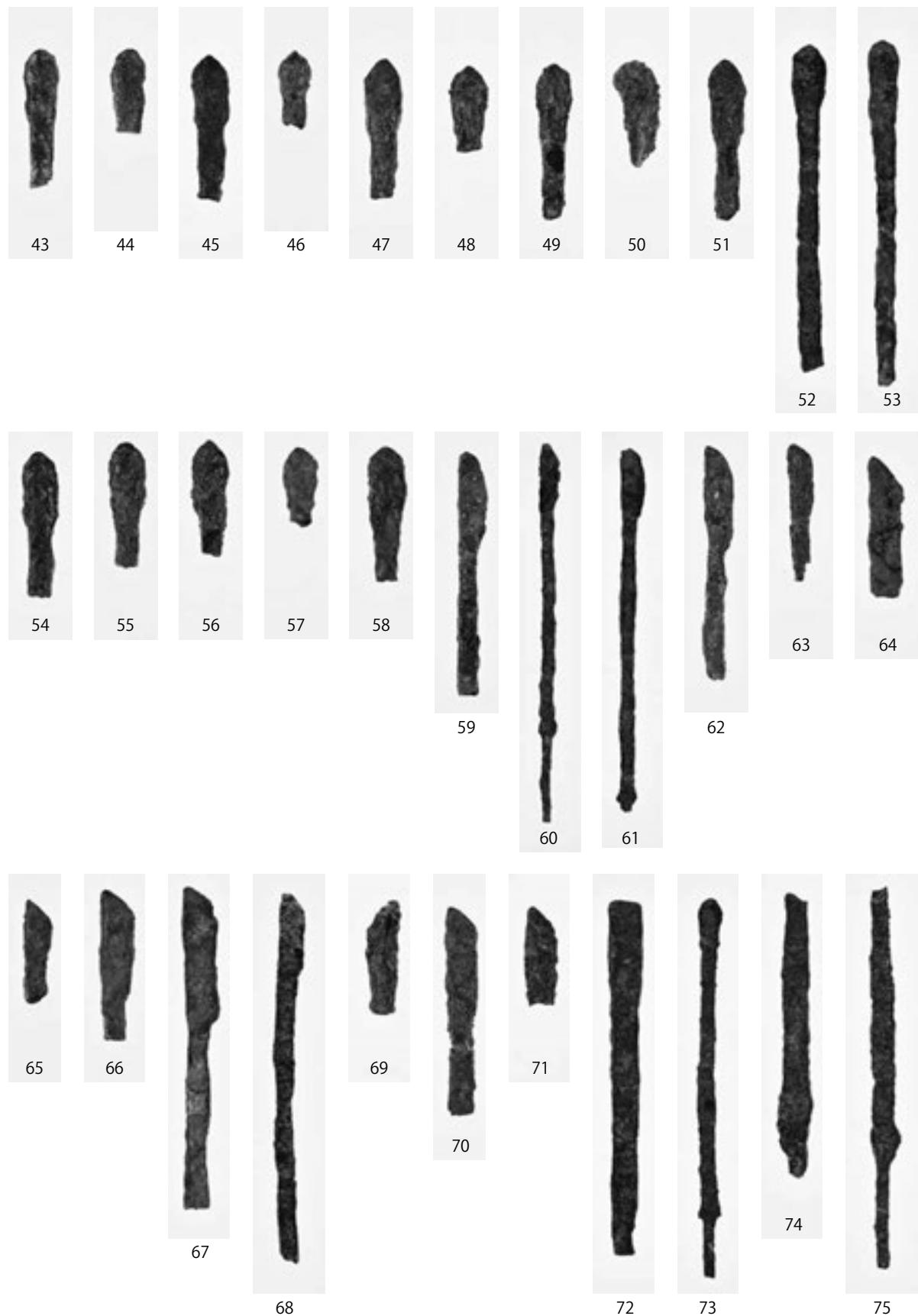
鋤子、刀子、工具

図版4

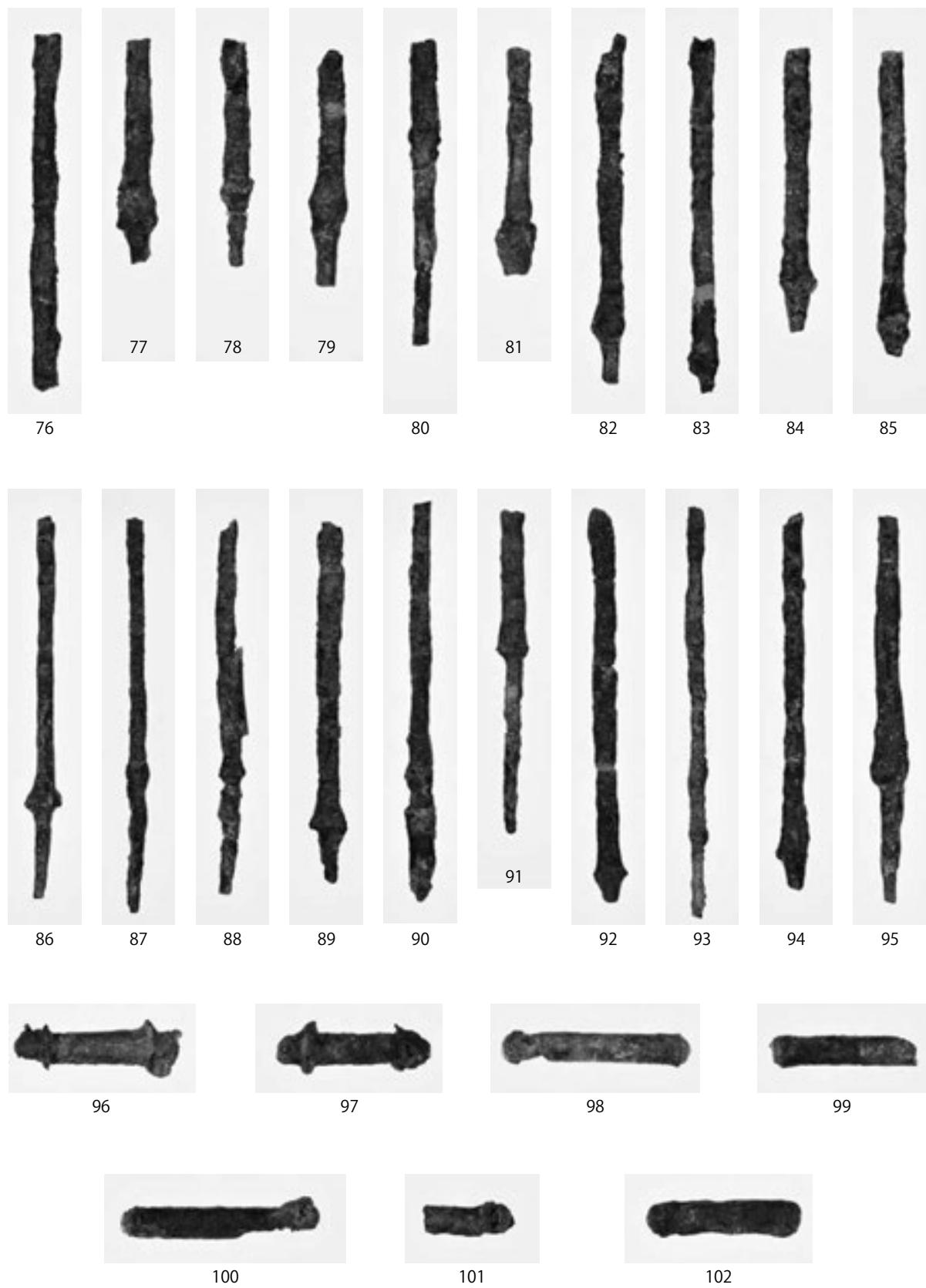


鉄鏃（1）

図版5

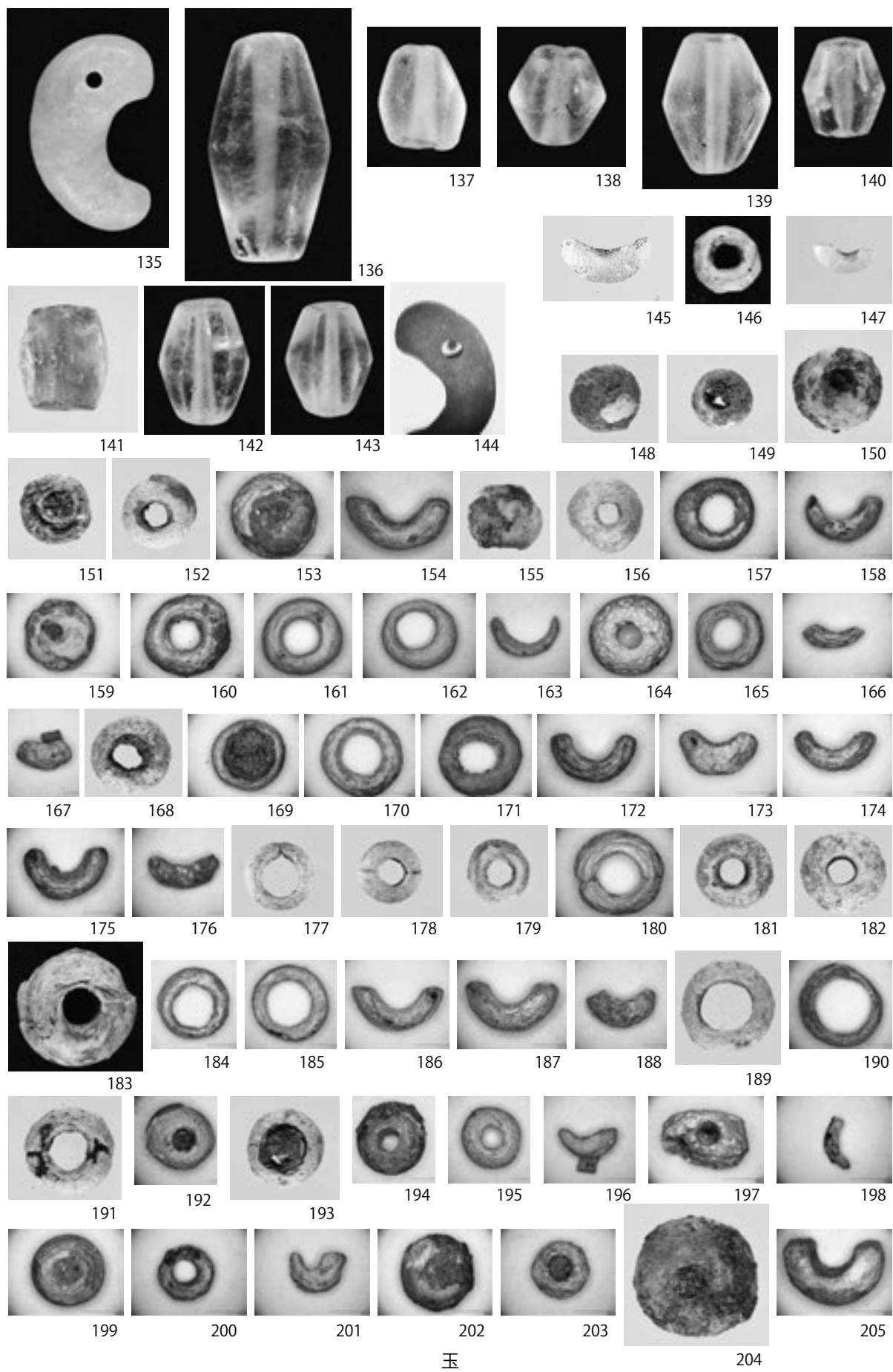


鉄鏃（2）

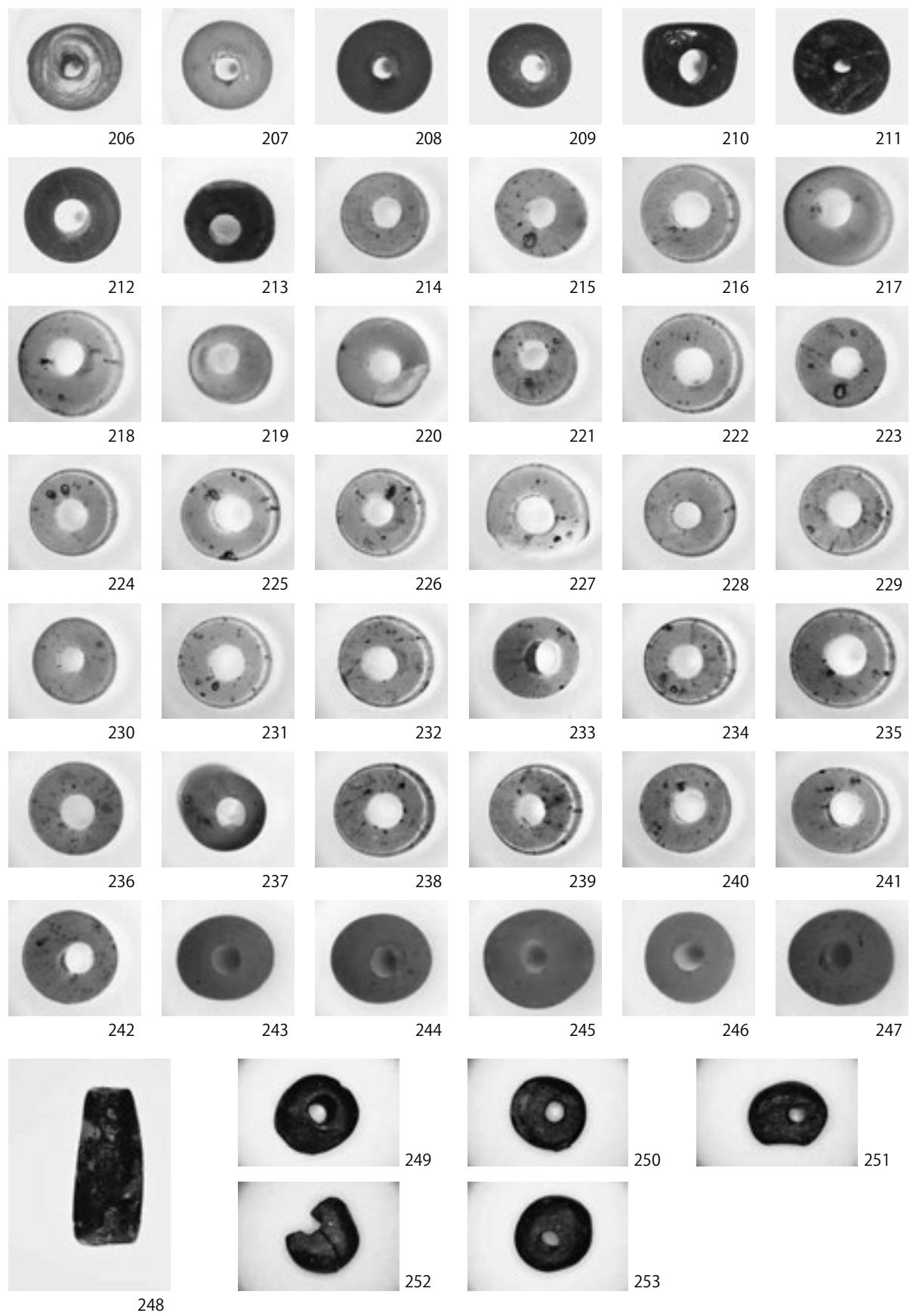


鉄鎌（3）・両頭金具

図版7



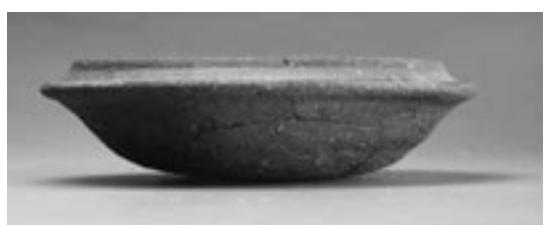
玉



図版9



254



258



255



259



256



260



257



261

土器①

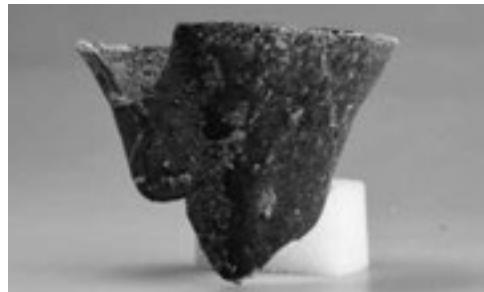


土器②

図版 11



272



276



273



277



274



278



275



279

土器③



280



284



281



285



282



286



283



287

土器④

重要文化財指定品目録

金錯銘大刀

1口

大歳庚寅正月六日庚寅の銘がある

福岡県元岡G群6号墳出土

附 1, 金属製品	134点	
1, 玉	119点	
1, 須恵器・土師器	34点	
		福岡市
		(福岡市埋蔵文化財センター保管)

(内訳)

1, 金錯銘大刀

1口

大歳庚寅正月六日庚寅の銘がある

福岡県元岡G群6号墳出土

附 1, 金属製品	134点	1, 玉	119点
銅鈴	1点	水晶勾玉	1点
金銅刀装具残欠	1点	水晶切子玉	8点
金銅花形飾金具残欠	1点	ガラス勾玉	1点
耳環	10点	ガラス丸玉	68点
刀・刀装具	7点	ガラス小玉	35点
鉄矛	1点	土製管玉	1点
鉄鎌	74点	土製丸玉	5点
両頭金具	7点	1, 須恵器・土師器	34点
轡残欠	6点	須恵器坏	10点
鐙残欠	2点	須恵器高坏	8点
鋸子	4点	須恵器塊残欠	1点
刀子	11点	須恵器甕残欠	2点
鉄鋸	2点	須恵器壺	1点
鉄鑿	1点	須恵器長頸壺	2点
鉄斧	1点	須恵器堤瓶残欠	1点
鉄鉈	1点	須恵器平瓶	7点
不明鉄製品	4点	土師器坏	1点
		土師器高坏残欠	1点
		(本指定1点、附287点)	

1. 金錯銘大刀1口
大歳庚寅正月六日庚寅の銘が有る

番号	長	幅	厚	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	74.4	3.0	1.1	刀身は、ほぼ全体が残るが切先及び刃部の一部を欠損、7片を接合、4分割の状態、刀身の棟に金象嵌による19文字の銘文有り『大歳庚寅正月六日庚寅日時作刀凡十二果練』(庚寅年は西暦570年に比定、蛍光X線分析で金含有量91~93%)、切先は吹か、関は棟側を小さく落とす両関、茎尻は一字文字尻で茎尻近くに目釘孔1カ所、目釘遺存、関に接して刀身側に壠を有する、金銅製の?が付き、茎側に金銅製の喰出し鐸が接する、茎に柄木の木質一部遺存	玄室内	1355集8-93	1	1043 10577

附1. 金属製品

銅鉈

1点

番号	長	厚(大)	厚(小)	遺存率(%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	11.4	7.5	7.2	100	青銅製、完形、断面八角形、中央に突線三条、方形鉈に円形鉈孔、鉈孔内に纖維遺存、鉄製丸入り(可動)	羨道	1210集61-381	附1	1043 10452

金銅刀装具残欠

1点

番号	長	幅	厚	遺存率(%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	4.2	最大のもの(3.5)	0.1	70	銅板鍍金、細片多数を接合して2分割、その他細片多数未接合、鞘金具か、金錯銘大刀に伴う可能性あり	玄室	1355集豊島論文fig2-1	附2	1043 10441

金銅花形飾金具

1点

番号	長	厚(大)	厚(小)	遺存率(%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	(4.1)	(4.1)	0.1	65	銅板鍍金か、4弁の花形、円形透かしが中央とそれぞれの花弁に入る、5ヶ所に鋤足遺存、腐朽顯著のため表面をガーゼとバラロイドB-72で補強、この他、金銅鉈頭と細片多数を別置	玄室	1210集61-382	附3	1043 10451

耳環

10点

番号	長径	短径	厚	遺存率(%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	2.5	2.3	0.8	100	中空の金属板に金薄板巻き、完形、小口に折り目有り、耳環2対を成す	玄室	1210集33-30	附4	1043 10431
2	2.4	2.3	0.8	100	中空の金属板に金薄板巻き、完形、小口に折り目有り、耳環1対を成す	玄室	1210集33-31	附5	1043 10432
3	1.7	1.7	0.4	90	銅芯に銀薄板巻き、鍍金、3片接合、耳環4対を成す	玄室	1210集33-38	附6	1043 10434
4	[1.8]	(1.6)	0.4	80	銅芯に銀薄板巻き、鍍金、2片未接合、耳環3対を成す、細片1別置き	玄室	1210集33-39	附7	1043 10436
5	2.4	2.1	0.7	100	銅芯に銀薄板巻き、完形、鍍金	玄室	1210集33-32	附8	1043 10433
6	2.4	2.2	0.7	100	銅芯に銀薄板巻き、完形、鍍金	玄室	1210集33-33	附9	1043 10435
7	2.5	2.3	0.7	95	銅芯に金薄板巻き、ほぼ完形、金板の一部を欠損	玄室	1210集33-34	附10	1043 10437
8	1.9	1.8	0.6	90	銅芯に金薄板巻き、開口部一部欠損、金板の一部を欠損	玄室	1210集33-35	附11	1043 10438
9	2.4	2.2	0.8	95	銅芯に金薄板巻き、ほぼ完形、開口部一部欠損、金板の一部を欠損	玄室	1210集33-36	附12	1043 10439
10	2.5	2.3	0.8	95	銅芯に銀薄板巻き、ほぼ完形、鍍金、銀板の一部を欠損	玄室	1210集33-37	附13	1043 10440

刀・刀装具

7点

番号	長	幅	厚	遺存率(%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	(8.3)	(2.5)	0.6	20	関部から茎部の残欠、片関(撫関)、茎に木質遺存、刀子の可能性あり	羨道	1210集51-309 1355集7-74 1381集3-14	附14	1043 10573
2	5.1	2.9	1.7	100	鉄製鞘尻金具、完形、内面に鞘の木質がわずかに遺存	羨道	1210集51-306 1381集3-13	附15	1043 10503
3	(4.3)	(1.9)	0.7	55	鉄地銀張單脚足金物、3片接合	玄室	1210集51-311 1355集7-87 1381集3-16	附16	1043 11645
4	(3.5)	0.8	0.9	40	鉄製責金具の残欠、2片接合	玄室	1210集51-311 1355集7-87 1381集3-17	附17	1043 12001
5	(2.0)	0.7	0.3	20	鉄製責金具の残欠	玄室	1355集7-88 1381集3-18	附18	1043 10529
6	(2.2)	(2.4)	0.5	50	鉄地銀張責金具、内面に木質遺存、2片接合+1片未接合があり	玄室	1355集7-89・上 1381集3-19	附19	1043 11636
7	(2.0)	1.3	0.3	20	鉄製の残欠、内面に木質遺存	玄室内	1381集3-15	附20	1043 11616

鉄鉢

1点

番号	長	幅	厚	遺存率(%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	(26.2)	3.0	3.0	95	三角穂式鉄鉢の身、ほぼ完形、先端部わずかに欠損か、刺突部断面三角形、基部断面円形で袋状、袋部内に目釘1本の遺存が確認できる、5片接合、この他釘状の未接合片1あり	墓道	1210集57-361 1355集7-71 1355集齊藤論文fig1 1381集4-1	附21	1043 10527

鉄鎌

74点

番号	長	幅	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	11.7	3.2	0.6	85	無頸有茎圭頭式、撫閔、鎌身部一部・茎端部欠損、茎巻き痕跡あり、4片接合	漢道	1210集53-337 1355集1-8 1355集齊藤論文fig5-7 1381集4-2	附22	1043 10556
2	16.1	4.3	1.0	100	短頸五角形式、鎌身閔は撫閔、閔は角閔、両側辺は平行する、4片接合	玄室	1210集51-304 1355集1-1 1355集齊藤論文fig5-1 1381集4-3	附23	1043 10501
3	14.9	4.0	0.8	90	短頸五角形式、鎌身閔は撫閔、閔は角閔、鎌身部一部欠損、両側辺は平行する、6片接合	玄室	1210集51-305 1355集1-2 1355集齊藤論文fig5-2 1381集4-4	附24	1043 10502
4	(9.7)	3.8	0.6	70	短頸五角形式、鎌身閔、閔とも角閔か、鎌身部・茎部端部欠損、4片接合	漢道	1210集52-317 1355集1-3 1355集齊藤論文fig5-3 1381集4-6	附25	1043 10535
5	14.7	4.6	0.6	100	短頸五角形式、鎌身閔、閔とも角閔か、4片接合	漢道	1210集52-322 1355集1-4 1355集齊藤論文fig5-4 1381集4-7	附26	1043 10540
6	(9.8)	4.0	0.4	80	短頸五角形式、台形閔、鎌身閔2段、角閔、茎部欠損、3片接合	玄室	1381集4-8	附27	1043 12030
7	(11.2)	4.0	0.5	90	短頸圭頭式、角閔、茎部端部欠損、4片接合	漢道	1210集52-319 1355集1-6 1355集齊藤論文fig5-5 1381集4-9	附28	1043 10537
8	12.8	3.7	0.5	100	短頸圭頭式、棘閔か、3片接合	漢道	1210集52-321 1355集1-7 1355集齊藤論文fig5-6 1381集4-10	附29	1043 10539
9	(3.1)	(3.4)	0.4	50	短頸三角式、角閔、鎌身の一部・頸部下半欠損	漢道	1210集52-325 1355集1-5 1355集齊藤論文fig5-8 1381集4-5	附30	1043 10543
10	(16.2)	1.1	0.5	95	長頸柳葉式、台形閔、茎尻欠損、9片接合	漢道	1210集52-313 1355集2-14 1355集齊藤論文fig5-24・32 1381集5-1	附31	1043 10531
11	(14.7)	1.1	0.7	90	長頸柳葉式、台形閔、茎尻欠損、茎部に矢柄の木質と口巻きの一部遺存、3片接合	漢道	1210集52-314 1355集2-10 1355集齊藤論文fig5-20 1381集5-2	附32	1043 10532
12	18.1	1.0	0.5	100	長頸柳葉式、台形閔、茎部に矢柄の木質わざかに遺存、茎部が若干曲がる、7片接合	漢道	1210集52-315 1355集2-13 1355集齊藤論文fig5-18 1381集5-3	附33	1043 10533
13	(12.2)	1.1	0.6	80	長頸柳葉式、台形閔、茎部欠損、4片接合	漢道	1210集52-323 1355集3-22 1355集齊藤論文fig5-27 1381集5-4	附34	1043 10541
14	(14.4)	0.9	0.5	90	長頸柳葉式、台形閔、茎尻欠損、6片接合	漢道	1210集54-353 1355集4-36 1355集齊藤論文fig5-21 1381集5-5	附35	1043 10575
15	(5.1)	0.9	0.5	30	長頸柳葉式、鎌身部の残欠、3片接合	漢道	1210集52-313 1355集2-19 1355集齊藤論文fig5-24 1381集5-6	附36	1043 12002
16	(4.2)	0.9	0.5	20	長頸柳葉式、鎌身部の残欠	漢道	1210集53-331 1355集3-21・上 1355集齊藤論文fig5-28 1381集5-7	附37	1043 10549
17	(7.9)	0.8	0.5	50	長頸柳葉式、頸部下半欠損、10片接合	漢道	1355集5-50 1381集5-8	附38	1043 11672
18	17.9	0.9	0.5	95	長頸柳葉式、台形閔、茎尻欠損、10片接合	漢道	1210集52-321 1355集2-12 1355集齊藤論文fig5-22 1381集5-9	附39	1043 12003
19	17.6	1.4	0.6	100	長頸柳葉式、台形閔、茎部に矢柄の木質・口巻きの一部が遺存、7片接合	漢道	1210集53-329 1355集2-9 1381集5-10	附40	1043 10546
20	(2.0)	0.9	0.4	5	長頸柳葉式、鎌身部の残欠	漢道	1210集53-329 1355集3-23 1355集齊藤論文fig5-25 1381集5-11	附41	1043 10547
21	(6.7)	1.0	0.5	30	長頸柳葉式、頸部下半欠損	漢道	1210集53-335 1355集5-45 1355集齊藤論文fig5-23 1381集5-12	附42	1043 10554

番号	長	幅	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
22	(3.4)	0.9	0.4	10	長頸柳葉式, 鎌身部の残欠	玄室内	1355集6-64 1381集5-13	附43	1043 11617
23	(2.1)	0.9	0.4	5	長頸柳葉式, 鎌身部の残欠	玄室内	1381集5-14	附44	1043 11629
24	(3.6)	0.9	0.4	10	長頸柳葉式, 鎌身部の残欠	羨道	1355集6-52 1381集5-15	附45	1043 11662
25	(1.9)	0.9	0.4	5	長頸柳葉式, 鎌身部の残欠	羨道	1355集6-58 1381集5-16	附46	1043 12005
26	(3.4)	0.9	0.5	10	長頸柳葉式, 鎌身部の残欠	羨道	1355集6-55 1381集5-17	附47	1043 11677
27	(2.1)	0.9	0.4	5	長頸柳葉式, 鎌身部の残欠	羨道	1355集6-57 1381集6-1	附48	1043 12006
28	(3.8)	0.9	0.4	15	長頸柳葉式, 鎌身部の残欠	羨道	1355集6-54 1381集6-2	附49	1043 12007
29	(2.6)	1.3	0.4	10	長頸柳葉式, 鎌身部の残欠	羨道	1381集6-3	附50	1043 11683
30	(3.9)	0.9	0.5	20	長頸柳葉式, 鎌身部の残欠, 2片接合	羨道	1355集2-19 1381集6-4	附51	1043 11692
31	(9.2)	0.9	0.5	40	長頸柳葉式, 頸部下半欠損, 3片接合	羨道	1355集4-37 1381集6-5	附52	1043 11695
32	(10.6)	0.9	0.4	50	長頸柳葉式, 下半欠損, 4片接合	羨道	1355集6-51・上 1381集6-6	附53	1043 12029
33	(3.5)	0.9	0.4	10	長頸柳葉式, 鎌身部残欠	羨道	1355集6-53 1381集6-7	附54	1043 11686
34	(3.1)	0.9	0.4	10	長頸柳葉式, 鎌身部残欠	羨道	1355集6-56 1381集6-8	附55	1043 12008
35	(2.8)	0.9	0.4	10	長頸柳葉式, 鎌身部残欠, 2片接合	羨道	1381集6-9	附56	1043 12009
36	(2.0)	0.9	0.4	5	長頸柳葉式, 鎌身部の残欠	墓道	1381集6-10	附57	1043 11705
37	(3.3)	0.8	0.5	10	長頸柳葉式, 鎌身部の残欠	Dトレンチ	1355集6-70 1381集6-11	附58	1043 11739
38	(5.9)	0.5	0.4	30	長頸片刃式, 下半欠損, 鎌身闊あり, 2片接合	羨道	1210集53-346 1381集6-12	附59	1043 10565
39	(15.8)	0.9	0.4	90	長頸片刃式, 台形闊, 茎尻欠損, 8片接合	羨道	1210集53-347 1355集3-29 1355集齊藤論文fig5-9 1381集6-13	附60	1043 10566
40	(13.4)	1.1	0.6	80	長頸片刃式, 台形闊, 茎部欠損, 6片接合	羨道	1210集53-345 1355集3-27 1355集齊藤論文fig5-11 1381集6-14	附61	1043 10564
41	(5.7)	0.9	0.4	30	長頸片刃式, 下半欠損, 3片接合	羨道	1210集54-352 1381集6-15	附62	1043 10572
42	(4.4)	1.0	0.5	20	長頸片刃式, 鎌身部の残欠, 3片接合	羨道	1210集54-350 1355集4-31・上 1381集6-16	附63	1043 10570
43	(3.5)	0.8	0.4	10	長頸片刃式, 鎌身部残欠	羨道	1210集53-348 1355集4-32・上 1355集齊藤論文fig5-17 1381集6-17	附64	1043 10568
44	(3.2)	0.9	0.4	10	長頸片刃式, 鎌身部の残欠	羨道	1210集54-351 1355集4-30・上 1355集齊藤論文fig5-15 1381集6-18	附65	1043 10571
45	(3.7)	1.0	0.4	15	長頸片刃式, 鎌身部残欠, 鎌身闊あり	羨道	1210集53-338 1355集4-34 1355集齊藤論文fig5-16 1381集6-19	附66	1043 10557
46	(7.8)	0.9	0.5	40	長頸片刃式, 下半欠損, 鎌身闊あり, 5片接合	羨道	1210集54-341 1355集4-33 1355集齊藤論文fig5-12 1381集6-20	附67	1043 10560
47	(11.1)	0.9	0.4	70	長頸片刃式, 開部から茎部欠損, 鎌身闊あり, 5片接合	羨道	1210集54-349 1355集3-26 1355集齊藤論文fig5-14 1381集6-21	附68	1043 10569
48	(2.8)	0.8	0.3	5	長頸片刃式, 鎌身部残欠	玄室内	1355集6-67 1381集6-22	附69	1043 11604
49	(5.1)	0.8	0.4	30	長頸片刃式, 鎌身部残欠, 3片接合	羨道	1381集6-23	附70	1043 11685
50	(2.4)	0.8	0.4	5	長頸片刃式, 鎌身部残欠	羨道	1381集7-1	附71	1043 12010
51	(8.5)	0.9	0.5	60	長頸方頭式か, 茎下半欠損, 2片接合	羨道	1355集4-38 1381集7-2	附72	1043 11696
52	(14.3)	1.0	0.5	90	長頸柳葉式, 台形闊, 茎部下半欠損, 5片接合	羨道	1210集53-327 1355集2-11 1381集7-3	附73	1043 10545
53	(6.9)	0.6	0.6	40	長頸鎌, 台形闊, 頸部から開部の残欠, 2片接合	羨道	1210集52-313 1355集2-15・下 1355集齊藤論文fig5-32 1381集7-4	附74	1043 12011
54	(11.8)	0.9	0.4	65	長頸鎌, 台形闊, 鎌身部・茎尻欠損, 7片接合	羨道	1210集53-331 1355集3-21 1381集7-5	附75	1043 12012

番号	長	幅	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
55	(8.9)	0.5	0.5	40	長頸鎌, 頸部の残欠, 6片接合	羨道	1210集53-331 1381集7-6	附76	1043 12013
56	(5.7)	0.9	0.6	30	長頸鎌, 棘闊か, 頸部から関部の残欠, 4片接合	羨道	1381集7-7	附77	1043 12014
57	(5.5)	1.0	0.4	30	長頸鎌, 台形闊, 頸部から関部の残欠, 3片接合	羨道	1381集7-8	附78	1043 12015
58	(5.5)	0.8	0.4	30	長頸鎌, 台形闊, 頸部から関部の残欠, 3片接合	羨道	1381集7-9	附79	1043 12016
59	(7.4)	0.8	0.5	35	長頸鎌, 台形闊, 関部から茎部の残欠, 口巻きわずかに遺存, 3片接合	羨道	1381集7-10	附80	1043 12017
60	(5.4)	0.4	0.4	30	長頸鎌, 台形闊, 鎌身部・茎部欠損, 4片接合	羨道	1210集53-346 1381集7-11	附81	1043 12018
61	(8.3)	0.5	0.4	50	長頸鎌, 鎌身部・茎部欠損, 3片接合	羨道	1210集54-352 1355集3-25・下 1381集7-12	附82	1043 12019
62	(8.6)	0.8	0.4	40	長頸鎌, 台形闊, 鎌身部・茎部欠損, 4片接合	羨道	1210集54-350 1355集4-31・下 1355集齊藤論文fig5-38 1381集7-13	附83	1043 12020
63	(6.9)	0.6	0.4	35	長頸鎌, 棘闊, 鎌身部・茎部欠損, 3片接合	羨道	1210集53-348 1355集4-32・下 1355集齊藤論文fig5-36 1381集7-14	附84	1043 12021
64	(7.4)	0.8	0.6	50	長頸鎌, 棘闊, 鎌身部・茎部欠損, 5片接合	羨道	1210集54-351 1355集4-30・下 1381集7-15	附85	1043 12022
65	(12.8)	0.9	0.4	70	長頸鎌, 台形闊, 鎌身部・茎尻欠損, 4片接合	羨道	1210集52-318 1355集2-16 1355集齊藤論文fig5-42 1381集7-16	附86	1043 10536
66	(14.6)	0.8	0.3	75	長頸鎌, 台形闊, 鎌身部・茎尻欠損, 茎部が若干曲がる, 8片接合	羨道	1210集52-320 1355集3-24 1355集齊藤論文fig5-31 1381集7-17	附87	1043 10538
67	(12.1)	0.9	0.5	65	長頸鎌, 台形闊, 鎌身部・茎尻欠損, 頸部中央に木質接着, 茎部に矢柄の木質と口巻き遺存, 5片接合	羨道	1210集52-326 1355集2-17 1355集齊藤論文fig5-39 1381集7-18	附88	1043 10544
68	(9.0)	0.9	0.5	50	長頸鎌, 台形闊, 鎌身部・茎部欠損, 3片接合	羨道	1210集53-330 1355集2-20 1355集齊藤論文fig5-35 1381集8-1	附89	1043 10548
69	(13.1)	0.9	0.5	70	長頸鎌, 台形闊, 鎌身部・茎尻欠損, 茎部に矢柄の木質と口巻き遺存, 3片接合	羨道	1210集53-333 1355集5-47 1355集齊藤論文fig5-34 1381集8-2	附90	1043 10552
70	(7.8)	0.8	0.4	40	長頸鎌, 棘闊, 上半・茎尻欠損, 4片接合	羨道	1210集53-339 1355集4-42 1355集齊藤論文fig5-30 1381集8-3	附91	1043 10558
71	(12.3)	1.0	0.5	70	長頸鎌, 台形闊, 鎌身部・茎部欠損, 4片接合	玄室内	1355集5-49 1381集8-4	附92	1043 11628
72	(13.9)	0.7	0.4	75	長頸鎌, 棘闊か, 鎌身部・茎尻欠損, 8片接合	羨道	1210集53-340 1355集4-41 1355集齊藤論文fig5-29 1381集8-5	附93	1043 10559
73	(10.0)	0.8	0.4	60	長頸鎌, 棘闊, 鎌身部・茎部欠損, 4片接合	羨道	1210集53-343 1355集4-40 1355集齊藤論文fig5-40 1381集8-6	附94	1043 10562
74	(10.0)	0.9	0.4	60	長頸鎌, 台形闊, 鎌身部・茎尻欠損, 5片接合	玄室内	1381集8-7	附95	1043 11631

両頭金具

7点

番号	長	幅	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	2.9	(1.0)	0.6	80	筒部が半欠, 筒部端部に4弁の花弁状細工, 筒部外側に木質遺存, 2片接合	墓道	1210集55-358 1355集11-123 1381集8-8	附96	1043 10519
2	2.7	0.9	0.7	95	筒部端部に4弁の花弁状細工あり, ほぼ完形, 筒部外側に木質遺存	羨道	1210集55-357 1355集11-121 1381集8-9	附97	1043 10520
3	(3.3)	0.6	0.6	80	軸部の片側端部欠損, 筒部外側に木質遺存	玄室内	1355集11-117 1381集8-10	附98	1043 11640
4	(2.6)	0.6	0.5	65	軸部両側欠損, 筒部外側に木質遺存, 2片接合	玄室内	1355集11-118 1381集8-11	附99	1043 11642
5	(3.5)	0.6	0.6	90	筒部片側頭部欠損, 筒部外側に木質遺存	羨道	1355集11-119 1381集8-12	附100	1043 11675
6	(1.6)	0.7	0.7	35	半欠, 筒部端部に4弁の花弁状の細工, 筒部外側に木質遺存	羨道	1355集11-120 1381集8-13	附101	1043 11682
7	2.7	0.7	0.6	100	完形, 筒部外側に木質遺存	羨道	1355集11-122 1381集8-14	附102	1043 12023

轡残欠

6点

番号	長	幅	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	20.7	9.5	3.6	75	素環環状轡、轡の銜と引手、引手・銜は無振り一条線、銜は2連、引手壺はくの字状に折れる、片側の引手に素環環状鏡板の一部が接着、10片接合	羨道	1210集58-362 1355集9-106 1381集9-1	附103	1043 10504
2	(5.1)	6.0	0.5	10	轡に伴う素環環状鏡板、4片接合、轡残欠1と同一個体の可能性あり	羨道	1210集58-369 1355集9-101 1381集9-2	附104	1043 10506
3	(3.4)	(0.5)	0.4	5	轡に伴う素環環状鏡板の残片、轡残欠1と同一個体の可能性あり	羨道	1210集58-368 1355集9-101 1381集9-3	附105	1043 10511
4	(12.4)	1.4	1.0	20	轡に伴う引手、一条線無振り引手、引手壺欠損、引手壺はくの字状に折れる、轡残欠5と組み合う可能性あり	羨道	1210集58-365 1355集9-94 1381集9-4	附106	1043 10507
5	(11.5)	2.9	0.8	20	轡に伴う引手、一条線無振り引手、引手壺欠損、引手の基部に遊環が遺存、2片接合、轡残欠4と組み合う可能性あり	羨道	1210集58-364 1355集9-95 1381集9-5	附107	1043 10508
6	(4.8)	2.4	1.6	5	銜の一部か	墓道	1210集58-366 1355集9-96 1381集9-6	附108	1043 10509

鎧残欠

2点

番号	長	幅	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	(3.1)	(4.6)	1.0	40	鎧の鎧軸金具、板状鉄板両端部欠損、一方の板状鉄板中央には木製壺鎧と結合する鉄釘が残存、3片接合、鎧残欠2と対をなす可能性あり	墓道	1355集9-102 1381集9-7	附109	1043 11701
2	(4.0)	(2.5)	0.8	20	鎧の鎧軸金具の残欠、鎧残欠1と対をなす可能性あり	墓道	1355集9-103 1381集9-8	附110	1043 11715

鎌子

4点

番号	長	幅	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	(4.9)	(1.3)	0.9	40	鉄製、頭部折り曲げ、先端部欠損、鎌子2と同一個体の可能性あり	羨道	1210集55-359 1355集11-114 1381集9-9	附111	1043 10514
2	(3.9)	0.9	0.5	20	鉄製、はさみ部の残欠、鎌子1と同一個体の可能性あり	Dトレンチ	1355集11-127 1381集9-10	附112	1043 12024
3	8.6	(1.8)	0.8	90	鉄製、頭部折り曲げ、3片接合、この他接点のないはさみ部片(2片接合)あり	玄室内	1355集11-113 1381集9-11	附113	1043 11606
4	(3.9)	0.7	0.3	20	はさみ部の残欠	Eトレンチ	1355集11-128 1381集9-12	附114	1043 11740

刀子

11点

番号	長	幅	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	(8.0)	2.3	0.5	25	刀子関部の残欠、片関(撫関)、2片接合、小形の刀の可能性あり	玄室	1210集51-308 1355集7-73 1381集10-2	附115	1043 10525
2	13.9	1.7	1.1	100	身と鞘の茎部に木質遺存、5片接合	玄室内	1210集51-310 1355集7-76 1381集10-1	附116	1043 10515
3	(9.0)	2.1	1.0	50	切先と茎尻を欠損、茎に柄の木質遺存、4片接合	玄室内	1210集51-307 1355集7-77 1381集10-4	附117	1043 10516
4	(9.2)	1.6	0.8	70	茎部欠損、関部以下に柄の木質遺存、4片接合	玄室内	1210集51-311 1355集7-75 1381集10-3	附118	1043 12025
5	(8.2)	1.5	1.0	75	切先欠損、茎部に柄の木質遺存	羨道	1210集59-377 1355集10-112 1381集10-5	附119	1043 10551
6	(6.7)	1.1	0.5	80	切先・茎尻欠損、両関、2片接合	玄室内	1355集7-84 1381集10-6	附120	1043 11609
7	(12.1)	1.5	1.0	80	切先・茎尻欠損、茎部に柄の木質遺存、5片接合	玄室内	1381集10-8	附121	1043 11625
8	(5.7)	1.4	0.5	40	関部以下欠損、切先わずかに欠損、2片接合	玄室内	1381集10-7	附122	1043 12026
9	(1.7)	(1.1)	0.2	5	鍔の残欠、内面に木質遺存	玄室内	1355集7-91 1381集10-11	附123	1043 12027
10	(4.5)	1.5	0.4	30	身部切先の残欠	玄室	1355集7-79 1381集10-9	附124	1043 11649
11	(4.8)	1.0	0.4	30	身の残欠、2片接合	墓道	1355集7-86 1381集10-10	附125	1043 11716

鉄鋸

2点

番号	長	幅	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	最大のもの (5.4)	最大のもの 3.3	0.5	—	両端部欠損、片刃、鋸歯、5片接合なし未接合	墓道	1210集59-375 1381集10-12	附126	1043 10524
2	(26.3)	2.8	0.9	—	両端部欠損、両刃、鋸歯、3片接合	羨道	1210集59-373 1355集10-107 1381集10-13	附127	1043 10523

鉄鑿

1点

番号	長	幅	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	(15.7)	1.5	1.7	95	刃先欠損, 断面方形, 方柱状, 5片接合	羨道	1210集59-380 1355集10-110 1381集11-1	附128	1043 10567

鉄斧

1点

番号	長	幅	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	8.5	4.3	2.3	100	袋状鍛造鉄斧, 完形, 有肩, 袋部接合部には隙間あり, 両刃	羨道	1210集59-376 1355集10-111 1381集11-2	附129	1043 10530

鉄鉤

1点

番号	長	幅	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	(17.0)	2.2	1.6	90	茎尻が欠損, 刃部は断面三日月形で中央に鏽あり, 間から茎部全体に木質が遺存, 5片接合	玄室内	1210集59-379 1355集10-109 1381集11-3	附130	1043 10526

不明鉄製品

4点

番号	長	幅	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	(8.5)	0.7	0.5	—	棒状の鉄製品, 装着された木質が一部遺存, 2片接合	羨道	1381集11-4	附131	1043 12028
2	(24.0)	0.6	0.5	—	棒状の鉄製品, 一端が遺存し尖る, 7片接合	前庭部・包含層	1355集11-124・125 1381集11-5	附132	1043 11730
3	2.6	0.9	0.9	100	キャップ状の鉄製品, 完形	羨道	1210集55-355 1355集11-116 1355集齊藤論文fig5-43 1381集11-6	附133	1043 10518
4	2.7	1.0	1.0	100	キャップ状の鉄製品, 完形, 内部にわずかに木質遺存	羨道	1210集55-356 1355集11-115 1355集齊藤論文fig5-44 1381集11-7	附134	1043 10522

附1, 玉水晶勾玉

113点
1点

番号	長	厚	幅	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	2.7	1.7	1.1	100	完形, 透明, 重量6.1g, 表面は風化のため失透, 全体に亀裂多數	玄室	1210集35-147	附135	1043 10421

水晶切子玉

8点

番号	径	孔径	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	3.0	0.4	1.6	95	ほぼ完形, 透明, 重量9.1g, 六面に面取り, 片側小口面の周辺一部欠損, 孔の周りに紐擦れ状の窪み, 表面は若干風化失透し, 摩耗する	玄室	1210集35-148	附136	1043 10422
2	1.5	0.5	1.2	100	完形, 透明, 重量2.7g, 六面に面取り, 小口面小欠損, 表面は若干風化し, 摩耗する	玄室	1210集35-149	附137	1043 10423
3	1.5	0.4	1.5	100	完形, 透明, 重量4.0g, 横断面は円形で, 面取りはしない, 表面は若干風化失透する	玄室	1210集35-150	附138	1043 10424
4	1.7	0.4	1.3	100	完形, 透明, 重量4.0g, 側面小欠損, 表面は風化失透し, 摩耗する	玄室	1210集35-151	附139	1043 10425
5	1.4	0.4	1.3	100	完形, 透明, 重量3.0g, 断面は円形で面取りしない, 表面の風化は少なく, 若干摩耗する	玄室	1210集35-152	附140	1043 10426
6	1.4	0.2	1.3	90	青味を帯びる, 重量2.8g, 側面の一部が剥離欠損, 六面に面取り, 表面に風化による亀裂多数, 若干摩耗気味	玄室	1210集35-153	附141	1043 10427
7	2.0	0.4	1.5	100	完形, 透明, 重量5.2g, 六面に面取り, 孔の周りに紐擦れ痕, 表面の風化は少なく, 若干摩耗する	玄室	1210集35-154	附142	1043 10428
8	1.3	0.3	1.8	100	完形, 透明, 重量4.1g, 六面に面取り, 孔の周りに紐擦れ痕, 表面は若干風化するが進んでいない, 若干摩耗気味	玄室	1210集35-155	附143	1043 10429

ガラス勾玉

1点

番号	長	厚	幅	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	2.4	0.9	1.5	100	完形, 重量3.2g, 青色, ソーダ石灰ガラス, 孔径0.3cm	玄室	1210集35-146	附144	1043 10402

ガラス丸玉

68点

番号	径	孔径	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	[0.9]	[0.5]	0.6	30	重量0.3g, 白色, 風化が著しい, 鉛ガラス, 細片多数に破損	玄室	1210集33-40	附145	1043 10301
2	1.0	0.4	0.5	90	重量0.4g, 白色, 風化が著しい, 鉛ガラス, 一部破損, 細片分離	玄室	1210集33-41	附146	1043 10302
3	(1.2)	[0.4]	0.8	30	重量1.1g, 白色, 風化が著しい, 鉛ガラス	玄室	1210集33-42	附147	1043 10303
4	1.3	—	0.9	95	重量3.0g, 白色, 風化が著しい, 鉛ガラス, 表層一部剥離欠損	玄室	1210集33-43	附148	1043 10304

番号	径	孔径	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
5	1.1	0.5	0.9	90	重量1.5g, 白色, 風化が著しい, 鉛ガラス, 一部破損, 細片分離	玄室	1210集33-44	附149	1043 10305
6	1.3	—	1.0	95	重量1.5g, 白色, 鉛ガラス, 表層一部剥離欠損	玄室	1210集33-45	附150	1043 10306
7	1.1	—	0.7	90	重量0.7g, 白色, 風化が著しい, 鉛ガラス, 表層一部剥離欠損	玄室	1210集33-46	附151	1043 10307
8	1.1	0.4	0.8	95	重量2.0g, 白色, 風化が著しい, 鉛ガラス, 表層一部剥離欠損	玄室	1210集33-47	附152	1043 10308
9	1.0	0.5	0.7	95	重量1.5g, 白色, 風化が著しい, 鉛ガラス, 表層一部剥離欠損	玄室	1210集33-48	附153	1043 10309
10	[1.1]	—	0.7	40	重量0.7g, 白色, 風化が著しい, 鉛ガラス, 表層一部剥離欠損	玄室	1210集33-49	附154	1043 10310
11	[1.2]	—	1.0	40	重量0.5g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス, 細片多数に破損	玄室	1210集33-50	附155	1043 10311
12	1.1	0.4	0.8	95	重量2.0g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集33-51	附156	1043 10312
13	0.9	0.4	0.5	90	重量0.5g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集33-52	附157	1043 10313
14	[1.0]	0.5	0.5	40	重量0.2g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集33-53	附158	1043 10314
15	0.8	—	0.6	90	重量0.6g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集33-54	附159	1043 10315
16	1.0	0.4	0.7	90	重量1.3g, 白色, 表層一部剥離欠損, 細片分離, 鉛ガラス	玄室	1210集33-55	附160	1043 10316
17	1.0	0.5	0.6	95	重量0.9g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集33-56	附161	1043 10317
18	0.9	0.4	0.5	80	重量0.3g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集33-57	附162	1043 10318
19	0.9	0.4	0.3	30	重量0.1g未満, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集33-58	附163	1043 10319
20	1.0	0.3	0.8	95	重量1.5g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集33-59	附164	1043 10320
21	0.8	0.4	0.5	80	重量0.5g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集33-60	附165	1043 10321
22	(0.7)	[0.6]	0.4	20	重量0.1g未満, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集33-61	附166	1043 10322
23	(0.6)	(0.3)	0.4	20	重量0.1g未満, 白色, 破断面緑色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集33-62	附167	1043 10323
24	1.1	0.4	0.8	95	重量2.1g, 白色, 一部青色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集33-63	附168	1043 10324
25	0.9	0.7	0.5	80	重量0.5g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集33-64	附169	1043 10325
26	1.0	0.5	0.5	90	重量0.9g, 白色, 一部青色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集33-65	附170	1043 10326
27	1.0	0.5	0.4	90	重量0.3g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集33-66	附171	1043 10327
28	[1.0]	[0.4]	0.8	45	重量0.7g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集33-67	附172	1043 10328
29	[1.0]	[0.5]	0.7	40	重量0.6g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-68	附173	1043 10329
30	[1.0]	—	0.7	40	重量0.6g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-69	附174	1043 10330
31	1.1	0.4	0.6	50	重量0.5g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-70	附175	1043 10331
32	[1.2]	—	0.5	25	重量0.1g未満, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-71	附176	1043 10332
33	1.0	0.6	0.5	90	重量0.9g, 白色, 一部青色, 表層一部剥離欠損, 1ヶ所縦位に筋状痕跡, 鉛ガラス	玄室	1210集34-72	附177	1043 10333
34	1.2	0.5	0.8	95	重量2.4g, 白色, 表層一部剥離欠損, 2ヶ所縦位に筋状痕跡, 鉛ガラス	玄室	1210集34-73	附178	1043 10334
35	1.1	0.4	0.6	90	重量1.0g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-74	附179	1043 10335
36	1.0	0.5	0.7	90	重量1.3 g, 白色, 一部青色, 表層一部剥離欠損, 2ヶ所縦位に筋状痕跡, 鉛ガラス	玄室	1210集34-75	附180	1043 10336
37	1.2	0.3	0.8	95	重量1.6g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-76	附181	1043 10337
38	1.2	0.3	0.8	95	重量2.5g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-77	附182	1043 10338
39	1.2	0.2	1.0	95	重量1.4g, 白色, 表層一部剥離欠損, 細片分離, 鉛ガラス	玄室	1210集34-78	附183	1043 10339
40	0.8	0.5	0.4	60	重量0.3g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-79	附184	1043 10340
41	0.9	0.5	0.4	80	重量0.4g, 白色, 一部緑色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-80	附185	1043 10341
42	[1.2]	—	0.6	45	重量0.5g, 白色, 破断面緑色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-81	附186	1043 10342

番号	径	孔径	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
43	1.2	0.6	0.7	50	重量0.9g, 白色, 破断面緑色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-82	附187	1043 10343
44	[1.0]	—	0.5	30	重量0.1g未満, 白色, 破断面緑色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-83	附188	1043 10344
45	1.2	0.4	0.7	90	重量1.5g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-84	附189	1043 10345
46	1.0	0.6	0.4	70	重量0.4g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1381集13-18	附190	1043 10404
47	1.1	0.4	0.6	80	重量1.2g, 白色, 破断面緑色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス, 2片接合	玄室	1210集34-85	附191	1043 10346
48	0.7	0.2	0.6	95	重量0.7g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-86	附192	1043 10347
49	1.1	0.6	0.6	90	重量1.5g, 白色, 表層一部剥離欠損, 1ヶ所縦位に筋状痕跡, 細片分離, 鉛ガラス	玄室	1210集34-87	附193	1043 10348
50	0.8	0.2	0.7	95	重量0.8g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-88	附194	1043 10349
51	0.7	0.2	0.5	95	重量0.4 g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-89	附195	1043 10350
52	[0.8]	—	0.4	30	重量0.2g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-90	附196	1043 10351
53	0.9	0.2	0.9	80	重量0.9g, 白色, 一部緑色, 形状は扁平, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-91	附197	1043 10352
54	(0.6)	—	0.3	10	重量0.1g未満, 白色, 一部緑色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-92	附198	1043 10353
55	0.8	0.2	0.7	90	重量0.8g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-93	附199	1043 10354
56	0.7	0.3	0.4	80	重量0.2 g, 白色, 一部緑色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-94	附200	1043 10355
57	0.7	0.3	0.5	55	重量0.2g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-95	附201	1043 10356
58	0.9	(0.5)	0.6	95	重量0.9g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-96	附202	1043 10357
59	0.7	0.3	0.4	80	重量0.2g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-97	附203	1043 10358
60	1.4	0.3	1.0	95	重量4.0g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-98	附204	1043 10359
61	1.2	0.5	0.8	50	重量1.1g, 白色, 表層一部剥離欠損, 鉛ガラス	玄室	1210集34-99	附205	1043 10360
62	1.4	0.5	1.0	100	完形, 重量3.8g, 黄色, 横方向に縞状の痕跡, 鉛ガラス	玄室	1210集35-140	附206	1043 10396
63	1.3	0.4	1.0	100	完形, 重量3.8g, 黄色, 鉛ガラス	玄室	1210集35-141	附207	1043 10397
64	1.4	0.4	1.0	100	完形, 重量5.0g, 緑色, 鉛ガラス	玄室	1210集35-142	附208	1043 10398
65	1.0	0.3	0.8	100	完形, 重量1.8g, 緑色, 横方向に縞状の痕跡, 鉛ガラス	玄室	1210集35-143	附209	1043 10399
66	0.9	0.3	0.8	100	完形, 重量0.7g, 小口面平坦, 青紺色, カリガラス	玄室	1210集35-144	附210	1043 10400
67	1.1	0.2	0.8	100	完形, 重量1.3g, 青紺色, ソーダ石灰ガラス	溝	1210集35-145	附211	1043 10401
68	1.4	0.6	1.3	100	重量4.4g, 2片接合か, 黄緑色, 鉛ガラス	玄室	1210集35-156	附212	1043 10403

ガラス小玉

35点

番号	径	孔径	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.03g, 青紺色, カリガラス	玄室	1210集35-105	附213	1043 10361
2	0.2	0.1	0.2	100	完形, 重量0.01g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-107	附214	1043 10362
3	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.02g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-106	附215	1043 10363
4	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.01g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-108	附216	1043 10364
5	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.03g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-109	附217	1043 10365
6	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.02g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-110	附218	1043 10366
7	0.2	0.1	0.2	100	完形, 重量0.02g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-111	附219	1043 10367
8	0.3	0.1	0.2	90	重量0.02g, 側面一部欠損, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-112	附220	1043 10368
9	0.2	0.1	0.2	100	完形, 重量0.01g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-113	附221	1043 10369
10	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.01g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-114	附222	1043 10370
11	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.01g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-115	附223	1043 10371
12	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.02g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-116	附224	1043 10372
13	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.01g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-117	附225	1043 10373
14	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.01g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-118	附226	1043 10374
15	0.3	0.1	0.1	80	重量0.01g, 側面一部欠損, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-119	附227	1043 10375
16	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.01g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-120	附228	1043 10376
17	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.02g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-121	附229	1043 10377
18	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.02g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-122	附230	1043 10378
19	0.3	0.1	0.1	100	完形, 重量0.01g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-123	附231	1043 10379
20	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.02g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-124	附232	1043 10380
21	0.2	0.1	0.2	100	完形, 重量0.02g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-125	附233	1043 10381

番号	径	孔径	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
22	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.02g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-126	附234	1043 10382
23	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.03g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-127	附235	1043 10383
24	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.02g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-128	附236	1043 10384
25	0.2	0.1	0.3	100	完形, 重量0.02g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-129	附237	1043 10385
26	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.02g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-130	附238	1043 10386
27	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.01g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-131	附239	1043 10387
28	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.01g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-132	附240	1043 10388
29	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.01g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-133	附241	1043 10389
30	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.02g, 淡青色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-134	附242	1043 10390
31	0.2	0.1	0.2	100	完形, 重量0.02g, 黄色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-135	附243	1043 10391
32	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.01g, 黄色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-138	附244	1043 10392
33	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.01g, 黄色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-136	附245	1043 10393
34	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.03g, 黄色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-137	附246	1043 10394
35	0.3	0.1	0.2	100	完形, 重量0.03g, 黄色, ソーダ石灰ガラス	玄室	1210集35-139	附247	1043 10395

土製管玉

1点

番号	径	孔径	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	0.8	0.2	1.9	90	重量1.1g, 片端がすぼまる, 9片接合, 側面一部欠損, 黒褐色	玄室	1381集14-36	附248	1043 11531

土製丸玉

5点

番号	径	孔径	厚	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	0.7	0.2	0.4	80	重量0.2g, 側面の一部を欠損, 黒褐色	玄室	1210集34-100	附249	1043 10411
2	0.7	0.2	0.4	90	重量0.2g, 側面の一部欠損, 黒褐色	玄室	1210集34-101	附250	1043 10412
3	0.7	0.2	0.4	80	重量0.1g, 側面の一部欠損, 黒褐色	玄室	1210集34-102	附251	1043 10413
4	0.5	0.2	0.3	65	重量0.2g, 2片接合, 細片分離, 側面の1/3ほどを欠損, 黒褐色	玄室	1210集34-103	附252	1043 10414
5	0.7	0.2	0.4	100	完形, 重量0.2g, 黒褐色	玄室	1210集34-104	附253	1043 10415

附1, 須恵器・土師器

34点

須恵器坏

10点

番号	口径	底径	器高	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	10.7	—	4.4	95	壊身, 口縁部一部欠損, 4片接合, 底部にヘラ記号	玄室	1210集32-20	附254	1043 10010
2	10.2	6.0	4.0	100	壊身, 完形, 底部にヘラ記号	羨道	1210集37-157	附255	1043 10012
3	10.0	12.1	3.3	80	壊身, 口縁部, 体部の一部欠損, 8片接合, 完形に復元	墓道	1210集45-229	附256	1043 10018
4	8.8	最大径 11.0	3.2	70	壊身, 8片接合, 完形に復元, 口縁部を大きく欠損	墓道下層	1210集43-201	附257	1043 10042
5	10.5	最大径 12.4	3.4	70	壊身, 口縁部から底部一部欠損, 8片接合, 完形に復元, 底部にヘラ記号	墓道下層	1210集43-196	附258	1043 10044
6	12.3	7.5	3.8	60	壊身, 破片多数接合, 完形に復元, 全体に薄手で体部は緩く外反	墓道下層・墳丘	1210集44-213	附259	1043 10047
7	[9.8]	天井径 4.8	3.2	35	壊蓋, 口縁部のほとんどを欠損, 6片接合, 完形に復元, 天井部に小礫融着	墓道下層	1210集43-190	附260	1043 10031
8	[13.0]	—	3.8	35	壊蓋, 口縁部のほとんどを欠損, 6片接合, 完形に復元, 天井部にヘラ記号	墓道下層	1210集43-188	附261	1043 10034
9	[10.9]	—	3.5	55	壊蓋, 口縁部のほとんどを欠損, 5片接合, 完形に復元, 天井部にヘラ記号	墓道下層	1210集43-189	附262	1043 10055
10	13.2	最大径 15.4	5.2	100	壊蓋, ほぼ完形, 口縁部小欠損, 中央に円筒形の摘み	玄室	1210集32-21	附263	1043 10063

須恵器高环

8点

番号	口径	底径	器高	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	10.3	6.2	6.5	90	口縁部・体部・脚端部の一部を欠損, 破片多数接合, 器壁薄い, 脚端部上面に小突起	羨道・羨道下層・玄室	1210集37-164	附264	1043 10001
2	10.1	8.1	10.8	90	体部と脚端部の一部を欠損, 9片接合, 器壁やや厚い, 壁外端と脚部に二条の沈線	玄室・羨道上層	1210集32-23	附265	1043 10005
3	8.4	[7.0]	9.3	80	口縁部小欠損, 脚裾部の2/3を欠損, 完形に復元, 壁口縁部に若干のひずみあり	玄室	1210集32-24	附266	1043 10006
4	10.0	—	(6.3)	65	脚の下半と口縁部一部欠損, 8片接合, 体部と底部の境に段を有する	羨道	1210集37-161	附267	1043 10013
5	[8.5]	10.7	3.4	50	有蓋高环の蓋, 6片接合, 完形に復元, 低く扁平な摘みが付く, 体部にヘラ記号	墓道下層	1210集44-216	附268	1043 10021
6	(6.9)	—	(8.7)	50	壊部口縁部・脚裾部欠損, 2片未接合, 黄褐色でやや軟質	墳丘・墓道下層	1210集44-218	附269	1043 10026
7	7.5	5.2	7.2	95	小形品, 2片接合, 口縁部わずかに欠損, 壁部の体部は深く直立する, 脚の裾は大きく開く, 脚部には二条の沈線が巡る	玄室	1210集32-25	附270	1043 10064
8	[10.4]	最大径 12.6	(10.5)	60	有蓋高环, 脚裾部を欠損, 破片多数接合, 外面は全体に灰かぶり	墓道・墓道下層	1210集44-217	附271	1043 10049

須恵器塊残欠

1点

番号	口径	底径	器高	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	14.8	-	(7.1)	70	脚の付く可能性有り、底部を大きく欠失、口縁部の一部欠損、9片接合、体部外面に2段を有する	羨道・羨道下層	1210集37-160	附272	1043 10061

須恵器甕残欠

2点

番号	口径	底径	器高	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	(22.2)	-	[32.4]	65	破片多数接合、口縁部および底部を大きく欠損、完形に復元、丸底、頸部へラ記号	玄室・墓道・墓道下層	1210集44-220	附273	1043 10214
2	[56.4]	胴部最大径 [98.4]	(62.4)	10	大甕、破片多数接合、7分割、底部を欠損、口縁部に突堤2条、内1条に刻み目、頸部に2条一組の沈線3ヶ所、その間に列点文帶2条、内面に同心円及び平行文の当て具痕	墓道・墓道下層	1210集49-272	附274	1043 10215

須恵器壺

1点

番号	口径	最大径	器高	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	8.8	18.7	19.5	95	口縁部一部欠損、8片接合、完形に復元、器壁薄い、体部はやや肩が張る、口縁部にひずみ	玄室	1210集32-22	附275	1043 10037

須恵器長頸壺

2点

番号	口径	最大径	器高	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	8.9	-	(6.6)	10	口縁部の残欠、6片接合、自然釉がかかる、東海系か	羨道下層・玄室	1381集14-51	附276	1043 10016
2	8.3	15.2	22.1	90	口縁・頸部・脚部の一部を欠損、破片多数接合、頸部は長く口縁は外反する、肩が張り、稜を持つ、脚は短く、外側に大きく広がる、脚部に三カ所の穿孔、胎土は明るい青灰色で口縁部から肩部にかけて緑色の自然釉がかかる、東海系か（底径7.7cm）	羨道・玄室	1210集38-170	附277	1043 10065

須恵器提瓶残欠

1点

番号	口径	最大径	器高	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	8.2	10.5	16.0	70	破片多数接合、未接合片1別置、完形に復元、口縁部歪む、胴部側面にヘラ記号	墓道下層・墓道	1210集44-214	附278	1043 10060

須恵器平瓶

7点

番号	口径	最大径	器高	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	-	12.5	(9.5)	70	頸部から上と胴の一部を欠損、7片接合、やや肩が張り、胴部最大径は胴部上位にある	玄室・羨道	1210集32-27	附279	1043 10007
2	7.2	16.5	15.0	85	口縁部と体部の一部を欠損、破片多数を接合、完形に復元、頸部に沈線一条、肩部にヘラ記号、底部はやや丸底気味	羨道・羨道下層・玄室	1210集37-166	附280	1043 10008
3	6.0	16.7	16.1	90	体部一部欠損、破片多数接合、完形に復元、未接合小片1別置、壺形に近く、胴頂部に頸部が接合、胴部最大径は中位からやや下で下膨れ状となる、底部にヘラ記号	羨道・羨道下層・閉塞石中	1210集37-168	附281	1043 10019
4	[4.6]	14.0	[12.3]	85	口縁部を欠損、完形に復元、胴部は丸みを持つ、灰白色でやや軟質	玄室	1210集32-28	附282	1043 10038
5	4.2	12.1	9.3	95	口縁端部・頸部の一部をわずかに欠損、5片接合、完形に復元、胴部はやや扁平、底部にヘラ記号	玄室	1210集32-26	附283	1043 10039
6	9.0	18.1	13.8	95	口縁部一部欠損、完形に復元、口は広く、口縁部は大きく外方に開く、胴部は肩が張る、平底（底径10.0cm）	玄室	1210集32-29	附284	1043 10062
7	5.6	14.4	12.8	95	口縁部一部欠損、完形に復元、口縁は内湾し沈線が一条めぐる、口縁部に小片が融着	羨道	1210集38-174	附285	1043 10216

土師器環

1点

番号	口径	底径	器高	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	10.5	-	3.9	95	口縁部一部欠損、2片接合、剥離片一括別置、器面の剥落顕著、丸底、体部外面に段を有する、樹脂で強化	玄室	1210集32-19	附286	1043 10009

土師器高环残欠

1点

番号	口径	底径	器高	遺存率 (%)	品質形状等	出土位置	報告書図No.	通番	福岡市登録番号
1	-	脚径 (9.2)	(5.5)	40	脚部残欠、5片接合、裾部が大きく広がる	羨道下層	1210集45-234	附287	1043 10112

(凡例)

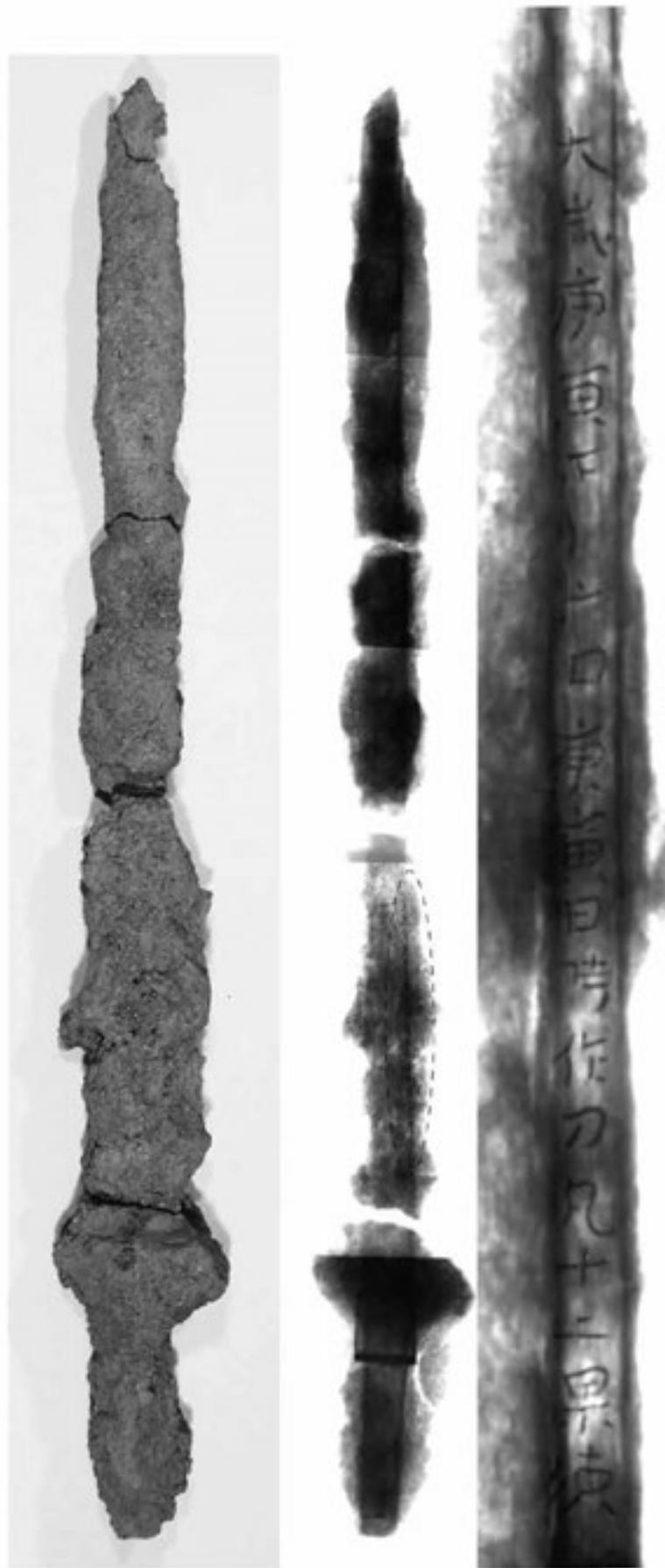
凡例1：法量の単位はcm、重さの単位はg、遺存度は%である。

凡例2：法量値で、() は復元値、[] は遺存値を示す。

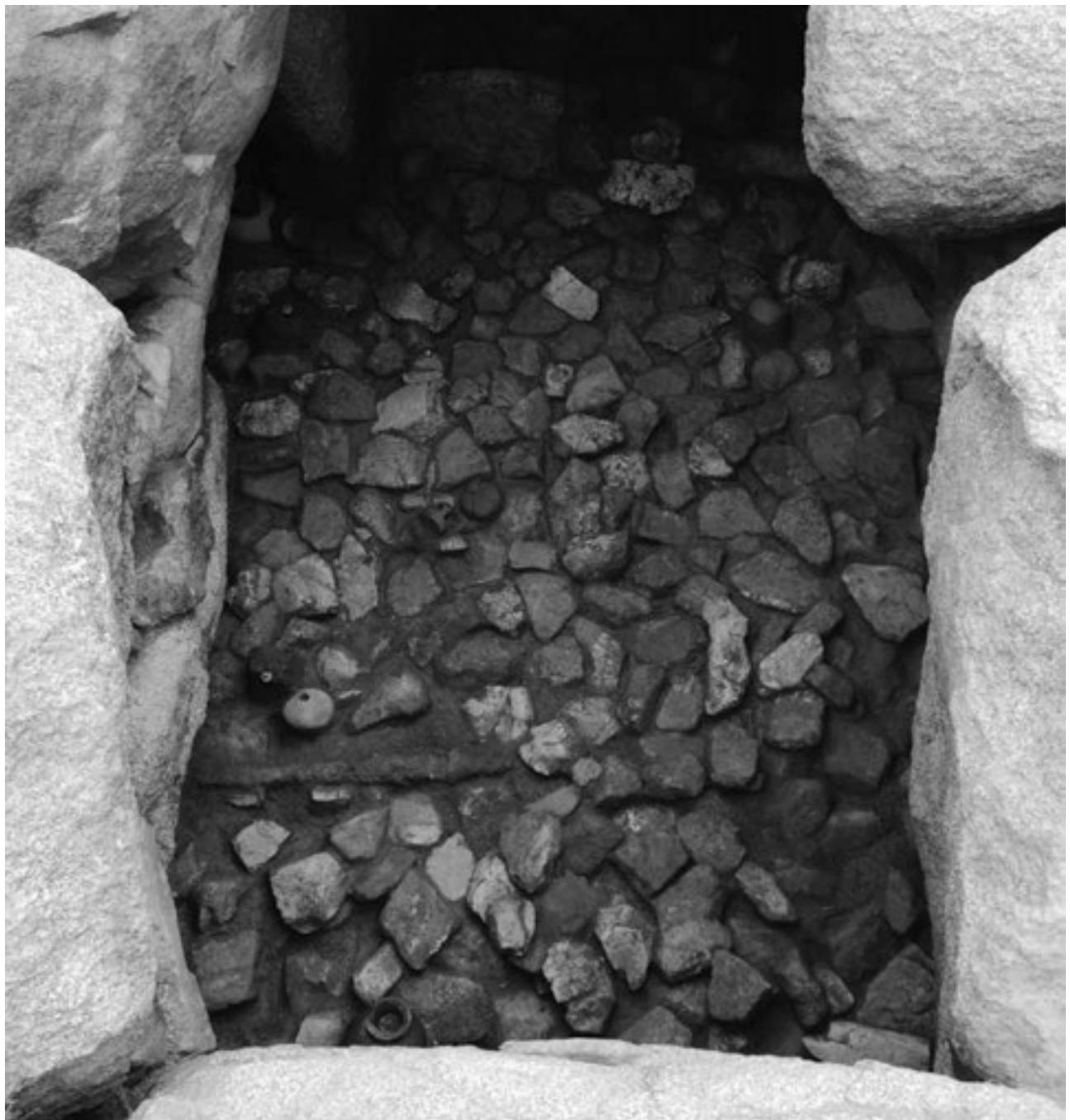
凡例3：刀・刀装具以下の鉄製品はすべて保存処理済、またガラス丸玉のうち表層剥離の激しいもの、および土製管玉はすべてアクリル樹脂含浸済である。

大歲庚寅正月六日庚寅日時作刀凡十二果

□ 練
力



庚寅銘大刀出土時状況（左）・出土時のX線写真（中）・銘文部分X線写真（右）（平成23年撮影）



G-6号墳玄室 遺物出土状況（奥壁側から）（平成23年9月2日撮影）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	もとおか・くわばらいせきぐん 33
書名	元岡・桑原遺跡群 33
副書名	55次・56次調査の報告・元岡古墳群G群6号墳の報告
卷次	九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1381集
編著者名	大塚紀宜(編)・米倉秀紀・比嘉えりか・比佐陽一郎・宮元香織・西幸子・松園菜穂
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2019年3月25日

もとおか くわばら
元岡・桑原遺跡群33

— 55次・56次調査の報告・元岡古墳群G群6号墳の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1381集

2019（平成31）年3月25日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社 西日本新聞印刷
福岡市博多区吉塚8-2-5

